東奈良

（大阪府茨木市）

発掘調査概報　Ⅰ

（本　文　編）

1979年6月

東奈良遺跡調査会

東奈良

（大阪府茨木市）

発掘調査概報　Ⅰ

（本　文　編）

1979年6月

東奈良遺跡調査会

はしがき

地下に眠る文化、先人達の自然を舞台とした様々なドラマや其の営なみは、現在に生活する我々と今尚大きな関連をもって生きているのです。然し其れを実証する貴重な財産であるべき埋蔵文化財も急ピッチな開発の煽りを受け、辛うじて各地域で緊急的な発掘調査をなされているのが現状です。

はからずも国際都市大阪のベッドタウンとして、発展の一途を辿りつつあった本市におきましても、昭和39年に日本初の本格的自動車道路である名神高速道路が整備され、同44年には隣接する吹田市で開催された日本万国博覧会会場の一つの玄関的役目を担った事等が契機となって、都市化に伴なう各種の開発事業が急激に進み其の一方で貴重な埋蔵文化財が、不本意乍ら破壊の危機に立たされました。そこで其の保存保護が急務とされた次第です。

今回東奈良遺跡の発見も、小川水路の改修、下水道工事等によるものであり、其の遺物の多大さ貴重さ等から緊急に遺跡の性格と、規模を詳しく調査する必要性が生じたのであります。更に此の附近にも住宅開発の波が押し寄せ、阪急南茨木駅が設けられた事等も発掘調査の大きな発端となった事は申す迄もありません。

幸いにして阪急電鉄株式会社においては、此の趣旨をご理解戴き、大阪府教育委員会と本市の三者に依る協議の結果、「東奈良遺跡調査会」が結成され、名実共に本格的調査の第一歩を踏み出したのであります。

百聞は一見に如かずとか、人間誕生以来培かわれて来た歴史の証を、現実に見、或は手に触れ実感として受け止め乍ら、当初の予想を上廻る成果を上げて調査は今も続けられております。

此々に、昭和47年～同48年迄の調査報告と致しまして若干の資料を提供するものであります。

最後に発掘調査に従事された方々及び調査関係者各位に感謝の意を表しますと共に、生きとし生ける者として、今後共文化財の保存保護について認識昂揚を、敢えて念願するものであります。

茨木市教育委員会教育長

桑　田　栢　身

例　　言

Ⅰ　本概報Ⅰは、阪急電鉄南茨木駅周辺の住宅開発事業等に伴って、昭和46年7月より、同48年8月までに実施した発掘調査の概要をとりまとめたものである。

Ⅱ　調査にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課主査・田代克己（現帝塚山短期大学助教授）を調査部長、茨木市教育委員会社会教育課長・奥田勉（現総務次長兼課長）を事務部長として行った。

Ⅲ　発掘調査については、阪急電鉄株式会社・秀和レジデンス株式会社・山文商事株式会社・三愛石油株式会社の各位に御協力を得たことに感謝いたします。

Ⅳ　本文の執筆は、各遺構は井上直樹、弥生式土器及び考察は前田千津子（旧性・寺田）、土師器は山口衣代（旧性・西尾）が行い、それぞれ井上直樹・白井忠雄が補佐を行った。須恵器は宮脇薫、石器は白井忠雄・木器は山尾真由美が行い、実測図の作成は各々の担当者の他、山内ちづ子が行った。遺構・遺物の写真撮影は寿福滋氏が行った。

尚、本書作成には旧・新調査会メンバーの多大な協力を得た。

Ⅴ　木器の材質鑑定は、暁学園短期大学教授理学博士・鳴倉巳三郎氏に依頼し、その結果を掲載した。

Ⅵ　本書作成に関し、原口正三氏・佐原真氏・田中琢氏・都出比呂志氏・森田克行氏・西念秋夫氏・その他多くの人達の助言を得ましたことに感謝いたします。

Ⅶ　本書の編集は、田代克己・奥井哲秀が担当した。

現調査会組織

理事長	桑田恬身	茨木市教育委員会教育長
理事	藤沢一夫	四天王寺女子大学教授
理事	免山　篤	茨木市文化財愛護推進委員
理事	中平　敏	茨木市教育委員会指導部部長
元調査部長	田代克己	元大阪府教育委員会文化財保護課係長
事務部長	久保田吉温	茨木市教育委員会社会教育課長
事務主任	吉岡成昭	茨木市教育委員会社会教育課長代理
調査主任	奥井哲秀	茨木市教育委員会文化財係主事

東奈良遺跡調査会メンバー

井上直樹・宮脇薫・松岡良憲・大野恵三子・白井忠雄・石田治雄・高田敬子・岩鼻圭子・谷本喜代子・森木芳子

旧調査会メンバー

中井貞夫・兼康保明・松下彰・藤沢真依・阿部幸一・前田昇治・小坂茂樹・福本孝弘・岡本広義・森田孝一・柏原平治・前田千津子・山口衣代・山尾真由美・山内ちづ子・巽清子・渡辺雅子・浜田恵三子・他、近畿大学考古学研究会・追手門学院大学考古学研究会の参加をみた。

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査に至る迄の経過 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 5

第Ⅲ章　調査の概要 …… 7

1. 経過 …… 7
2. 調査地区の設定 …… 10

第Ⅳ章　遺　構 …… 12

1. F－7－E・F地区 …… 12
2. H－5－I・M地区 …… 14
3. H－3－J・K・M・N・O・P地区 …… 17
4. H－3－B・C・F・G・H地区 …… 21
5. I－3－B・C・F・G・H地区 …… 32
6. F－4－N、G－4－B地区 …… 33
7. A－6－F・G・I・J・K地区 …… 49
8. A－6－F地区 …… 54

第Ⅴ章　遺　物 …… 56

第1節　弥生式土器 …… 56

1. 小川水路 …… 56
2. F－7－E・F地区 …… 57
3. H－3－H地区 …… 59
4. F－4－N、G－4－B地区 …… 60
5. A－6－F・G・I・J・K地区 …… 70

第2節　土師器 …… 135

1. F－7－E・F地区 …… 135
2. H－5－I・M地区 …… 136
3. H－3－N・P地区 …… 137
4. H－3－G地区・井戸4号 …… 137
5. H－3－G地区・溝Ⅰ－3 …… 138

第3節　須恵器 …… 221

第4節　石器 …… 233

第5節　木器 …… 237

第Ⅵ章　考　察 …… 245
1. F－4－N地区方形周溝墓の供献土器について …… 245
2. 土器焼成実験から観た思考 …… 246
3. 高杯型土器と台付鉢型土器の杯部と脚部の接点について …… 254
4. 回転台について …… 255

図 版 目 次

図版 1　東奈良遺跡周辺図（附図）

2　割付け図（附図）

3　東奈良遺跡の航空写真

F－7－E・F地区

4　（上）遺構全面（東より）

（下）遺構全面（西より）

H－3－J・K・M・N・O・P地区

5　掘立柱建物跡群

6　（上）井戸状遺構

（下）竪穴住居跡

H－3－B・C・F・G・H地区

7　第Ⅰ遺構面

8　（上）竪穴住居跡Ⅰa（南より）

（下）竪穴住居跡Ⅱa（北より）

9　（上）竪穴住居跡Ⅱb（南より）

（下）竪穴住居跡Ⅰc（南より）

10　（上）井戸4号

（下）土器群　a・b・c

I－3－B・C・F・G・H地区

11　（上）東半遺構

（下）西半遺構

F－4－N、G－4－B地区

12　第1号方形周溝墓

13　（上）第1号方形周溝墓（供献土器）

（下）第1号方形周溝墓（最終面）

14　（上）第1号方形周溝墓内木棺墓1・2号

（下）第1号方形周溝墓南溝供献土器

15　（上）第8号土壙墓

（下）第1号井戸

図版 16　（上）　第Ⅰ大形土壙
（下）　第Ⅰ大形土壙　木製品
17　（上）　第Ⅱ大形土壙
（下）　第Ⅱ大形土壙　木製品

A－6－F・G・I・J・K地区
18　（上）　方形周溝墓群（東より）
（下）　方形周溝墓群（北より）
19　（上）　第1号方形周溝墓東溝供献土器
（下）　遺構（北より）

弥生式土器
20～24　F－7－E・F地区　出土の土器
25～36　F－4－N、G－4－B地区　出土の土器
37・38　A－6－F・G・I・J・K地区　出土の土器

土　師　器
39　F－7－E・F地区　出土の土器
40　F－7－E・F地区　出土の土器
H－5－I・M地区　出土の土器
41　H－3－O・P地区　出土の土器
H－3－G地区　出土の土器
42～62　H－3－G地区　溝Ⅱ－3（大溝）出土の土器

須恵器・石器・木器
63　各地区出土の土器
64　各地区出土の石器
65　各地区出土の石器・土製品
66・67　F－7－E・F地区　出土の木器
68・69　F－4－N、G－4－B地区　出土の木器
70　H－3－G地区　出土の木器
71　F－4－N、G－4－B地区　出土の板状原材
72　F－7－E・F地区　遺構実測図
73　H－5－I・M地区　遺構実測図
74　H－5－M地区　竪穴墓実測図

図版 75　H－3－J・K・M・N・O・P地区　遺構実測図（附図）
76　II－3－B・C・F・G・H地区　第Ⅰ遺構面実測図（附図）
77　II－3－B・C・F・G・H地区　第Ⅱ遺構面実測図（附図）
78　II－3－C地区　竪穴住居跡Ⅱa実測図
79　H－3－C地区　竪穴住居跡Ⅱb・c実測図
80　H－3－G地区　井戸4号実測図
81　I－3－B・F・G・H地区　遺構実測図（附図）
82　F－4－N、G－4－B地区　遺構実測図（附図）
83　F－4－N、G－4－B地区　土層図（附図）
84　F－4－N地区　第1号木棺墓
85　F－4－N地区　各遺構土層図
86　F－4－N地区　各遺構土層図
87　F－4－N地区　第1号方形周溝墓南溝供献土器実測図
88　G－4－B地区　第Ⅰ大形土壙実測図
89　F－4－N地区　第Ⅱ大形土壙実測図
90　A－6－F・G・I・J・K地区　遺構実測図（附図）
91　A－6－K地区　第1号方形周溝墓東溝供献土器実測図
92　小川水路採集の土器・石器
93　F－7－E・F地区　包含層・第3号土壙出土の土器
94　〃　溝Ⅰ－S・溝Ⅱ・溝Ⅲ・出土の土器
95　〃　沼地状落ち込み出土の土器
96　F－4－N地区　包含層・マウンド出土の土器
97　〃　第1号方形周溝墓　南溝供献土器
98　〃　〃
99　〃　第1号方形周溝墓北溝・北第Ⅱ溝供献土器
100　G－4－B地区　第Ⅰ大形土壙出土の土器
101　〃　〃
102　G－4－B地区　第Ⅰ大形土壙出土の土器
F－4－N地区　東第Ⅱ溝出土の土器
103　F－4－N地区　第Ⅱ大形土壙（東端土器群）出土の土器
104　A－6－F・G・I・J・K地区出土の土器　第1号方形周溝墓供献土器
105　A－6－F・G・I・J・K地区出土の土器　第1号方形周溝墓供献土器
H－5－I・M地区出土の土器　溝状遺構・壺棺
106　F－7－E・F地区出土の土器
107　H－3－N、H－3－O、H－3－G地区出土の土器

図版108　H－3－G地区　溝Ⅱ－3（大溝）出土の土器
109　〃
110　〃
111　〃
112　〃
113　〃
114　〃
115　〃
116　〃
117　〃
118　〃
119　〃
120　〃
121　各地区出土の須恵器
122　〃
123　各地区出土の石器
124　〃
125　各地区出土の石器・土製品
126　F－7－E・F地区出土の木器
127　〃
128　F－7－E・F地区、F－4－N、G－4－B地区　出土の木器
129　F－4－N、G－4－B地区出土の木器
130　H－3－G地区出土の木器
131　G－4－B地区出土の板状原材

挿 図 目 次

第１図　小川水路採集の銅鉄と銅鏡……3
第２図　小川水路近景（北より昭和54年３月撮影）……3
第３図　東奈良遺跡の位置……4
第４図　地区割細分図……5
第５図　発掘調査風景……5
第６図　木樋の出土状況……12
第７図　竪杵の出土状況……13
第８図　掘立柱建物跡……15
第９図　壺棺墓……16
第10図　土器群Ｃ出土土器……32
第11図　第７号土壙墓出土土器……40
第12図　第８号土壙墓出土土器……40
第13図　南溝供献土器……44
第14図　北溝供献土器……45
第15図　井戸第１号出土土器……45
第16図　第Ⅰ大形土壙出土土器……46
第17図　第Ⅱ大形土壙出土土器……47
第18図　第１号方形周溝墓供献土器……50
第19図　東壁面土層図……55
第20図　溝Ⅰ－３（大溝）出土土器……147
第21図　溝Ⅰ－３（大溝）出土土器……148
第22図　須恵器杯蓋１……221
第23図　〃　５……221
第24図　〃　８……222
第25図　木器材質鑑定顕微鏡写真……244・245
第26図　〃　……244・245
第27図　〃　……244・245
第28図　〃　……244・245
第29図　〃　……244・245
第30図　東第Ⅱ溝出土土器……246
第31図　杯部と脚部のとりつけ方法……254
第32図　〃　……255
第33図　〃　……255

第34図　東奈良遺跡出土土器・土製品の黒斑……256・257
第35図　焼成実験土器の黒斑（1～10）・描き継ぎ（11、12）と木葉底（13～15）…256・257
第36図　土器焼成実験（1～6）・脚部のとりつけ方法（7～10）……256・257
第37図　杯部と脚部の接合実験……256・257

表　目　次

第1表　調査経過表……2
第2表　掘立柱建物跡の規模……18
第3表　井戸状遺構の規模……20
第4表　第1号方形周溝墓各溝の規模……36
第5表　木棺墓・土壙墓の形態と規模……42
第6表　各地点標高……43
第7表　各方形周溝墓の規模……53
第8表　F－4－N、G－4－B地区弥生式土器の形態と呼称（折込）……62・63
第9表　H－3－G地区溝Ⅱ－3（大溝）土師器の形態と呼称（折込）……140・141
第10表　板状原材木取り模式図及考察……242
第11表　各溝の供献土器群集計表（百分率）……245
第12表　焼成土器の観察表……249
第13表　黒斑の位置関係分類表……249
第14表　黒斑の位置観察表……250
東奈良遺跡出土土師器編年図表……附図

別　表

弥生式土器観察表
土師器観察表
須恵器観察表
石器・土製品観察表

第Ⅰ章
調査に至る迄の経過

大阪、京都を結ぶ交通の要路にあたる茨木市は、其の立地と交通網に恵まれた事から、工場用地、住宅地として大阪を核とする衛星都市化が急速に進み、農村から都市への転換を余儀なくされた。此の様な生活基盤の変化は、何百年もかかって培かわれた古い茨木の町並を次第に奪い去り、長閑な田園地帯は、工場用地や宅地へとその歴史的風土は開発の波に呑み込まれ大きな変貌をとげつつある。

摂津市に隣接する茨木市の南西部は、此れ迄交通機関に恵まれなかったことから、国鉄東海道線沿いに工場が建設された他は、近年迄特に目立った大規模な開発はなく広々とした田園風景を保っていた。

然し、日本万国博覧会の開催を契機に交通網の整備がなされ、阪急南茨木駅の誕生を見、大阪中央環状線がひかれると言う好条件から、新たな住宅地として浸蝕される様になって来た。

此の様な状況下に於いて、昭和45年から同47年にかけて、水捌けの悪かった茨木の市街地を流れる小川水路を浄化する為の改修工事が、茨木市土木課によって随時行なわれ、同46年春、東奈良２丁目にさしかかった際、パワーショベル等で掘り上げられた土砂の中に多量の遺物（土器・石器・木器）が混入しているのが発見された。

此の第一発見者は、近くに住む市立玉櫛小学校と、市立南中学校の児童、生徒諸君であり、彼等は毎日のように、残土の中から根気よく遺物の表面採取を行ない、其れを各々の学校に届けた。その中で、美沢町の日高史雄、水尾町の西岡仲哲両君による多量な採集品の中には、銅鏃、木製品等も含まれており、その重要性等から事態を重視した学校側より本市教育委員会に第一報が入った。

此れ迄茨木市の南部における遺跡の存在は確認されておらず、この連絡を受けた市教委は、状況を把握する為現地に赴むいた結果、現地表面下約 1.7mの黒色粘土層中より弥生時代及び、古墳時代の遺物等が出土していることを確認した。

その後、この地域で阪急電鉄株式会社によるマンション建設が計画された為、市教委によって試掘が行われ、其の結果、奈良、東奈良、沢良宜西、天王、若草の各町にまたがるかなりの範囲に遺跡が広がることが確認された。遺跡の発見は、各新聞で報道され、広く一般にも周知される様になったが、一方遺跡の保存、保護について大阪府教育委員会、茨木市教育委員会、阪急電鉄株式会社との三者で幾度となく協議が重ねられ、同年７月、本格的な発掘調査の必要

性から、府教委、市教委の合同のもとに「東奈良遺跡調査会」が結成され、調査が実施されることとなった。

調査期日	発掘地域	調査目的	調査主体	遺構	遺物
昭和46年7月20日～9月30日	東奈良2丁目745—2 500㎡	家建設にともなう事前調査	東奈良遺跡調査会	溝、円型大形土壙、袋状土壙等（弥生時代後期）	弥生式土器（Ⅱ～Ⅴ）、土師器（庄内～布留）、須恵器、石器、木器、瓦器
昭和46年11月21日～11月30日	東奈良3丁目316、393	小川水路の改修	茨木市教育委員会	溝（時期不明）	弥生式土器、土師器、須恵器（古墳時代後期）
昭和46年12月13日～12月18日	沢良宜西35—1、36—1 44㎡	ガソリンスタンド建設にともなう緊急調査	茨木市教育委員会	溝、壺棺（古墳時代前期）住居跡（平安時代？）	弥生式土器、土師器
昭和47年1月27日～1月31日、2月23日	東奈良2丁目402番地	小川水路の改修	茨木市教育委員会	わき水のため調査不能	弥生式土器、土師器、須恵器、磨製石剣、鍋鉄
昭和47年5月17日～5月22日 6月25日～8月6日	沢良宜西368—1 17,998㎡	小学校建設にともなう事前調査および範囲確認調査	茨木市教育委員会	壺棺（弥生時代後期）住居跡、井戸、溝（奈良～平安時代）	弥生式土器、土師器、須恵器

第1表　調査経過表

小川水路採集遺物について

ここに報告する弥生式土器、石器、銅鏃、銅鏡は、上記の小川水路改修工事に際して掘り上げられた排土中より、日高史雄・西岡伸哲両君が採集した遺物の一部である。報告を行うに際して、日高史雄・西岡伸哲両君の資料提供に対して心より感謝するものである。

弥生式土器
（図版92　1～16）

弥生式土器は、前期（1・2・3）と中期（5・7・8・9・10・11・12・13・14）と後期（15・16）の各時期を通じて採集されており東奈良遺跡における弥生時代の存続期間の長さを如実に物語っている。個々の詳細については土器観察表を参照されたい。

石器
（図版92　1～7）

採集された石器は、磨製石鏃（1）と打製石鏃（2～6）と打製石庖丁（7）等である。打製石鏃は、平基式（2・3・4）と凸基無茎式〔円基式〕（5）と凸基無茎式〔尖基式〕（6）の3形式が見られる。これらの内、畿内地方で異例な遺物は打製石庖丁（7）である。打製石庖丁は、畿内地方において出土例が少なく瀬戸内地方（香川県の西半部・岡山県の瀬戸内側等）に多く出土している。東大阪市西石切町植附遺跡出土の打製石庖丁について指摘(注1)されている様に、東奈良採集の打製石庖丁においても瀬戸内地方より運ばれて来た石器であり、畿内と瀬戸内の交易を推定する事が出来るだろう。

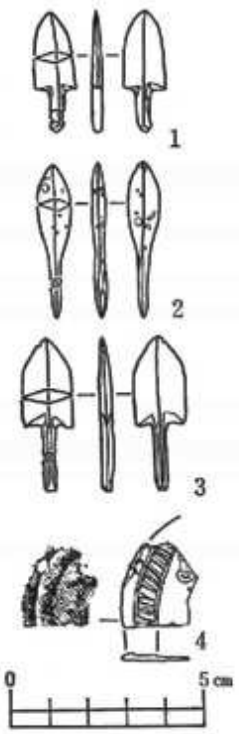
銅鏃・銅鏡
（第1図　1～4）

採集された銅鏃（1・2・3）・銅鏡（4）は、それぞれの形式的な特徴から弥生時代後期の時期であろう。銅鏃（2・3）は、表面に鋳造時の鬆が残存しており、東奈良において銅鏃等を製造していることを暗示する遺物である。銅鏡は、弥生時代後半から古墳時

代初頭にかけての小型仿製鏡である。文様は、磨滅がひどく不明瞭であるが一応実測図を挙げておく。

これら代表的な遺物の他にも、多量の弥生式土器片・土師器片・石鏃（弥生時代）・剥片（サヌカイト製）と数点の木器が含まれているが、小川水路改修工事における新発見の遺跡であったため、そこに存在したであろう遺構は不明である。しかし、出土した遺物等により弥生時代から古墳時代の遺構群が存在していた事は確実である。

今日の東奈良遺跡における、多くの新しい発見は、この小川水路において見い出された多量の遺物が原点であり、そこに小川水路発見遺物の意義がある。

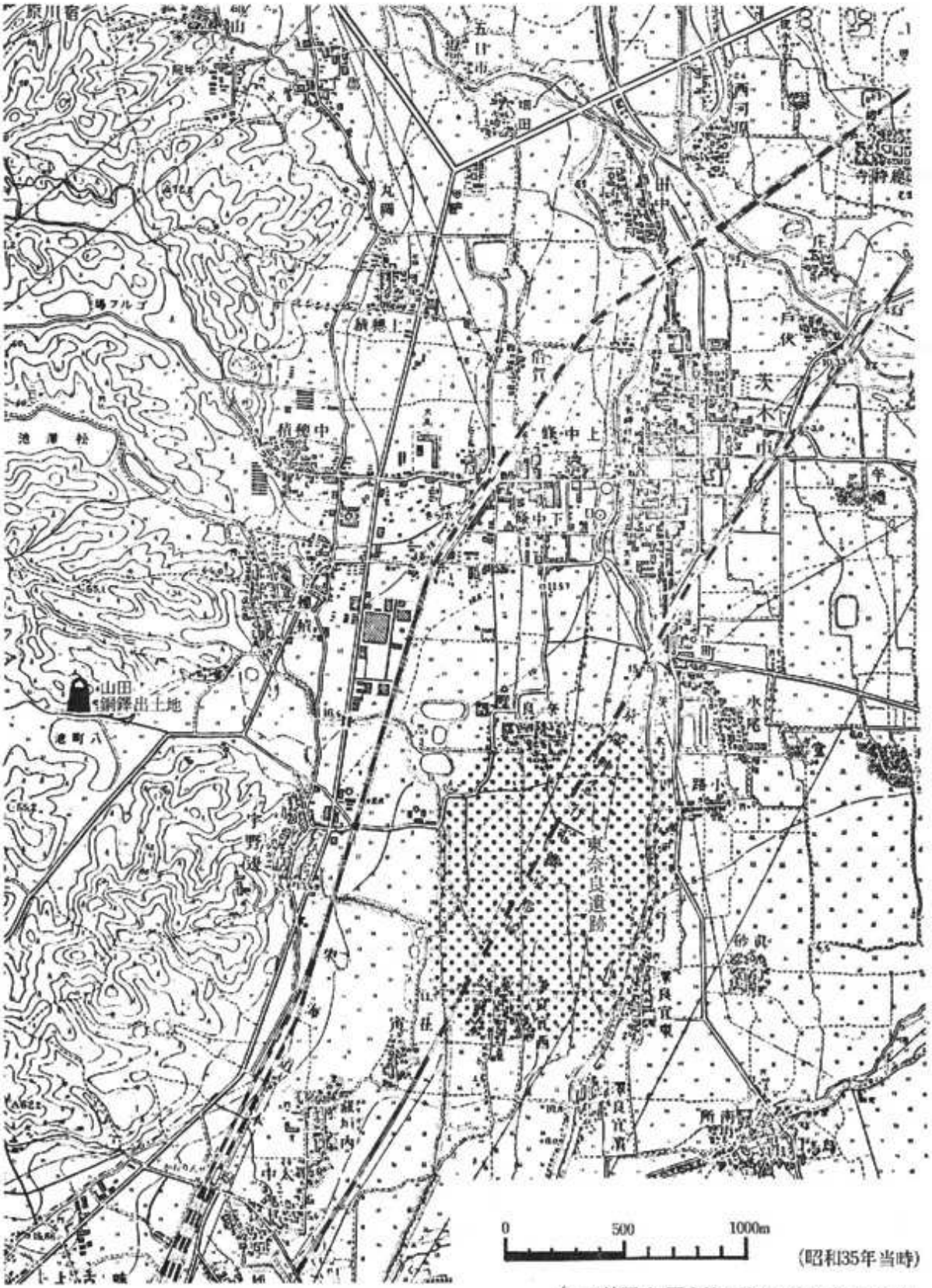


第1図　小川水路採集の銅鏃と銅鏡

第2図　小川水路近景（北より昭和54年3月撮影）

小川水路改修工事中に出土した遺物は、今回報告した遺物以外にも多くの人々によって採集されており、今後機会あるごとに少しでも多く紹介していきたいと考えており、採集された方々の御協力をお願いいたします。

注　1　大阪府史第1巻　古代編Ⅰ　昭和53年　P469～P470　打製石包丁と植附遺跡



(この地図は、国土地理院が昭和35年1月30日発行の2万5000分の1の地形図を使用したものである。)

第3図　東奈良遺跡の位置

第Ⅱ章
遺跡の位置と環境

東奈良遺跡は、大阪府茨木市東奈良、奈良、沢良宜西、天王、岩倉町の一帯に所在し、弥生時代前期に始まり中世に及ぶ大集落跡である。

遺跡は、すぐ西方に千里丘陵をひかえ、北は老坂山地、東及び南は西南流する淀川にはさまれた沖積平野上に位置する。

明治初年、遺跡の西方吹田市山田別所から銅鐸一口が出土していることから、遺跡の存在は予想されてはいたが、1960年代にはまだその実体は明らかでなかった。

1971年から開始された小川水路の改修工事によって、大量の遺物が発見されて以後、数次の調査が行なわれ、一方銅鐸の鋳范等が発見されたこともあって、三島平野における大規模な低地の遺跡として知られるようになった。

三島地域において現在までに知られる弥生時代初期の集落跡としては、東奈良遺跡、目垣遺跡、耳原遺跡、柱本遺跡、安満遺跡があり、いずれも弥生時代前期に始まるものである。これらの遺跡は、すべて標高5～10m程度の低地に存在しており、他地域の弥生時代前期の集落立地と変りがない。周辺の低湿地が水田として利用された結果と言えるであろう。

弥生時代中期には、郡遺跡、宿久庄遺跡、郡家川西遺跡、天神山遺跡などが増加し、特に安満遺跡を中心として、天神山遺跡、慈願寺山遺跡、芝谷遺跡、古曽部遺跡、紅茸山遺跡、萩ノ庄遺跡等の存在が知られており、安満遺跡を母村とするまとまりがあるのではないかとも言われている。

弥生時代後期には、東奈良遺跡の周辺に新芦屋遺跡、中条小学校遺跡、上中条遺跡などがみられ、郡遺跡の周辺には、郡児童公園遺跡、地蔵池南遺跡、上穂積遺跡、倍賀遺跡などがみられるようになる。耳原遺跡の周辺には、太田遺跡、総持寺遺跡、安威遺跡などが現われ、郡家川西遺跡周辺には津之江遺跡、その他天神山遺跡の周辺では真上遺跡の存在が知られる。

弥生時代前期から後期まで続いて集落の営まれた遺跡と比べて、後期に出現するものは小規模なものがほとんどである。大規模な集落と周辺の小集落がどの様な関係にあったかについては、単に母村と分村と言うだけでは解決し得ない多くの問題を含んでいるわけであり、目下のところ不明としか言いようのないのが現状であろう。

東奈良遺跡では、銅鐸をはじめ、銅戈、勾玉などの鋳造に関係す

る遺物が多く発見され、注目されることとなったが、このことは、単に三島地域のみにかかわらない大きな問題を含んでいると言わねばならない。銅鐸の製作とその配布に限っただけでも問題は大きい。このことをふまえた上で、三島地域で東奈良遺跡が占めた役割等について今後追求されねばならないであろう。

古墳時代には、三島平野の背後の丘陵地にいち早く前期古墳が築造されはじめる。紫金山古墳、将軍山古墳、弁天山古墳群などよく知られたものも多く、これらの古墳を通して各々の地域のまとまりをうかがうことができる。

東奈良遺跡では、巾10m、深さ3mで2段に掘り下げた、少なくとも 500m以上一直線に続く大溝が発見されている。溝の時期を弥生時代にするか古墳時代とするかについては、今後さらに検討すべきものと考えられるが、比較的大規模な古墳と比べても、その土木量は圧倒的である。この溝からは、すでに弥生時代にはみられない、人員を大量動員し得る背景が浮び上ってくるわけであり、古墳時代の初期にこの三島地域で東奈良の人々がはたした役割にも大きなものがあったと予想されるのである。

大溝は短時間の間に砂で埋没してしまい、5世紀以降東奈良では人々の生活した痕跡はほとんど無くなる。奈良～平安時代にかけてわずかに掘立柱建物が検出され集落が営なまれたことがわかるが、かっての大規模な集落のおもかげはない。この時期には律令制下鴨下の郡衙の置かれた郡遺跡周辺が、この地域の中心となったのである。

第Ⅲ章
調査の概要

東奈良遺跡は、昭和46年4月、小川水路改修工事及び、下水道管埋設工事中に発見されて以来、多くの箇所において緊急発掘調査を行って来た。今回の概報は、昭和46年7月から昭和48年7月にかけて行った調査地区のものである。以下調査年度を追って記述を進めて行く。

阪急電鉄社員寮
（F－7－E・F地区）

昭和46年7月、さきの小川水路の東側、茨木市東奈良2丁目745番地の2（東奈良遺跡地区割り、F－7－E・F地区）に、阪急電鉄株式会社の社員寮が建設されることとなり、試掘調査を行った結果、遺物包含層が確認され、昭和46年7月20日より調査面積約 500㎡の発掘調査を行った。まず包含層迄一気に造成土、耕土床土を、ユンボにより現地表面下約 2.5m迄掘り下げると、全面に黒色粘土層があらわれた。当初黒色粘土層は2層にわけられると思われたが判別困難であることから、ベースの青灰色粘土層迄下げることとした。然し遺物の出土量が多い上に、連日の雨天に悩まされベースの面が完全に検出されたのは8月中旬であった。その結果弥生時代後期から古墳時代にかけての溝状遺構、円形大形土坑、袋状土坑が検出され、9月30日に全調査を終了した。

山文商事ガソリンスタンド
（H－5－I・M地区）

F－7－E・F地区調査中の昭和46年8月、阪急電鉄京都線南茨木駅南東約200mの中央環状線沿い、茨木市沢良宜西35－1、36－1（東奈良遺跡地区割り、H－5－I・M地区）に、山文商事がガソリンスタンドの建設工事を行った時、大型タンクを地中に埋めるために掘り出された土砂中より、弥生時代から古墳時代にかけての土器が出土していることを中学生から通報を受けた茨木市教育委員会では、工事主体者である山文商事株式会社に現状保存を依頼し、大阪府教育委員会文化財保護課の指導を受けた。協議の結果、用地内で地下の遺跡に影響を受けるガソリンスタンド事務所のみの発掘調査を実施することになった。昭和46年12月13日より18日にかけて、ほぼ南北に2×22mのトレンチを設定し、発掘調査を行った。その結果、平安時代頃の柱穴跡、古墳時代前期の壺棺墓・弥生時代後期の溝状遺構を検出した。

天王小学校
（I－1、J－1地区）

昭和47年の春から同年11月、天王小学校（I－1、J－1地区）の建設に先立って、大小3ヶ所の試掘調査及び発掘調査を実施し、現在の東奈良遺跡の範囲が確認された。

阪急電鉄マンション

昭和47年10月、阪急電鉄京都線南茨木駅周辺に大規模なマンション建設が計画されていることから長期的な発掘調査を考えて、新に

東奈良遺跡調査会が結成された。同時に東奈良遺跡地区割りをも設定し、本格的な発掘調査に備えた。

昭和47年11月1日より、阪急電鉄株式会社、駅前ハイタウン第一期分譲マンションA、B、C3棟の発掘調査を開始した。まずH—3—J・K・M・N・O・P地区に位置するB棟から調査を行った。当マンション建設計画地区は、全面に 1.5～2mの造成土が旧耕土面に盛られていることから、この撤去作業を行い、更に耕土床土をユンボのバケットに鉄板を取り付けて、平削りを行いながら取り除いた後、本格的な発掘調査を行った。

B棟
（H—3—J・K・M・N・O地区）

同地区は、昭和47年11月1日より12月30日にかけての2ヶ月間にわたって、約 1,270㎡の調査を実施した。当調査地区は、現地表面下約 2.5mに位置しており、雨天、湧き水による冠水等、困難を極めたが、遺構が少なく比較的短期間で終了できた。

調査開始後すぐに、調査地区東半（H—3—O・P地区）より平安時代のものと考えられる約 150ヶ所の柱穴跡、更に同下層より古墳時代前期の竪穴住居跡一基、調査地区西半（H—3—M・N・O地区）より、古墳時代前期の井戸状遺構が多数検出された。この井戸状遺構が検出された面を当調査地区最終遺構面と考え、ユンボにより、調査地区中央部を東西に、深さ 1.6mの「すじ掘り」による土層調査を行い全調査を終了した。

C棟
（H—3—B・C・F・G・H地区）

C棟はさきのB棟の北約35mに位置する。昭和48年1月より3月25日にかけて、約 940㎡について発掘調査を行った。同地区は遺構面が二面存在し、第Ⅰ遺構面より掘立柱建物跡、方形周溝状遺構、溝状遺構、井戸等が検出された。更に下層約 0.2mより、古墳時代前期の竪穴住居跡、井戸、大小の溝状遺構、土器群等が検出された。遺構調査終了後の3月20日に実施した「すじ掘り」土層調査のさいに検出された古墳時代前期の巨大な溝は、わずか4日で掘り上げるという緊急調査を余儀なくされた面もあったが、これは東奈良遺跡の重要性を知らしめた。

A棟
（I—3—B・C・F・G・H地区）

A棟は、B棟の南約40mに位置し、さきのC棟と並行して、昭和48年1月中旬より2月10日にかけて、約 1,050㎡について発掘調査を行った。調査は他の調査地区同様、造成土、耕土、床土をユンボにより取り除き、薄く堆積する茶褐色粘土層を手掘りによって除去した後、ベースと考えられる赤褐色粘質土層を検出した。遺構は他の地区に比較すると非常に少なく、少数の柱穴跡、大形土坑、近世

の池（沼）の跡のみであった。2月9日に最終調査の「すじ掘り」土層調査を調査地区中央部、東西方向に行い全調査を終了した。

阪急電鉄南茨木駅舎
（F－4－N、G－4－B地区）

昭和48年3月、南茨木駅周辺の高層マンション建設に伴い、南茨木駅の駅舎増築並びにショッピングセンターの建設が、阪急エンジニアリングによって計画され、昭和48年3月24日より、茨木市奈良305の1の発掘調査を行った。

当地区は、すでに存在する駅舎の東側にあたる上に、周囲には中央環状線、近畿自動車道が走り、大形下水道が埋設されている状態であった。更に遺構面が現地表面下約 2.5mに位置することから、調査中たび重なる雨による造成土の崩壊により遺構の一部を埋め、土砂の取り除きに手間取っている内に又崩壊するという状態が繰り返され、調査の長期化を生み、遺構の一部がたび重なる湧水の為大きく変化するという困難な調査が続いた。調査面積は、当初約 150㎡であったが、方形周溝墓の検出により調査地区を敷地いっぱいまで拡張し、約255㎡になった。

当地区では、弥生時代中期の方形周溝墓、木棺墓、土壙墓、多量の木製品を含む大形土壙、井戸、柱穴等が多数検出された。遺構検出終了後、北東～南西の壁面沿いに、深さ1mの「すじ掘り」土層調査を行い、7月14日に全調査を終了した。

秀和レジデンスマンション
（A－6－F・G・I・J・K地区）

昭和48年3月、H－3－B・C・F・G・H地区調査中、茨木市奈良町19番地に、秀和レジデンス株式会社が中高層マンションの建設を予定している事を知った。建設予定地が東奈良遺跡内に位置することから、工事主体者と協議を行い、昭和48年3月16日に試掘調査を実施し、その結果、弥生時代から古墳時代の土器を包含する土層を検出し、緊急発掘調査が、東奈良遺跡調査会に要請された。同年4月下旬より、調査面積約 1,600㎡の当地区の調査を開始した。調査は先ずユンボによって耕土床土を取り除き、厚さ 0.4mの灰褐色粘土層を手掘りによって掘り下げ、遺構面を検出した。その結果、弥生時代中期の方形周溝墓5基、土壙等を検出し、遺構調査終了後、他地区同様調査地区中央部に、深さ 1.2mの「すじ掘り」を東西方向に設け、土層調査を行い昭和48年6月下旬に全調査を終了した。

三愛石油ガソリンスタンド
（A－6－F地区）

又同地区において、三愛石油株式会社によるガソリンスタンド建設計画の申請があり、A－6－F・G・I・J・K地区終了後継続調査を行う事になった。ガソリンスタンド建設予定地はA－6－F

地区に位置し、昭和48年7月上旬より地下埋設タンクと事務所の建設される所のみの約200㎡の調査を行った。

当地区では、土器を包含する薄い土層以外全く遺構は検出されず7月下旬に全調査を終了した。

以上が今回の概報に記載した調査地区の調査経過である。

調査地区の設定

昭和46年4月、東奈良遺跡発見以後、阪急電鉄の家族寮(F－7)、山文商事ガソリンスタンド(H--5)、天王小学校（I－1・J－1）など大小8カ所の発掘調査ならびに試掘調査により、東奈良遺跡の範囲は、北は奈良町、東は元茨木川を越え玉御、西は大正川、南は沢良宜西付近に至る東西約1,100m、南北約1,400mの極めて大規模なものであると考えられるに至った。この遺跡の範囲の中には、本来他の名称がつくべき所もあるが、将来この地域に大規模な開発が予想され、細い概念にとらわれずに埋蔵文化財の破壊を未然に防ぎ、遺跡を大規模につかみ、総合的に調査・保存することを含んで範囲を設定したものである。（図版2）

このように東奈良遺跡の範囲が拡大され、大規模な開発計画があることにより、長期の広範囲な発掘調査が予想されることから、遺跡の将来を見越して範囲を明確に区分しておく必要が生じた。

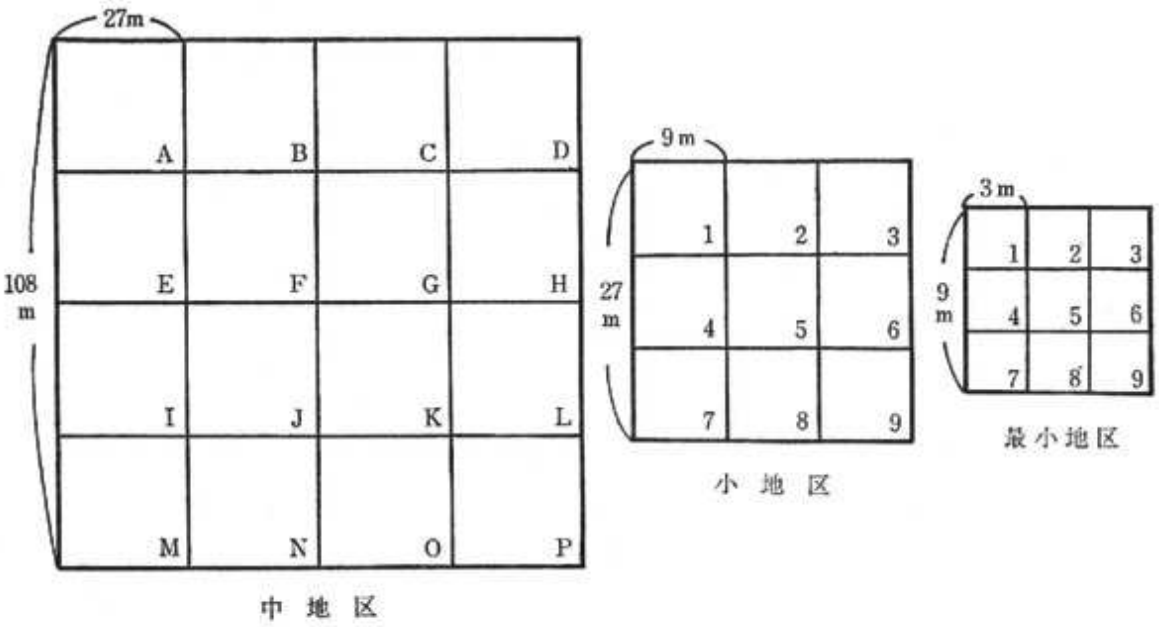
東奈良遺跡も調査が進むにつれて、奈良・平安時代の遺構が存在することが判明し、また将来も同時期の遺構検出が予想されることから、条里制にのっとった地区割りが必要とされた。そこで問題となるのは、基準線の設置であるが、東奈良遺跡の範囲内には、比較的水田面が多く残っており、条里をつかみやすく、地図上よりほぼ南北・東西に通った道路(畦)を基準とし、磁北よりN－6°28′－Eにふった基準線を設け、これを東西南北に拡大して地区割りを行った。すなわち、大地区を 108m四方に取り、最小地区を3m四方とした。これにより、大地区を南北にA～M、東西に1～10にわけ中地区を設け、北西よりA～P地区とした。次に中地区を9mにわけ小地区を設け北西より1～9地区と称し、さらに小地区を3mにわけ最小地区を設け同様に1～9地区と称することにした。また東奈良遺跡の略号をHNとし、調査地区の名称は、たとえばIIN・II－3－E－2－1地区と表わす。なお各地区の基準点は東南隅とした。（第4図）

この地区割り設定により、検出遺構・遺物にもこの表記がされ、

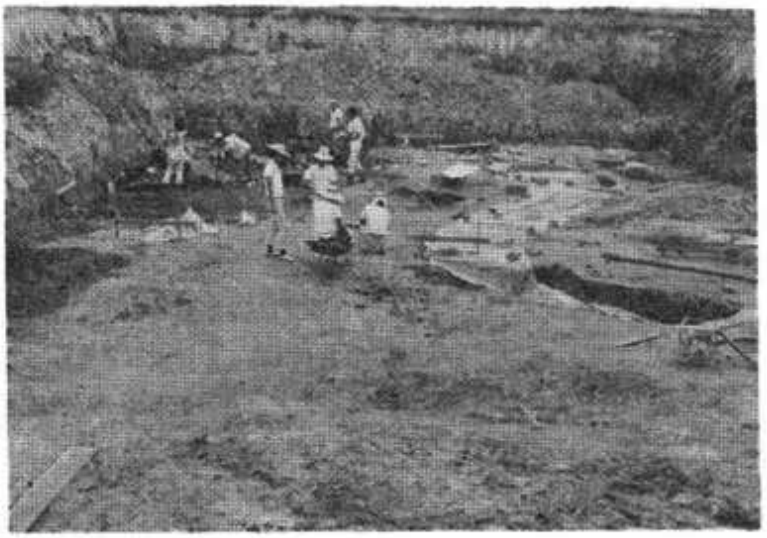
相互関係を正確に把握することができ、将来東奈良遺跡の古代史地図をも作製することが可能になった。

次に、基準標高は、茨木市沢良宜西の蓮照寺境内の三角点（O・P－8.129m）を基準として使用している。

（注） 今回の概報に記載している阪急家族寮（F－7－E・F地区）、山文商事ガソリンスタンド（H－5－1・M地区）は、この地区割り設定以前の調査のため、地図上よりひろった地区割りを使用している。



第4図 地区割細分図



第5図 発掘調査風景

第Ⅳ章
遺　構

F－7－E・F地区

当調査地点で検出された遺構は、北西から東へ流れる浅くて幅の広い溝（溝Ⅰ）と、東西に蛇行しながら流れるV字溝（溝Ⅱ）、直径約2m、深さ1m前後のものを含む九個の円形大形土坑、溝Ⅰによって切られた8個の袋状土坑などの他、柱穴かと考えられる若干のピットを検出した。また調査地点の中央部から西寄りにかけて腐蝕した植物遺体や自然流木を多量にまじえた、非常に粘りの強い黒色粘土層が堆積した南北に広がりを見せる沼状のよどみと思わせる大きな落ち込みのあるのを確認している。

層位

造成土を取り去ると、かっての水田面が姿を現わす。其の耕土と床土（第1層）を約 1.2m掘り下げると淡黒色粘土層（第2層）が現われる。第2層には、瓦器、磁器の小破片、木製品、自然流木等が包含されているが、遺構は検出されなかった。約 0.3mの第2層を除去すると、粘りの強い黒色粘土層（第3層）が現われる。庸古第Ⅱ様式から、第Ⅴ様式にわたる弥生式土器、土師器、須恵器が自然流木とともに含まれており、数回にもわたって押し流されて、繰り返し堆積したと考えられるが、包含層が全く黒色であるため明確に堆積の実態をつかむことはできなかった。約 0.5mの第3層を取り除くと淡青白色の非常に粘り強い粘土層（第4層）となる。遺構はこの第4層に掘り込んだ状態で検出されている。

溝Ⅰ

今回の調査地点内では、北西から南東方向に約11m検出した。溝の幅は約5～6mであるが、南北2本の流れにわけることができ、北側の流れを溝Ⅰ－N、南側の流れを溝Ⅰ－Sと呼ぶ。

溝Ⅰと直角に設定した土層断面から判断すれば、層位は大きく2層にわけることができる。溝Ⅰ－Sには、2層の堆積のうち下層の土が流入して溝を埋めているのに対して、溝Ⅰ－Nは上層の土の流入によって浅くなっており、その上に第2層の淡黒色土が堆積して埋没している。この結果溝Ⅰ－Nは、溝Ⅰ－Sが埋没した際に、部分的に其の横に新に掘り込まれた様である。

第6図　木樋の出土状況

両水路より出土した土器から判断して、溝Ⅰ－Sは庸古第Ⅴ様式の時期に形成され古墳時代前期まで使用されており、溝Ⅰ－Nは古墳時代前期より形成されている。両水路からは、多量の土器の他、多量の流木と溝Ⅰ－Sより木樋（図版128－8）さらに石鏃（図版123－4）や剥片が少量出土している。

溝Ⅰ－Nの流れが地上から姿を消したのは、中世の始め頃と考えられる。其の最終的な流れの中に、流木や植物の堆積層が認められ

ることから、多少とも流れの存在した根拠としてあげることができよう。

溝Ⅰ

調査地点内を東西に蛇行しながら走る幅1.5～2m、深さ0.6m前後のV字溝で、約30m検出した溝の南側の肩には、数本ではあるが、直径5～6cmの木杭（図版127—6.7）とその抜け跡が認められた。

第7図　竪杵の出土状況

溝が形成されたのは唐古第V様式の時期で、古墳時代後期頃までかなり長期間にわたって使用されている。また溝の土層面を観察すると、溝の使用期間中に拡張をおこなった事が判る。

中央部より西側の溝の調査は、湧き水と壁面の崩壊のため溝の底まで十分に調査を実施することができなかった。この部分の北側の肩には、竪杵2点（図版127—4.5）と用途不明の加工木2点が乗った状態で検出されている。他に溝より、有頭棒（図版126—3）、異形木器（図版126—2）、自然木が出土した。

溝Ⅱ

溝Ⅰには幅1m、深さ0.2mの小支流溝Ⅲを有している。溝Ⅲからは、壺型土器（図版94—36）が出土している。

沼池状の落ち込み

調査地点の中央部より西側に、深さ0.7m前後の不整形な落ち込みが南北に連らなり検出された。落ち込み内の南北の土層断面から判断すれば、土砂の堆積は、黒色粘土や暗灰色粘土が下部に沈澱し、上部には流木や、植物遺体を多量に含む腐蝕土層や、砂層が認められる。沼地状の落ち込み底部より、唐古第Ⅴ様式の壺（図版95—43）、器台（図版95—51・52）等と共に、木製の腰掛け（図版126—1）1点が出土している。

円形大形土坑

円形大形土坑は、大きく3群にわけることができる。溝Ⅰと溝Ⅱにはさまれた東側の地点で4基（2基ずつ切り合った状態で検出）、沼地状落ち込みの西側で4基と東側に1基を検出した。

土坑は、最大のもので上口径2.5m（第7号土坑）、最小のものは上口径1.3m（第1号土坑）で、平均して上口径1.5m前後のものが多い。深さは土坑の肩から計って、最も深いもので1m（第3号土坑）、浅いもので0.25m（第6号土坑）で、平均して深さは0.45m前後である。

土坑は、淡青灰色の粘りの強い粘土層（第4層）を掘り込んで作られており、土坑の底に粘性の強い灰色粘土層が認められるほかはほとんど腐蝕土が土坑内に充満している。東側の1群、第3号土坑の底近くに唐古第Ⅴ様式の甕形土器（図版93—15）が横転した状態で出土した。これと同様の円形大形土坑が下中条遺跡からも検出され

ており、土坑中の遺物も同時期のものである。

円形大形土坑の時期は、土坑内遺物を全く含まないものであるが、2群とも唐古第Ⅴ様式の時期と考えてよいだろう。

袋状土坑

調査地点の北東のすみに、溝Ⅰによって切断された8基の袋状土坑が検出された。溝Ⅰによって切断されているため詳細な点は不明確であるが、ほぼ上口径0.8m、深さ0.3m程の下ぶくれの土坑である。第13号土坑からは唐古第Ⅴ様式の壺形土器を出土したほか、各々土坑内からも多少の土器片が出土した。(第13号土坑の遺物は、調査中盗難を受けた。) 今回の調査では検出することができなかったが、袋状土坑群と接する東側の壁面にも袋状土坑の一部が認められ、唐古第Ⅴ様式の甕型土器の破片を包含していた。

尚、袋状土坑群の付近には、北から南の溝に向って若干の傾斜が認められ、土坑の最上面に多数の弥生式土器の破片が散乱していた。

土器は唐古第Ⅴ様式のものがほとんどであった。

其の他の遺構

以上1～5迄で述べて来た遺構の他に、ピットが若干検出されているが、どのような遺構があったか把握する事は出来なかった。

小結

今回の調査で検出された遺構は、其のほとんどが弥生時代後期(唐古第Ⅴ様式)の時期に形成され、2本の溝状遺構(溝Ⅰ・Ⅱ)のみが、それ以降長く使用されていたと考えられる。又、各々の遺構からの出土遺物や切り合い関係から推定するなら、溝Ⅱ⟶袋状土坑・円形大形土坑、溝Ⅰ－S⟶溝Ⅰ－Nという形成順序と、袋状土坑・円形大形土坑⟶溝Ⅰ－S⟶溝Ⅱ⟶溝Ⅰ－Nという廃絶順序を追うことが出来る。

H－5－Ⅰ・M地区

当地区より検出された遺構は、奈良～平安時代頃の柱穴遺構とA$_{10}$地区より検出された古墳時代前期の竪穴1基、A$_{1,2}$地区に検出された溝状遺構である。以下層位と時期の新しい遺構から記述を進める。

地区割りの設定

山文商事ガソリンスタンド調査地区の地区割りは、現調査会結成以前であったため、地区割りはなく任意に北より2m割りに、A$_{1,2}$～A$_{11}$地区と設定している。(現東奈良遺跡調査会の地区割りを地図上よりあてはめると、H－5－Ⅰ・M地区に位置する。)

また、基準標高も同様に未設定ではあるが当調査地区は、地図上より現耕土面に7m等高線が突出している位置にあたる。

層位

当調査地区の層位は、A₁地区において地山と思われる青灰色粘土層まで掘り下げる試掘を行ない、またトレンチ東壁面を利用して土層調査を行なった結果、第1層・耕土、第2層・灰色粘土層、第3層は2層にわけられ、上層がやや砂質の強い淡灰色土層、下層がやや粘質の強い淡灰色土層にわけられる。以下第4層・茶褐色砂質粘土層、第5層・黄土色粘土層、第6層・青灰色粘土層にわけられる。第1～6層までは、ほぼ全面に見られたが、第5層・黄土色粘土層はA₁,₂地区に検出された溝内に堆積していた層位である。他の地区においては、第5層が灰色砂質土層に変化しており、さらにA₂地区附近からは、黒灰色砂質土層に変化し多量の弥生時代から古墳時代の土器を包含する層になる。（図版73）

柱穴遺構

第3層中間層の淡灰色粘質土層より、柱穴遺構が2カ所検出されたが他に続くものがなく、掘り方も不明確であった。

第4層・茶褐色砂質粘土層上面より第5層・灰色砂質土層に掘り込まれた柱穴は、上層のものより残りはよく、土層断面より柱穴上部の掘り方が削平されていることも考えられる。検出された柱穴は、不秩序な配置で検出された。柱穴の掘り方は、円形あるいは方形に近いものもあり、柱自体は円形である。掘り方の径、あるいは一辺が0.16～ 0.2m、柱自体の径は約0.06mを計る。各々の柱穴は不秩序に並んでいるが、掘立柱建物跡復元の可能性のあるものとしては、東壁面に接し検出された3本の柱穴がある。柱間隔約7m、各々の柱穴間約3.5m、検出時の柱穴の深さ約0.16～ 0.2mを計る。しかし、建物自体が調査地区より東に位置するため、詳細は不明である。他の柱穴遺構からは、建物跡を復元することができなかったが、この面において附近に集落が存在していることが考えられる。

第8図　掘立柱建物跡

掘り方内の堆積層は、掘り方内に橙色砂質土、柱穴内には灰色砂質土が堆積しており、柱自体の存在は見られなかった。また、遺物も少なく、須恵器片が出土したが、時期は断言できない。層位的には、奈良～平安時代のものと推測される。（図版73、第8図）

溝状遺構

A₁,₂地区において、第4層・茶褐色砂質粘土層下層より砂層と粘土層の互層状態が検出され、古墳時代前期と思われる壺型土器片（図版105－1～3）が出土した。この堆積層を追うと、第5層青灰色粘土層をベースとした溝状遺構になった。しかし、調査地区と

調査期間の関係から、溝底部および溝方向は確認できなかった。調査地区内において１ｍ以上掘り下げたが、依然として砂層の堆積層が続き相当規模の大きなものになると考えられる。

壺棺墓

A_{10}、$_{11}$地区の第４層・茶褐色砂質粘土層取り除き中に、下層より黒灰色砂質土層があらわれ、多量の土器片（弥生時代中期～古墳時代前期）が出土した。

なおこの包含層取り除き中に、壺棺を検出したが掘り方の一部を破壊したために掘り方の上口に不明確な部分がある。第５層・黒灰色砂質粘土層と第６層・青灰色粘土層とを掘り込み東西に長軸をもつ楕円形のものであり、長軸約1.2m、短軸約１ｍ、深さ約0.4m程のものと考えられる。

壺棺は、口縁部を北東に取り、横位に安置してある。さらに壺棺取り除き後、掘り方底部の東よりに不整形な落ち込みが見られ、その部分に弥生時代中期の壺あるいは甕型土器の底部があたかも壺棺の安定をはかるために敷いたような状態で出土した。掘り方内の堆積層は周囲の土層と非常に似ており、第Ⅰ層・黒灰色砂質粘土層、第Ⅱ層・黒色砂質粘土層、第Ⅲ層・灰色粘土層にわけられた。各層に、周囲の土層で検出された同時期の土器片が含まれていることから、壺棺を安置した後に掘り出した土を再び埋めもどしたことが推測される。（図版74、第９図）

第９図　壺棺墓

壺棺は、復元口径0.2m、高さ0.436ｍを計る古墳時代前期のものである。（図版105―４）

壺棺の口縁部西上約 0.2m附近に、河原石（図版125―50）が出土した。この石は、壺棺墓との位置関係から標石とも考えられる。また、壺棺墓の周囲の第５層・黒灰色砂質粘土層には、弥生式土器唐古第Ⅳ様式～古墳時代前期にかけての土器片が多数出土したが、その多くは残りが悪いものである。

（注）　この編は、昭和46年12月24日に茨木市教育委員会より発行された「茨木市文化財調査略報Ⅰ」を追加・変更したものである。

H－3－J・K・M・N・O・P地区

当調査地区における遺構は、調査地区東半において、平安時代頃と考えられる掘立柱建物跡と多数の柱穴跡を第1層・茶褐色砂質粘土層面より、平均遺構レベル・標高（O，P）6.080mにおいて検出した。さらに、II－3－P地区の第2層・淡灰色砂質粘土層より古墳時代前期の竪穴住居跡を平均遺構レベル・標高（O，P）5.724mにおいて検出した。しかし、西半・H－3－J・K・M・N地区には、第1層に遺構らしきものが認められず、第3層・黄褐色粘土層面において弥生時代後期から古墳時代前期にかけての井戸状遺構・溝状遺構・土器群が、平均遺構レベル・標高(O，P)5.440mにおいて検出された。以下層位及び、時代の新しいものから記述を進める。

層位

当調査地区の層位については、床土下層より調査地区南壁面の一部において調査を実施し、さらにユンボにより、標高O・P 4mまでの層位調査を行った。（㊟耕土・床土までは、すでにバックホウにより除去している。）

第1層は、調査地区全面に観られた弥生式土器、土師器、須恵器を包含し、歴史時代の遺構面を有する茶褐色砂質粘土層。第2層は、古墳時代前期の遺構面を有する淡灰色砂質粘土層。第3層は、調査会地区割り「W－60ライン」付近より西に観られ、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構面のベースである黄褐色粘土層。第4層は、同じく「W－60ライン」より東に観られた黄褐色砂質層。第5層以下は、「すじ掘り」より調査したものである。第5層以下は、一部の弥生時代後期から古墳時代前期の遺構のベースとなる灰色粘土層。第6層、黒色粘土層、第7層は、「W－60ライン」より西側に淡灰色砂層。第8層は、「W－60ライン」より東側の暗灰色砂質粘土層。第9層、黒色粘土層と以上のようにわけられる。しかし、「W－18ライン」より東側においては、第5・6・8・9層が消え、砂層の堆積層に変化し、標高4m以下まで続くと考えられる。

（注） 後日行った調査によって判明したことであるが、この砂層の堆積は、II－3－G地区において検出された溝Ⅱ－3と堆積状態が以通っており、また溝方向も一致することから、同一の大溝がH－3－P地区にも存在していたものと考えられる。

歴史時代の遺構

掘立柱建物跡

H－3－O・P地区

調査地区東部において、第1層・茶褐色砂質粘土層上面より掘り込まれた柱穴遺構が多数検出された。その中より5棟の掘立柱建物跡が復元された。

今回検出された柱穴遺構の掘り方は、円形あるいは方形を成し検

出時の深さ約0.2～0.6mを有する。その多くは、掘り方自体だけであったが、一部には柱穴跡あるいは柱根を残すもの、柱穴底部から河原石を出土したものもある。

復元された掘立柱建物跡5棟は、第4号棟を別にして、主軸を南北あるいは東西に取り、集落跡的形態をもつが、今回検出された建物跡は、その西端に位置し、他のものは調査地区の東に伸びることが推測される。

当地区より、検出された掘立柱建物跡ならびに柱穴の時期は、掘り方内より出土した土師器片、黒色土器片、瓦器片と層位的相対年代を参考として、平安時代中期（11世紀頃）のものと考えられる。

復元された掘立建物跡は、北より掘立建物跡1号・2号……と称して、第2表に記述する。

No. / 規模	1 号	2 号	3 号	4 号	5 号
桁行	不 明	3 間	3 間	2 間	3 間
桁行長		5.8	6.4	3	6.4
梁行	2 間	不 明	3 間	2 間	2 間
梁行長	3.6		6.0	2.75	3.7
主 軸	N－6°－E	N－6°－E	N－6°－E	N－26°－W	N－6°－E
掘り方の形態	円 形	円形・方形	円形・方形	円 形	円 形
径・深さ	0.24、0.4	0.2～0.3、0.1～0.4	0.2～0.3、0.2～0.6	0.2、0.2	0.2、0.2～0.4
備 考	・桁は調査地区の南へ伸びる。	・梁は調査地区の東に伸びる。	・掘立柱建物跡2号と重複、東側に1間の庇を持つが、同様のものが両側にあり定かでない。2本の柱穴底部に河原石。	・他の4棟と主軸を異にし、時期差も考えられる。	・東側梁の南分に、柱間 0.8mの庇を有す。掘柱径 0.06～0.1、深さ 0.1を計る。

第2表　掘立柱建物跡の規模（単位はm、掘り方・柱穴の深さは検出時のもの）

古墳時代の遺構

竪穴住居跡

H－3－P－1・2

地区

調査地区東北隅において検出された竪穴住居跡は、第2層・淡灰色砂質粘土層を掘り込んで存在する。住居跡の平面形態は、隅丸方形を成す。住居跡の規模を知るため、調査地区北側の一部を拡張した結果、南北の長さ 6.4mであることが明らかになった。しかし、東西の長さは、調査を行えなかった関係上不明である。また住居跡の軸は、N－14°－Wに取る。住居跡の検出時の床面の深さは、肩より約6cmと浅く、砂質粘土層を掘り込んでいるため、住居跡側壁

と床面はもろい。住居跡の掘り方の深さが浅いことから、新しい時期に掘り方の一部が、削平を受けていることも考えられる。住居跡内の床面より柱穴跡が、4カ所検出されており、その内、住居跡南側に東・西に並ぶ2カ所の柱穴跡が、住居跡の主柱と考えられる。各々の柱穴の掘り方は、東側径0.34mの円形で、検出時の深さ 0.2m、西側径0.24mの円形、検出時の深さ約0.21mを計る。柱間隔は、約 2.3mと住居跡の規模に比較して狭くなっている。北側の主柱は、調査地区の関係から検出することができなかった。住居跡内には、他に、南・北に各々の1カ所のピット状遺構が検出されている。北側のピット状遺構は、切り合いが認られ、隅丸方形を成し、一辺約 0.5m、検出時の深さ約0.17mを計る。南側のピット状遺構は、住居跡南壁面沿いに、不整形な形態を成す。このピット状遺構は一部調査地区外にあるため、規模は不明確であるが、東西長軸1.4m以上、南北1.1m、検出時の深さ約0.1mを計る。掘り方は、上口よりゆるやかな傾斜をもって底部に落ちこみ、底部は白色砂層となり、ピット内には黒色砂質粘土の堆積が認られた。当ピットより、古墳時代前期の高杯型土器（図版107－7）が、押しつぶされた形で出土した。この2カ所のピット状遺構は、貯蔵穴あるいは炉跡と考えられる。さらに、住居跡西壁面沿いに幅0.06m、検出時の床面よりの深さ約0.03mと浅く細い溝が検出されている。検出された溝は、ごく一部であったが、本来は住居跡内を全周していたものと推測される。

当竪穴住居址の時期は、住居跡内より出土した土器より古墳時代前期のものと考えられる。

弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構

H－3－M・N・O地区

井戸状遺構

前述の柱穴遺構、竪穴住居跡の西側全域において、第3層・黄褐色粘土層をベースとする井戸状遺構・溝状遺構が検出された。

井戸状遺構・溝状遺構は、柱穴遺構がなくなるH－3－O－6地区より西にあらわれ、特にH－3－N地区では集中的に検出された。これらの遺構は、各々が関連しあいながら、不秩序な配置、不整形な形態を成して検出されたが、その状態から、無造作に掘られた遺構と考えられる。

今回検出された井戸状遺構・溝状遺構は24基あるが、その内、形態、掘り方の深さから井戸と考えられる可能性のあるものは、8基あり、その内1基は、近代の井戸枠をもつものであった。以上井戸状遺構の詳細は、ピット番号に合わし、第3表に記述する。

II－3地区の弥生時代後期から古墳時代前期の遺構であるため、非常に浅い土坑においても、井戸としての能力（湧き水程度のもの）をもつことも考えられるが、地下水を汲みあげる深い竪穴を掘った井戸は当地区において検出されていない。

No.	地区	形態	規模 長軸	規模 短軸	規模 深さ	底部標高	備考
P－3 a	H－3－N－1	楕円形	2.0	1.6	0.47	5.057	P－3 aは、P－3 bを切り込んで存在する。
P－3 b	H－3－N－1	長方変形	2.6	2.1	0.44	5.141	
P－4	H－3－N－1、2	円形2段素掘り	径 1.64		1.09	4.512	南側に溝（幅1.24m、深さ0.239m）を伴う。
P－8	H－3－N－1、4	変形2段素掘り	径 2.6		0.93	4.537	
P－15	H－3－N－6	円形に近い2段素掘り	1.9	1.6	0.6	4.729	完形の変形土器（図版107－1）出土。
P－16	H－3－N－6、9	鍵穴形一部2段素掘り	3.3	2.1	0.77	4.505	
P－18	H－3－O－2	円形素掘り	径 2.6		1.15	4.100	H－3－N・O地区 最大規模のもの。

第3表　井戸状遺構の規模（単位はm、深さは検出時のもの、底部標高はO・P）

溝状遺構

多くの溝状遺構の中で、P－5がもっとも溝の形態をもつものである。調査地区H－3－N－2地区の南壁面より表われ、北々西より南々東に連なり、検出長約6.4m付近で途切れる。幅1.4～1.8m、深さ約0.35mを計り、溝内の堆積層は、第1層・黒褐色砂質粘土層、第2層・赤褐色砂質粘土層、第3層・灰色砂質粘土層、第4層・黒色腐植土層にわけられる。第1・2層より少量の土器片が出土した。

またP－23も同様に溝遺構の形態をもつものであるが、この溝は、近代に掘り方上口部分に大きく削平を受けている様子が観られ、明確な肩は検出されなかった。溝は、H－3－O－8地区の南壁面よりあらわれ、南東から北東に連らなり、検出長約8m付近でやや西向きに方向を変え途切れる。溝幅1～1.4m、深さ0.1m前後と浅い。溝内には灰色砂層の堆積が観られ、溝内より、須恵器の大形甕型土器（図版122—34）が出土している。

他の溝状遺構については、明確に溝と判断できるものは少なく、長楕円形土坑の形態を成すものであった。

ピット状遺構であるH－3－N－7地区のP－19は、南壁面以南にその中心が位置するため明確な形態は不明であるが、南壁面の土

層から、第4層・黄色砂層より掘り込まれており、深さ約 0.5mを計る。ピット内には、茶褐色砂質粘土層の堆積が観られ、多量の土器片が出土した。その多くは破片であり、残存状態も悪かった。その中に、壺形土器の口縁部から胴部にわたるものが一点含まれている。（図版107－5）この土器より、当遺構の時期は、古墳時代前期のものと考えられる。

土器群a、b

II－3－N地区の井戸状遺構の間に、2カ所の土器群が検出された。その北側を土器群a、南側を土器群bと称する。土器群aは、南北約1.5m、東西1.2mの楕円形を成す部分に、遺構面より約 0.2～0.4m浮いた状態で、土器が集中して出土した。同じく、土器群aの南西約8mに検出されたのが土器群bであり、南北約 1.9m、東西約1mの部分に土器が多量に出土した。両土器群とも同じ性格をもつものと思われ、それは第1層・茶褐色砂質粘土層中に含まれ、古墳時代前期の遺構面より浮いた状態が観られる点である。また、土器の残存状態は非常に悪く、細片化していた。

H－3－E・C・F・G・H地区

当調査地区において検出された遺構は、一応2層の遺構面にわけることが出来る。第Ⅰ遺構面には、古墳時代中期の方形周溝状遺構と時期不明のピット群、溝、井戸、竪穴住居跡が検出された。

第Ⅱ遺構面においては、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて竪穴住居跡、井戸、大小の溝、土器群等の遺構が検出された。

同遺構面に於いて、弥生時代中期の土器群が出土したが、遺構としての性格が薄い、然し溝Ⅱ－2は、遺構の切り合い関係、下層より出土した土器より弥生時代中期頃のものであることから、弥生時代中期からの生活面の存在も考えられる。

以下層位、第Ⅰ遺構面より記述を進める。

層位

当調査地区では、調査地区南壁面の一部と、西壁面の土層調査を実施した。更に調査地区のほぼ中央、N－75ラインに沿って最終遺構面よりバックホウにより標高4m付近迄約1.3～1.6m掘り下げ、遺構面下層の層位状態を調査した。其の結果、耕土・床土をバックホウにより取り除いた後の南壁面の土層は、調査地区東半（W－37ラインより東側）に於いて、床土下層に第1層・須恵器、埴輪片を包含する茶褐色砂質粘土層、第2層・淡灰色粘土層、第3層・淡灰色砂質土層、第4層・橙色粘土層、第5層・灰色粘土層に分けられる整った層位が観られた。然し西半（W－37ラインより西側）において

は、第1層、茶褐色砂質粘土層の下層より、複雑な砂層と粘土層の互層状態を呈し、この層は、東半の第3層淡灰色砂質土層と第4層・橙色粘土層の間にもぐる。この互層は大別しても20層以上を呈し、調査地区のW—39ライン以西全域に、北北西から南南東に連なった状態が観られた。この層位は、調査地区西壁面にも観られ、第5層、灰色粘土層まで厚さ約0.5～0.6mあり、今回は全体を同一層として扱い第4層と称する。

また、「すじ掘り調査」より第6層、黒色粘土層、第7層、灰色粘土層、第8層、黒色粘土層が、ほぼ水平に堆積する比較的整った層位が観られた。然しこの層位も、第5層、灰色粘土層と、第6層黒色粘土層の間に、W—32ライン付近から東側には第6・7・8層をも切り込んだ砂層の堆積に変化する。この砂層の堆積は、標高(O・P) 3.9m以下迄続き、更に下層に続いていると考えられるが、湧き水による壁面の崩壊の為追跡調査を断念した。又同じ様な砂層の堆積が、W38～W46ラインの間にも観られ、同じく第5・6・7層をも切り込んで存在する大形の溝状遺構が検出され、砂層の下層より弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる土器が出土した。大形溝状遺構の詳細については後述する。

第Ⅰ遺構面
古墳時代から歴史時代の遺構
溝Ⅰ—1
（方形周溝状遺構）
（H—3—F、G地区）

調査地区西半において、黄白色砂層と茶褐色砂層をベースとした溝状遺構がみられた。当溝は、南北に連らなり、N75ライン付近から西へほぼ直角に曲り、方形周溝状を呈する。仮に南北に連なる溝を東溝、東西の溝を北溝と称する。

今回検出の東溝は、検出長約 11.5m、幅約2～ 2.75m、深さ約0.3mの規模をもち、北溝に関しては、東溝と北溝の接点付近において、不明瞭な部分があるが、検出長約5m、幅約2m、深さ約0.3mを計る。東溝は直線的ではなく、やや弓状になっている。両溝とも溝肩より底部にかけて、非常にゆるやかな傾斜で落ち込み、溝底部には起伏があり、溝幅に対して深さが浅いのが特徴である。

溝内には、3層の堆積がみられ、第1層・黒灰色砂層、第2層・茶褐色砂層、第3層・灰色粗砂層にわけられる。溝内より出土した遺物は少なく、東溝東肩（II—3—F—4地区）において、第2層茶褐色砂層より古墳時代中期後半の甕（図版121—23）と少量の須恵器片が出土したのみである。

溝Ⅰ—1の性格は、溝が方形周溝状に廻っていることから、方形周溝墓の可能性もあるが、周溝内の台状部には主体部と思われるも

のがなく、不秩序に並ぶ時期不明のピットが検出されたのみである。又、盛土と思われるものも検出されていない。調査範囲の関係上、不明確であるが、方形周溝墓と考えた場合は古墳時代中期頃の規模の大きなものになる。そこで今回は方形周溝状遺構として扱うことにする。

溝Ⅰ－2

溝Ⅰ－2は、溝Ⅰ－1の東溝の途中よりあらわれ、南東から北西に連らなっており、北端はピット状遺構によって終っている。当溝は、土層断面よりみると、溝Ⅰ－1より古く又溝Ⅰ－1により一部溝肩が削平されている。溝Ⅰ－2は、調査地区内においての検出長約10m、幅0.7m、深さ約0.3mを計り、溝内には灰褐色砂層の堆積がみられたが、遺物は全く包含していない。

さきの溝北端に検出されたピット状遺構は、上口径 0.5m、深さ0.52mを計り、溝Ⅰ－2と同時期に存在するものと考えられる事から、簡単な井戸状遺構、或は水溜めの様な遺構の可能性もある。

溝Ⅰ－3

溝Ⅰ－3は、溝Ⅰ－1の南端東肩付近より現われ、北北東に延び調査地区中央部付近で途切れる。調査地区内においての検出長約8.5m、幅0.5～1m、深さ約0.66mを計る。溝内には茶褐色粗砂層の堆積がみられたが、遺物は全く包含されていない。

溝Ⅰ－3は、層位の項において述べた様に、溝検出地区が複雑な砂層と粘土層の互層状態がみられる所である事から、此の堆積層の一部を掘り抜いた可能性がある。又溝肩も砂層の堆積層の為、はっきりせず、溝遺構としては疑わしいものである。

柱穴遺構
（H－3－II－4地区）

調査地区内の南東部と西部に、少数の柱穴が検出された。これらの柱穴は、不秩序な配置で検出され、建物遺構を考え出す様なものは、極くわずかの柱穴のみであった。

建物遺構の可能性があるものとしては、調査地区南東部に於いて検出された5本の柱穴の内、東西に連らなる4本の柱穴が、2～2.3mの間隔をもち、秩序よく並んでおり、東西方向3間の掘立柱建物跡が考えられるが、南北に関しては調査地区の関係上不明である。各々の上口径約 0.2m、深さ約0.25mを計り、柱穴内には、暗灰色砂の堆積がみられたが、時期を決定する遺物は出土していない。

竪穴住居跡Ⅰ
（H－3－G－4地区）

調査地区南西に、溝Ⅰ－3の東肩を一部切り込んだ落ち込みを検出した。非常に狭い範囲での検出の為、規模形態等は不明確であるが、検出された部分から想定すると、方形或は隅丸方形の竪穴住居跡と考えられる。

当竪穴住居跡Ⅰの軸方向は、検出部分より西北西から東南東にもち、検出時の掘り方の深さは、約0.06mと浅いものである。竪穴住居跡内には灰褐色砂質層の堆積が見られたが、時期を決定する遺物は出土していない。住居跡の周、床面は黄白色砂層と非常に軟弱なベースである。床面より、柱穴が1ヶ所検出されている。柱穴上口径0.2m、深さ0.12mを計る。又住居跡の壁面付近に、炭化物が棒状になった状態で集中して出土した。この炭化物は、床面より約0.06m程浮いた状態で出土したが、住居跡の建築用材の焼け跡の可能性もある。

其の他の遺構（H－3－D・H地区）

調査地区東部（II－3－D・H地区）に、大小の落ち込みが4ヶ所検出されている。落ち込み内には、何れも灰色砂質層が堆積しており、時期を決定する遺物は出土していない。各々の落ち込みは形態も不整形で規模もまちまちである事から、自然の落ち込みと考えられる。

第Ⅱ遺構面 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構

層位の項で述べた第2層・第3層・第4層を掘り込んだ弥生時代から古墳時代前期の遺構としては、3回以上の建て直しをおこなった竪穴住居跡を中心とし、井戸・大小の溝遺構が多数検出された。此等の遺構の内、竪穴住居跡Ⅱと井戸4号、大溝（溝II－3）との関係は、非常に興味ある資料となった。（図版77）

竪穴住居跡Ⅱ（H－3－C－8・9地区）

調査地区北部に於いて、淡灰色砂質粘土層を切り込んだ隅丸方形の竪穴住居跡が検出された。当住居跡は、3回以上の建て直しが行なわれている事が判明した。新しいものから竪穴住居跡Ⅱa－Ⅱb－Ⅱcと称する。

竪穴住居跡Ⅱa

最も新しい竪穴住居跡Ⅱa（図版78）は、軸をほぼ磁北に取る隅丸方形の竪穴住居跡である。当住居跡は、南北6m、東西6m、検出時の深さ約0.15mを計る。住居跡内には、7個の柱穴と炉跡・貯蔵穴を各々1個、コの字形のベット状遺構をもつ。

柱穴は、住居跡内のみにみられ、住居址の周囲等には検出されていない。住居跡内の7個の柱穴跡から、配置関係より、4個の主柱を組み合わせると、南北 2.8m、東西3mとなる。各々の柱穴は円形で上口径0.16m、検出時の深さ0.3m～0.4mを計る。（尚、北東に位置する柱穴のみが上口径0.3mを計る）。各々柱穴内には暗灰色砂質粘土、或は黒色砂質粘土が堆積していたが、柱自体は検出されていない。

炉跡は、住居跡中央部に位置し、円形を呈し上口径0.76m、検出

時の深さ0.14mを計る。掘り方は、上口より底部にかけて急傾斜で落ち込み、底部は平坦になっている。炉内には、炭化物と灰の堆積層が見られ、掘り方壁面に炭化物の付着がみられた。貯蔵穴は住居跡内南東部に位置し、平面形が三角形に近く、南北約1m、東西約0.9m、検出時の深さ約 0.29mを計る。掘り方は上口より底部にゆるやかな傾斜で落ち込み、底部は非常に小さく擂鉢状を呈している。内部は、灰色砂質層の堆積が見られた。

更に、当住居跡の特徴としては、東、北、西側にかけてコの字形のベット状遺構をもつ点である。このベット状遺構は、住居跡の側壁に沿って、約1～ 1.2mの幅をもって床面より0.04m程度高くなっている。(尚、ベット状遺構が住居跡の南側の部分にないことから、南側が住居跡の入口と考えられる)。北側のベット部分西寄りに、幅0.26m、深さ0.1mの溝が掘ってあるが、用途は不明である。

住居跡の側壁に沿う様に北側から西側にかけて細い溝が、不明瞭ながら廻っている。この溝は、全体的に痕跡程度しか残っていないが幅約 0.1m、深さ約0.03mを計る。今回検出された住居跡においては、住居跡を全周していないが、本来は側壁に沿って廻っていたものと考えられる。

住居跡内には、2層の堆積層が見られ、ベット状遺構上面迄第1層・暗茶褐色砂質粘土層、第2層はベット状遺構より床面にかけて厚さ約0.04～0.05mの炭化物と灰の堆積層になっている。この堆積は、中央炉跡内にもみられた。第1・2層にも、又床面等にも時期を決定する遺物は検出されていない。第2層炭化物と、灰の堆積層から、住居が火災にあった可能性をも示している。

竪穴住居跡Ⅰb

竪穴住居跡Ⅰaの床面とベットを深さ0.1～0.2m程淡灰色砂質粘土層を取り除くと下層より、更に1基の竪穴住居跡Ⅰb（図版79）が検出された。さきの竪穴住居跡Ⅰaをひとまわり縮小した形で存在すると考えられる。然し、住居跡Ⅰbは、住居跡Ⅰaによる攪乱と更に下層の住居跡Ⅰcの関係も相俟って、より複雑化を呈しており、規模形態を想定するのが困難な住居跡である。

竪穴住居跡Ⅰbは、軸を磁北とほぼ同じ方向に取り、東西 5.6m南北 5.6mを計る隅丸方形の竪穴住居跡と考えられる。主柱穴4個の間隔は、東西3m、南北2.84mを計り、南側の2本の主柱穴が、住居跡Ⅰaと重複することになる。南東主柱穴の北西に接するように柱穴が存在し、住居跡Ⅰaの南東主柱穴に切り込まれているこの

柱穴が住居跡Ⅱbの南東主柱穴の可能性もあるが、他の主柱穴の配置関係から一致しなかった。各々の柱穴は円形で上口径 0.2～0.24m、検出時の深さ0.2～0.4mを計る。柱穴内には、暗灰色粘質土が堆積していたが、柱等は検出されていない。

住居跡Ⅱaに見られたベット状遺構は、住居跡Ⅱbには検出されていないが、床面がかなりの攪乱を受けて起伏があり、当時の床面を想定するのが困難であることから、ベット状遺構が存在していた可能性もある。又同様に、炉跡・貯蔵穴等も明確なものは検出されていないが、住居跡南側に、複雑なピット状遺構が重複して検出されており、これが炉跡、或は貯蔵穴であった可能性もある。

住居跡Ⅱbの東、西、南、北側の側壁沿いの一部に細い溝が廻り、溝幅0.2～0.4m、深さ約 0.1mと細く浅いため途中途切れる部分もあるが、ほぼ全周している。又溝内に小さなピットが数ケ所検出されたが、ピットと溝の関係は不明である。

竪穴住居跡Ⅱc

竪穴住居跡Ⅱc（図版75）は、住居跡Ⅱa、Ⅱbと軸方向を異にした更に規模の大きな住居跡である。住居跡Ⅱcも、住居跡Ⅱa、Ⅱbと重複する部分は、複雑化を呈し、柱穴、炉、ベット遺構等の付属物も不明瞭な部分が多少あるが、さきの住居跡外の部分は、明確に残っており、規模、性格を想定する事が可能であった。

住居跡Ⅱcは、住居跡Ⅱa、Ⅱbの西側のベースとなった黄褐色粘土層を取り除くと、下層の黄色粘土層をベースとし、住居跡西側に検出されていた溝状遺構を西側壁とし、北側壁の一部が調査地区よりはみ出し、東側壁は北側の一部が残り、南側は住居跡Ⅱa、Ⅱbにより削平を受けている。又住居跡の南側も住居跡Ⅱa、Ⅱbと新しい時期の攪乱を受けているため、明確なものは残っていない。

住居跡Ⅱcは、軸をN—24°—Wに取り、東西7.2m、南北7.2mを計る隅丸方形の竪穴住居跡と考えられる。主柱穴は、10個の柱穴の中より、配置関係から4個の柱穴を組み合わせると、東西4m、南北 3.6mの間隔を有する。各々の柱穴は円形を成し、北西、南西の柱穴の上口径0.3m、検出時の深さ0.4m北東、南東の柱穴の上口径0.24m、検出時の深さ0.25mを計る。柱穴内に暗灰色粘質土或は黒色粘質土が堆積しており、柱自体は残っていない。

住居跡Ⅱcは、住居跡Ⅱaと同様に、西、北、東側壁に沿って、ベット状遺構をもつ。ベットの幅は1～1.4mを有し、床面より0.1m程高くなっている。住居跡Ⅱcも住居跡Ⅱaと同様に、南側にベ

ットを検出できなかった。これは、住居跡Ⅱａ、Ⅱｂと新しい時期の攪乱によるものとも考えられるが、やはり南側は住居の入口の為ベットがなかったと考えられる。炉跡・貯蔵穴は、住居跡Ⅱａ、Ⅱｂの中央付近に、複雑なピット状遺構が重複しており、位置関係から炉跡・貯蔵穴の可能性もあるが、定かでない。

又、住居跡Ⅱｃと同じ位置において、南西と北西の主柱穴付近に、各々１個の明確な柱穴が検出された。この２個の柱穴から更に１回の建て直しの可能性もある。東側の主柱穴が残っていないため、住居跡の復元はできないが、竪穴住居跡Ⅱは、３回以上の重複が明らかであり、時期を決定する遺物は検出されていないが、住居跡の形成順序は、住居跡Ⅱｃ→住居跡Ⅱｂ→住居跡Ⅱａと考えられる。又住居跡の形態から、弥生時代後期から古墳時代前期のものと考えられ更に後述する竪穴住居跡Ⅱの南側より検出された井戸４号、西側の大溝（溝Ⅱ－３）が、弥生時代後期から古墳時代前期にあたるものと判明しており、これらを参考として、ほぼ同時期のものと考えられる。

井戸状遺構

東奈良遺跡には、多数の井戸状遺構が検出されており、当調査地区も例外でなく、７基の井戸状遺構が検出されている。然し、全部が井戸とは考え難く、一概に断定できない。７基の内、井戸としての能力を有するものと考えられる３基を抽出して記述する。

井戸１号
（H－３－H－４地区）

井戸１号は、調査地区南東部の溝状遺構の中に位置する。溝Ⅱ－２を切り込んで存在する井戸１号は、素掘りの円形二段掘りのもので、上口径約2.2m、上口より二段目上口までの深さ0.5m、二段目上口径 1.1m、２段目上口より底部迄の深さ0.67m、一段目上口よりの深さ1.17m、底部標高（O・P）4,870mを計る。

井戸内には、２層にわけられる堆積層が見られ、第１層・茶褐色砂質粘土層、第２層・暗青灰褐色粘土層にわけられたが、井戸の時期を決定する様な遺物は出土しなかった。

井戸２号
（H－３－H－９、H－３－H－３地区）

調査地区東北部に第Ⅰ遺構面において検出されていた自然の落ち込みの下層より、井戸状遺構が検出された。この井戸２号は、楕円形素掘りの井戸で、上口長軸1.8m、短軸1.3m、深さ1.15m、井戸底部標高（O・P）4.944mを計る。井戸の東肩は、さきの自然の落ち込みにより削平されている。

井戸内には、２層にわけられる堆積層が見られ、第１層・暗茶褐色砂質粘土層、第２層・暗灰褐色粘土層にわけられる。第１層は、

東に伸びる自然の落ち込みの堆積層と同一のものである。堆積層中よりは、時期を決定する遺物は出土していない。

井戸4号
（H—3—G—3地区）

井戸4号は、第Ⅰ遺構面において、調査地区中央部より検出された。第Ⅱ遺構面においては、井戸自体も大きく変化し、当調査地区最大規模のものになった。

井戸4号は、当初ほぼ円形に近い2段素掘りのもので、上口長軸2.4m、短軸2.2m、下段上口径1.5m、深さは上段上口より下段上口まで約0.6m、下段上口より底部まで約0.6m、上段上口より底部まで約 1.2m、底部標高（O・P）5.024mを計る。井戸内には第1層・茶褐色砂質粘土層、第2層・青灰色粘土層の堆積が認められ、第2層下層、井戸底部より、古墳時代前期の土器が出土した。この土器の出土のため、この面を井戸4号の一時期の底部として扱った。出土した土器は、井戸底部よりわずかに浮いて、底部中央に位置する。（図版80）出土した土器には、完形の甕型土器（図版107—9・10）、口縁から頸部を欠く甕型土器（図版 107 —12）、完形の土錘（図版125—41）が各々1点あり、その他甕型・壺型土器片がある。これらの土器の出土状態から、単に埋没する時に入ったものではなく、意識的に井戸に投入されたものと考えられる。

井戸4号は第Ⅱ遺構面において、井戸上口付近が大きく変化し、すりばち状に落ち込み、細い溝状遺構が派生する。このすりばち状の落ち込みは、不整形なもので自然に形成されたような形を成している。井戸の深さも第3層・暗灰色粘土層の取り除きにより、さらに深いものになり、すりばち状の落ち込み上口よりの深さは1.81m、底部標高（O・P）4.377mを計るものになる。第3層中より、甕型土器（図版107—11）・椀型高杯（図版同13）が出土した。

井戸4号は、前述の竪穴住居跡Ⅱの南々西 2.5mに位置し、同時期と考えられることから、住居跡の重複関係と相俟って、相当長期間使用されたことが考えられる。

溝

溝状遺構は、井戸と同様に、東奈良遺跡においては非常に多数検出されている。H—3地区においては、非常に規模の大きな溝を含み、大・小20本程の溝状遺構が検出されている。今回は、その内おもだったものを記述する。溝の番号は、調査地区東側より記しており、それに従って記述を進める。

溝Ⅰ—1（小溝群）
（H—3—D・H地区）

調査地区東北部に、8本以上の小溝が列なっている。各々の溝は、溝間隔は一定でないが、同一方向にほぼ平行に列なっており、

また溝幅・深さ・堆積層も似ていることから、同じ性格の溝と考え、小溝群として扱う。

溝Ⅱ－1（小溝群）は、北々西から南々東に列なり、N－14°－Wの方向を取る。各々の溝の間隔は、1.65～2mを有し、溝幅 0.2～0.5m、深さ0.15～0.2mを計る。溝内には、灰色砂層の堆積が観られ、時期を決定するような遺物は出土していない。

各々の溝は、調査地区中央付近（N－75ラインの南北1m前後）で消えている。また、小溝群が消える付近に、小溝の下層より、小溝群に直交する形で、溝幅0.3m、深さ0.2m程の溝が検出された。この溝も小溝群と同様のものと考えられる。このような性格をもつ溝は、床上中あるいは歴史時代の遺構面で検出することはあるが、古墳時代前期の遺構面での検出例は当遺跡にはなく、初めての検出である。このように小規模の溝が同一方向に列なるのは、不明確であるが、当時の水田の残存遺構とも考えられる。

溝Ⅱ－2
（II－3－D・H地区）

調査地区を南北に連なる溝Ⅱ－2は、前述の溝Ⅱ－1（小溝群）・井戸1号より古くから存在するものである。溝幅1～1.5m、深さ0.2～0.3mと溝幅に比較し、深さが浅く溝底部の広い溝である。溝の方向は、N－4°－Wに取る。溝内には2層の堆積層がみられ、第1層・茶褐色粘土層と第2層・黒色粘土層にわけられる。

溝北部は、溝Ⅱ－1（小溝群）との関係から複雑化を呈しているため、一部溝Ⅱ－2の肩を消失している。溝Ⅱ－2の底部のレベルは、北から南に向かって低くなっており、比高差は約0.1m程ある。

溝内より、第1層から古墳時代前期の土器、第2層より弥生時代中期の土器片が少量出土している。

溝Ⅱ－3（大溝）
（H－3－C・G地区）

溝Ⅱ－3は、前述のごとく、第Ⅰ遺構面より複雑な砂層と粘土層の互層がみられ、この状態が第Ⅱ遺構面に至っても続いていることから、洪水などによる自然堆積と考えた。しかし、調査地区内の全遺構調査終了後実施したユンボによる「すじ掘り」の時に、当地区において深さ 1.6m程の下層の砂層中より大量の土器片が出土するに至り、調査の結果、非常に規模の大きな溝であることが判明した。

（溝Ⅱ－3は、調査期間の関係上緊急調査に終ったため、平面図・写真等はなく土層断面図のみを記す。）

溝Ⅱ－3は、5層以上の沖積層（第5～第8層、さらに第9層・灰色粘土層）を掘り抜いており、溝の肩は2段にわけて掘られている。溝上段上口幅7m以上、上段上口より二段目上口までの深さ 1.4～

1.5m、二段目上口幅2～3m、二段目上口より底部までの深さ0.6～0.8m、溝上段上口より底部までの深さは約2～2.4mに達し、溝底部の平均標高（O・P）3.700mを計る。

溝内の堆積層は、場所（地区）により大きく相違するが、比較的整った層位がみられるII－3－G－3地区において、大別すると10層にわけられる。（この層位も細別すると20層以上になり、また地区によって溝上口より、砂層と粘土層の複雑な互層が溝内へ流入する堆積がみられた。）

第1層・黄色砂層、第2層・白色砂層、第3層・淡灰色粗砂層、第4層・灰色微砂層、第5層・黒色腐植土層、第6層・暗灰色微砂層、第7層・黒色腐植土層、第8層・暗灰色砂層、第9層・黒色腐植土層、第10層・暗灰色粗砂層にわけられる。堆積層中の遺物の包含状態は、第1～第4層まで全く遺物を含まないが、第5～第9層までに、少量の土器片と植物遺体を含む黒色腐植土層より2点の木製品が出土した。この木製品は、鋤（図版130－17・18）と用途不明の木製品1点である。溝二段目上口より底部に堆積する厚さ0.4m前後の第10層・暗灰色粗砂層より、古墳時代前期の土器が、完形品をも多量に含みコンテナパットに150箱以上出土した。しかも緊急調査であったために全容を把握することができなかったことから、それ以上包含されていたことが考えられる。

出土した土器は、甕型土器がほぼ半数を占め、壷型土器・高杯型土器・器台型土器・鉢型土器・鉢型土器（図版108～120）等、当時使用されていたほぼ全器種の土器に及んだ。

溝Ⅱ－3の性格は、緊急調査であったために不明確な点が多いが溝肩が整った2段の掘り方を持つことから、自然に作られた溝とは考え難く、人工によって5層以上の沖積層を幅7m以上、深さ2m以上掘り下げたか、あるいは自然水路を改修したことが考えられる。何故にこれほどの規模の溝をつくり、また溝の下層に時期の限られた土器が多量に入っているのか、問題の多い溝Ⅱ－3である。さらに溝内の堆積状態から、長期間使われていたとは考え難く一時期に何らかの関係で埋没したと考えられる。

後日当調査地区（H－3－G地区）の北々西110m付近の調査地区（G－3－A地区）の調査により、同じ溝を検出していることから、東奈良遺跡西部を北々西から南々東に縦走していることが考えられる。（この大溝に関しての詳しい報告は、G－3－A地区の調査報告に記述

する。）

土器群
（H－3－H－1・2・4・5地区）

調査地区東南部において、第1層・茶褐色砂質粘土層を取り除き中に、多量の土器が集中する形で出土した。第1層よりの掘り方はなく、第2層・黄白色砂質粘土層を掘り込んだ痕跡もないため当土器群の性格が非常につかみにくいものになった。出土時この土器群は、コの字形に連なっているような状態がみられたが、大きく3カ所にわけられた。便宜上東より西へ、土器群a・b・cとわけて記述を進める。

土器群a
（H－3－H－2・5地区）

土器群の東端に位置する土器群aは、南北約1.15m、東西約0.65mの不整形な形の部分に集中して出土した。当土器群の最高レベルは、第Ⅱ遺構面より約 0.2m高くなっており、最低レベルは第Ⅱ遺構面より約0.05mを計るが、どちらも第1層・茶褐色砂質粘土層中に含まれてしまう。土器群aは、古墳時代前期のみで、出土した器種は壺型土器・甕型土器・高杯型土器等の破片と共に完形品に近いものもあったが、土器表面の剥離が激しく残存状態が悪かった。

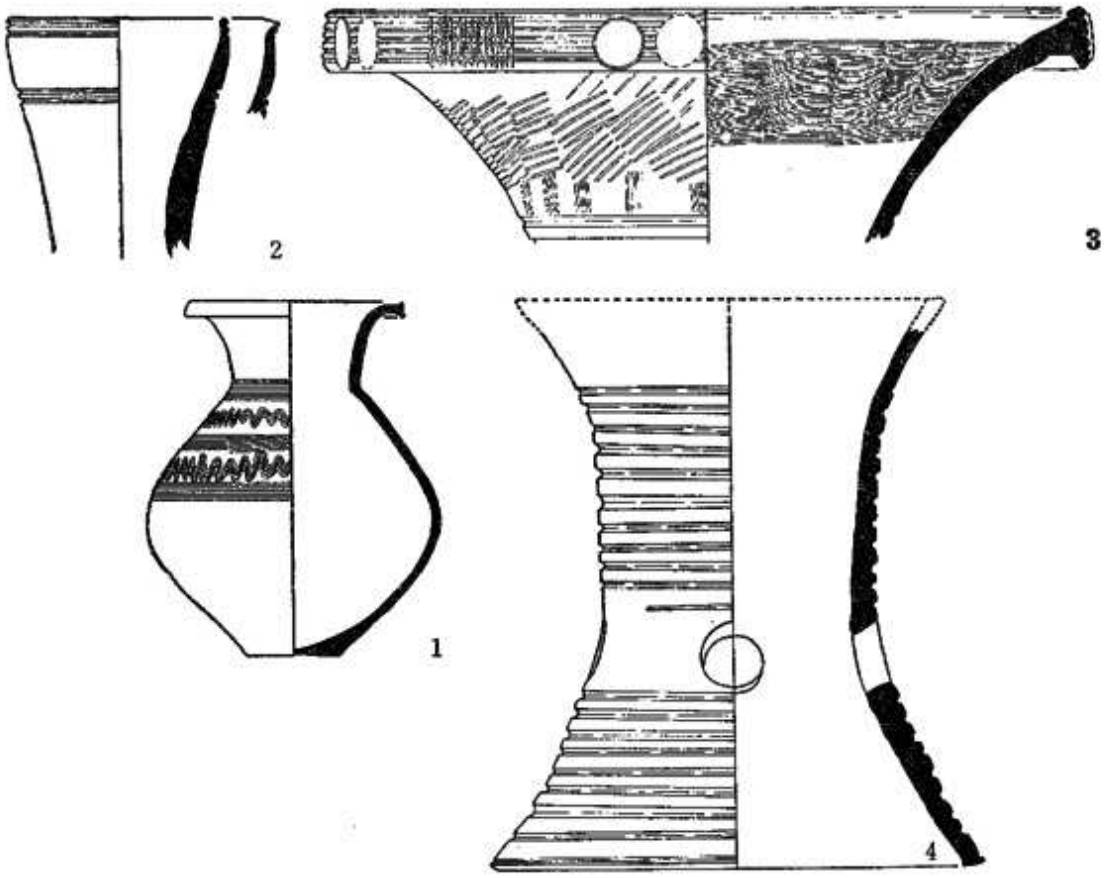
土器群b
（H－3－H－4・5地区）

土器群a・c間に、東西に連なる少量の土器の集中がみられた。当土器群bには、長楕円形の落ち込みが検出された。落ち込みは、長軸をほぼ東西に取り、長軸約3.2m、短軸約0.8m、深さ0.25mを計り、上口より底部にゆるやかな傾斜で落ち込み、底部には起伏がある。内部には、茶褐色砂質粘土層の堆積がみられた。当土器群bの土器の量は他の土器群に比べ少なく、さきの長楕円形の落ち込みにもごく少量の土器片が出土したのみである。土器群bも土器群aと同様に、古墳時代前期のもので甕型・壺型土器片によって形成されている。

土器群c
（H－3－H－1・4地区）

土器群cは、土器群の西端に位置し南北に連なる多量の土器が集中する土器群である。南北約3.4m、東西約0.6～1mの間に集中しており、土器群cも土器群aと同様に第1層・茶褐色砂質粘土層中に入り、遺構的性格を持つ掘り方は検出されていない。

土器群cの特徴は、土器群a・bでは古墳時代前期の土器が出土したのに対して、弥生時代中期（畿内第Ⅲ様式新～第Ⅳ様式）の土器によって形成されている点である。土器群cでの検出器種は、壺型土器・甕型土器・器台型土器・高杯型土器等の土器片があり、その多くは破片で、土器表面の剥離が激しく残存状態は非常に悪かった。完形品に近いものとしては、壺型土器（第10図－1・2）、器台型土器（第10図－3・4）がある。



第10図　土器群C出土土器　土器番号1・2・3・4　¼

Ⅰ—3—B・C・F・G・H地区

層位

Ⅰ—3—B・C・F・G・H地区では、遺構が非常に少なく、柱穴跡、大形土坑等のみであった。以下層位より記述する。

当調査地区では、他調査地区とは異なり、単純な層位がみられた。第1層・耕土、第2層・床土、第3層・淡茶褐色粘土層、第4層・赤褐色粘土層に分けられ、第4層が遺構面になった。以下「すじ掘り」土層調査より第5層・灰色砂質層、第6層・黒色粘土層、第7層・灰色砂質層と分けられた。第3層には弥生式土器、土師器、須恵器、瓦器片が少量包含されている。

池（沼）（Ⅰ—3—F—4・5・7・8地区）

調査地区西南隅において、床土の下層より方形の落ち込みが検出された。堆積層はヘドロ状の黒色粘土層が観られ、層中より近世の瓦片、土瓶、茶碗片等の陶器類を出土した。又2段になる肩の中段には、杭が打ち込まれていた。

近傍の人の話によると、明治時代迄この付近は、池或は沼であったという談話を聞いており、近世のものと考えられる。

大形土坑
（I－3－G－8・9、H－7地区）

調査地区東南部に一部検出された大形土坑は、ベースの赤褐色粘土層を掘り込み作られており、深さ0.3～0.4mを計る非常に浅いものである。掘り方は、なだらかに落ち込み、土坑底部はほぼフラットになっている。

形態はやや歪みがある隅丸長方形をなし、東西10m、南北 1.5～2m以上を計り、更に南へ広がる非常に大形のものである。

土坑内には、茶褐色粘質土層の堆積が観られたが、時代を決定するような遺物は出土しなかった。又、土坑肩、底部より、直径 0.2m、深さ 0.3m前後の柱穴址が4ヶ所検出されたが、土坑との関係は不明確である。

柱穴跡

大形土坑の北に、不秩序な配置で4ヶ所の柱穴跡が検出された。いづれも直径0.2m、深さ0.3m程のものであり、その内の一ヶ所の柱穴跡に、柱根がわずかに残っていた。

F－4－N、G－4－B地区

当調査地区において検出された遺構は、比較的時期の新しいと考えられる大小の溝状遺構と弥生時代中期の方形周溝墓・土広墓・大形土坑・井戸・ピット遺構などがある。

歴史時代の遺構と考えられるものは、5本の小さな溝状遺構と弥生時代中期の遺構の一部を破壊した形で検出された大形の溝状遺構である。

弥生時代中期の遺構としては、方形周溝墓1基を中心とし、土坑墓5基、大形土坑2基、井戸1基、ピット群などが所狭しと検出された。方形周溝墓には、木棺墓2基、土坑墓8基が検出され、多量の供献土器を有していた。2基の大形土坑は、多量の木製品を包含する特異な土坑である。

以下、層位と時期の新しい遺構から記述を進める。

層位

当調査地区で層位（遺成土を除く）は、調査地区・北北東から南南東の壁面を利用して土層調査を行った。（図版83）

第1層・耕土、第2層・床土、第3層・黄褐色砂質粘土層、第4層・茶褐色粘土層、第5層は2層にわけられ、上層の第5層aは黒灰色砂質粘土層、下層の第5層bは灰褐色砂質層である。第5層以下は、複雑な砂質層の堆積が観られ、南に向って流れ込むような堆積状態になっている。以下各層の詳細を記述する。

第1・2層の現耕土・床土面は、F－4－N地区においてフラットであるが、G－4－B地区において急激に層位が約 0.8mも上昇

している。この部分においては、第3・4・5a層がなく、全て砂層の堆積層に変化する。

第3層・黄褐色砂質粘土層は、厚さ約 0.2mを計り、G－4－B地区を除いて全面に観られ、瓦器、須恵器、弥生式土器片が少量出土している。

第4層・茶褐色粘土層は、厚さ約 0.2mを計り、北より南にわずかづつ下がりながら全面に観られ、上面に歴史時代の細い溝状遺構とG－4－B地区には大形溝状遺構の肩を不鮮明ながら検出している。第4層には、庄古第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式の土器片を包含している。

第5層a・黒灰色砂質粘土層は、F－4－N－5・7・8・9地区の調査地区内・南西部から南東・北東部にかけて堆積しており、厚さ約 0.4m以上におよぶ所もある。第5層aには、庄古第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式の土器を多量に包含している。しかし、土器の残存状態が悪く、破片の状態で出土したため、土器による第4層との年代差は把握することができなかった。

第5層b・灰褐色砂質層は厚さ 0.2m前後を計り、第5層aが観られた以外の調査地区の北東部から南西部・F－4－N－4・5地区に観られ、少量の庄古第Ⅲ様式（新）～Ⅳ様式の土器片を包含している。第5層a・bの面においては、複雑な砂層と粘質土層の堆積層である。当調査地区においては、調査終了後西壁面沿いに深さ約1mの「すじ掘り」を実施し、弥生時代中期の遺構面下層の土層調査を行い、細別すると約 120層にわけられる堆積層が観られた。「すじ掘り」が浅かったため、この複雑な砂層の堆積状態を理解することは難しいが、非常に大規模な溝あるいは川、または大きな洪水による流入などが考えられる。今回検出された弥生時代中期の遺構は、この第5層以下の砂層あるいは砂質粘土層上に位置している。

古墳時代以降の遺構

溝Ⅰ（小溝群）

第4層・茶褐色砂質粘土層上面において、不明瞭ながら、東西に走る細い溝状遺構・溝Ⅰ（小溝群）が検出された。溝Ⅰは、溝幅・深さも小さく、明確な溝肩が検出できないもの、あるいは途中でとぎれるものが多く観られた。このうち、比較的明確に検出されたF－4－N－4・5地区の5本の溝を記述する。

これらの小溝群は、ほぼ東西に走り、溝幅0.2～0.6m、深さ 0.1m前後と小規模なものであり、溝間隔も 0.5～3mと一様でない。

溝内には、白色砂層・黄白色砂層が堆積しており、時期を決定するような遺物は出土されていない。

溝Ⅰ（小溝群）は、調査地区全域に存在したと考えられるが、規模が小さいため調査中の削平、あるいは近世における整地によって削滅したものと考えられる。このような溝は、他の調査地区においてもしばしば検出されており、旧耕土跡とも考えられる。

溝Ⅱ
（G－4－B－1・2地区）

調査地区南部に非常に規模の大きな溝Ⅱが検出された。溝Ⅱは、床土より下層の第3層・黄褐色粘土層に不明確ながら掘り込まれており、第4・5層aをも掘り込み、さらに下層の複雑な砂層を掘り込んで存在したことが考えられる。

堆積している砂層は、第1層・耕土、第2層・床土を約 0.8mも押し上げたような様子が観られ、このため砂層の堆積層は3m以上に達する。溝Ⅱの規模・形態は、調査地区の関係から把握できないが、溝の方向は、ほぼ東西に走り、調査地区東側においてやや北側に蛇行している。また調査初期において、溝北肩付近に3本の杭らしきものが検出されたが、造成土の崩壊のため破壊され、溝との関係は得られなかった。溝の堆積砂層よりは、時期を決定するような遺物は出土していない。溝の時期は、層位の関係から、比較的新しい近世以降のもので、相当長期間使用されていたと考えられる。

この溝Ⅱは、この溝に並行して埋設されている大形下水道が、この付近の開発以前に存在した小川を改修して作られた記録があることから、溝Ⅱがこの小川に関連したものとも考えられる。

弥生時代の遺構
第1号方形周溝墓
（F－4－N－5・8・9地区）

第1号方形周溝墓は、調査地区中央部において検出された。方形周溝墓の方向は方位とは一致しないが、ここでは便宜上、北東－南西に連なるものを北溝として、これに平行するものを南溝、直交する2つの溝を東・西溝とし、北溝から東溝の外側を走る溝を北第Ⅱ溝、東第Ⅱ溝と称する。

各々の溝の形態・規模は、直線的でなく、溝幅・深さも一定でない。各々の溝の規模は、北溝長約8.5m、幅は最大約2.4mにも及ぶが、これは、溝を切り込んで作られた第6号土壙墓によるものと推測される。深さ平均0.36m。東溝長約6.6m、幅約0.5～0.6m、深さ平均0.4m。南溝長約7.4m、幅約1m、深さ平均0.4m。西溝長約5m、幅約0.5～0.6m、深さ平均0.35m。北第Ⅱ溝長約 4.8m、幅約1.2m、深さ平均0.3m。東第Ⅱ溝長約4.8m、幅約1.2m、深さ平均0.3mを計る。

各々の溝は、上部の大きく開いたU字形を呈し、溝の底部は平坦でなく起伏がある。また、北第Ⅰ溝・東第Ⅰ溝は他の溝よりも、溝幅の割りに浅い点が特徴である。

溝内の堆積層は、各々の溝によって多少の差異があり、また土器の包含の有無によっても異なる。全溝を通して大別すると、第1層・灰褐色砂質土層、第2層・黒灰色砂質粘土層にわけられる。

第1号方形周溝墓の特異な点としては、北第Ⅰ溝・東第Ⅰ溝の存在である。北溝の中央北側付近より、北溝の幅を極端に狭めて北第Ⅰ溝が掘られている。北溝と北第Ⅰ溝の関係は、土層断面（図版85－1）より北第Ⅰ溝が北溝を掘り直して作られていることがわかる。包含する土器の量も北第Ⅰ溝が多い。さらに北第Ⅰ溝は、東溝と幅約1mの台状部により完全にわけられ、平行して走る東第Ⅱ溝になる。東第Ⅰ溝は、後述する第Ⅱ大形土坑の北側で消える。東第Ⅱ溝と第Ⅱ大形土坑の前後関係は、土器の時期差では把握できなかったが、層位的には、東第Ⅰ溝は、第Ⅰ大形土坑埋没後掘られ、南溝付近まで伸びていたと考えられる。また、東第Ⅱ溝と東溝の関係は、土層断面（図版82）より、東溝埋没後東第Ⅰ溝が掘られており、土器は東第Ⅱ溝のみに出土した。

さらに特異点としては、西溝と南溝間が約 1.3mとぎれ、陸橋部を形成している点である。

方形周溝によって区画された台状部は、東西約 7.6m、南北約6mと東西にやや長い長方形を呈している。北第Ⅰ溝・東第Ⅱ溝によって区画された台状部の東西長は、約8.75mとなる。主軸（木棺墓の長軸と平行する軸を主軸とする。）方向をN－24°－Wに取り、台状部の中央には、2基の木棺墓が平行して並び、その周囲には、同じく長軸を主軸に平行あるいは直交して5基の土坑墓がある。特異な土坑墓として、周溝内にも土坑墓と推定されるものが、北溝と西溝に各々1基あり、陸橋部にも1基の土坑墓を有する。

（各々の溝の規模は、第4表にまとめて記述しておく。）

溝名	溝長	溝幅	溝の深さ（平均）	備考
北溝	8.5		0.36	溝幅は、土坑墓と切り合っているため不明。
西溝	5.0	0.5	0.35	
南溝	7.4	1.0	0.4	
東溝	6.6	0.55	0.4	
北第Ⅱ溝	4.8	1.2	0.3	
東第Ⅱ溝	4.8(7.5)	1.2	0.3	（）の中の溝長は、第Ⅱ大形土坑まで伸ばした場合。

第4表　第1号方形周溝墓各溝の規模
（単位はm）

主体部
（木棺墓）

第1号方形周溝墓より検出された明確な木棺墓は2基である。他にもプラン的には、木棺墓の可能性をもつものがあるが、一応確実に木棺を有するものを木棺墓として、他のものは土坑墓の部類に入れて記述する。2基並行する木棺墓の西側を第1号木棺墓、東側を第2号木棺墓と称する。

第1号木棺墓

第1号木棺墓（図版84）は、残存木棺の一部である底板から、組

み合わせ式木棺と推定される。しかし、木棺の蓋板・長側板・短側板は残っていなかった。残存底板自体も腐植がひどく、南北両側端がなくなっており、また底板中央部も厚さが1cm程度になっている。残存底板の大きさは、幅0.6m、長さ1.6m、厚さは比較的残りのよい東・西側端において約5cmを計る。木棺は材質鑑定[1]によりコウヤマキと判明した。なお、遺体・副葬品などは出土しなかった。

注　(①鑑定は、暁学園短期大学教授、理学博士・嶋倉巳三郎)

木棺埋置のための掘り方は、幅約 0.8m、長さ約2.23mを計る長方形を呈し、残存底板より幅においてやや広い程度であるが、長さにおいては、底板自体が腐植しているためか、ゆとりがある。木棺検出前の掘り方の平面形は、側板の張り出しが四方に明瞭に残り整った形を成していた。しかし、側板の張り出しの部分の掘り方は浅く痕跡だけというものであった。因みに、比較的残りのよい木棺墓東北の張り出しの掘り方の深さは、0.02mを計る。同様に木棺埋置のための掘り方の検出時の深さは、約0.08mである。

主軸に直交する掘り方のたち割りの結果、掘り方東・西壁面沿い底部に、不明瞭ながら黒灰色砂質粘土層のU字形の落ち込みが土層断面にみられたが、木棺の側板の掘り方あるいは排水用の細い溝とも考えられる。底板の底部には、黒色砂質粘土層が検出された。

この層は土層断面より観ると、底板は平坦であるが、下層は起伏があり不整形なものであり、弥生式土器の破片も出土している。この点から、この黒色砂質粘土層は、木棺安定のために埋められたものと考えられる。さらに下層は灰色砂質層、掘り方の肩は淡灰褐色砂質層になっていることから、木棺墓自体が不安定な砂質層上に立地することが観察された。

第2号木棺墓

第2号木棺墓は、第1号木棺墓と約 0.3mの間隔をおき、東に平行して並んでいる。第2号木棺墓の木棺は、第1号木棺墓に比べて残存状態が悪く、残存木棺の1部から第1号木棺墓と同じく組み合わせ式木棺と推定される。

組み合わせ式木棺の底板の残存幅0.3m、長さ0.8mを計るが、底板中央部は腐植し、東西側端が残っている状態である。短側板・長側板・蓋板・遺体といったものは、痕跡すら認めることはできなかった。

木棺埋置のための掘り方は、幅0.8m、長さ1.6m、検出時の深さ0.12mを計る長方形というより、ゆがんだ隅丸方形を成している。

主軸と直交するたち割りの結果、底板の下には黒色砂質粘土層が検出されたことから、第1号木棺墓と同じ目的で充填されたものと推測される。また、掘り方の肩、底部は灰色砂質層になっているが、第1号木棺墓のように、掘り方東・西壁面沿い底部にU字形の落ち込みは観られない。

土壙墓

第1号方形周溝墓の台状部には、土壙墓と考えられるものが5基ある。この中には、平面的には木棺墓の可能性をもつものもあるが、木棺が検出されていないものは、土壙墓と称している。なお土壙墓の名称は、北より1号・2号・3号……と記述する。

第1号土壙墓

第1号土壙墓は、台状部の一番北側に位置し、北溝に接する土壙墓である。最大長1.7m、最大幅1m、検出時の深さ0.25mを計る。長軸を主軸よりやや東にふり、隅丸方形の胴張りの掘り方をもち、土壙底部にゆるやかな傾斜で落ち込み、土壙底部は平坦でない。土壙内には、暗灰褐色砂質粘土層が堆積しており、遺物は出土していない。

第2号土壙墓

第2号土壙墓は、台状部の一番東に位置し、東溝に土壙墓の一部がかかり、東溝を掘り込んで作られている。長方形の掘り方をもち、幅 0.7m、長さ1.25m、検出時の深さ0.17mを計り、長軸を主軸に直交する。土壙底部へは、東西よりゆるやかな傾斜をもって落ち込むが、南北からはやや急傾斜に落ち込んでいる。土壙底部は、平坦になっており幅0.36m、長さ 0.6mの規模を計り、土壙上口の規模に比べると非常に小さくなっている。

土壙内の堆積層は、第1層・灰褐色砂質層、第2層・暗灰褐色砂質粘土層にわけられる。各々の層からは、少量の弥生式土器片が出土している。

第2号土壙墓と東溝との関係は、土層断面から、第2号土壙墓が東溝が埋った後に掘り込まれたことが判明した。（図版85—2）

第2号土壙墓の平面形は、木棺を埋置するのは困難であるとも考えられる。

第3号土壙墓

第3号土壙墓は、台状部の北西に位置し、第1号木棺墓と掘り方の南東部を接している。長方形の掘り方をもち、幅0.7m、長さ1.2m、検出時の深さ0.09mを計り、長軸を主軸に直交している。掘り方の形態の特徴は、平面形が長軸に比べ短軸の長い正方形に近い形を成し、土壙底部は平坦であるが検出時の深さは非常に浅い点である。土壙内には、暗灰褐色砂層が堆積しており、遺物は含まれてい

ない。（図版86—1）

第1号木棺墓との相互関係は、第3号土壙墓が掘り方の南東隅を第1号木棺墓に切られており、第1号木棺墓埋置以前に、第3号土壙墓が存在していることが推測される。

第4号土壙墓

第4号土壙墓は、台状部の南東に位置する。隅丸長方形の掘り方をもち、幅0.7m、長さ1.5m、検出時の深さ0.15mを計り、長軸を主軸に平行して位置している。掘り方上口より土壙底部には、やや急傾斜で落ち、底部は平坦であるが、ゆがんだ隅丸の長方形を成している。土壙内には、暗灰褐色砂質粘土層が堆積しており、少量の弥生式土器片が含まれている。

第4号土壙墓は、形態的に木棺墓の可能性も強いが、検出時に上層の土層断面より、土層から木棺あるいは掘り方の存在の調査を試みたが、それらしき跡は検出できなかった。

第5号土壙墓

第5号土壙墓は、台状部の一番南に位置し、南溝に接するように掘り込まれている。楕円形の掘り方をもち、短軸0.8m、長軸1m、検出時の深さ0.25mを計り、長軸を主軸に直交している。掘り方上口より土壙底部にはゆるやかな傾斜で落ち込み、底部は平坦でなくすりばち形を成している。土壙内には、第1層・黒色粘土層、第2層・黒色砂質粘土層の2層の堆積が観られ、両層から少量の弥生式土器片が出土している。（図版86—2）

周溝内土壙墓

第1号方形周溝墓の周溝には、土壙墓と推定されるものとして、北溝の第6号土壙墓と西溝の第7号土壙墓の2基がある。しかし、両土壙墓ともに、土壙墓と決定する要因は少なく、単に土壙墓と推定される箇所において、溝の幅が広がり、溝底部が深くなることのみである。

第6号土壙墓

第6号土壙墓は、北溝中央付近の溝幅が大きく広がり、多量の供献土器下層の溝底部にすりばち状の落ち込みを検出した部分に位置する。

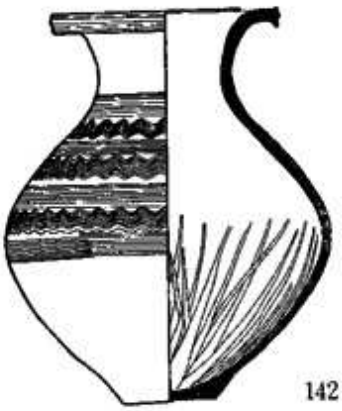
第6号土壙墓検出当時は、第1号方形周溝墓確認以前であった上に、北溝と北第Ⅱ溝が重なり、さらに土壙内と北溝の堆積層が似通っているために、結果的には土壙墓の掘り方の一部を破壊した。幸い土壙中央・北溝に直交する土層断面を残していたため、この土層から、土壙を確認し、土壙が北溝を掘り込み作られたことがわかった。土壙墓と判断する決定要因には、明確なものはなく、北溝の平均溝底部レベルより約0.2m、北第Ⅱ溝より約0.26m深くなる点と、

溝幅が約1.2m広がる点である。

第6号土拡墓の推定規模は、短軸1.2～1.5m、長軸 1.7～2 m、検出時の深さは北溝外肩より約0.55mを計り、長軸を北溝とほぼ平行に取る。土拡内には2層の堆積層が観られ、第1層・多量の供献土器を包含する黒色砂質粘土層、第2層・少量ながら土器片を包含する黒色粘土層にわけられる。この堆積層は、北溝の堆積層よりやや粘質が強く黒色であることが相違している。（図版86—3）

第7号土拡墓

第7号土拡墓は、西溝中央付近の幅が約0.36m広がり、溝底部も深くなる所に位置する。第7号土拡墓の推定規模は、短軸約1 m、長軸約2 m、検出時の深さは溝外肩より0.55mになり、深さにおいて周囲の溝底部より約 0.2m深くなっている。土拡底部は、平坦でなく非常にゆるやかな傾斜をもって南北の溝底部より落ち込み、すりばち形になっている。



142

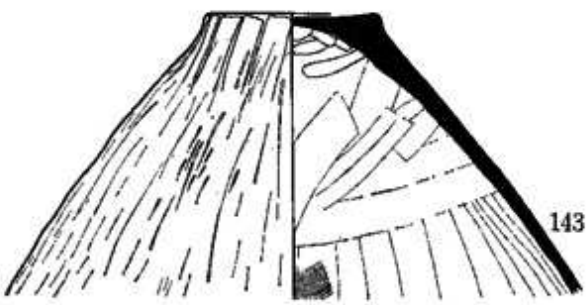
第11図　土拡墓出土土器　¼

土拡内には4層の堆積層が観られ、第1層・灰褐色微砂質層、第2層・暗灰褐色微砂質層、第3層・炭化物を含む暗黒灰色微砂質層、第4層・黒灰色粘質砂層にわけられる。この層位は、西溝全体に観られ、特別な相違はない。（図版85—5）

また、第7号土拡墓の中央、第Ⅰ層上から、完形に近い唐古第Ⅲ様式（新）の壺型土器（第11図—142）が1点出土した。この土器は、溝に直交するように、口縁を東に向けて横位になっており、西溝で出土した唯一の土器でもある。

第8号土拡墓

前述のように、第1号方形周溝墓には、南西隅において約 1.3mの周周溝がとぎれ、陸橋部を形成している。その中央に、第8号土拡墓が検出された。円形に近い形態を呈し、上口径約 0.8m、検出時の深さ0.55mを計る。第8号土拡墓には、土拡上口より深さ約0.25m付近に甕（壺）型土器の底部が、底を上に向けて、あたかも土拡墓の遺体に蓋をするように入っている。



143

第12図　第8号土拡墓出土土器　¼

土拡内には3層の堆積層が観られ、第1層・灰褐色砂質層、第2層・炭化物を含む黒色砂質粘土層、第3層・灰色砂質粘土層にわけられる。前述の土器底部は、第1層中より第Ⅱ層上面に位置している。（図版86—4）なお、この土器は、底部のみであるため明確な時期は不明であるが、唐古第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式のものであると考えられる。（第12図—143）

第８号土坑墓は、主体部以外において最も土坑墓としての可能性が強い。また、第８号土坑墓は、第１号方形周溝墓との前後関係あるいは陸橋部の意味を考え直す土坑墓として興味深い。

方形周溝墓周囲の土坑墓

第１号方形周溝墓の東・西・南・北には、土坑墓と推測される土坑が５基検出された。この中には、第10号土坑墓のように周溝を切り込んで存在するものもあり、方形周溝墓との前後関係も興味深い。

第９号土坑墓

第９号土坑墓は、北溝の北に位置し、短軸0.8m、長軸1.6m、検出時の深さ0.42mの楕円形を呈し、土坑上口より底部にゆるやかな傾斜で落ち込み、底部は平坦でなくすりばち形である。長軸を北に取り、第１号方形周溝墓の主軸よりやや東に振っている。土坑内には、灰褐色砂質粘土層の堆積が観られたが、土器などの遺物は含まれていない。

第９号土坑墓は、北溝内より検出された第６号土坑墓と接するように位置しているが、明確な関係は不明である。

第10号土坑墓

第10号土坑墓は、第１号方形周溝墓北西の北溝と西溝の接する箇所に、切り込むように検出された。平面形は隅丸の長方形を呈し、幅0.6m、長さ1.25m、検出時の深さ0.45mを計り、長軸はN—21°—Wに取っている。土坑の掘り方は、２段掘りになっており、上口より深さ約 0.2m付近までゆるやかな傾斜で落ち込むが、それ以下は急傾斜で落ち込んでいる。２段目の肩の規模は、幅 0.4m、長さ0.7mの隅丸の長方形を呈し、掘り方上口の規模より小さく、土坑底部は平坦になっている。

土坑内には４層の堆積層が観られ、第１層・灰褐色砂質層、第２層・灰褐色粘質砂層、第３層・黒灰褐色砂質粘土層、第４層・炭化物を含む黒色砂質粘土層にわけられる。（図版86—５）４層ともに、庄内第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式の土器片が出土している。

第10号土坑墓と周溝との関係は、平面的には、堆積層が似ているため判別が困難であったが、土層断面より不明瞭ながら、土坑墓が周溝を切り込んで造られたことがわかった。

第11号土坑墓

第11号土坑墓は、第１号方形周溝墓の東溝と東第Ⅰ溝との間の台状部に検出された土坑をいう。土坑墓と判断する根拠は少なく、単なる土坑の可能性もあるが、堆積する土層と周囲の関係から土坑墓の可能性も考えられるため、今回は土坑墓として取り扱っている。

土坑内には、遺物を全く含まない黒色粘土層が堆積している。ま

た、東溝・第11号土拡墓・東第Ⅰ溝を直交させた土層断面より、東溝と東第Ⅱ溝によって第11号土拡墓が切り込まれていることが観られる。さらに、土拡墓の南西側の一部も第Ⅰ大型土拡によって切り込まれている。

これらの関係から、第11号土拡墓の規模・形態は、把握が困難であるが、円形に近いもので直径約1.6m、深さ約0.6m程度のものと推測される。土拡の掘り方は、肩から底部にかけてゆるやかな傾斜で落ち込み、底部は平坦でなくすりばち状を呈している。また、第11号土拡墓は、層位関係から、方形周溝墓築造以前に存在していたことが考えられる。

第12号土拡墓

第12号土拡墓は、第1号方形周溝墓南溝の南約1mに位置し、円形に近い掘り方をもち、短軸0.75m、長軸0.85m、検出時の深さは0.35mを計り、長軸は方形周溝墓の主軸と一致する。掘り方は、肩から底部には急傾斜で落ち込み、底部には起伏があり南から北にゆるやかに傾斜している。また、土拡内の南・西壁に小ピットが検出されたが、土拡墓に伴うものか、後世のものかは不明である。

土拡内には、3層の堆積層が観られ第1層・黒灰色砂質層、第2層・炭化物を含む黒色粘土層、第3層・灰色砂質粘土層にわけられ、第1・2層より庄内第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式の土器片を少量出土している。（図版86—6）

第13号土拡墓

第13号土拡墓は、第1号方形周溝墓の南西に検出された第Ⅳ号土拡に掘り込まれていることが、第Ⅳ号土拡内の土層断面より検出された。結果的には土拡墓の掘り方を破壊しているため、第13号土拡墓の規模は、長軸約1.2m、深さ約0.32mと考えられる。同様に土層断面より観た土拡墓の形態は、平面形は楕円形を呈し、肩から底部にかけてやや急傾斜で落ち込み、底部はすりばち状になっていたものと考えられる。

第13号土拡墓内の堆積層は、第Ⅳ号土拡と類似しており、2層にわけられ第1層・黒色砂質粘土層、第2層・白青緑色粘土層のブロックを含

遺構No.	形態	長軸	短軸	深さ	備考
第1号木棺墓	長方形	2.23	0.8	0.08	木棺検出
第2号木棺墓	隅丸方形	1.6	0.8	0.12	木棺検出
第1号土拡墓	隅丸方形	1.7	1.0	0.25	
第2号土拡墓	長方形	1.25	0.7	0.15	
第3号土拡墓	長方形	1.2	0.7	0.09	
第4号土拡墓	隅丸方形	1.5	0.7	0.15	
第5号土拡墓	楕円形	1.0	0.8	0.25	
第6号土拡墓	楕円形	1.7～2.0	1.2～1.5	0.5	推定規模
第7号土拡墓	楕円形	2.0	1.0	0.55	
第8号土拡墓	円形	直径 0.8		0.55	陸橋部の土拡墓
第9号土拡墓	楕円形	1.6	0.8	0.42	
第10号土拡墓	隅丸方形	1.25	0.6	0.45	
第11号土拡墓	円形	直径 1.6		0.6	
第12号土拡墓	楕円形	0.85	0.75	0.35	
第13号土拡墓	楕円形	1.2	1.0	0.32	推定規模

第5表　木棺墓・土拡墓の形態と規模（単位はm）

む黒灰色砂質粘土層である。

（各々の土拡墓・木棺墓の規模は、第5表にまとめて記述しておく。）

盛土

第1号方形周溝墓は、当初方形周溝墓の確認が遅れたため、盛土の存在は明確でなかった。しかし、幸いに方形周溝墓の北溝・北第Ⅱ溝と東溝・東第Ⅱ溝とのコーナーから、南溝の西端にかけての調査地区全域の土層断面を残しており、この土層断面からレンズ状のゆるやかな傾斜をもつ盛土らしきものが観られた。（図版82）

第1号方形周溝墓確認後、調査地区を拡張し方形周溝墓の残り½の検出を試みた結果、茶褐色粘土層がゆるやかな傾斜で不明瞭ながら方形に落ち込み、裾は黒色砂質粘土層に変化した。特に、方形周溝墓の東南側において、著しい落差が観られた。

これらの点から盛土の存在を確認することができたが、層位的に茶褐色粘土層と方形周溝墓の裾に広がる黒色砂質粘土層を取り除かなければ、実際の方形周溝墓の規模を知るための周溝が検出できないために除去すると、南・東側の裾より多量の唐古第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式の土器が出土した。これらの土器は、後に方形周溝墓の南溝・東第Ⅱ溝の供献土器と判明し、明確な第1号方形周溝墓の規模・形態が検出された。

第1号方形周溝墓の盛土は、さきの土層断面より、方形周溝墓中央付近から非常にゆるやかな傾斜で下がってゆき、周溝付近から急傾斜で落ち込み、周溝上では溝内の堆積と周囲からの堆積が入り複雑な堆積が観られる。盛土は、整った3層の層位を呈しており、第1層・唐古第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式にかけての土器を包含する茶褐色粘土層、第2層・ごく少量の弥生式土器片を包含し、多量の鉄分の落ち込みが観られた灰褐色砂質粘土層、第3層・全く遺物を含まない灰色砂質層にわけられる。各々の層の厚さは、方形周溝墓中央部において、第1層・約0.25m、第2層・約0.18m、第3層・0.25m以上を計る。第1層は、周溝上に大きく流出しており、多量のまとまった土器が出土しているが、それに比較すると第2層以下には、全く土器を包含していないと言っても過言ではない。

第1層・茶褐色粘土層を盛土の最上層とした場合の盛土の高さ（比高差）は、当調査地区において弥生時代中期の遺構面が北より南に向って低くなっていることも関係し多少相違があるが、南溝外肩より約 0.8m、北溝外肩より約0.65mを計る。同様に、第2層・灰褐色砂質粘土層とすると、南溝外肩より約0.54mになる。

調査地点名	平均標高（O・P）
盛土第1層上面	6.500m
盛土第Ⅱ層上面	6.240m
第1号木棺墓底板	5.800m
南溝外肩	5.700m
北溝外肩	5.850m
東第Ⅱ溝外肩	5.511m
西溝外肩	5.940m

第6表　各地点標高

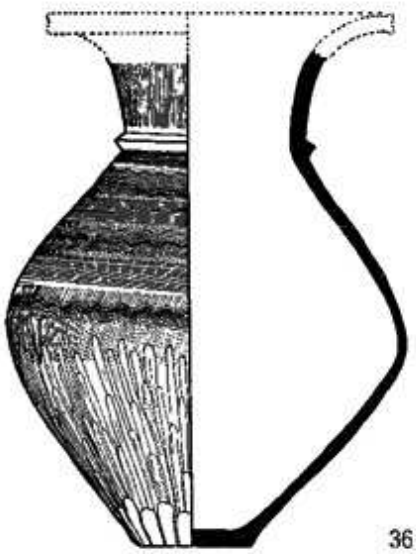
盛土の第1層・茶褐色粘土層は、調査地区全域に観られた第4層・茶褐色粘土層と同名であり、包含土器も唐古第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式と同時期のものであるが、盛土の第1層は方形周溝墓上にレンズ状に堆積しており、調査地区全域に観られた第4層と異なるものと思われる。

第1号方形周溝墓の問題点である北第Ⅱ溝・東第Ⅱ溝は、東・西・南・北の溝によって区画された方形周溝墓の拡張とも考えられるが、しかし、この拡張を示すような層位が盛土の土層断面には観られなかった。整った盛土の層位は、東溝を埋めて、東第Ⅱ溝まで伸びている状態で検出された。

盛土の参考資料として、盛土中央部における各層の標高と木棺底板、各々の溝外肩の平均標高を第6表に記述する。

供献土器

第1号方形周溝墓には供献されたと思われる土器が、北溝・北第Ⅱ溝・南溝・東第Ⅱ溝内および盛土の上面と、さきの溝の外側にも多量に出土した。東溝・西溝内には、ごく少量の土器片が出土したが、供献土器と思われるものは一切出土していない。



第13図　南溝供献土器　¼

西溝において検出された第7号土壙墓上の壺形土器は、他の溝に観られ供献土器とは性格が異なり、土壙墓自体の供献土器とみられる。供献土器の多くは完形品あるいは完形品に近いものが少なく、周溝内および周溝上、周溝外において出土している。

周溝より検出された供献土器は、2、3層に重なり合い不規則に並んでおり、その状態から溝内に落ち込んだようになっており、溝外へ大きくはみ出している土器もある。また、供献土器出土の溝においては、供献土器が全て溝底部より浮いており、特に、南溝では溝底部より約0.1m以上、最高0.4mも浮いている土器もある。しかし、北溝より検出されたほぼ完形の唐古第Ⅲ様式（新）の壺形土器（図版99—65）が、溝底部に接し横転した状態で出土し、その状態から北溝底部に立てられていたものが倒れたものと思われる。この1点の土器を別として全ての供献土器は浮いた状態で出土した。（図版87）

36

供献土器の内で東第Ⅱ溝の土器は、溝内・溝上に堆積した第5層a・黒灰色砂質粘土層と関係し、外部からの二次的堆積とも考えられる上に、後述する第Ⅱ大形土壙の堆積層と関係し、複雑さを増した。一応溝内より出土した土器を供献土器として扱う。

第14図　北溝供献土器

第１号方形周溝墓の供献土器は、その大多数に亀裂が入っており、完形個体といえるものは北溝の壺型土器、南溝の水差型土器（図版98—51）、台付鉢型土器（図版98—50）の３個体のみである。また完形に近い個体も少なく、大多数が壊れており、残存状態も非常に悪いものばかりである。北溝・北第Ⅱ溝・東第Ⅱ溝・南溝の供献土器の時期は、各々の個体を観れば時期差はあるが、堆積状態の上、下ならびに各々の溝別といった大きな面を観れば、時期差を明確に把握できない。しかし、東第Ⅱ溝の供献土器は、土器量が最も少なく、また時期もやや下がるものがある。

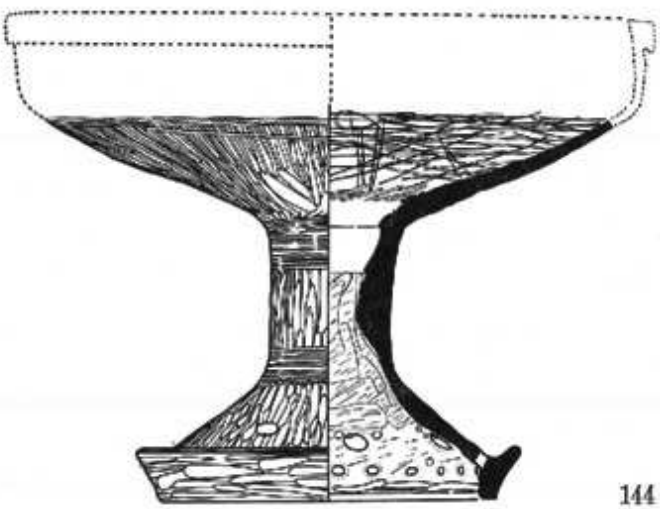
南溝から出土した完形の水差型土器・台付鉢型土器には、底部に焼成後内側から打ち欠いた不整形な孔があり、また、これらの土器には外面に朱が塗られている。なお、北溝の黒灰色砂質粘土層中より蛤刃石斧（図版124—34）、柱状石斧（図版124—26）、石鏃（図版123—11）が、西溝より用途不明の磨製石器（図版124—18）などの石器も出土した。

その他の遺構

第１号井戸

（G—４—B—２地区）

第１号方形周溝墓の南西約３mにおいて、時期不明の溝Ⅱ（大溝）による、掘り方の一部を削平された第１号井戸を検出した。第１号井戸は、円形二段素掘りのもので、上段上口径約３m、検出時の深さ２m、底部標高（O・P）3.740mを計り、上段上口から深さ約0.6m付近までゆるやかな傾斜で落ち込み、それ以下はほぼ垂直に落ち込んでいる。



第15図　第１号井戸出土土器　¼

井戸内には２層の堆積層が観られ、第１層・黒灰色砂質粘土層、第２層・腐植性の強い黒色砂質粘土層にわけられる。第１層は、二段掘り井戸の二段目上口まで堆積しており、この土層は調査地区の南側に観られた第５層ａ・黒灰色砂質粘土層と同一のものと考えられ、多量の唐古第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式の土器を包含している。第２層は、二段目上口より底部まで堆積しており、井戸底部付近に、杯の一部を欠いた生焼けの唐古第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式の高杯型土器（第15図—144）が出土した。

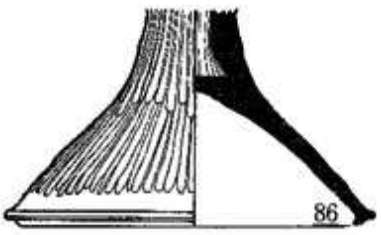
144

第Ⅰ大形土坑

（F—4—N—7地区）

第１号方形周溝墓の西約３m・調査地区南西隅において、第Ⅰ大形土坑を検出した。時期不明の溝Ⅱ（大溝）によって南西側の一部

を削平されている上に、土拡の一部が調査地区外に存在するため、明確な形態・性格を把握することはできなかったが、楕円形の掘り方をもち、長軸を北々東—南々西に取るものと考えられ、推定長軸約6m、短軸約5m、深さ最大約0.75mを有する大形土拡と推測される。土拡内には18層にわけられる堆積層が観られる（図版88）が、大別すると3層にわけられる。第1層・黒灰色砂質粘土層は、調査地区の南西から東側に観られた第5層aと同一の自然堆積と考えられ、多量の唐古第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式の土器が出土した。第2層・黒灰色砂質粘土層あるいは黒色粘土層は、第Ⅰ大形土拡内のみに観られたもので、多量の唐古第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式の土器と共に、多量の植物遺体が出土した。第3層・黒色砂質粘土層（一部、黒色砂質粘土層と砂層の互層が観られる部分がある。）は、多量の唐古第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式の土器と共に、加工木と植物遺体を包含する層になる。



第16図　第Ⅰ大形土拡出土土器　¼

第Ⅰ大形土拡は、2ヵ所の土拡にわけられ、土層断面の観察から掘り直しが1度実施されていることが明らかである。北側に位置する土拡は推定3mを計り、南側の土拡は一部のみの検出のため、規模は不明確であるが、推定径約2m程度のものと考えられる。北側の土拡を第Ⅰ大形土拡a、南側を第Ⅰ大形土拡bと称する。土層断面の層位より第Ⅰ大形土拡bが第Ⅰ大形土拡aより新しく掘り込まれたのがわかるが、土器による時期差は、把握できなかった。また、第Ⅰ大形土拡全体の掘り方は、調査地区全体に観られた第6層以下の砂層の堆積層上に掘られているため、底部・肩は全て砂層上に位置している。

第Ⅰ大形土拡a

第2層・黒灰色砂質粘土層を取り途くと、下層より砂層と粘土層の複雑な互層状態が観られ、多数の加工木と植物遺体が不自然な配置関係で出土した。土拡aの掘り方は、肩より底部にかけてゆるやかな傾斜をもって落ち、一部北側の肩には段をもつ所もある。底部はすりばち状を呈しており、深さは約0.7mを計る。加工木は、土拡肩から底部にかけて沿うように、わずかに浮いた状態で出土した。これらの加工木の多くは未完成品であるが、中には又鋤（図版128—10）1点、朱塗板（図版129—14・15）2点、用途不明木製品（図版129—16）1点の完成品もある。未完成品には、丸鋤（図版129—12・13）2点、鋤あるいは鍬になるであろうと考えられる板状原材（図版131—19・20・21）3点があり、その他にも小板が検

出された。これらの加工木と共に、庄古第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式の甕型土器（図版101—93）、壺型土器（図版100—71）と土製品の紡錘車（図版125—44）が土坑底部より出土した。

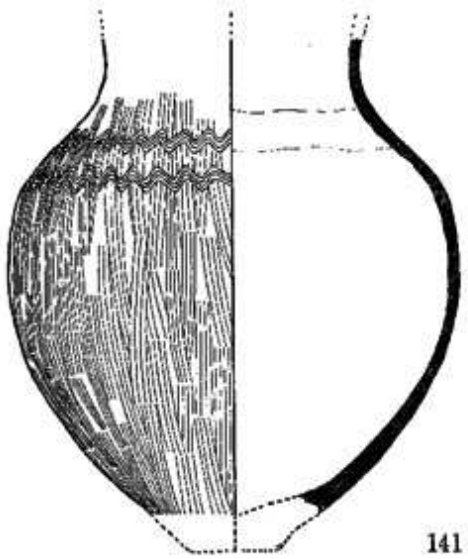
第Ⅰ大形土坑b

土層断面より第Ⅰ大形土坑aが埋没後、新たに南側に掘られており、2層の堆積層が観られる。第1層・黒色粘土層には多量の植物遺体と共に、庄古第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式の土器を包含する。第2層・黒色砂質粘土層には加工木と植物遺体を包含する。土坑bは、調査地区の関係から詳細は不明であるが、調査地区西北に広ろがっていると推測され、原木を切り出した角材1点も、大部分は壁面より奥に入っていた。

第Ⅰ大形土坑の目的が、加工木、土器などを放棄するためのものか、意図があって置いたものかは今回の調査のみでは判断できない。さらに方形周溝墓・土坑墓が埋置された付近に、同時期のものと考えられる多量の木製品と土器を包含した大形土坑が存在する点に関しては、第1号方形周溝墓の北溝より蛤刃石斧・扁平片刃石斧が出土していることから、第Ⅰ大形土坑が方形周溝墓と何らかの関係があることも考えられる。

第Ⅱ大形土坑
（F—4—N—9地区）

調査地区東端・第1号方形周溝墓東南約 1.5m付近において、大形土坑の一部を検出した（図版89）。この第Ⅱ大形土坑も第Ⅰ大形土坑と同様に調査地区の関係から一部のみの検出を余儀無くされたため、規模は調査した範囲内のものを記す。長軸約 3.5m、短軸約2m、検出時の深さ約0.5mを計る。



第17図　第Ⅱ大形土坑出土土器　¼

第Ⅱ大形土坑の堆積層は、3層にわけられるが、上層の2層は前述の第1号方形周溝墓東第Ⅰ溝の堆積層と同一であり、多量の土器が出土した。第3層以下は、5層の砂層の堆積層が観られたが、細別せずに灰褐色砂層として扱う。この灰褐色砂層の下層には、加工木と植物遺体、少量の庄古第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式の土器を包含している。

第Ⅱ大形土坑の掘り方は、淡灰色砂質層を掘り込み、南側よりゆるやかな傾斜で落ち込み、北・西側よりやや急傾斜で切り込まれている。土坑底部は、すりばち形をなし、底部が土坑の北よりに位置している。

第Ⅱ大形土坑より出土した遺物には、加工木として、柱状石斧の柄の未完成品（図版 128—11）1点、一部加工が観られる原材2点と、弥生時代中期と思われる東海型の壺

型土器（第17図—141）1点と少数の土器片がある。

第Ⅱ大形土坑は、出土した原材が調査地区の東壁面の相当奥まで入っていることから、調査地区の東北にさらに広ろがっていることが考えられる。当土坑は、第1号方形周溝墓の東第Ⅰ溝が掘られる以前に存在していたことは判明しているが、第1号方形周溝墓改修以前との前後関係は不明である。いづれにしても、時期差があまりみられない方形周溝墓と共存することは今後の研究を待ちたい。

第Ⅲ土坑
（F—4—N—5地区）

調査地区北端において検出された第Ⅲ土坑は、一部のみの検出のため規模・形態は不明である。掘り方は、上口よりゆるやかな傾斜で落ち込み、検出時の深さ約0.45mを計る。土坑内には暗灰色粘土層と黒色粘土層の堆積が観られ、唐古第Ⅲ様式（新）の時期の土器が出土した。また、土坑のたち割りの結果、自然木の株が立ったまま検出された。

第Ⅳ土坑
（G—4—B—2地区）

調査地区南端において検出された第Ⅳ土坑は、時期不明の溝Ⅱ（大溝）に掘り方の一部を削平され、前述の第13号土坑墓によって中央部を破壊されている。

第Ⅳ土坑は、隅丸方形の土坑に溝状遺構が派生した形を呈す。隅丸方形の土坑は、東西約2.8m、南北2.2m以上、検出時の深さ0.3mを計り、掘り方の上口よりゆるやかな傾斜をもって落ち込む、土坑内には、黒灰色砂質粘土層が堆積しており、唐古第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式の土器を包含している。また、土坑底部より砥石（図版125—48）が出土した。土坑東肩に2カ所のピットをもち、各々の上口径約 0.3m、深さ0.25mを計り、暗灰色砂質粘土が堆積している。また土坑底部南よりに、長軸約 0.5m、短軸0.44m、深さ約0.15mの楕円形のピットがあり、同じ黒灰色砂質粘土が堆積していた。

第Ⅳ土坑の北と東に伸びる短い溝は、北側の溝が、幅約 0.8m、深さ約0.12m、検出長1mを計り、溝内の堆積層は黒灰色砂質粘土層である。また溝北端に上口径 0.3m、深さ0.18mのピットを有する。東側の溝は、幅0.54m、深さ0.1m、検出長約1.5mを計り、溝内には黒灰色砂質層の堆積が観られる。溝東端と西端に各々1カ所のピットがあり、東端のピットは上口径0.5m、深さ0.3m、西端のピットは上口径0.16m、深さ0.12mを計る。

ピット群
（F—4—N—4地区）

第1号方形周溝墓の西側において、十数個のピットが検出され、また他の地区においても小数のピットが検出されている。これらの

ピット群の中には、柱穴といえるものと単純な土坑と思われるものもあり、各々のピットの規模もまちまちである。また無秩序に並んでいるため、建物跡なども復元できない。これらのピットは、第Ⅶ層より掘り込まれていることから、弥生時代中期頃のものと考えられる。

A－6－F・G・I・J・K地区

A－6－F・G・I・J・K地区では、弥生時代中期の方形周溝墓が調査地区の東半全域に5基検出された。以下層位及び各方形周溝墓について記述する。

層位

当調査地区の層位については、調査地区2方向、北・東壁面を残して調査を行い、遺構調査終了後当地区内中央部を東西方向に深さ1.2mの「すじ掘り」によって遺構面下層の調査を行った。

その結果、第1層・耕土、第2層・淡茶褐色粘土層、第3層・弥生時代中期～奈良・平安時代頃の土器片を包含する灰褐色粘土層、第4層・生活面である淡灰褐色粘土層となる。以下「すじ掘り」による遺構面下層の層位は、E－261ライン（A－6－J－6地区）付近を界に東・西に相違がある。東においては、第5層・茶褐色土層、第6層・青灰色粘土層、第7層・灰色粘土層、第8層・黒色砂質粘土層となり、西においては第5層～第8層はなく、第9層・黄褐色礫層、第10層・青灰色礫層になる。

第3層・灰褐色粘土層は、調査地区西半（A－6－F・J地区）において浅く、後世に相当攪乱を受けており、攪乱層の一部は第4層におよぶ所も観られた。第4層・淡灰褐色粘土層は、調査地区全域に観られたが、調査地区東半（A－6－G・K地区）においては溝状遺構、下層の層位も関連し、入り乱れた状態が観られた。遺構面下層に関しては、調査地区東半と西半とは大きく相違し、第5層～8層は沖積層、第9層～10層は洪積層と思われる。

方形周溝墓

今回検出された5基の方形周溝墓は、互いに周溝の一部を共有しており、東・西・南・北に連なっている。各方形周溝墓の周溝は磁北より約 20°東に振っている。調査地区内において方形周溝墓が連なった状態で検出された点から観て、調査地区外の東・南・北にも伸びると考えられ、事実その可能性が考えられる遺構が観られたが、今回は明確な5基の方形周溝墓を記述する。5基の方形周溝墓は、前述の第4層・淡灰褐色砂質土層を切り込んで造られており、周溝底部は、第7層・灰色粘土層まで至る部分もある。全体に、今

回検出された方形周溝墓の残存状態は悪く、主体部は一切残っておらず、供献土器も一部の方形周溝墓に出土したのみである。

5基の方形周溝墓は、便宜上東より第1号、第2号……第5号方形周溝墓と称して、記述する。

第1号方形周溝墓
（A—6—K—4・5・7・8地区）

調査地区東南隅より検出された第1号方形周溝墓は、周溝が磁北よりN—20°—Eにふっている。周溝は直線的であるが、溝幅、深さに相違がある。南・西溝は、溝幅が比較的狭く、北・東溝は後世の攪乱の為か、大きく広がる部分がある。溝の深さは、溝底部に起伏があり、また調査地区全体に遺構面が南に向って低くなっており、溝の深さも相対的に南に向って深くなっている。各溝は、上口の大きく開くU字形を成し、多少の相違はあるが、茶褐色砂質層と暗灰褐色粘質土層の堆積が観られた。西溝は、第2号方形周溝墓の東溝との共有関係から、南北に張り出している。しかし、北側の張り出しに関しては、後世の攪乱によるものと考えられる。また、東溝・南溝の一部も、溝の外肩が調査地区外に伸びている点から、第1号方形周溝墓の東・南に他の方形周溝墓が存在している可能性が考えられる。

第1号方形周溝墓の規模は、北溝長9m、幅2m、深さ0.35m、東溝長11m、幅 1.4m、深さ0.35m、西溝長10m、幅 1.4m、深さ0.4mを計る。

第18図　第1号方形周溝墓供献土器

方形周溝によって区画された台状部には、主体部と考えられる遺構はなく後世に削平されたものと思われる。また同様にマウンドと考えられる堆積は、方形周溝墓たち割りのすじ掘りによっても観られなかった。なお台状部と溝外肩の比高差は 0.3m前後ある。ただ台状部中央部より南溝にかけて、長軸5m、短軸2.1m、深さ0.2mの弓なりの楕円形の土坑2号が検出され、土坑内には、茶褐色砂質層の堆積が観られた。しかし、この土坑2号が、方形周溝墓の主体部とは考え難く、後世に掘り込まれたものと考えられる。

供献されたと思われる土器は、東溝9点以上、北・南溝に各1点が出土したが、完形品に近いものは少なかった。供献土器は、台状部から溝への肩と溝底部、溝外肩に出土した。その大部分は溝肩・底部に接している。供献土器の内完形に近いものとしては、東溝の壺型土器（図版104—11・12）、高杯型土器（図版105—20）、北溝の甕形土器（図版105—17）、南溝の壺型土器（図版104—13）がある。この内11と12には、焼成後内側から打ち欠いた不整形な孔があ

る。これらの供献土器から、第1号方形周溝墓の時期は、弥生時代中期（西古第Ⅲ様式）と考えられる。

第2号方形周溝墓
（A－6－J－6・9、K－4・7地区）

第2号方形周溝墓は、第1号方形周溝墓の西に位置し、第1号方形周溝墓の西溝と東溝を共有し、また北に位置する第3号方形周溝墓の南溝と北溝、西に位置する第5号方形周溝墓の東溝と西溝を共有する関係に位置する。

周溝は、南東隅の一部が調査地区外にあるが、全周せずに北東部において約3mの間、周溝はとぎれ陸橋を有する。周溝は、磁北よりN－20°－Eにふれているが、各方向の溝は幅・深さともに他の方形周溝墓の周溝共有関係あるいは後世の攪乱を受けたのか、相違がある。特に、第5号方形周溝墓と共有する西溝は幅4mにもなるが、共有しない部分は約1mと非常に細くなる。同じく、溝の深さも北溝と西溝には深さの差が0.4mあり、特に北溝が深くなっている。東溝は第1号方形周溝墓の西溝と共有しない部分が深くなっている。

第2号方形周溝墓の規模は、北溝長7.5m・幅2m・深さ0.6m、東溝検出長9.5m（推定長12m）・幅2m・深さ0.3～0.5m、南溝検出長7m（推定長11.5m）・幅2.3m・深さ0.2m、西溝長13m・幅0.8～4m・深さ0.2mを計る。

周溝によって区画された台状部には、主体部が第1号方形周溝墓と同様に検出されなかった。同様に供献土器も、周溝・台状部よりは一切出土しなかった。台状部には、中央部から北に伸びる2条の溝状遺構（溝Ⅰ・Ⅱ）が検出されたが、層位的関係から後世に掘り込まれたものと考えられる。

第3号方形周溝墓
（A－6－J－3、K－1・4地区）

第3号方形周溝墓は、第2号方形周溝墓の北溝と南溝を共有し、また第4号方形周溝墓と周溝の一部を共有する関係を成して位置する。第3号方形周溝墓の周溝は全周せず、北・東溝が他の周溝の半分程度の長さになっている。また、周溝の深さ・底部に落差があり、北溝と西溝においては西溝が約0.2m深くなっており、東溝と南溝においては南溝が0.5m深く、西溝と南溝においても南溝が約0.2m深くなっている。周溝はN－20°－Eにふっているが、溝幅は他の方形周溝墓と同様相違があり、溝肩も不鮮明な部分がある。

第3号方形周溝墓の規模は、北溝長5m・幅2m・深さ0.3m、東溝長6m・幅1.5m・深さ0.3m、南溝長9.2m・幅2m・深さ0.6

m、西溝長さ7.3m・幅1m・深さ0.5mを計る。

周溝に区画された台状部には、他の方形周溝墓と同様に主体部は検出されず、第2号方形周溝墓から伸びる溝状遺構（溝1・2）が検出されたのみである。供献土器は、西溝の台状部側の肩上の一部から土器片が集中して出土したが、供献土器であるかは定かでない。

第4号方形周溝墓
（A－6－F－9地区）

第4号方形周溝墓は、第3号方形周溝墓の北西に位置し、第3号方形周溝墓の周溝の北西部と第4号方形周溝の南東部を共有する。

第4号方形周溝墓の周溝は、磁北より約20°東にふっており、全周する。周溝幅・深さも他の方形周溝墓に比べ整っているが、第3号方形周溝墓と共有する南東部の周溝が広くなっている。

第4号方形周溝墓の規模は、北溝長6.5m・幅1.2m・深さ0.15m、東溝長7m・幅1～2.7m・深さ0.2～0.35m、南溝長4.5m・幅0.8m・深さ0.2m、西溝長7m・幅0.5m・深さ0.15mを計り、5基の方形周溝墓中最も小型である。

周溝に囲まれた台状部には、他の方形周溝墓と同様に主体部は検出されず、また周溝・台状部より供献土器も認められなかった。

第5号方形周溝墓
（A－6－J－4・7・8・5地区）

第5号方形周溝墓は、第2号方形周溝墓の西南に位置し、第2号方形周溝墓の西溝の一部と東溝を共有する。

第5号方形周溝墓の周溝は、磁北よりN－20°－Eにふっており、全周するものと思われるが周溝の一部が調査地区外にあるため定かでない。周溝の残存状態は他の方形周溝墓に比較して悪く、溝幅が広く、深さは浅くなっており、後世に削平を受けた様子が北溝の溝肩に観られる。

第5号方形周溝墓の規模は、北溝長13m・幅一部推定3.1m・深さ0.2m、東溝検出長10.5m（推定12m）・幅不明・深さ0.2m、西溝長14m・幅3m・深さ0.2mを計り、5基の方形周溝墓中最大規模を持つ。

周溝によって区画された台状部には、主体部は検出されず、また供献土器も出土しなかった。

今回検出されたA－6－F・J・K地区の5基の方形周溝墓の築造時期は、供献土器の残存状態が悪く把握が困難であるが、第1号方形周溝墓の東溝より出土した壺型土器より、弥生式土器庄古第Ⅲ様式（古）の時期のものであることから、他の方形周溝墓もこれに追従すると考えられる。

	東辺長	西辺長	南辺長	北辺長	東溝幅	東溝深さ	西溝幅	西溝深さ	南溝幅	南溝深さ	北溝幅	北溝深さ
1号	11.0	10.0	8.0	9.0	1.4	0.35	1.4	0.4	1.2	0.35	2.0	0.35
2号	9.5 (12.0)	13.0	7.0 (11.5)	7.5	2.0	0.3 ～ 0.5	0.4 ～ 4.0	0.2	2.3	0.2	2.0	0.6
3号	6.0	7.3	9.2	5.0	1.5	0.3	1.0	0.5	2.0	0.6	2.0	0.3
4号	7.0	7.0	4.5	6.5	1.0 ～ 2.7	0.2 ～ 0.35	0.5	0.15	0.8	0.2	1.2	0.15
5号	10.5 (12.0)	14.0	4.5 (11.5)	13.0	2.0 ～ 4.0	0.12 ～ 0.4	3.0	0.2		0.2	3.1	0.2

第7表　各方形周溝墓の規模（単位は*m*）、（　）内は推定規模を示す。

土坑
（A－6－J・K地区）

当調査地区より検出された5基の方形周溝墓の間あるいは中に、4基の土坑が検出された。この他にも土坑らしき遺構があるが、その状態から自然形成による落ち込みと考えられるため、明確な土坑のみ記述する。4基の土坑は、楕円形・隅丸方形のすりばち状の形態を成し、内部には茶褐色砂質土層あるいは黒褐色粘質土層の堆積が観られ、周囲の遺構から土坑墓の可能性もあるが、明確な根拠がないため土坑として扱う。以下東より土坑1号……土坑4号と称して記述する。

土坑1号
（A－6－K－2・5・6地区）

土坑1号は、第1号方形周溝墓の北約3mに位置し、ややゆがんだ隅丸方形を成し、南北1.6m、東西1.6m、深さ0.24mを計る。土坑上口より底部にはやや急傾斜で落ち込み、底部は平坦に近い。土坑内には、茶褐色砂質土層の堆積が観られ、年代を決定するような遺物は出土していない。

土坑2号
（A－6－K－5・7、K－8・1地区）

土坑2号は、第1号方形周溝墓の台状部の中央より南溝にかけて掘り込まれている。長軸をほぼ磁北に取っており、長軸長約5m、短軸長約2.1m、深さ約0.2mを計る弓なりの楕円形の土坑である。土坑上口より底部にはゆるやかな傾斜で落ち込み、底部は平坦でなくすりばち状を成す。土坑南側の掘り方は、方形周溝墓南溝の掘り方と切り合って消失しているが、土坑内の堆積と周溝内の堆積層が互いに似かよった茶褐色砂質土層であるため、不明確であるが土坑が後に掘り込まれたものと考えられる。土坑内より時期を決定する遺物は出土していない。

土坑3号
（A－6－K－1・

土坑3号は、第3号方形周溝墓の東溝が途中で消える所より北約2mに位置する。長軸をN－20°－Eに取っており、長軸長約3.1

2・3・5・6地区）

m、短軸長約1.5m、深さ0.3mを計る楕円形の土坑である。土坑上口より底部にはやや急傾斜で落ち込み、底部は平坦でなくすりばち状を成す。土坑内には、黒褐色粘土層の堆積が観られたが時期を決定する遺物は出土していない。

土坑4号
（A－6－J－3・4地区）

土坑4号は、第3号方形周溝墓西溝に接するように位置している。長軸を北東から南西に取り、長軸長約2.6m、短軸長約2.3m、深さ約0.3mの楕円形を成す。

溝状遺構
（A－6－J－3・6地区）

調査地区中央部西よりに溝状遺構がほぼ南北に2条平行して走り、第2・3号方形周溝墓上を縦走しており、両溝は約1mの間隔をもって平行しているが、途中で消失している。以下東側の溝を溝Ⅰ、西側を溝Ⅱと称して記述する。

溝Ⅰ

溝Ⅰは、検出長18.2m、幅 1.3m、深さ0.15mを計る上口の大きく開くU字溝である。溝内には、黒褐色粘質土層の堆積が観られた。

溝Ⅱ

溝Ⅱは、検出長10.5m、幅 1.2m、深さ0.15mを計る上口の大きく開くU字溝である。

溝Ⅰ・Ⅱは、遺物が出土していないために時代は不明であるが、層位的には、弥生時代中期の方形周溝墓より新しいものと考えられる。

A－6－F地区

A－6－F地区では、遺構は全く検出されず、層位のみ記述する。

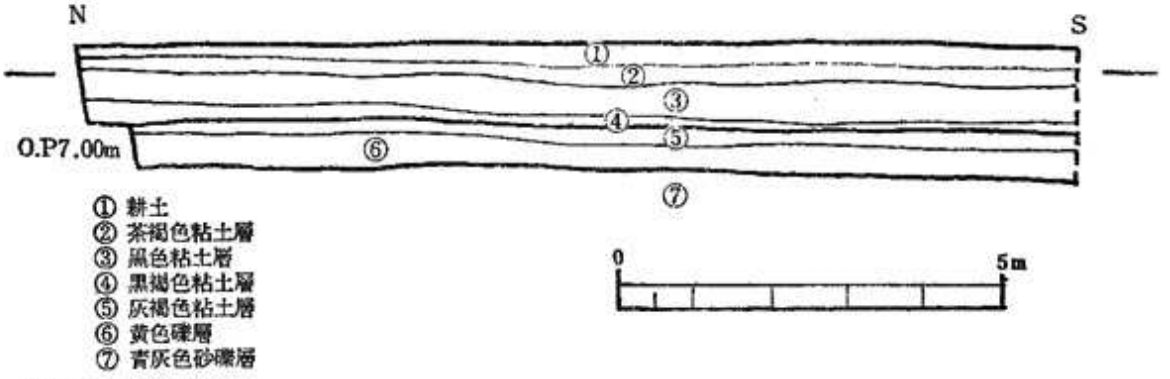
層位

層位調査は、南壁と東壁面で行い、東壁面沿いに深さ0.6mの「すじ掘り」調査による下層の調査を行った。

第1層・耕土、第2層・茶褐色粘土層の床土、第3層・黒色粘土層、第4層・弥生時代～平安時代頃の土器片を包含する黒褐色粘土層、第5層・生活面に当る灰褐色粘土層、第6層・黄色礫層、第7層・青灰色砂礫層にわけられる。第3層・黒色粘土層は、遺物は皆無に近く、A－6－F・G・I・J・K地区には観られず、当地区のみのものであった。第4層・黒褐色粘土層は、A－6－F・G・I・J・K地区に観られたが、東へ厚く西へ薄くなっており、当地区において厚さ約0.1～0.2mを計る。包含されている遺物の量も少なく、時期判断の困難な弥生式土器・須恵器・瓦器片のみであった。第5層以下は全く遺物を包含しておらず、A－6－F・G・I・J・K地区と同様生活面と考えられる。（第19図）

遺構

当調査地区においては、全く遺構は検出されず、フラットに続く淡灰褐色粘質土層が観られたのみである。この状態はさきのA－6－F・I地区にも観られたものであり、遺構の空白地帯（グランド）と考えられる。



① 耕土
② 茶褐色粘土層
③ 黒色粘土層
④ 黒褐色粘土層
⑤ 灰褐色粘土層
⑥ 黄色礫層
⑦ 青灰色砂礫層

第19図　東壁面土層図

第V章
遺　物

第1節　弥生式土器

小川水路改修工事に伴う採集土器

小川水路改修工事の時に、黒色粘土層中より多量の土器が採集された。その内、主だったものを器種別に記述する。

壺形土器（図版92—2～8・16）　2・3は、いずれも肩部片であり、沈線文を施す唐古第Ⅰ様式(新)のものと考えられる。5は、同様に肩部破片であるが、沈描直線文（3条）を施す唐古第Ⅱ様式と考えられる。7は、口縁部が外反し端面で上・下に肥厚し、下方へたれる。8は、外反する口縁部をもち上げた受口状の口縁。端面に凹線文を施す。いずれも唐古第Ⅲ様式に位置する。16は、二重口縁型土器。筒状の頸部から大きく外反し、段をもってさらに外反、端部で僅かに上・下に肥厚する。段部外面に細い凹線文、2対のうず巻き状浮文を施す唐古第Ⅴ様式の新しい時期と考えられる。4・6は、いずれも壺型土器底部破片であるが、4には木葉痕が残る。唐古第Ⅱ様式と考えられる。

壺用蓋型土器（図版92—1）　1は、笠形を成し、楕円形のつまみを2ヵ所にもち、2孔1対の孔を穿つ唐古第Ⅰ様式に位置する。

甕型土器（図版92—12～14）　12は、口縁部が「く」の字形に外反し、端部が僅かに肥厚し凹線文を施す。体部は張りが小さくなだらかな形を成し、外面上部に刷毛目、下部はヘラ磨きを行い、内面中位より下位にヘラ削りが観られる。13は、口縁部が「く」の字形に外反し、端部は僅かに上・下に肥厚し、凹線文を施す。体部は張りが小さく刷毛目を行う。14は、口縁部が頸部より丸く外反し、端部で僅かに上方へ肥厚し細い凹線文を施し、全面に刷毛目を行う。いずれも唐古第Ⅲ様式（新）と考えられる。

高杯型土器（図版92—9～11）　9は、杯部が水平にのび、内端に1条の凸帯をもち、外部が下方へ折れ曲り、ヘラ磨きを行う。唐古第Ⅲ様式（新）に位置する。

複合土器（図版92—10）　10は、破片であるため、結合器種は不明であるが、器台が端部で大きく折れ曲り、凹線文と棒状浮文を施す。

器種不明土器（図版92—15）　15は、口縁部が外面では段をもち外反し、端部で上方へつまみ上げ、内面は直線的に外反する。外面の段部に下方へ肥厚する痕が残る。上段に竹管文を施し、下段はタタキ目、横なでを行う。

F－7－E・F地区出土の土器

当調査地区においては、弥生式土器として唐古第Ⅱ様式から第Ⅴ様式が出土した、これらの土器の内、唐古第Ⅱ様式から第Ⅳ様式に位置するものは、攪乱を受けている第3層・黒色粘土層より出土したものである。唐古第Ⅴ様式は、溝状遺構、土壙等の遺構より出土した。なお、各様式を量的に比較すると、唐古第Ⅴ様式が70%を占め完形品も多い、次で第Ⅱ様式が20%、第Ⅲ・Ⅳ様式が10%となる。以下第3層・黒色粘土層出土の土器より遺構別に記述する。

第3層・黒色粘土層

壺形土器（図版93—1～4、6～8）　1・2は、口縁端部の破片のみであるが、いずれも大きく外反し端面で下方へ僅かに肥厚する。2は、口縁端面に指頭圧痕による刻目文を施す。この刻目文は、親指を端面に当てて、人差し指によって粘土をつまむように刻目を付け、それを右回りに施文する。1は、櫛による刻目文・同波状文を施す。いずれも唐古第Ⅱ様式に位置すると考えられる。3は、筒状の頸部から大きく外反する口縁部、口縁部端面にヘラによる刻目文を施す。4は、頸部より短く外反し、口縁部端部で下方へ短く肥厚し、端面に櫛描波状文を施す。3、4は唐古第Ⅱ様式と考えられる。6～8は、唐古第Ⅴ様式に位置すると考えられる。6は、口縁部が短かく直線的に外反し胴部は肩部がやや張り、最大径を中位にもち丸味がある。7・8は、7が口縁部を欠くが、長頸壺である。胴部は張りの小さい縦長形をなす。肩部にヘラによる記号のようなものが記されている。

甕型土器（図版93—9～11）　9は、頸部から「く」の字形に外反し、口縁部端部で上方につまみ上げ、凹線文を施す。唐古第Ⅳ様式に位置する。10は、底部のみであるが、荒いタタキ目と一部に刷毛目を行う。底部の張りが大きく唐古第Ⅴ様式（新）と考えられる。11は、口縁部が頸部より「く」の字形に外反し、口縁部端部は僅かに下方へ肥厚し浅い凹線状の凹みをもつ。体部は張りの小さい、丈高の高い器形を成し、2段の荒いタタキ目を行う。唐古第Ⅴ様式に位置する。

高杯型土器（図版93—12・13）　12・13は、いずれも脚部であるが、12が柱部より裾部へなだらかに広がり、端部で上・下に肥厚する。13は、中空裾広がりの柱部より、大きく広がる裾部をもつ。

鉢型土器（図版93—5）　5は、把手が4カ所につき、各々に2孔1対の孔があり、体部上位に櫛描簾状文を施す。

土壙3号

壺型土器（図版93—14）　14は、短かい頸部より外上方へ開き、

口縁部端部で上・下に肥厚する。肩部内面にヘラ削りを行う。

甕型土器（図版93—15）　15は、口縁部が頸部より「く」の字形に外反し、端面で上方へ肥厚する。体部は最大径が中位にあるが、張りの小さい丸底を成し、2段に別けられるタタキ目を行う。近江～山城系の甕型土器と考えられる。いずれも庄古第Ⅴ様式の古い時期に位置すると考えられる。

溝Ⅰ—S

庄古第Ⅳ様式から第Ⅴ様式の新しい時期のものまでが出土した。

壺形土器（図版94--16～22、24）　16～18は、いずれも口縁部が頸部より漏斗状に開き、端部で肥厚する。16は、口縁部端部で上・下に肥厚し、凹線文を施す。18は、口縁部端部下方に粘土紐貼り付けによって肥厚し、凹線文を施す。19は、筒状の頸部より短かく外反し、口縁部端部で僅かに小さく肥厚する。20は、丸味のある肩部より、外反する口縁部をもつ。21・22・24は、いずれも外上方へ直線的に立ち上がる口頸部をもつ。21は、長頸壺。口縁部端部で僅かに外へ開く、22は、やや長く立ち上がり、端部外面に浅い凹線文を施す。24は、頸部のくびれが小さく短く立ち上がり、口縁部端部へ器壁が薄くなる。

甕型土器（図版94—23、25～27）　25は、なだらかな肩部より外反する口縁部。口縁部端部に凹みがある。23は、肩部の張りが大きく、くびれた頸部より大きく外反し、口縁部端部が僅かに上・下に肥厚する。肩部内面にヘラ削りが観られる。底部26・27は、いずれも底部にヘラによる記号のようなものを残す。

高杯型土器（図版94—29～32）　29・30は、いずれも杯部上段が外反し、端部で僅かに水平にのびる。30は段部で僅かに下方へ肥厚する。脚部31は、裾部端部で上・下に肥厚し面をもつ。

溝Ⅱ

庄古第Ⅴ様式の土器が出土した。

壺型土器（図版94—33）　33は、口縁部が斜上方へ直線的にのび、体部は張りの小さい長胴形をなす。体部外面にタタキ目を残し、口縁部外面・体部内面に刷毛目調整を行う。外面には濃く煤の付着が観られる。

甕型土器（図版94—34）　34は、口縁部が頸部よりなだらかに外反する。体部は張りの小さいなだらかな形をなし、2段に別けられるタタキ目、肩部に刷毛目を行う。

高杯型土器（図版94—35）　35は、脚部のみであるが、柱部より裾部へなだらかに広ろがり、柱部に凹線文を施す。

溝Ⅱ

壺型土器（図版94—36）　36は、口縁部端部を欠くが、長頸壺と考えられる。頸部が鋭くくびれ、肩部が大きく張る器形を成す。

沼地状落ち込み

当遺構は、その堆積層がさきの包含層（第3層・黒色粘土層）と似ており、別けられなかったため、出土土器には他の遺構より時期が古い唐古第Ⅲ様式から第Ⅴ様式のものまである。

壺型土器（図版95—37～44）　37・38は、短く漏斗状に開く口縁部をもつ。37は口縁部端部外面に列点文を施し、38は口縁部端部が上・下に肥厚し、凹線文を施す。39は、頸部のみであるが、断面三角形の貼り付け凸帯文の上に棒状浮文を貼り付けている。40～42・44は、時期は異にするが、いずれも長頸壺である。40は、口縁部端部で僅かに内弯し、凹線文・円形浮文を施す。42は、頸部に円形竹管文・ヘラ記号を施す。44は、体部の張りの小さい長胴形をなし、外面に刷毛目を行う。43は、口縁部が筒状の頸部より水平に折れ曲がり、端部に凹線文を施す。体部は、肩部がやや張り最大径が上位にある球形の器形をもつ。器壁全外面に刷毛目を行う。

甕型土器（図版95—45）　45は、口縁部が頸部より「く」の字形に外反し、端部で上・下に僅かに肥厚し、凹線文を施す。体部は肩部がやや張り、底部へなだらかなカーブを描く。2段にタタキ目、一部に刷毛目を行い、内面には刷毛目調整を行う。

鉢型土器（図版95—46）　46は、突出平底底部より丸味をもって立ち上がり、頸部をもち、外反する口縁部。

高杯型土器（図版95—48～50）　48・49は、杯部底部より内弯ぎみに広がり、杯部上部で直口ぎみに立ち上がる。49は、杯部上部外面に3条の凹線文を施す。脚部50は、杯部下段が水平にのび、柱部に刻目文・柳描直線文を施す。

器台型土器（図版95—51、52）　51・52は、いずれも鼓胴形をなす。51は口縁部端部外方に断面三角形の貼り付け文を施す。

H—3—H地区出土の土器

H—3—H地区を中心に、土器群Cより、唐古第Ⅲ様式～第Ⅴ様式の土器が出土した。

土器群c

土器群cは、唐古第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式の各器種の土器が、包含層中に集中的に出土した地点である。

壺型土器（第10図—1、2）　1は、ほぼ完形で出土した。口縁部は、漏斗状に開き、端部で水平にのび、端面で僅かに上・下に肥厚する。体部は、最大径を中位にもち、丸味のある形を成す。文様

は、全面の剥離が著しく定かでない箇所も多いが、頸部より斜描直線文・同波状文を交互に施し、同直線文で終わる。

2は、長頸壺と呼ばれるもの。細い頸部よりやや開き傾向でのび、端部で僅かに内弯する。端部の一カ所が僅かに下方へ下がり、片口をもつ。文様は、2段に凹線文を施す。

器台型土器（第10図—3、4）　3は、口縁部のみであるため壺との判別が困難。端部で上・下に肥厚し凹線文・円形浮文・刻目文を施す。頸部に凹線文を施し、タタキ目が残る。

4は、口縁部を欠くが、形態より、端部は丸く終わるものと考えられる。鼓胴形を成し、底径が大きい。文様は、凹線文を2段に施し、その間に大きい4孔の透し孔を穿つ。

F—4—N、G—4—B地区出土の弥生式土器

当調査地区においては、弥生式土器として庸古第Ⅲ様式から第Ⅳ様式にかけてのものが主に出土した（一部第Ⅱ様式のものが含まれる）。その大多数は、方形周溝墓の供献土器と2基の大形土壙から出土したものである。以下器形分類を行い、方形周溝墓の各周溝、大形土壙を各遺構別に記述する。なお各土器の仔細は土器表を参照願う。

F—4—N、G—4—B地区土器の器形分類

東奈良遺跡の弥生時代中期（F—4—N、G—4—B地区）の土器を、壺型土器・甕型土器・鉢型土器・高杯型土器・器台型土器・蓋型土器に分類、それぞれ下記のように細分化して呼称する。（第8表）

壺型土器

壺型土器A　球形に近い胴のはった器体に、筒状の頸部を持ち外反する口縁部をもつ壺である。口縁部の形態により、壺A_1、壺A_2、壺A_3、壺A_4と4形態に分けることができる。壺A_1は、口縁部端面が肥厚することなく漏斗状に開くもので、壺A_2は、口縁部端面が上下僅かに肥厚する。頸部は太く、そのまま胴部まで広がり、胴部の最大径を計る位置は、中位よりも下位にある。壺A_3は、口縁部端面が斜め下方あるいは直下に大きく肥厚する。頸部は短く細い。胴部はなだらかなカーブを描き、最大径が中位にある。壺A_4は、頸部より漏斗状に開き、口縁部端面下に、断面三角形凸帯を付けて面をもたせたものである。

壺型土器B　漏斗状の頸部を持ち口縁部が受口状のものである。受口の状態により壺B_1、壺B_2の2種にわける。壺B_1は、受口部を持ち上げて成形しているもので、壺B_2は、受口部を上下に貼り

付けて成形しているものである。

壺型土器C　あまり例のない土器であり、当遺跡では少例しかみられない形体を呈している。筒状の頸部は太く、端面は外方へ僅かに折れ曲っており、口縁端面は丸く終る。

壺型土器D　筒状の頸部が直口するもので、いわゆる長頸壺型土器である。壺D_1は、口縁部が僅かに内弯し、壺D_2は、口縁部が僅かに外弯する。

壺型土器E（短頸壺）　口縁端面は内外共に丸みを持ち、外面は僅かに下方へ折れ曲っており、小さくくびれる太い頸部から僅かに広がりを持ち胴部に至る。最大径は下位にあり、底部が小さい。

（なおこの器種は、今まで無頸壺とされていたが、形態などから見ると短頸壺と呼称した方が適しているため、当遺跡においては短頸壺と呼称する。）

壺型土器F（無頸壺）　壺F_1は、内方にやや傾斜して立ち段状口縁部を持ち、胴部は稜を持ちやや算盤玉球形を成す。壺F_2は、腰にはっきりとした稜を持ち内弯して立つ口縁部を持つ。

壺型土器G（水差型土器）　口縁部の形態から、壺G_1、壺G_2、壺G_3の3種がある。壺G_1は、少しの広がりを持つ筒状の口縁部に、把手側の口縁をえぐり取っているもので、壺G_2は、口縁部が直口し、把手の付加されている反対側は広がりを持ち、把手側は下っている。壺G_3は、筒状の頸部で直口する。

複合土器　壺あるいは無頸壺に、高坏あるいは器台等を結合したものである。

甕型土器

甕型土器A　口縁部は外反するが、内外共に頸部に丸みをもつものが多い。口縁径と胴部径とが同率のものが多い。

甕型土器B　「く」の字形に外反する口縁部、端部は立ち上がりを持つ。外端面は、凹線文を施されているものが大多数である。最大径部は上位にあり、底部にかけてゆるやかなカーブを持ち終る。

甕型土器C（大形甕型土器）　丸みを帯びた頸部より「く」の字形に外反する口縁部、端面は僅かに立ち上がりを持つ。胴部はあまり張り出さないが、全体の器形としては丸みを持つ。

鉢型土器

鉢型土器A　頸部より丸みを持ち「く」の字形に外反し、胴部においても丸みを持つ。破片のみでは甕型土器と区別し難い。

鉢型土器B　椀形の器形で、口縁端面は内へ肥厚するものが大多数である。

鉢型土器C　底部より大きく広がり、口縁部付近で立ちあがるや

や深鉢。

鉢型土器D　胴部に稜を持ち内方へ傾斜し、段状口縁部を持つ。

高杯型土器

高杯型土器A　高杯A_1は、大きく外反した浅い杯部、端面は、水平になり内外に肥厚する上端に凹線文を持つものもある。高杯A_2は杯部端が直立して立ちあがる。

高杯型土器B　内方に傾斜し立ち上がり、体部に稜を持つ。杯端面は平らである。これは、当遺跡において少例しか見られない。

高杯型土器C　高杯C_1は、水平に広がった口縁部内端に1条の凸帯を持ち、外端は下に折れ曲る。高杯C_2は、杯端部が水平に短くのびる。

蓋型土器　つまみ部を持ち笠形を成す。

器台型土器　口縁部は、水平な部分を有し、それより下方に折れ曲り長く垂下する。

脚部　高杯型土器、鉢型土器、器台型土器等の脚部。

包含層　遺構の項でも記述したが、弥生式土器が出土したのは第4層、第5層a・bよりである。しかし、層位的時期差がみられないために一括して記述する。

壺型土器A_2（図版96—1、2）　1は、漏斗状に開く口縁部を持つ。端部は、上下に肥厚する。文様は剝離が著しく不明である。2は太い頸部より外反し、端部で下方へ肥厚する。

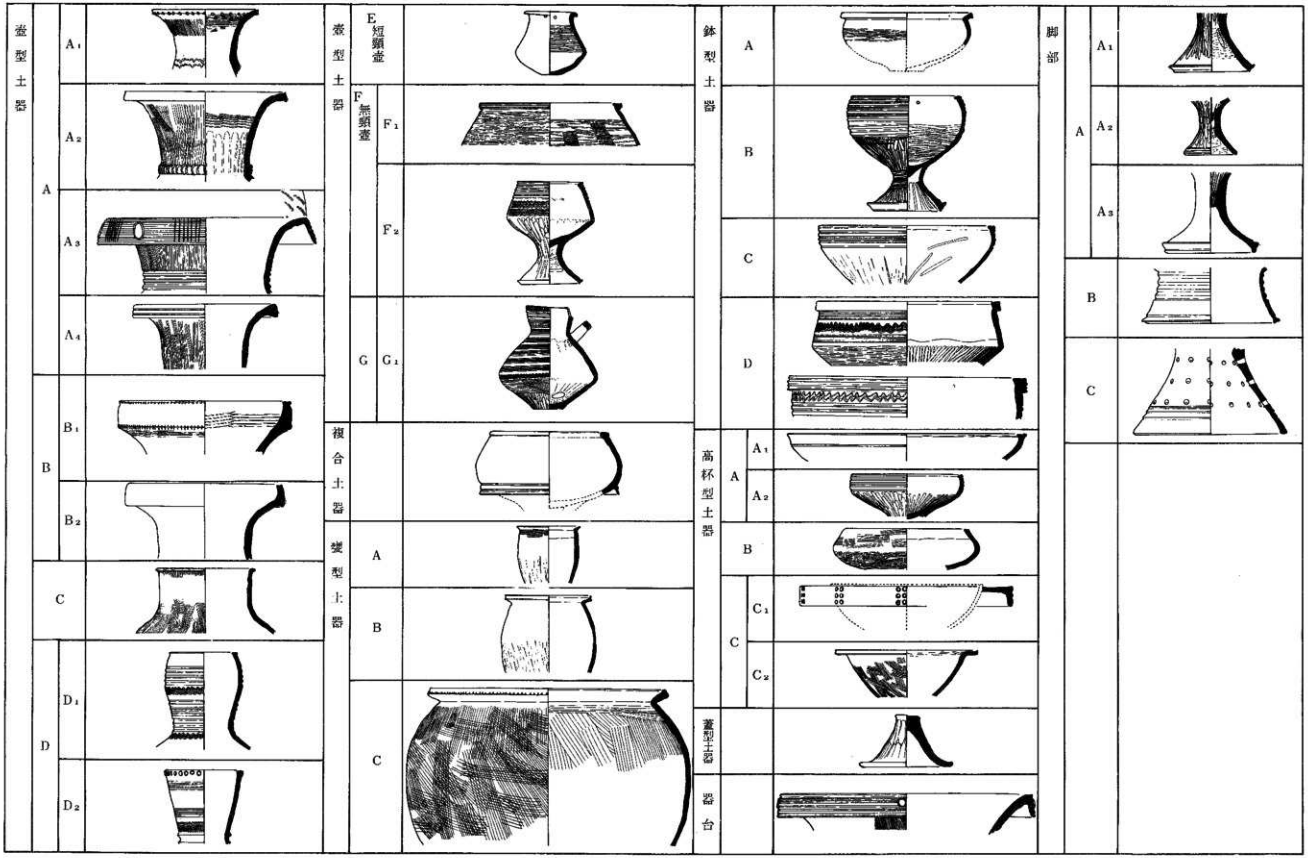
壺型土器A_3（図版96—3、5）　3は、口縁端部が水平にのびて折れ曲り下方へ垂下する。端部に凹線文、大形の円形浮文、頸部に凹線文を施している。5は口縁部内面でつまみ上げ、端部で上下に肥厚する。端部外面の凹線文上にヘラによる刻目文・円形浮文を施している。伊勢地方にこの器形の壺型土器が知られる。

壺型土器B_1（図版96—4）　4は、受口状の口縁部を持ち凹線文を施している。

壺型土器C（図版96—6）　6は、当調査地区において1例のみ出土した壺である。頸部より直立して立ち上がり、口縁端部で外方へ肥厚する。

鉢型土器B（図版96—8）　8は、斜上方へ大きく広がる体部から稜を持って直口し、口縁端部で内面に肥厚する。文様は凹線文と刻目文を施している。

その他の土器・台付鉢脚部（図版96—10～12、16）　10～12は、いずれも柱状部からなだらかに広がり端部で上方へ肥厚する。11は



第8表　F－4－N・G－4－B地区　弥生式土器の形態と呼称

柱状部に凹線文、12は端部に断面三角形の貼り付け凸帯文、刻目文を施している。

マウンド内の土器

方形周溝墓のマウンドと思われる茶褐色粘土層のレンズ状の堆積層中より、点数は少ないが土器が出土した。

壺型土器A₂（図版96—17） 17は、口縁部が太い頸部から大きく外反し、端部は上下に肥厚する。端部外面に凹線文、頸部に管状の擬原体による波状文、直線文を施している。

壺型土器A₃（図版96—18） 18は、口縁部が水平にのび折れ曲り垂下する。端面に凹線文と大形の円形浮文を施している。

甕型土器A（図版96—20） 20は、口縁部が頸部より水平に折れ曲り端部で僅かに肥厚する。最大腹径が口縁径より小さく底部へ細くなる。

甕型土器C（図版96—19） 19は、口縁部が斜上方に外反し、端部は上方へ僅かに肥厚する。

その他の土器

台付把手付鉢型土器（図版96—22） 22は、短い脚部を持ち底部よりなだらかに立ち上がり、把手痕を残す。脚部端に凹線文を施している。

複合土器（図版96—21） 21は、壺部が底部より丸く立ち上がり、中位より内傾して段状口縁部を持つ。器台部は端部が短く垂下し凹線文を施している。他の文様、調整は風化が著しく不明。

第1号方形周溝墓

第1号方形周溝墓の北溝・南溝・北第Ⅱ溝・東第Ⅰ溝より供献土器と考えられる庄内第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式の土器が出土した。

南溝

壺型土器A（図版97—25～35、第13図—36） 南溝出土の壺型土器Aは、壺A_3が大多数を占め、次いで壺A_2がみられる。

壺A_2・26、29～31について述べると、26は頸部がやや細く、口縁端面に櫛描波状文、頸部に凹線文を施す。29は口縁端部が短く下方へ折れ曲がることからA_4に近い。29～31は頸部に指頭圧痕文を貼り付けている。

壺A_3・27、28、32～35は、口縁端部で上方に僅かに肥厚する28、32、折れ曲る27、33～35がある。いずれも装飾が豊かで、凹線文・櫛描波状文・同直線文・同列点文・同扇状文・円形浮文等を施してある。特に後者は全装飾を用いるものが多い。口縁端部の凹線文は幅の狭いものを5～8条施し、大きく垂下するものほど多い。これに小形の円形浮文を加飾する32・35と、大形の円形浮文の27、34がある。口縁端部内面に櫛描列点文・同扇状文を施す27、32、

34、35がある。頸部をみると櫛描文のみの4以外は、凹線文を施し、35のみ貼り付け断面三角凸帯文がみられる。唯一の完形品である35は、肩部から胴部にかけて櫛描波状文に初まり、同直線文で終る文様が交互に施されている。仕上げはいずれも内外面ともに刷毛目、或いはナデを用い、体部も残る35は、体部外面にヘラ磨きを用いている。36は、口縁部を欠くため器種は不明である。頸部はやや細く、胴部の張りもやや小さい。頸部に断面三角形貼り付け凸帯文、肩部より最大径部までに櫛描直線文で初まり、同波状文を交互に施し、同波状文で終る。

鉢型土器C（図版98—37）　南溝出土の鉢Cは少なく、他に破片が10点出土した。37は口縁外面に4条の凹線文が施されている。

鉢型土器D（図版98—38～42）　鉢Dは南溝出上の大多数を占め、他に破片で5点出土した。いずれも段状口縁を持つ。38は段状口縁部に凹線文、39、40の体部に櫛描波状文と同直線文を、42は同簾状文を施してある。41は口縁端部上面に同波状文が施されている。仕上げは、風化の著しいものが多いが、ヘラ磨き、あるいはナデを用いたものが多い。42は、「円板充填法」を用いた脚部の付く台付鉢である。また、胎土、施文から河内地方よりの搬入品と思われる。

器台型土器（図版98—43）　口縁部を欠いているが、折れ曲り垂下するものと思われる。口縁部内面には櫛描扇状文を、頸部には凹線文を施してある。

甕型土器A（図版98—44）　44は、丸みのある頸部から外反する口縁部を持ち、体部はなだらかなカーブを描いて内外面ともに刷毛目を行っている。なお45は、甕底部と考えられ内外共にヘラ削りがみられる。他に南溝より、破片であるが甕Aが7点と同Bが19点出土している。

高杯型土器C$_1$（図版98—47）　南溝より出土した高杯は高杯C$_1$が多く、47以外の他に9点出土した。いずれも口縁端部片のみが多い。47は、端部の折れ曲った面に円形浮文を施してある。

脚部A$_3$（図版98—48）　48は、柱状部が短く裾部へなだらかに広がり端部で上下に肥厚し凹線文を施す。柱部から裾部にヘラによる鋸歯文と直線文を施してある。この文様は、播磨地方よりの搬入と考えられる。

壺型土器F$_2$（図版98—50）　南溝より1点のみであるが、壺F$_2$

(台付無頸壺) 50が出土した。体部に5条の凹線文と細かな櫛描波状文を施し、脚部は裾へなだらかに広がり端部で上下に肥厚する。仕上げは、全面にヘラ磨きを行っている。口縁端部から脚部裾部まで放射線状に朱が塗布され、また体部底部に焼成後の穿孔がみられる。

壺型土器G$_1$ (図版98—51)　同じく南溝より壺G$_1$(水差型土器) 51が1点出土している。口縁部は端部へ僅かに広がり、体部は最大径が下位にあり張りが大きい。口縁端部上面に刻目文、端面に4条の凹線文、以下体部最大径まで櫛描直線文を施し同波状文で終る。51も50と同様把手付近に朱痕があり、底部に焼成後の穿孔がある。他に水差型土器の把手片が3点出土している。

北溝・北第Ⅰ溝

北溝と北第Ⅰ溝の相違は、遺構の項でも記述したが定かでなく、唯一壺型土器A$_2$ (65) のみが北溝より出土したことが確認できた。(第14図)

壺型土器A (図版99—52・53・65)　北溝・北第Ⅰ溝では、壺A$_2$が壺A$_3$より多く出土している。

壺A$_2$ ・52、65は、いずれも口縁端部外面に細い凹線文を施してある。65は北溝の底に立った状態で出土した完形品であるが、太い頸部のまま胴部へ広がり最大腹部は下位にあり張りがある。文様は口縁端部内面に管状の扇状文、頸部に櫛描波状文、同直線文、肩部よりこれを繰り返し直線文で終る。仕上げはヘラ磨きを行う。壺A$_2$は破片で18点出土した。

壺A$_3$ ・28は、口縁端部を欠くが折れ曲り垂下すると考えられ、頸部には円形竹管文と貼り付け指頭圧痕文を施している。他に壺A$_3$の破片が11点出土した。

壺型土器B (図版99—54・55)　いずれも受口状口縁部を持ち、壺B$_1$55は受口部に凹線文とヘラによる刻目文を施してある。他に破片で4点出土した。

壺型土器G$_3$ (図版99—58)　58は、口縁端部を欠くが、筒状の口縁部と思える。体部の張りが大きい大型の水差型土器である。頸部から肩部に櫛描直線文・同波状文を交互に施してある。他に壺Gと思われる破片1点と把手3点が出土した。

甕型土器B (図版99—64)　64は、体部中位を欠くが、口縁部は「く」の字形に外反し端部が僅かに上方へ肥厚し、体部は上位で張り底部へ続き内外面とも刷毛目で仕上げ、外面下位にヘラ削りがみ

られる。他に甕Aが10点と甕Bが17点、甕C22点の破片が出土した。

高杯型土器A（図版99—61） 61は、杯部が浅く斜上方に立ち上がり端部で内面肥厚し、一条のヘラ描き沈線文が施されている。

鉢型土器C（図版99—57） 57は、小型のもので把手を持つと思われる。口縁部に4条の凹線文と刻目文が施されている。他に鉢B 59は大きく内弯し端部で内面肥厚し、8条の凹線文を施している。

鉢型土器D（図版99—60） 60は、無文の段状口縁部を持ち、体部に櫛描直線文と同波状文を施してある。他に鉢型土器Dとして段状口縁部が無文のものが2点、凹線文を施すものが6点出土した。また同脚部62・63がある。

器台型土器（図版99—56） 56は、口縁端部が壺A_4と同様折れ曲り垂下し凹線文、円形浮文を施している。この器形の器台型土器は、口縁部のみでは壺型土器A_3との区別が困難である。

東第Ⅱ溝

東第Ⅱ溝は、北第Ⅱ溝から続く東溝の外側にめぐる周溝で、他の周溝に比べ土器の出土量は少ない。

壺型土器A_2（図版102—110） 110は、口縁端部で両面肥厚し櫛描簾状文が施されている。太い頸部よりそのまま胴部へのび、櫛描直線文と同波状文を施してある。他に同破片が3点と口縁端部に凹線文を施した破片が2点出土した。

壺型土器A_3（図版102—111） 111は、折れ曲り垂下する口縁端部全面に、ヘラによる刻目文を施している。他に凹線文を施すものが7点出土した。

壺型土器B_1（図版102—113・114） いずれも、受口部に凹線文を施し、114は端部で内面肥厚する。

壺型土器D_1（図版102—112） 112は、頸部が細くしまり、口縁部中位で僅かに張り端部へ内弯する。文様は、口縁部から頸部にかけて凹線文と櫛描波状文が施されている。

壺型土器E（図版102—115） 115は、口縁端部が内外共に丸みを持ち、外面は僅かに下方へ折る。太い頸部より体部は、最大径が下位にあり底部は小さい。頸部に2孔1対の孔がみられる。

器種不明土器（図版102—116） 116は、体部が大きく張り断面三角形の貼り付け凸帯に刻目文を施す。唐古第Ⅰ様式とも考えられるが、この場合包含層の混入と考えられる。

甕型土器C（図版102—120） 口縁部は、「く」の字形に外反し

端部で上方へ僅かに肥厚する。体部は張りがなく口縁径と同率である。頸部には貼り付けによる指頭圧痕文がみられる。他に甕底部121～124があり、121・122には木葉痕がみられる。また同甕片が9点出土した。

鉢型土器C（図版102—117）　117は、口縁部が直口に立ち上がり段状口縁部がない。端部に刻目文・櫛描直線文・同波状文を施している。同D118は、段状口縁部を持ち円形浮文を施してある。鉢型土器脚部C119は、短く裾部までなだらかに広がり裾部に凹線文を施してある。

第Ⅰ大形土坑

第Ⅰ大形土坑出土の弥生式土器は、深さ約 0.7mの土坑内に堆積した黒色粘土層と土坑底部の木製品と共に出土した。

壺型土器A（図版 100—68～70・72～74）　第Ⅰ大形土坑も方形周溝墓供献土器と同様に、壺型土器A_3、A_4が主力である。

壺A_2、69・70は、いずれも口縁端部が上下に肥厚し細い凹線文、頸部から肩部に櫛描直線文を施している。70は、土坑の南肩より出土した。

壺A_3、72～74は、いずれも端部で折れ曲り大きく垂下する。端面に5条の凹線文と72に小形円形浮文、他に大形の円形浮文を施し、72の口縁端部上面に櫛描列点文が施されている。

壺型土器B_1（図版100—75）　75は、受口状の口縁を持ち凹線文が施されている。

壺型土器F_1（図版100—66・67）　66・67は、無頸壺と呼ばれるものでいずれも算盤球形の体部を持ち、口縁端部は、66が丸みのある段状口縁、67は面のある段状口縁を持ち凹線文を施している。

器種不明壺型土器（図版100—71）　71は、胴部片のみであるために器種は定かでないが、最大径が下位にあり稜を持って底部へ続く。文様は、櫛描直線文・同波状文を交互に施し同波状文で終る。仕上げは最大径まで刷毛目、下位はヘラ磨きを行っている。胴部の形態から壺型土器A_3、壺型土器Fと考えられる。

壺型土器G_3（図版100—82）　82は、把手を欠くが器形から水差と考えられる。口縁部は直口して立ち上がり凹線文を施し、肩部から胴部へ櫛描直線文を施している。

甕型土器A（図版101—87・88）　87は、頸部より丸く外反し端部で上下に僅かに肥厚し、頸部に櫛描波状文と2孔1対の小孔が2カ所にみられる。同88は、小型で口縁径と胴部最大径が同率の器形

を成す。

甕型土器B（図版101—89～93）　89～93は、口縁部が「く」の字形に外反し、端部で上に立ち上がり凹線文を施している。体部はあまり張り出さずなだらかな器形を成す。同93は、唯一の完形品であり、木製品とともに出土した。

甕型土器C（図版101—94～96）　94～96は、口縁径30cm～40cmの大形品である。口縁部は「く」の字型に外反し端部は肥厚し面を持つ。肩部がやや張る器形を成す。

高杯型土器A（図版102--102～104）　高杯A_1、102・103は直口の杯部を持ち、杯部外面に凹線文が施こされている。103は、端部上面にも凹線文を施している。高杯A_2、104は、前者とやや異なり杯部がゆるやかに内弯し立ち上がり端部で内面に肥厚する。端部外面に凹線文を施している。

高杯型土器B（図版102—105）　105は、当調査地区より1例のみ出土した器種である。杯部は稜を持って内傾して立ち上がり、端面上部に平らな面を持つ。仕上げは、外面に刷毛目、内面にナデを行っている。無頸壺、鉢としては器高が浅く、高杯として扱ったが判別は困難である。

高杯型土器C_2（図版102—106）　106も当調査地区より1例のみ出土した器種である。高杯C_1と似た器形を成すが、端部の凸帯と外端が下に折れ曲がらず、水平にのびるのみである。摂津加茂遺跡の高杯に類似品をみる（弥生式土器集成・本編）。他に、高杯脚部107～109がある。

鉢型土器A（図版100—81）　81は、口縁部が短く折れ曲る。体部は、張りがない。

鉢型土器B・C（図版100—78・79）　鉢B78は、口縁部が内弯して立ち上がり端部で内面に肥厚する。外面には凹線文を施してある。鉢C79は、口縁部が直立して立ち上がる。

鉢型土器D（図版100--76・77・83）　76は、口縁端部上面が内側へ下り、櫛描波状文を段状口縁部外面と頸部に施している。77・83は、段状口縁部と体部に凹線文、その間に77は櫛描波状文、83はヘラによる刻目文が施され、他に台付鉢の脚部として80(図版100)・100（図版101）がある。100は、短く裾までなだらかに広がり、裾部に凹線文と大きい円形透し孔がある。

複合土器（図版101—99）　99は、壺と器台を結合した複合土器

と呼ばれるものであり、器台部と口縁部の結合部分のみ検出した。垂れ下り部に凹線文の上から一部に刻目文、円形浮文を施している。

甕用蓋型土器（図版101—84・85）いずれも笠形を成し、84は上部が凹みを持ち、85は細いつまみ状のものを持つ。

蓋型土器（第16図—86）は、形は高杯脚部を成すが、裾部内部に多量に煤が付着しており、蓋に転用したと思われる。器型は裾端部で横、下に肥厚する。

東端土器群（第Ⅱ大形土拡）

東端土器群は、第Ⅱ大形土拡上より多量に出土した土器の集中群である。遺構の項でも記述したが、方形周溝墓・東第Ⅱ溝の供献土器との判別が困難な面がある。

壺型土器A₁（図版103—126）　126は、口縁部が漏斗状に開き端部は丸く終る。文様は口縁端部外面に刻目文、内面に竹管文、頸部外面に櫛描波状文を施している。

壺型土器A₂（図版103—125・127～129）　125は、口縁端部を欠くが長い頸部から僅かに広がる。頸部に櫛描直線文を施している。127・128は、太く短い頸部から広がり口縁端部で上下に肥厚する。いずれも、口縁端部外面に櫛描波状文、頸部から肩部へ同直線文を施し、128は口縁端部内面にも同波状文を施している。129は、口縁端部で上面に肥厚し、頸部に貼り付け指頭圧痕文を施している。

壺形土器A₃（図版103—130）　130は、口縁端部で折れ曲り下方へ垂下し、この内外面に竹管文を施している。

壺型土器D（図版103—131・132）　壺D_2、131は細い頸部から口縁部へ少し開き、同D_1、132は細い頸部から直立して立ち上がり口縁部で内傾する。文様は、132は口縁端部から頸部へ円形浮文、櫛描直線文、同波状文、断面三角形貼り付け凸帯文を施している。132は同じく凹線文、ヘラ描き刻目文を施している。

壺型土器F_1（図版103—133）　133は、底部より大きく張り出し、稜を持って内傾する。口縁部は段状口縁部を有し凹線文を施し、体部最大径上位に櫛描直線文、同波状文を施している。これは、第Ⅱ大形土拡最下層より出土した。

壺型土器（第17図—141）　141は、第Ⅰ大形土拡底部の木器群と共に出土した。文様、器形より東海系の土器と考えられる。体部は肩が張り、最大径が中位よりやや上に位置する。肩部に角張った波状文が施され、全面に縦方向の荒い刷毛目を行っている。

甕型土器A（図版103—137）　137は、口縁部は丸みを持って外反し、口縁径が胴部最大径を凌ぐ。

甕型土器C（図版103—138・139）　138は、口縁部が外反し端部で上面に丸みを持って肥厚し、外面にヘラ描き刻目文を施している。体部は肩部で丸く張り底部へ続く。外面に刷毛目を、縦・横・斜めに行っている。139の底部は、ヘラ削りを行っている。

鉢型土器B（図版103—134）　134は、台付鉢である。鉢部は内彎する椀形を成し、端部で内面肥厚する。口縁部から体部へ凹線文が施され、端部に2孔1対の孔を2カ所あけている。脚部は、短くなだらかに広がり端部で上下に肥厚する。文様は、柱部にヘラによる凹線文、裾端部に竹管文、底部端に2カ所の刻目文を施している。

鉢型土器A（図版103—135）　135は、口縁部は頸部から丸みを持って外反し、端部は丸い。他に鉢型土器の脚部片136がある。

甕用蓋型土器（図版103—140）　140は、笠形を成し上部につまみを持ち、やや器高が高い。

その他の遺構

土拡7号

方形周溝墓西溝中央部の土拡墓7号上より検出された壺型土器A3（第11図—142）は、口縁部が短い筒状の頸部より外反し、端部で上下に僅かに肥厚し凹線文を施している。体部は丸みを持ち最大径が中位にある。肩部より最大径部に櫛描直線文・同波状文を交互に施し、同直線文で終る。

井戸1号

井戸1号底より高杯型土器（第15図—144）が出土した。杯部は、杯上部を欠くが、杯底部より大きく開き稜を持って屈折し段状口縁部を持つものと考えられ、内面に細かい不規則な方向へのヘラ磨きを施している。脚部は、太い中空柱部より裾部へなだらかに広がり、端部で上下に大きく肥厚する。文様は、柱部上下にヘラによる直線文（凹線文風）、裾部に上段6孔、下段27孔の円孔を施している。仕上げは、外面に縦方向のヘラ磨き、内面はヘラ削りの後にナデを行っている。山陽地方系の土器と考えられる。

A—6—F・G・I・J・K地区出土の弥生式土器

当調査区においては、遺物包含層（灰褐色粘質土層）中より、弥生式土器・土師器・須恵器・瓦器等の各時期にわたる土器片が出土しているが、その出土量は他地区と比較すると非常に少なく、また判別できる土器は、弥生式土器と須恵器のごくわずかである。

遺構は、遺構編に述べているように、弥生時代中期の方形周溝墓

を中心としており、その数は第1号から第5号までの5基であるが、遺物の出土量は少なく、さらに盗掘などと合いまって現存の遺物のみで、この地区の弥生式土器をみることにする。

5基の方形周溝墓のうち、第1号方形周溝墓のみに、供献されたとおもわれる弥生式土器が11点出土しており、なかには完形に近い状態のものもある。

第1号方形周溝墓の供献土器

壺型土器（図版104—11・12）　11は、東溝の周溝内の底から、底部を下にして立った状態で出土し、第1号方形周溝墓の供献用土器としては、最も完形に近い状態で出土したものである。口頸部は意識的に欠かれたとおもわれ、最大腹径よりやや下方に焼成後穿孔されている。胴部上半部から頸部にかけて9帯以上（口縁部は欠損しているため不明）の櫛描直線文が施され、1帯は10本の直線で構成されている。下半部はたて方向にヘラで整形されており、この東溝の出土遺物としては比較的新しい時期のもので唐古第Ⅲ様式に比定されるものである。

12は、東溝より細かな破片で出土し、復元すると頸部より胴部やや下半部まで可能であり、さらに同一個体とおもわれる底部が図面上、復元されているが、上半部と下半部のつながりは不明であり、穿孔されているとみられる位置は確認できない。口縁部は、11と同様意識的に欠かれているとおもわれる。胴上半部から頸部にかけて数帯の（欠損のため不明）櫛描直線文が施され1帯の直線の数は確認できるのは9本であり、少なくとも8帯以上の櫛描直線文が施されていると思われる。13は、南溝より出土し、表面は著しく風化しており、わずかに胴部上半部に3帯以上の櫛描波状文が認められる。1帯の本数は判別しにくいが、少なくとも9本以上で施されているとおもわれる。最大腹径より下方に、焼成後穿孔が2ヶ所ほぼ対象的な位置にされている。5は、口縁部のみで南溝より出土し、端面には3本の凹線文の上に、円形浮文が3個1対の状態で施されている。14は、東溝の中間附近で出土し、底部を東向きにして倒れており（図版105—14・16・20）、胴部から底部にかけてはほぼ完形であり、頸部・口縁部はないが壺とおもわれる。表面はヘラで整形されているが風化がはげしく文様などはみられない。20は、東溝から出土した高杯であり、22の胴部のみとの2点が出土している。9の壺口縁より約1m北側に位置しており復元するとほぼ完形に近く、杯部外面は横ヘラ削りで、胴部は縦ヘラ削りで整形されている。16

は、北溝から出土した口縁がなめらかな「く」の字形に外反する甕であり、端面に刻み目が施されている。北溝から土出した唯一の遺物である。

以上のように、当調査区においては、全体的に遺物の出土量が少なく、遺構と関連のある土器のみを記述した。この他包含層中からは、庄古第Ⅱ様式に比定される土器等が土出している。最も出土例の多かった第1号方形周溝墓は、調査地区の最南に位置し、そのうち東溝と南溝に土器が集中しており、時期的には弥生時代中期（庄古第Ⅱ様式～第Ⅲ様式）のものである。他の第2・第3・第4・第5号方形周溝墓からは全く遺物は出土しておらずその詳細は不明である。

弥生式土器観察表

土器 No.	(写真)	1	2	3	4
	(図面) 92	92	92	92	92
種類 / 摘要		蓋	壺	壺	底部
法量 (cm)	口縁径 器高 腹径 底径	1.4 (現存値) 9.85 (裾部径)	不明	不明	欠損のため不明 3.25 (現存値) 欠損のため不明 11.65
出土地区		小川水路	小川水路	小川水路	小川水路
口頸部	形態	・楕円形の2ヶ所のつまみを持ち、笠形をなすもので、端面はやや上方に持ち上るものである。			
	文様	・2孔1対の孔あり。	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
	整形 外	・			
	整形 内	・ ナデ?			
体部	形態				
	文様		・胴部に沈線文	・胴部に沈線文	欠損のため不明
	整形 外		・	・	
	整形 内		・ ナデ?	・ ヘラ磨き	
底部			欠損のため不明	欠損のため不明	・木葉底
色調		・灰黄色	・黄灰淡茶褐色	・黄褐色 中核一暗灰色	・灰黄淡茶褐色
胎土		・0.1~0.3の砂粒多量に含有	・0.1~0.3の砂粒含有 ・くされ含有	・0.1~0.3の砂粒多量に含有	・0.1~0.3の砂粒含有 ・くされ少量含有
質		・良好	・良好	・良好	・良好
備考		・内面に½以上黒斑		・黒斑あり	・黒斑あり

土器 No.	92	5 92	6	92	7	92	8
摘要 ＼ 種類	甕	底部		壺		壺	
法量 (cm) 口縁径	不明	欠損のため不明		16.25		18.95	
法量 (cm) 器高		6.05（現存値）		5.8（現存値）		3.95	
法量 (cm) 腹径		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量 (cm) 底径		6.5					
出土地区	小川水路	小川水路		小川水路		小川水路	
口頸部（杯部） 形態				◦斜めにひろがる口縁部口縁部端部は外側下方に肥厚する。		◦腰に稜を持ちながら外反する。いわゆる受口状の口縁である。	
口頸部（杯部） 文様	欠損のため不明	欠損のため不明					
口頸部（杯部） 整形 外				◦ 剝離のため不明		◦ 共に横ナデ	
口頸部（杯部） 整形 内				◦ 剝離のため不明		◦ 共に横ナデ	
体部（脚部） 形態	◦壺の肩胴部						
体部（脚部） 文様	◦櫛描直線文	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
体部（脚部） 整形 外	◦ 不明（おそらくナデ調整）						
体部（脚部） 整形 内	◦ 不明（おそらくナデ調整）						
底部	欠損のため不明	◦僅かにあげ底状である。 ◦ナデ		欠損のため不明		欠損のため不明	
色調	◦灰褐色 中核—暗灰色	◦灰黄淡褐色		◦緑灰黄褐色		◦灰黄淡褐色	
胎土	◦0.1～0.2の砂粒含有 ◦くされ少量含有	◦0.1～0.4の砂粒多量に含有 ◦くされ含有		◦0.1～0.5の砂粒多量に含有 ◦0.1～0.3の黒雲母多量に含有		◦0.1～0.2の砂粒極めて少量含有	
焼成	◦良好			◦良好		◦良好	
備考		◦4.0×5.0の黒斑あり。		◦口縁部内端面に帯状の煤が付着		◦杯部外面に黒斑あり。 ◦外面の黒斑の位置に薄く煤付着と内面に濃く煤付着している。	

土器 No.	92	9	92	10	92	11	92	12
種類 / 摘要	高杯		複合土器		高杯		甕	
法量(cm) 口縁径	30.75		欠損のため不明		欠損のため不明		14.25	
法量(cm) 器高	3.75（現存値）		3.05（現存値）		8.25（現存値）		18.7	
法量(cm) 腹径							15.8	
法量(cm) 底径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		4.9	
出土地区	小川水路		小川水路		小川水路		小川水路	
口縁部（杯部） 形態	・水平にひろげた口縁部で、内面は1条の凸帯を持ち、外面は下方に折れ曲る。		・段状口縁部を持つ鉢形のもので、腰部より端合状のものが下に付加される。				・斜めに外反する口縁部で端部は僅か上方に立ち上る。	
口縁部（杯部） 文様			・凹線文の上に縦方向の指頭圧痕による棒状浮文。		欠損のため不明		・口縁部外端面に凹線文。	
口縁部（杯部） 整形 外	・上端面に横向（放射状の？）のヘラ磨き。 ・たれ部は横方向の細かいヘラ磨き。 ・ヘラ磨き？		・ ・ ・ } 横ナデ				・ ・ } 横ナデ	
口縁部（杯部） 整形 内								
体部（脚部） 形態							・なだらかなカーブを持ち、腰はあまり張り出さない。	
体部（脚部） 文様					・凹線文		・上半部は細い刷毛目で下半部は荒い刷毛目。	
体部（脚部） 整形 外	欠損のため不明		欠損のため不明		・剝離のため不明		・縦方向のヘラ磨き。	
体部（脚部） 整形 内							・上半部は縦方向の部分的な刷毛目。 ・下半部は縦・斜め方向のヘラ削り。	
底部							・外面―ナデ調整 ・内面―指頭圧痕	
色調	・黒茶褐色 たれ部から内面にかけて暗茶褐色		・灰黄色		・黄茶褐色		・灰黄褐色	
胎土	・0.1の砂粒極めて少量含有 ・かくせん石多量に含有		・0.1～0.2の砂粒多量に含有		・0.1～0.3の砂粒含有 ・くされ含有		・0.1の砂粒含有	
焼成	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考			・内外共に薄く部分的に煤が付着。				・外面―頸部下より全面に煤が付着 内面―下半部に煤付着	

土器No.	92	13	92	14	92	15	92	16
種類	甕		甕		壺		壺	
法量(cm) 口縁径	25.65		24.95		34.6		26.75	
器高	8.85（現存値）		10.8（現存値）		11.0（現存値）		6.15（現存値）	
腹径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
底径								
出土地区	小川水路		小川水路		小川水路		小川水路	
口頸部 形態	・口頸部は斜めに外反し口縁端部は面を持つ。		・頸部は、ゆるく斜めに外反し内外ともに凹味を持ち、口縁部端部は平たんである。		・口縁部は大きく外反し端部は下方に貼り付けによって大きく肥厚する。		・頸部は漏斗状にひらき口縁部は上方に外反する。	
文様			・口縁部外面上端に細い凹線文。		・竹管文		・受口状下端に凹線文 ・口縁部にうず巻状の浮文があり、同じものがもう一方に認められる	
整形外面	・斜め縦方向の刷毛目の後に口縁部は横ナデ ・部分的に横方向の刷毛目の後に部分的にヘラ磨き。		・縦方向の荒い刷毛目		・タタキ目及び横ナデ		・横ナデ	
内面			・横・斜め方向の刷毛目		・横方向の荒い刷毛目の後に横ナデ		・横方向の細かいヘラ磨きか	
体部 形態	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
文様								
整形外面								
内面								
底部	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
色調	・灰黄淡褐色		・灰黄色 中核一淡灰色		・灰黄色		・灰黄淡褐色	
胎土	・0.1～0.4の砂粒含有 ・金雲母少量含有		・0.1～0.8の砂粒少量含有		・0.1～0.2の砂粒含有		・0.1～0.2の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考								

土器 No.	23/93 1	23/93 2	23/93 3	24/93 4
種類 / 摘要	壺	壺	壺	壺
法量(cm) 口縁径	19.15	23.4	18.2	9.85
器高	2.6（現存値）	4.35（現存値）	7.1（現存値）	4.5（現存値）
胴径 / 底径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
出土地区	F－7－E・F	F－7－E・F	F－7－E・F	F－7－E・F
口頸部 形態	・漏斗状に開く口縁端部は外方に開く。	・頸部は水平に折れ曲る口縁部、端部は下方に肥厚する。	・頸部に水平に折れ曲る口縁部、端部は下方に僅かに肥厚する。	・短い頸部に水平に折れ曲る口縁部、口縁端部は下方に肥厚する。
口頸部 文様	・口縁端面に刻目文と櫛描波状文	・指圧による押圧痕	・口縁端面に刻目文	・口縁端面に櫛描波状紋
口頸部 整形外	・横ナデ	・横ナデ 粗い刷毛目	・縦方向に荒い刷毛目	・縦方向にヘラ磨き
口頸部 整形内	・横方向に荒い刷毛目	・横ナデ	・横方向に荒い刷毛目	・横方向・刷毛目 頸部多量に爪圧痕
体部 形態				
体部 文様	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
体部 整形外				
体部 整形内				
底部	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
色調	・黄灰色 中核－淡灰色	・乳灰色	・黄褐色 中核－暗灰色	・黄灰褐色
胎土	・0.1～0.4の砂粒含有	・0.1～0.5の砂粒含有	・0.1～0.2の砂粒含有	・0.1～0.3の砂粒僅かに含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考		・口縁部端面の押圧痕は親指で押し人指指でたぐりよせるために、はっきりと爪のあとがつく。		

土器No.	24 / 93 — 5	20 / 93 — 6	20 / 93 — 7	20 / 93 — 8
種類 / 摘要	鉢	壺	甕	甕
法量 (cm) 口縁径	12.2	11.2	欠損のため不明	12.55
法量 (cm) 器高	3.8 (現存値)	19.3	15.4 (現存値)	25.75
法量 (cm) 胴径	欠損のため不明	17.8	15.3	14.1
法量 (cm) 底径		4.8	4.9	3.8
出土地区	F−7−E・F	F−7−E・F	F−7−E・F	F−7−E・F
口頸部 形態	・底部から口縁部にかけて、やや斜め方向にひろがりをもつ。	・口縁部は斜めに外反するが、内外ともに円味を持ち端部は丸い。		・外上方に、やや開き比較的長い頸部、端部は僅かに下へ肥厚する。
口頸部 文様	・横描簾状文 把手には2孔1対の孔あり		欠損のため不明	・頸部位に深き巾等の大ぶりな波状文あり
口頸部 整形外	・横ナデ	・横ナデ		・横ナデ
口頸部 整形内	・ヘラ磨き	・横ナデ		・横ナデ、頸部に横方向の簾状文的な刷毛目
体部 形態	欠損のため不明	・球形に近い形態でやや横位に張る。	・肩からなだらかに開がり緩るものであり器面の凹凸が激しく他の壺に比べると厚い。	・肩は、ほとんど張らずなだらかに胴部に続く
体部 文様			・ヘラによる縦方向の3本線	
体部 整形外		・肩部より横方向にヘラ磨き、一部その下に刷毛目 腰より下位、縦方向にヘラ磨き	剝離のため不明	剝離のため不明
体部 整形内		・剝離のため不明		
底部	・欠損のため不明	・剝離のため不明	・底部は、あげ底気味で凹凸が激しい。	・底の部厚いもの(2.25) ・ヘラ？
色調	・暗褐色	・灰黄茶褐色	・灰黄褐色	・青黄褐色
胎土	・0.1〜0.3の砂粒多量に含有	・0.1〜0.4の砂粒含有	・0.1〜0.4の砂粒含有	・0.2〜1.0の砂粒含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考	・2〜3帯の横描簾状文が認められるが図示出来ない。	・胴部薄く煤付着		・底部付近に黒斑

土器 No.	23 / 93	9	93	10	20 / 93	11	93	12
種類 / 摘要	甕		甕		甕		脚部	
法量 (cm) 口縁径	14.35		欠損のため不明		16.7		欠損のため不明	
法量 (cm) 器高	4.35（現存値）		15.7（現存値）		25.5		12.2（現存値）	
法量 (cm) 腹径	欠損のため不明		欠損のため不明		19.15			
法量 (cm) 底径			4.15		4.9.		13.15	
出土地区	F－7－E・F		F－7－E・F		F－7－E・F		F－7－E・F	
口頸部（杯部） 形態	◦斜めに外反する。端部は僅かに立ち上りを持つ。				◦頸部は円味のあと「く」の字形を成し、端部は僅か下方に肥厚する。			
口頸部（杯部） 文様			欠損のため不明		外端は僅か凹線状の凹みを持つ。		欠損のため不明	
口頸部（杯部） 整形外	◦縦方向に刷毛目				◦タタキ目			
口頸部（杯部） 内	◦斜め方向に刷毛目、その上に縦方向に刷毛目				◦横ナデ			
体部（脚部） 形態					◦なだらかなカーブを持ち腰はあまり張り出さない。		◦裾まで、なだらかに広がり端部は上下に肥厚する。	
体部（脚部） 文様	欠損のため不明							
体部（脚部） 整形外			◦タタキ目の上より刷毛目		◦タタキ目		◦縦方向にヘラ磨き	
体部（脚部） 内			◦刷毛目		◦横・斜め方向の刷毛目の後に縦方向のヘラナデ		◦絞り目 裾部ヘラ削り	
底部	◦欠損のため不明		◦外―タタキ目 内―刷毛目 ◦あげ底		◦ナデ ◦ヘラ痕もしくは木葉痕			
色調	◦灰黄褐色		◦茶褐色		◦黄茶褐色		◦淡灰黄褐色 中核―暗灰色	
胎土	◦0.1～0.2の砂粒含有		◦0.1～0.3の砂粒含有		◦0.1～0.2の砂粒含有		◦0.1～1.0の砂粒含有	
質	◦良好		◦良好		◦良好		◦良好	
備考	◦外面に黒斑		◦外面に煤付着		◦口縁部外端部より腰部中頃まで煤付着 ◦内面、底部より腰部に炭化米付着		◦裾部端面に黒斑	

土器 No.	93	13	24 / 93	14	21 / 93	15	94	16
摘要 ＼ 種類	脚部		盤		甕		盤	
法量 (cm) 口縁径	欠損のため不明		15.0		17.45		15.4	
法量 (cm) 器高	13.7 (現存値)		11.65 (現存値)		25.95		4.25 (現存値)	
法量 (cm) 腹径			22.0		20.3		欠損のため不明	
法量 (cm) 底径	13.95		欠損のため不明		5.75			
出土地区	F－7－E・F		F－7－E・F 第3号土拡		F－7－E・F 第3号土拡		F－7－E・F 溝I－S	
口頸部(杯部) 形態			・短い頸部で外方に開き端部は上下に薄く僅かに肥厚する。		・頸部は「く」の字形を成し、端部は上方に肥厚し外端は凹線状のものである。		・漏斗状に開く頸部に端部は僅かに肥厚	
口頸部(杯部) 文様	欠損のため不明						・端部に凹線紋	
口頸部(杯部) 整形 外			・横ナデ		・タタキ目		・縦方向にヘラ磨き	
口頸部(杯部) 整形 内			・横ナデ		・横ナデ		・横方向にヘラ磨き	
体部(脚部) 形態					・なだらかなカーブを持ち腰は、あまり張り出さない。			
体部(脚部) 文様	・有孔						欠損のため不明	
体部(脚部) 整形 外	・縦方向のヘラ磨き		・横ナデ		・タタキ目			
体部(脚部) 整形 内	・ナデ		・ヘラ削り・指圧痕		・横方向に刷毛目			
底部			・欠損のため不明		・中央部僅かにあげ底気味である。		・欠損のため不明	
色調	・黄灰褐色		・黄褐色		・黄灰色		・黄灰褐色	
胎土	・0.1～0.4の砂粒含有		・0.1～1.0の砂粒多量に含有		・0.2～0.3の砂粒含有		・0.1～0.3の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考					・外面1/4位煤付着 ・内面1/4位腰部に黒斑			

土器 No.	33 / 94	17	23 / 94	18	24 / 94	19	94	20
種類 / 施要	鉢		鉢		鉢		鉢	
法量 (cm) 口縁径	14.95		21.05		11.95		10.55	
器高	4.5 (現存値)		9.8 (現存値)		4.7 (現存値)		7.8 (現存値)	
底径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		11.55 欠損のため不明	
出土地区	F−7−E・F 海I−S		F−7−E・F 海I−S		F−7−E・F 海I−S		F−7−E・F 海I−S	
口縁部 形態	・上方にのびる頸部。端部は大きく外反し丸く下方に折れ曲る。		・斜めに広がり、端部は貼り付けによる肥厚である。		・僅かにひろがり端部は下方に肥厚する。		・漏斗状に開き頸部は内外共に円味を持つ。	
文様	・竹管文4個のみ		・端部に凹線文				・頸部下に刻目文	
調整 外面	・	剝離のため不明	・縦方向に刷毛目		・縦方向にヘラ磨き		・	剝離のため不明
内面	・		・剝離のため不明		・横方向にヘラ磨き		・	
体部 形態	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
文様								
調整 外面								
内面								
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明	
色調	・黄褐色 中核一灰色		・赤褐色 中核一灰色		・暗灰黄褐色		・暗茶褐色	
胎土	・0.1〜0.2の砂粒含有 ・雲母少量含有		・0.1〜0.3の砂粒含有		・0.1〜0.4の砂粒含有		・0.1〜0.3の砂粒多量に含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考			・内面に米痕					

土器No.	24	21	24	22	23	23		24
	94		94		94		94	
種類 / 摘要	壺		壺		甕		甕	
法量(cm) 口径	12.3		10.05		16.75		10.45	
法量(cm) 器高	12.25（現存値）		5.15（現存値）		7.2（現存値）		6.95	
法量(cm) 腹径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		12.35	
法量(cm) 底径							欠損のため不明	
出土地区	F−7−E・F 溝I−S		F−7−E・F 溝I−S		F−7−E・F 溝I−S		F−7−E・F 溝I−S	
山類 形態	・頸部は長く外方に傾かに開く。		・外方にやや開き端部は凹線文あり。		・頸部は短く外方に開く端部は僅かであるが下方に肥厚する。		・斜めに外反するが内外共に円味を持ち端部は丸い。	
山類 文様								
部 整形外	・剝離のため不明		・横ナデ		・横ナデ		・横ナデ	
部 整形内	・剝離のため不明		・横ナデ		・ヘラ削り		・ヘラ削り	
体類 形態	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
体類 文様								
部 整形外								
部 整形内								
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明	
色調	・淡黄褐色		・茶褐色		・淡黄青灰色		・茶褐色	
胎土	・0.2〜0.4の砂粒僅かに含有		・0.1の砂粒少量含有		・0.1〜0.3の砂粒含有		・0.1〜0.4の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・外面に黒斑				・外面、頸部から端面にかけて煤付着		・外面に煤付着	

土器No.	94	25	94	26	94	27	94	28
種類 / 摘要	甕		底部		底部		甕	
法量(cm) 口縁径	21.35		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量(cm) 器高	6.4		4.9（現存値）		2.4（現存値）		3.8（現存値）	
法量(cm) 胴径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量(cm) 底径			4.9		4.55		3.25	
出土地区	F－7－E・F 溝I－S		F－7－E・F 溝I－S		F－7－E・F 溝I－S		F－7－E・F 溝I－S	
口類 形態	・頸部は丸味がありゆるやかに外反する。							
口類 文様			欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
口類 整形外	・縦方向に刷毛目							
口類 整形内	・横ナデ							
体部 形態								
体部 文様	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
体部 整形外								
体部 整形内								
底部	・欠損のため不明		・ヘラ圧痕あり		・中央窪あげ底状で十文字にヘラ痕あり		・あげ底気味で穿孔	
色調	・黄褐色		・外一淡黄褐色 内一淡灰色		・黄茶褐色		・灰黄褐色	
胎土	・0.1～0.4の砂粒含有		・0.1～0.2の砂粒含有		・0.1～0.4の砂粒含有		・0.1～0.4の砂粒含有	
焼成			・良好		・良好		・良好	
備考							・外面に黒斑	

土器No.	94	29	94	30	94	31	94	32
種類 / 摘要	高杯		高杯		脚部		脚部	
法量(cm) 口縁径	23.95		23.85		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量(cm) 器高	3.5（現存値）		3.9（現存値）		12.75（現存値）		7.85（現存値）	
法量(cm) 腹径	欠損のため不明		欠損のため不明		13.4		10.6	
法量(cm) 底径								
出土地区	F－7－E・F 溝I－S		F－7－E・F 溝I－S		F－7－E・F 溝I－S		F－7－E・F 溝I－S	
杯部 形態	◦大きく外反し端部は僅かに下方へ垂れ下る。		◦大きく外反する。					
杯部 文様					欠損のため不明		欠損のため不明	
杯部 整形外	◦剥離のため不明		◦横方向に刷毛目					
杯部 整形内	◦剥離のため不明		◦横ナデ					
脚部 形態					◦裾まで、なだらかに広がり端部は上下に肥厚する。		◦柱部は中空。	
脚部 文様	欠損のため不明		欠損のため不明					
脚部 整形外					◦縦方向のヘラ磨き		◦剥離のため不明	
脚部 整形内					◦絞り目		◦絞り目	
底部								
色調	◦赤褐色 外面一部黄灰色		◦黄灰褐色		◦淡褐灰色		◦青黄褐色 中核一赤褐色	
胎土	◦0.1～0.2の砂粒含有		◦0.1～0.2の砂粒含有 ◦雲母僅かに含有		◦0.1～0.4の砂粒含有		◦0.1～0.3の砂粒含有	
焼成	◦良好		◦良好		◦良好		◦良好	
備考								

土器No.		20/94 33	21/94 32	/94 35	21/94 36
摘要	種類	壺	甕	脚部	壺
法量(cm)	口縁径	13.75	15.55	欠損のため不明	13.75
	器高	16.7	20.1	6.45（現存値）	16.7（現存値）
	腹径	18.15	17.6		18.15
	底径	欠損のため不明	5.45	10.95	欠損のため不明
出土地区		F－7－E・F 溝II	F－7－E・F 溝II	F－7－E・F 溝II	F－7－E・F 溝III
口頸部（杯部）	形態	◦斜めに外反する口縁と丸味のある頸部。	◦頸部外反は円味を持つカーブを持つが稜がある。	欠損のため不明	◦欠損のため不明 ◦頸部は「く」の字形に外反し上方へ立つ
	文様				
	整形外	◦口縁端部から頸部まで縦方向の刷毛目	◦頸部、タタキ目の上より所々に刷毛目		◦ 横ナデ
	内	◦横方向の刷毛目	◦横ナデ		◦ 横ナデ
体部（脚部）	形態	◦あまり肩の張出さないなだらかなカーブをえがく。	◦なだらかなカーブを持ち腰は、あまり張り出さない。		◦肩は張り円味を持つ。
	文様			◦凹線文	
	整形外	◦頸部よりタタキ目その上から縦方向のヘラ磨き	◦タタキ目	◦縦方向のヘラ磨き ◦横ナデ	◦ ナデ
	内	◦横方向刷毛目	◦横方向に刷毛目	裾部内面に爪痕無数にあり	◦ ナデ
底部		◦欠損のため不明	◦中央部僅かにあげ底 ◦木葉痕		◦ナデ
色調		◦淡黄赤褐色	◦淡暗灰色	◦黄褐色	◦茶褐色
胎土		◦0.1～0.2の砂粒僅かに含有	◦0.1～0.5の砂粒多量に含有 ◦雲母僅かに含有	◦0.1～0.8の砂粒含有	◦0.1～0.2の砂粒含有
質		◦良好	◦良好	◦良好	◦良好
備考		◦外面に煤付着			

土器No.	95	37	24/95	38	95	39	24/95	40
種類	壺		壺		壺		壺	
法量(cm) 口縁径	21.5		12.85		欠損のため不明		11.05	
器高	11.75（現存値）		6.45（現存値）		6.85（現存値）		7.05（現存値）	
胴径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
底径								
出土地区	F－7－E・F 沼地状落ち込み		F－7－E・F 沼地状落ち込み		F－7－E・F 沼地状落ち込み		F－7－E・F 沼地状落ち込み	
口頸部 形態	・緩斗状に開く口縁部端部は上下に僅かに肥厚する。		・口縁部は外反し上下に僅かに肥厚する。		・欠損のため不明		・壺部は僅かに内弯して立ち端部は丸い。	
口頸部 文様	・口縁部内端に列点文		・口縁外端凹線文		・断面三角形の貼り付け凸帯の上に縄状浮文 ・要所の所に貼り付けの指頭圧痕文		・凹線文・端面外縁に円形浮文	
口頸部 整形外	・剝離のため不明		・縦方向に刷毛目、その上よりタタキ目		・剝離のため不明		・磨ナデ	
口頸部 整形内	・剝離のため不明		・横ナデ		・剝離のため不明		・磨ナデ	
体部 形態								
体部 文様	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
体部 整形外								
体部 整形内								
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明	
色調	・淡赤黄褐色		・赤黄灰色		・暗赤褐色		・暗灰黄色 中核－暗灰色	
胎土	・0.1～0.3の砂粒含有		・0.1の砂粒僅かに含有		・0.1～0.3の砂粒多量に含有		・0.1の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考								

土器 No.	24 / 95	41	22 / 95	42	21 / 95	43	22 / 95	44
種類 / 摘要	壺		壺		壺		壺	
法量 (cm) 口縁径	11.95		11.8		15.6		欠損のため不明	
法量 (cm) 器高	7.45（現存値）		13.3（現存値）		23.4		18.15（現存値）	
法量 (cm) 腹径	欠損のため不明		欠損のため不明		21.65		12.85	
法量 (cm) 底径					6.5		4.05	
出土地区	F－7－E・F 沼地状落ち込み		F－7－E・F 沼地状落ち込み		F－7－E・F 沼地状落ち込み		F－7－E・F 沼地状落ち込み	
口頸部 形態	・外上方に僅かに開く口縁端部は少し外方に肥厚する。		・頸部は長く外方に僅かに開く。		・直立する頸部に水平に折れ曲る口縁部		・外方にやや開き（ほぼ直）端部は丸味があると考えられる。	
口頸部 文様			・外面に竹管文2ヵ所へう描き線刻文		・口縁端面に凹線文			
口頸部 整形外	・横ナデ		・横ナデ		・縦方向に刷毛目・一部斜めに刷毛目		・縦方向の刷毛目	
口頸部 整形内	・横ナデ		・横方向の刷毛目		・横ナデ		・ナデ	
体部 形態	欠損のため不明		欠損のため不明		・球形に近い形態で、やや横位に張る。		・肩はほとんど張らずなだらかに胴部に続く。	
体部 文様								
体部 整形外					・腰位に横方向刷毛、肩から底部にかけて縦方向に刷毛目		・肩から腰にかけて縦方向に刷毛目	
体部 整形内					・剝離のため不明		・ナデ？	
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・剝離のため不明		・中央部が僅かにくぼむ	
色調	・黄褐色		・暗灰色		・灰赤黄褐色		・黄灰茶褐色	
胎土	・0.1～0.2の砂粒多量に含有		・0.1～0.4の砂粒を含有		・0.1～0.2の砂粒含有		・0.1～0.2の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考			・内外共に凹凸が著しい。 ・外面の竹管文は検出されているのが2ヵ所である。		・肩から胴にかけて濃く煤付着		・胴部に黒斑 ・内外共に凹凸が著しいため粘土帯の間隔などがよくわかる。	

土器 No.	22	45	46	47	48
	95	95	95	95	95
種類 / 摘要	甕	甕	底部	高杯	
法量 (cm) 口縁径	14.65	10.0	欠損のため不明	29.0	
法量 (cm) 器高	21.9	8.75	6.65（現存値）	5.85（現存値）	
法量 (cm) 最大径	18.65	7.55	欠損のため不明		
法量 (cm) 底径	8.2	4.65	4.65	欠損のため不明	
出土地区	F－7－E・F 沼地状落ち込み	F－7－E・F 沼地状落ち込み	F－7－E・F 沼地状落ち込み	F－7－E・F 沼地状落ち込み	
口頸部（杯部） 形態	・頸部は「く」の字形を成し、端部は上下に肥厚し外端は凹線状のくぼみを持つ。	・口縁部は斜めに外反するが内外ともに凹味を持ち端部は丸い。		・直口の口縁で端部は僅かに内弯している。	
口頸部（杯部） 文様	・口縁部外端面に凹線文			・凹線文	
体部（脚部） 整形外	・タタキ目の後に縦方向の刷毛目	・剝離のため不明	欠損のため不明	・剝離のため不明	
体部（脚部） 整形内	・横方向の刷毛目	・横方向に刷毛目		・剝離のため不明	
体部（脚部） 形態	・なだらかなカーブを持ち腰はあまり張り出さない。				
体部（脚部） 文様					
体部（脚部） 整形外	・タタキ目	・剝離のため不明	・タタキ目	欠損のため不明	
体部（脚部） 整形内	・刷毛目	・横方向に刷毛目	・ヘラ痕		
底部	・輪台状底部	・内面放射状に刷毛目	・タタキ目		
色調	・黄茶褐色～黄褐色	・茶褐色	・茶褐色	・黄茶褐色	
胎土	・0.1～0.2の砂粒含有	・0.1～0.4の砂粒含有	・0.1～0.2の砂粒含有	・0.1～0.3の砂粒含有	
質	・良好	・良好	・良好	・良好	
備考	・口縁部内端面から外面腰部中頃まで煤付着		・内外共に煤付着 ・内面に炭化米が一面に付着	・外面に黒斑	

土器 No.	49 (95)	50 (95)	51 (22/95)	52 (22/95)
種類 / 摘要	高杯	高杯	器台	器台
法量 (cm) 口縁径	25.85	欠損のため不明	19.15	15.45
法量 (cm) 器高	3.0 (現存値)	8.55 (現存値)	16.05	12.15
法量 (cm) 脚径	欠損のため不明	欠損のため不明	19.05	欠損のため不明
出土地区	F－7－E・F 沼地状落ち込み	F－7－E・F 沼地状落ち込み	F－7－E・F 沼地状落ち込み	F－7－E・F 沼地状落ち込み
口頸部(杯部) 形態	・大きく外反する杯部	・ほぼ水平にのびる杯部	・斜斗状に開く口縁部端部は下へ垂れ下る。	・鼓胴形を成す。
口頸部(杯部) 文様				
口頸部(杯部) 整形 外	・	・ヘラ磨き	・	・刷毛目の上からヘラ磨き
口頸部(杯部) 整形 内	・ 剝離のため不明	・あん文風	・ 剝離のため不明	・刷毛目
体部(脚部) 形態	欠損のため不明			
体部(脚部) 文様		・刻目文・櫛描直線文	・有孔	・有孔
体部(脚部) 整形 外		・縦方向のヘラ磨き	・ 剝離のため不明	・ 剝離のため不明
体部(脚部) 内		・ナデ	・	・
底部				
色調	・外—赤褐色 内—黄灰褐色	・黄灰褐色	・灰黄褐色	・赤褐色
胎土	・0.1～0.4の砂粒含有	・0.1～0.3の砂粒含有	・0.1～0.3の砂粒含有	・0.1～0.4の砂粒を含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考	・内面に黒斑	・脚部上方に爪痕		

土器No.	第10図 1	第10図 2	第10図 3	第10図 4
種類	甕	鉢	器台	器台
法量(cm) 口縁径	11.0	11.05	38.15	欠損のため不明
法量(cm) 器高	18.35	12.0（現存値）	11.95（現存値）	27.7（現存値）
法量(cm) 胴径	15.35	欠損のため不明	欠損のため不明	25.75
法量(cm) 底径	4.75			
出土地区	H－3－II 土器群C	H－3－H 土器群C	H－3－II 土器群C	H－3－H 土器群C
口頸部 形態	・やや外方にひらく筒状の頸部を持ち口縁部は水平に折れ曲り端部は上下僅かに肥厚する。	・僅か外方にひらく筒状の口縁部で、口縁上方はやや内弯して立つ。	・斜めに大きく外反する口縁端部は上下に肥厚する。	欠損のため不明
口頸部 文様		・凹線文	・口縁外端部に凹線文とその上に、円形浮文と刻目文が交互に配置している。 ・頸部に凹線文	
口頸部 整形外	・剝離のため不明	・剝離のため不明	・タタキ目 ・頸部上面に部分的に刷毛目	
口頸部 整形内	・剝離のため不明	・剝離のため不明	・横方向の刷毛目と横ナデ	
体部 形態	・なだらかなカーブを描き腰位は中頸にある。			・底径の大きい鼓胴形
体部 文様	・頸部下より横描沈線文と同波状文	欠損のため不明	欠損のため不明	・凹線文、その間に4孔の透し孔。
体部 整形外	・剝離のため不明			・剝離のため不明
体部 整形内	・剝離のため不明			・剝離のため不明
底部	・平底	・欠損のため不明		
色調	・灰黄茶褐色 中核一暗灰色	・灰黄色	・内外ともに灰黄淡茶褐色	・黄淡茶褐色
胎土	・0.1～0.2の砂粒含有	・0.1～0.4の砂粒含有	・0.1～0.2の砂粒含有	・0.1～0.2の砂粒極めて少量含有 ・くされ含有
焼成	・良好	・良好	・良好	・良好
備考	・腰位に6.7×3.5の黒斑あり。	・片口状の口縁 ・口縁上端面に5×2.5の黒斑	・壺型土器の可能性あり。	・裾部に16.55×4.8の黒斑

土器 No.	38/104	1	38/104	2	38/104	3	38/104	4
種類 / 摘要	壺		壺		壺		壺	
法量 (cm) 口縁径	14.8		19.7		27.0		32.6	
器高	3.9 (現存値)		8.2 (現存値)		2.3 (現存値)		3.2 (現存値)	
腹径 / 底径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
出土地区	A—6—F・G・I・J・K		A—6—F・G・I・J・K		A—6—F・G・I・J・K		A—6—F・G・I・J・K	
口頸部 形態	・頸部より漏斗状に開き上面近くでやや水平に折れまがる。端部はやや上方に肥厚する。		・漏斗状に開き端部は下方にたれさがる。		・口縁部のみの残存であるが、やや水平に近くなるまで外反す。端部はやや下方に肥厚するが目立つほどではない。口縁端面下方に刻目文		・頸部から口縁にかけて大きく外反し端部は上下にやや肥厚する。	
口頸部 文様	・口縁部端面に刻目文		・口縁端面に刻目文				・口縁端面に横描波状文	
口頸部 整形外	・横ナデ、頸部一部に縦方向刷毛目		・横ナデ、頸部一部にヘラ磨き		・横ナデ		・内面横方向の刷毛目が残るが内外面とも風化が著しい。	
口頸部 内	・横ナデ		・横ナデ		・横ナデ			
体部 形態	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
体部 文様								
体部 整形外								
体部 内								
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明	
色調	・淡黄色		・淡黄色		・淡黄色		・黄褐色	
胎土	・0.1～0.3の砂粒含有		・0.1～0.3の砂粒含有		・0.1～0.3の砂粒含有		・0.1～0.3の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考								

土器No.	38/104 5	38/104 6	38/104 7	38/104 8
種類 / 摘要	壺	壺	壺	壺
法量(cm) 口縁径	28.6	9.8	18.8	7.3
法量(cm) 器高	3.7（現存値）	3.7（現存値）	3.1（現存値）	5.8（現存値）
法量(cm) 腹径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
法量(cm) 底径				
出土地区	A−6−K 第1号方形周溝墓南溝	A−6−F・G・I・J・K	A−6−F・G・I・J・K	A−6−F・G・I・J・K
口頸部 形態	・口縁部肥厚し、下に大きくたれさがる。	・頸部より丸味をもって外反し、端部は上に肥厚する。	・漏斗状に開き端部は上下にやや肥厚する。	・斜めにカットされた口縁形をもち、頸部は無い。
口頸部 文様	・端部には3本の凹線文の上から3個1対の形で円形浮文	・口縁部内面に6個の円形浮文		・現存部分は、櫛描直線文2帯と同波状文一帯
口頸部 整形 外	・風化のため不明	・横ナデ	・横ナデ、下方へラ磨き	・縦方向刷毛目
口頸部 整形 内	・	・風化のため不明	・横ナデ	・横方向ヘラ磨き
体部 形態	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
体部 文様				
体部 整形 外				
体部 整形 内				
底部	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明
色調	・茶褐色	・淡黄褐色	・淡赤褐色	・黄褐色
胎土	・0.1〜0.2の砂粒多量含有	・0.1〜0.3の砂粒含有	・0.1〜0.3の砂粒少量含有	・0.1〜0.3の砂粒含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考				

土器No.	38 / 104	9	104	10	37 / 104	11	37 / 104	12
種類 / 摘要	壺		壺		壺		壺	
法量(cm) 口縁径	18.2		20.4		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量(cm) 器高	11.2（現存値）		18.0（現存値）		25.5（現存値）		38.7（現存値）	
法量(cm) 腹径	欠損のため不明		欠損のため不明		26.7		25.8	
法量(cm) 底径					6.4		7.2	
出土地区	A−6−F・G・I・J・K		A−6−F・G・I・J・K		A−6−K 第1号方形周溝墓東溝		A−6−K 第1号方形周溝墓東溝	
口頸部 形態	・頸部が長く口縁部に向かって漏斗状に開く。口縁端部は僅かに上下に肥厚する。		・口縁部まで漏斗状に開き、端部は少し凹んでいるが歪な仕合がりである。		欠損のため不明		・口縁部は不明である。	
口頸部 文様			・頸部から肩部にかけて荒い籠状文				・頸部には数帯の横描直線文	
口頸部 整形外	・頸部下方に一部刷毛目		・荒い縦方向刷毛目					
口頸部 内	・不明		・横・斜め方向のヘラ磨き					
体部 形態	欠損のため不明		・頸部から肩にかけては明確な角度をもつが肩からは丸味をおびて胴部に至る。		・胴部下半部で腹径が最大となり、大きくはりだす。		・緩やかな弧をえがき肩ははらない。	
体部 文様			・籠状文からさらに波状文と続く、何帯かは欠損のため不明		・頸部より胴部上半部にかけて、9帯以上の横描直線文		・頸部からの横描直線文が胴部上半まで。	
体部 整形外			・斜め方向刷毛目、頸部と同様に荒い。		・下半部横方向ヘラ磨き底部に近づくにつれて縦方向ヘラ磨き		・縦方向の刷毛目、底部はヘラ磨き	
体部 内			・縦方向ヘラ削り					
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・中央にむかってやや凹む。		・横方向への乱雑なヘラ磨き	
色調	・黄褐色		・外面一赤褐色 内面一黄白色		・淡黄茶褐色		・淡黄茶褐色	
胎土	・0.2〜0.5の砂粒含有		・0.1〜0.3の砂粒含有		・0.1〜0.3の砂粒含有		・0.1〜0.3の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考					・腹部穿孔されている。			

土器No.	37/104	13	37/105	14	37/105	15	38/105	16
種類	壺		壺		甕		甕	
法量(cm) 口縁径	11.6		欠損のため不明		9.6		29.4	
法量(cm) 器高	31.0		15.7（現存値）		14.2		6.0（現存値）	
法量(cm) 胴径	22.3		14.4		12.4		欠損のため不明	
法量(cm) 底径	6.1		5.0		3.8			
出土地区	A－6－K 第1号方形周溝墓南溝		A－6－K 第1号方形周溝墓東溝		A－6－F・G・I・J・K		A－6－K 第1号方形周溝墓北溝	
口頸部 形態	・頸部からやや外反しながら内面ぐにのびそのまま終る。		・口縁部及び頸部は欠損しているが、頸部が多少たちあがるところがわかる。		・丸味をおびながら外反し、口縁端部はごく僅か下に肥厚する。		・口縁部はなめらかな「く」の字形に外反し、「コ」の字形に終る。	
口頸部 文様							・口縁部端面に、鋭い刻目文	
口頸部 整形 外	・ほとんど表面風化のため整形技法は不明である。				・横ナデ。頸部に縦方向刷毛目		・横ナデ、頸部から肩部にかけて縦方向ヘラ磨き。	
口頸部 整形 内					・横ナデ		・横ナデ	
体部 形態	・くびれ部より緩るやかな丸味をもって底部に至る。		・緩やかな傾をえがきそのまま底部に至る。		・肩部は、はらずに丸味をおびたまま底部に至る。			
体部 文様	・肩から胴部中央辺りまで櫛描波状文がみられるが風化のため何帯か不明						欠損のため不明	
体部 整形 外			・内・外両面とも磨滅がはげしいがヘラで整形されているのが部分的にわかる。		・丁寧なヘラ磨き。			
体部 整形 内					・上部刷毛目 丁寧なヘラ磨き。			
底部	・中央にむかって、やや凹む。木葉痕が、かすかに残っている。		・全体的に中央にむかって凹んでいる。		・木葉痕。中央にむかってくぼむ。		・欠損のため不明	
色調	・淡黄褐色		・淡黄茶褐色		・黄白褐色		・淡黄褐色	
胎土	・0.1～0.2の砂粒含有		・0.2～0.4の砂粒含有		・0.1～0.2の砂粒含有		・0.1～0.3の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・焼成後の穿孔。							

土器 No.	105	17	105	18	38 105	19	37 105	20
種類 / 摘要	甕		甕		高杯		高杯	
法量 (cm) 口縁径	13.5		19.2		欠損のため不明		23.8	
法量 (cm) 器高	18.5		28.9 (現存値)		8.4 (現存値)		18.9	
法量 (cm) 腹径	14.8		26.0					
法量 (cm) 底径	5.2		欠損のため不明		欠損のため不明		12.4	
出土地区	A－6－K 第1号方形周溝墓北溝		A－6－F・G・I・J・K		A－6－F・G・I・J・K		A－6－K 第1号方形周溝墓東溝	
口頸部(杯部) 形態	・丸味をおびながら外反し、口縁端部はごく僅か下に肥厚する。No.16と同様		・頸部から口縁部にかけて緩やかな「く」の字形に外反しそのまま終る。				・口縁部やや内弯ぎみ、端部は、内・外にやや肥厚する。体部はなだらかなカーブで脚部つけ根にいたる。	
口頸部(杯部) 文様					欠損のため不明			
口頸部(杯部) 整形外	・横ナデ。頸部には縦方向刷毛目		・横ナデ				・斜め方向刷毛目の後に、ヘラ削り及びヘラ磨き。	
口頸部(杯部) 内	・横ナデ		・横ナデ				・刷毛目	
体部(脚部) 形態	・肩ははらずに丸味をおび胴部下半からやや直線的に底部に至る。		・肩部はほとんどはらず緩やかな胴部につづき全体的に扁平な球形の体部である。		・欠損のためわかりにくいが、内面しぼり目あり。		・脚部つけ根、脚部端までなだらかなカーブを描きながらさがり、脚部端面は上に肥厚する。	
体部(脚部) 文様					・沈線文現存は18本である。			
体部(脚部) 整形外	・全面に縦方向刷毛目		・荒い縦方向刷毛目。小石の移動がみられる。		・不明		・体部下部から脚部中央にかけて縦方向ヘラ削り、中央下半より縦方向刷毛目	
体部(脚部) 内			・縦方向ヘラ磨き		・不明		・横方向刷毛目	
底部	・ほぼ水平である。		・欠損のため不明		・欠損のため不明		・接地点は丸味をもっている。	
色調	・淡黄褐色		・黄茶褐色		・淡黄褐色		・赤褐色	
胎土	・0.1～0.2の砂粒含有		・0.1～0.3の砂粒含有		・0.1～0.3の砂粒含有		・0.1～0.4の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考								

土器No.	38 / 195	21	105	1	105	2	105	3
種類 / 摘要	鉢		壺		壺		壺	
法量(cm) 口縁径	17.6		12.05		17.65		欠損のため不明	
法量(cm) 器高	5.2（現存値）		9.65（現存値）		6.0（現存値）		7.3（現存値）	
法量(cm) 腹径			欠損のため不明		欠損のため不明		13.6	
法量(cm) 底径	欠損のため不明						3.2	
出土地区	A－6－F・G・I・J・K		H－5－I、溝状遺構		H－5－I、溝状遺構		H－5－I、溝状遺構	
口頸部 形態	◦緩いカーブを描きながら漏斗状に開き端部は、やや下に肥厚する。		◦筒状の頸部を持ち、僅かに外反する。口縁端部は丸い。		◦短い筒状の頸部を持ち口縁は僅かに外反し、端部は丸い。			
口頸部 文様							欠損のため不明	
口頸部 整形 外	◦ヘラ磨き。		◦		◦			
口頸部 整形 内			◦ 剝離のため不明		◦ 剝離のため不明			
体部 形態							◦最大径は中位にあり大きくはり出すもの。	
体部 文様			欠損のため不明		欠損のため不明			
体部 整形 外							◦剝離のため不明	
体部 整形 内							◦横方向の刷毛口	
底部	◦欠損のため不明		◦欠損のため不明		◦欠損のため不明		◦ナデ	
色調	◦黄茶褐色		◦灰黄淡乳褐色		◦灰黄淡褐色		◦灰黄色 中～内―灰色～黒色	
胎土	◦0.1～0.3の砂粒含有		◦0.1～0.3の砂粒含有 ◦くされ含有		◦0.1～0.2の砂粒多量に含有		◦0.1～0.2の砂粒含有	
質	◦良好		◦良好		◦良好		◦良好	
備考								

土器 No.	40 / 105	4	105	5		
種類 / 摘要	壺形		壺			
法量 (cm) 口縁径	24.45		23.4			
法量 (cm) 器高	36.6 (現存値)		4.2 (現存値)			
法量 (cm) 腹径	36.4		欠損のため不明			
法量 (cm) 底径	欠損のため不明					
出土地区	H—5—M		H—5—M			
口頸部 形態	・短い筒状の頸部に大きく漏斗状に外反する口頸部。端部は平たん。		・二重口縁、外反し段をもって立ち上がり、端部で水平にのび。端部は稜をもち丸く終る。			
口頸部 文様	・頸部に、断面三角形による貼り付け凸帯上に刻目文		・竹管円形浮文			
口頸部 整形 外	・	剝離のため不明	・	風化が著しく不明		
口頸部 整形 内	・		・			
体部 形態	・最大径は、ほぼ中位にあり、やや縦長のもの。					
体部 文様			欠損のため不明			
体部 整形 外	・	剝離のため不明				
体部 整形 内	・					
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明			
色調	・茶褐色～黄茶褐色 内—暗茶褐色		・外面—赤褐色 内面—淡黄褐色			
胎土	・0.1～0.4の砂粒含有		・0.1～0.2砂粒多量に含有			
質	・良好		・良好			
備考						

土器 No.	96 — 1	96 — 2	96 — 3	96 — 4
種類 / 摘要	壺 A2	壺 A2	壺 A4	壺 B1
法量 (cm) 口縁径	21.75	21.85	28.45	31.9
法量 (cm) 器高	7.8 (現存値)	5.4 (現存値)	9.7 (現存値)	7.9 (現存値)
法量 (cm) 腹径 / 底径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
出土地区	F−4−N、G−4−B	F−4−N、G−4−B	F−4−N、G−4−B	F−4−N、G−4−B
口頸部 形態	・漏斗状に開く口頸部口縁端部は僅かに内弯して下方に肥厚する。	・漏斗状に開く口頸部	・漏斗状に開く頸部に水平に折れ曲り端部は下斜めに肥厚する。	・頸部は漏斗状に開き口縁部は上方に立ち上る受口状のもの。
口頸部 文様			・口縁端面に凹線文を施しその上に円形浮文 ・頸部に凹線文	・受口状の部分に凹線文
口頸部 整形外内	・ ・ 剝離のため不明	・ ・ 剝離のため不明	・ ・ 剝離のため不明	・ ・ 剝離のため不明
体部 形態	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
体部 文様				
体部 整形外内				
底部	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明
色調	・黄褐色	・暗黄灰色	・赤褐色 中核一灰褐色	・淡灰黄色 一部淡灰色
胎土	・0.2〜0.5の砂粒含有	・0.2〜0.4の砂粒多量に含有	・0.2〜0.3の砂粒含有	・0.2〜0.3の砂粒含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考	・口縁端部外傾に黒斑 ・全面著しく剝離	・全面的に剝離が著しい。	・口縁内端に刻状文があったと思われる。口縁内端に一部黒斑	・内外共に剝離著しい。

土器 No.	96 / 5	32/96 / 6	32/96 / 7	96 / 8
種類 / 摘要	壺 A	壺 C	不 詳	鉢 C
法量 (cm) 口縁径	37.0	14.35	13.1	33.9
法量 (cm) 器高	5.85（現存値）	9.7（現存値）	4.0（現存値）	9.65
法量 (cm) 腹径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	34.75 欠損のため不明
法量 (cm) 底径				
出土地区	F−4−N、G−4−B	F−4−N、G−4−B	F−4−N、G−4−B	F−4−N、G−4−B
口縁 形態	◦漏斗状に開く口縁部端部は上下に肥厚する。	◦口縁から頸部まで直立した口縁、端部は外方に肥厚する。	◦端面は僅かに内弯して立つ、端部は丸い。	◦直口の口縁端部は内面に肥厚する。
口縁 文様	◦凹線文の上にヘラによる刻目文と剝離しているが円形浮文		◦円形浮文	◦凹線文の間と上に刻目文
頸部 整形外	◦	◦縦方向の磨毛目	◦	◦
頸部 整形内	◦ 剝離のため不明	◦横ナデ	◦ ナデ？	◦ 剝離のため不明
体部 形態	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
体部 文様				
体部 整形外				
体部 整形内				
底部	◦欠損のため不明	◦欠損のため不明	◦欠損のため不明	◦欠損のため不明
色調	◦暗茶褐色	◦淡黄灰褐色	◦暗灰緑青色	◦淡暗灰褐色
胎土	◦0.1〜0.2の砂粒含有	◦0.1〜0.3の砂粒含有 ◦雲母含有	◦0.1〜0.2の砂粒含有 ◦雲母含有	◦0.1〜0.8の砂粒多量に含有
質	◦良好	◦良好	◦良好	◦良好
備考	◦東海地方の土器かと思われる。		◦円形浮文は圧した時に、はみ出した粘土を後にヘラで切り取っている。すなわち器体よりも浮文の粘土が僅かでも厚い。	◦外面に煤付着

土器 No.	9 (96)	10 (36/96)	11 (96)	12 (26/96)
種類 / 摘要	鉢	脚部	脚部	脚部
法量 (cm) 口縁径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
法量 (cm) 器高	4.95	5.9 (現存値)	6.6 (現存値)	4.9 (現存値)
法量 (cm) 腹径				
法量 (cm) 底径	4.15	10.6	12.15	13.85
出土地区	F−4−N、G−4−B	F−4−N、G−4−B	F−4−N、G−4−B	F−4−N、G−4−B
口頸部(杯部) 形態				
口頸部(杯部) 文様	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
口頸部(杯部) 整形 外面				
口頸部(杯部) 整形 内面				
体部(脚部) 形態	・下半部より把手	・柱状部から裾まで、なだらかに広がり端面外側に僅かに肥厚する。	・柱状部から裾まで、なだらかに広がり端面外側に僅かに肥厚する。	・柱状部から裾までなだらかに広がる。
体部(脚部) 文様			・柱状部四線文。	・断面三角形の貼り付け凸帯、刻目文。
体部(脚部) 整形 外面	・剥離のため不明	・剥離のため不明	・剥離のため不明	・剥離のため不明
体部(脚部) 整形 内面	・剥離のため不明	・ヘラ削り。	・ヘラ削り。	・横ナデ。
底部	・欠損のため不明			
色調	・灰黄色 一部赤褐色	・暗茶褐色	・内—青黄灰色 ・外—赤黄灰褐色	・赤褐色 中核—暗灰色
胎土	・0.1〜0.8の砂粒含有	・0.1〜0.4の砂粒含有	・0.1〜0.4の砂粒含有	・0.1〜0.3の砂粒含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考	・外面薄く煤付着 ・内面黒斑	・円板充填法	・円板充填法	・内面煤付着

土器 No.	96 — 13	96 — 14	96 — 15	96 — 16
種類 / 摘要	脚部 A1	底部	底部	脚部 B
法量 (cm) 口縁径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
法量 (cm) 器高	8.9 (現存値)	3.3 (現存値)	3.7	8.25
法量 (cm) 脚径		欠損のため不明	欠損のため不明	
法量 (cm) 底径	11.1	6.75	3.35	19.1
出土地区	F—4—N、G—4—B	F—4—N、G—4—B	F—4—N、G—4—B	F—4—N、G—4—B
口縁部(杯部) 形態	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
口縁部(杯部) 文様				
口縁部(杯部) 整形外				
口縁部(杯部) 内				
体部(脚部) 形態	・裾までなだらかに広がり端部は上下に肥厚する。			
体部(脚部) 文様				・凹線文
体部(脚部) 整形外	・縦方向ヘラ磨き	・ヘラ磨き	・剥離のため不明	・剥離のため不明
体部(脚部) 内	・上半部絞り目 ・下半部ヘラ削り	・横方向刷毛目	・	・
底部		・ヘラ磨き ・僅かにあげ底	・ヘラ痕	
色調	・暗黄褐色	・灰黄褐色	・灰褐色	・淡灰黄色
胎土	・0.1～0.5の砂粒含有 ・雲母含有	・0.1～0.4の砂粒含有	・0.1～0.2の砂粒含有	・0.1～0.4の砂粒含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考	・外面全面と内面裾部に煤付着	・外面黒斑	・外面に薄く煤付着	・内面に黒斑あり

土器 No.	28 / 96	17	96	18	96	19	96	20
種類 / 摘要	壺 A_2		壺 A_3		甕 C		甕 A	
法量 (cm) 口縁径	20.55		32.1		37.65		17.05	
法量 (cm) 器高	9.8 (現存値)		7.5 (現存値)		6.65 (現存値)		12.3 (現存値)	
法量 (cm) 胴径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		14.8	
法量 (cm) 底径							欠損のため不明	
出土地区	F—4—N マウンド		F—4—N マウンド		F—4—N マウンド		F—4—N マウンド	
口頸部 形態	・短く立つ頸部に水平に折れ曲る口縁部を持つ。端部は上下に肥厚する。		・漏斗状に開く口縁、水平に折れ曲る端部は下に大きく肥厚する。		・口縁部は「く」の字形に外反し端部は上方に立ちあがりを持つ。		・口縁部は水平に折れ曲り端部は下方に僅かに肥厚する。	
口頸部 文様	・口縁端面外、内線文 ・頸部に管状の櫛で波状文と直線文		・口縁端面に凹線文を施しその上に円形浮文					
胴部 整形外	・	剝離のため不明	・	剝離のため不明	・	横ナデ	・	横ナデ
胴部 整形内	・		・		・		・	
体部 形態							・口縁径より胴部は内方に入る。	
体部 文様	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明			
体部 整形外							・一部縦方向に刷毛目	
体部 整形内							・横ナデ	
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明	
色調	・淡黄褐色		・淡黄褐色		・淡灰褐色		・外—暗灰赤茶褐色 内—暗灰赤茶褐色 暗灰色 中核—灰色	
胎土	・0.1～0.3の砂粒多量に含有		・0.1～0.2の砂粒僅かに含有		・0.1～0.3の砂粒含有		・0.1～0.3の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・内面に煤付着 ・内面剝離著しい。 ・管状の櫛使用 ・内面端に文様があると思われる。		・口縁端面内側に文様があるか確認できず。 ・口縁端面外側一部に黒斑あり				・外面に薄く煤付着 ・内外共に凹凸が激しい。	

土器No.	26/96	21	26/96	22	—/96	23	36/96	24
種類 / 摘要	複合上器		鉢		脚部 A₂		脚部C	
法量(cm) 口縁径	17.3		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量(cm) 器高	9.65（現存値）		8.8（現存値）		9.4（現存値）		13.0（現存値）	
法量(cm) 腹径	22.05		欠損のため不明					
法量(cm) 底径	欠損のため不明		9.15		11.25		22.6	
出土地区	F—4—N マウンド		F—4—N マウンド		F—4—N マウンド		F—4—N マウンド	
口頸部（杯部） 形態	・丸味のある段状口縁部を持つ。							
口頸部（杯部） 文様			欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
口頸部（杯部） 整形 外	・	剝離のため不明						
口頸部（杯部） 整形 内	・	剝離のため不明						
体部（脚部） 形態			・柱状部から裾まで、なだらかに広がり端面に凹線文		・裾までなだらかにひろがり端部は上下に肥厚する。			
体部（脚部） 文様							・有孔・凹線文	
体部（脚部） 整形 外	・	剝離のため不明	・	剝離のため不明	・縦方向へラ磨き		・	剝離のため不明
体部（脚部） 整形 内	・	剝離のため不明	・	剝離のため不明	・絞り目		・	剝離のため不明
底部			・剝離のため不明					
色調	・黄茶褐色		・黄褐色		・黄褐色		・灰黄褐色	
胎土	・0.1の砂粒僅かに含有		・0.2～0.3の砂粒含有		・0.1～0.2の砂粒含有		・0.1～0.4の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考			・円板充填法 ・外面黒斑あり		・脚部裾に黒斑		・裾部に一部黒斑あり	

土器No.	97-25	97-26	97-27	97-28
種類 / 摘要	壺 A	甕A 2	壺A 3	甕A 3
法量(cm) 口縁径	欠損のため不明	14.7	27.55	27.15
法量(cm) 器高	8.2（現存値）	13.75（現存値）	14.25（現存値）	8.4（現存値）
法量(cm) 胴径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
法量(cm) 底径				
出土地区	F－4－N 南溝	F－4－N 南溝	F－4－N 南溝	F－4－N 南溝
口縁部 形態	・欠損のため不明	・僅かに外方に傾斜して立ち、斜めに折れ曲る。口縁端は上下に僅かに肥厚する。	・漏斗状に開く頸部に水平に折れ曲り口縁端部は下に肥厚する。	・短い頸部に水平に折れ曲る口縁部を持ち端部は上下に肥厚する。
口縁部 文様	・頸部より櫛描簾状文、同直線文、同波状文	・口縁端部外一櫛描波状文 口縁端部内一列点文 ・頸部凹線文	・口縁端部外・凹線文凹形浮文・内端列点文 ・頸部に櫛描波状文・同直線文・凹線文	・口縁端部外・凹線文頸部・櫛描波状文・同直線文
胴部 整形外	・剝離のため不明	・縦方向に荒い刷毛目	・剝離のため不明	・剝離のため不明
胴部 内	・剝離のため不明	・横ナデ	・剝離のため不明	・剝離のため不明
体部 形態				
体部 文様	欠損のため不明	・頸部下より直線文	欠損のため不明	欠損のため不明
体部 整形外		・ナデ？		
体部 内		・一部へラ痕。		
底部	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明
色調	・外一灰黄褐色 内一暗茶褐色	・灰黄褐色 中核一黒色	・淡暗灰褐色 一部黄灰褐色	・赤褐色
胎土	・0.1～0.4の砂粒含有	・0.1～0.2の砂粒含有	・0.1～0.3の砂粒多量に含有	・0.1～0.4の砂粒含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考	・内外共に剝離が著しい。		・口縁内端に粘痕 ・口縁内端に薄く煤付着 ・2孔1対の孔あり	・口縁端面内側、列点文らしきものあり内外共に剝離が激しいため不明である。

土器 No.	97 / 29	97 / 27 / 30	97 / 27 / 31	97 / 32
種類 / 摘要	壺 A₂	壺 A₂	壺 A₂	壺 A₃
法量 (cm) 口縁径	21.85	24.15	26.8	36.2
法量 (cm) 器高	10.45（現存値）	13.05（現存値）	6.55（現存値）	13.33（現存値）
法量 (cm) 胴径 / 底径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
出土地区	F－4－N 南溝	F－4－N 南溝	F－4－N 南溝	F－4－N 南溝
口頸部 形態	・太く短い頸部に口縁が僅かにひろがり端部は丸く下方に折れ曲る。	・太く直立する頸部に水平に折れ曲る口縁部を持つ端部は外反し上下に肥厚する。	・太く直立する頸部に水平に折れ曲る口縁部を持つ、端部は下方に肥厚する。	・鉢斗状に開き口縁端面は僅かに外反し下に肥厚する。
口頸部 文様	・口縁外端に凹線文 ・頸部に貼り付けによる指頭圧痕文	・頸部一貼り付による指頭圧痕文	・頸部に貼り付による指頭圧痕文	・端面外は凹線文の上より円形浮文 ・内面端・列点文
口頸部 整形 外	・縦方向の刷毛目	・縦方向に荒い刷毛目	・縦方向に刷毛目	・斜め、縦方向に刷毛目
口頸部 整形 内	・横ナデ 横方向刷毛目	・横方向に荒い刷毛目 指圧痕	・横ナデ 荒い刷毛目	・剝離のため不明
体部 形態				
体部 文様	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
体部 整形 外				
体部 整形 内				
底部	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明
色調	・黄灰褐色	・灰黄褐色 中核一灰色 内面一部赤褐色	・灰黄褐色	・淡茶褐色 中核一黒色
胎土	・0.1～0.4の砂粒含有	・0.1～0.3砂粒含有	・0.1～0.2の砂粒含有	・0.1～0.3の砂粒含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考	・内外共に剝離著しい。		・内面剝離が著しい。	・口縁端面外一部に黒斑あり。

土器 No.	35 / 97	33	27 / 97	34	37 / 97	35	25 / 第13図	36
種類 / 摘要	壺 A		壺 As		壺 As		壺 A	
法量 (cm) 口縁径	欠損のため不明		30.5		19.05		欠損のため不明	
法量 (cm) 器高	17.6 (現存値)		11.3 (現存値)		38.85		25.95 (現存値)	
法量 (cm) 腹径	欠損のため不明		欠損のため不明		32.95		21.05	
法量 (cm) 底径					8.15		5.1	
出土地区	F−4−N 南溝		F−4−N 南溝		F−4−N 南溝		F−4−N 南溝	
口部 形態	・欠損のため不明		・太く短い頸部に口縁が少し広がり端部は下方に大きく外反し肥厚する。		・細く短い口縁は漏斗状に開き端部は斜めに折れ曲り下に肥厚する。		・欠損のため不明	
口部 文様	・頸部に凹線文を施してから棒状浮文 ・貼り付けによる指頭圧痕文 ・頸部下より波状文		・口縁端面外に凹線文を施し、その上に刻目文と円形浮文 ・口縁内端には列点文 ・縦方向に荒い刷毛目		・口縁外端に凹線文を施し、その上に円形浮文 ・内端は3段の凹状文 ・頸部断面三角形の貼り付け凸帯 ・縦方向の刷毛目		・頸部・断面三角形貼り付け凸帯文 ・縦方向の刷毛目	
口部 整形外	・横ナデ							
口部 整形内	・横ナデ		・剝離のため不明		・横ナデ		・横ナデ	
体部 形態					・腰の張った縦長のだ円形		・頸部よりなだらかに落ち、中位で最大径をもち張る。	
体部 文様	欠損のため不明		欠損のため不明		・頸部直下より櫛描波状文と同直線文のくりかえし。		・頸部より最大胴部に、櫛描直線文、同波状文をくり返す。	
体部 整形外					・ヘラ?		・最大胴部まで縦方向の刷毛目。以下ヘラ磨き、ヘラ削り。	
体部 整形内					・荒い刷毛		・不明	
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・ヘラ?		・ヘラ磨き。	
色調	・黄茶褐色 中核一暗灰色		・黄灰褐色		・淡黄茶褐色		・黄茶褐色	
胎土	・0.1〜0.3の砂粒含有		・0.1〜0.4の砂粒多量に含有		・0.1〜0.2の砂粒多量に含有。		・0.1〜0.2の砂粒極少量含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
			・内面に煤付着		・腰位に黒斑			
備考								

土器 No.	37	38	39	40
種類 / 摘要	鉢 B	鉢 D	鉢 D	鉢 D
法量 (cm) 口縁径	20.65	29.0	28.8	25.7
法量 (cm) 器高	10.4 (現存値)	5.4 (現存値)	6.85 (現存値)	8.85 (現存値)
法量 (cm) 腹径	欠損のため不明	29.65	28.75	27.45
法量 (cm) 底径		欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
出土地区	F−4−N 南溝	F−4−N 南溝	F−4−N 南溝	F−4−N 南溝
口縁部 形態	・椀形の器形で口縁内端が肥厚。	・腰に稜を持ち、なだらかなカーブを描く段状口縁部。	・腰に稜を持ち、なだらかなカーブを描く段状口縁部。	・腰に稜を持ち端面は僅かに内弯し段状口縁部を持つ。
口縁部 文様	・凹線文	・口縁端面に凹線文	・櫛描波状文と同直線文	・櫛描直線文と同波状文
整形外面	・	・横ナデ	・横ナデ	・縦方向へラ磨き
整形内面	・ 剝離のため不明	・横ナデ	・横ナデ	・一部縦方向へラ
体部 形態				
体部 文様	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
整形外面				
整形内面				
底部	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明
色調	・黄褐色	・黄灰褐色 中核一暗灰色	・黄茶褐色	・淡黄灰色
胎土	・0.1〜0.3の砂粒含有	・0.1〜0.4の砂粒含有	・0.1〜0.3の砂粒含有	・0.1〜0.3の砂粒含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考			・口縁から腰にかけて黒斑あり。	

土器No.	34 / 98	41	27 / 98	42	/ 98	43	/ 98	44
種類 / 摘要	鉢 D		台付鉢D		器台		甕 A	
法量(cm) 口縁径	26.15		39.45		欠損のため不明		14.7	
法量(cm) 器高	2.35（現存値）		19.15（現存値）		18.35（現存値）		9.9（現存値）	
法量(cm) 胴径	欠損のため不明		41.35		欠損のため不明		19.65	
法量(cm) 底径			欠損のため不明				欠損のため不明	
出土地区	F－4－N 南溝		F－4－N 南溝		F－4－N 南溝		F－4－N 南溝	
口頸部(体部) 形態	・段状口縁		・頸部で、はっきりとした稜を持ち内弯して立つ口縁部				・口縁部は外反し頸部は内外共に円味を持ち端部はするどい。	
口頸部(体部) 文様	・口縁上端に櫛描波状文		・櫛描簾状文					
口頸部(体部) 整形 外	・ナデ		・横方向ヘラ磨き		欠損のため不明		・横ナデ	
口頸部(体部) 整形 内	・ナデ		・剥離のため不明				・横ナデ	
体部(脚部) 形態					・欠損のため不明		・胴部はあまり張り出さず、なだらかなカーブを持つ。	
体部(脚部) 文様			・有孔		・口縁内端に屑状文 ・頸部凹線文			
体部(脚部) 整形 外	欠損のため不明		・縦方向ヘラ磨き ・縦方向刷毛目		・横ナデ		・縦方向の刷毛目 荒い刷毛と細い刷毛	
体部(脚部) 整形 内			・わずかに絞り目の痕あり		・指頭圧痕と絞り目		・斜め方向の刷毛目	
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明				・欠損のため不明	
色調	・黄灰茶褐色		・赤褐色		・茶褐色		・暗黄灰褐色	
胎土	・0.1の砂粒少量含有		・0.1～0.3の砂粒含有 ・雲母僅かに含有		・0.1～0.8の砂粒多量に含有		・0.1～0.2の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・外面黒斑		・円板充填法？		・外面黒斑			

土器No.	98 45	98 46	98 36 47	98 27 48
種類	底部	鉢	高杯 C_1	脚部 A_8
摘要				
法量(cm) 口縁径	欠損のため不明	欠損のため不明	31.85	欠損のため不明
器高	3.6 (現存値)	4.25 (現存値)	3.1 (現存値)	7.1 (現存値)
腹径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	
底径	4.95	9.95		11.5 (脚部裾径)
出土地区	F－4－N 南溝	F－4－N 南溝	F－4－N 南溝	F－4－N 南溝
口頸部(杯部) 形態			・水平にひろげた口縁部	
文様			・円形浮文	
整形外面	欠損のため不明	欠損のため不明		欠損のため不明
整形内面			・横ナデ	
体部(脚部) 形態				・柱状部は短く裾までなだらかに広がり端部は上下に肥厚する。
文様				・裾端面凹線文
整形外面	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	・剝離のため不明
整形内面				・上半部絞り目
底部	・内外共にヘラ削り	・ヘラ削り ・焼成前に穿孔		
色調	・内外共に暗灰色	・黄灰淡茶褐色	・灰黄色	・茶褐色 脚部裾一部暗灰色
胎土	・0.1～0.3の砂粒多量に含有	・0.1～0.4の砂粒多量に含有 ・雲母僅かに含有	・0.1の砂粒僅かに含有	・0.1～0.2の砂粒含有 ・雲母含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考				・高杯

土器 No.	98	49	28/98	50	28/98	51	99	52
種類 / 摘要	脚部		壺 F_2		甕 G_1		壺 A_2	
法量(cm) 口縁径	欠損のため不明		9.8		6.35		13.75	
器高	11.6 (現存値)		15.55		15.95		7.2 (現存値)	
腹径			13.35		15.3		欠損のため不明	
底径	10.5 (脚部裾径)		8.8 (脚部底径)		4.45			
出土地区	F−4−N 南溝		F−4−N 南溝		F−4−N 南溝		F−4−N 北第II溝	
口頸部(杯部) 形態			・腰部ではっきりした稜を持ち内弯して立つ口縁部		・僅かな広がりを持つ筒状の口頸部に肥手側をえぐりとっている。		・短い頸部に水平に折れ曲る口縁部を持つ端部は下方に外反し上下に肥厚する。	
文様	欠損のため不明		・口縁端面から門線文腰まで櫛描波状文		・口縁端面に刻目文 ・端面から頸部下より凹線文と櫛描直線文		・口縁部端面に門線文	
整形 外			・縦方向ヘラ磨き		・横ナデ		・縦方向に荒い刷毛目	
内			・腰部指圧痕		・横ナデ 頸部下より指圧痕			
体部(脚部) 形態	・柱状部から裾までなだらかに広がり端部に凹線文		・柱状部は短く裾までなだらかにひろがり端部は上下に肥厚する。		・腰は底く張り出している肩の横位に肥手			
文様	・柱状部ヘラによる沈線 ・裾部下端鋸歯文				・頸部から引き続き櫛描直線文、腰の位置で同波状文で終っている。		欠損のため不明	
整形 外	・縦方向ヘラ磨き		・縦方向にヘラ磨き		・縦方向にヘラを施してから横方向にヘラ			
内	・ヘラ削り		・成形のためによる爪痕 ・所々にヘラ		・肩部肥手の囲りに指圧痕			
底部			・外−縦方向ヘラ ・内−爪痕 所々にヘラ ・内面に一部朱痕あり		・ヘラ		・欠損のため不明	
色調	・黄褐色		・黄灰色		・暗黄褐色		・淡黄茶褐色	
胎土	・0.2〜0.3の砂粒多量に含有		・0.1〜0.2の砂粒含有		・0.1〜0.3の砂粒含有		・0.1〜0.2の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考			・円板充填痕 ・口縁端面から脚部裾まで放射線状に朱が塗布されている。		・把手の囲りに朱痕あり範囲等は図示できない。 ・下半部に欠孔あり ・腰から底部にかけて黒斑			

土器 No.	98	53	32/99	54	32/99	55	99	56
種別 / 摘要	壺 A		壺 B₂		壺 B₂		器台	
法量 (cm) 口縁径	欠損のため不明		23.15		25.7		37.65	
法量 (cm) 器高	13.45 (現存値)		11.35 (現存値)		8.15 (現存値)		6.3 (現存値)	
法量 (cm) 胴径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量 (cm) 底径								
出土地区	F−4−N 北第Ⅱ溝		F−4−N 北第Ⅱ溝		F−4−N 北第Ⅱ溝		F−4−N 北第Ⅱ溝	
口頸部(肩部) 形態	・欠損のため不明		・長く立つ頸部に受口状の口縁部。		・頸部は漏斗状に開く口縁部は上方に立ち上る受口状のもの。		・漏斗状に開く頸部に水平に折れ曲る端部は下へ肥厚する。	
口頸部(肩部) 文様	・頸部に竹管文と貼り付けによる指頭圧痕文				・口縁受口状の部分に凹線文を施しその上にヘラによる刻目		・口縁端部に凹線文と円形浮文	
口頸部(肩部) 整形 外	・剥離のため不明		・横ナデ		・口縁部と頸部の継目に横方向のヘラ磨き頸部は縦方向の刷毛目		・縦方向の刷毛目	
口頸部(肩部) 整形 内	・剥離のため不明		・横ナデ		・口縁部・横方向ヘラ磨き頸部・刷毛目		・横ナデ	
体部(胴部) 形態								
体部(胴部) 文様	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
体部(胴部) 整形 外								
体部(胴部) 整形 内								
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明	
色調	・赤褐色 中核一暗褐色		・黄茶褐色 中核一淡灰色		・黄褐色 中核一淡灰色		・浮灰黄色	
胎土	・0.1〜0.4の砂粒含有		・0.1〜0.3の砂粒多量に含有		・0.1〜0.4の砂粒含有		・0.1の砂粒僅かに含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
			・外面一部に煤付着					
備考								

土器 No.	34/99	57	34/99	58	34/99	59	34/99	60
種類 / 摘要	把手付鉢C		壺 Ga		鉢 B		鉢 D	
法量(cm) 口縁径	12.25		欠損のため不明		31.65		27.9	
法量(cm) 器高	5.1（現存値）		15.55（現存値）		8.0（現存値）		9.95（現存値）	
法量(cm) 腹径	欠損のため不明		欠損のため不明		33.4		29.25	
法量(cm) 底径					欠損のため不明		欠損のため不明	
出土地区	F−4−N 北第II溝		F−4−N 北第II溝		F−4−N 北第II溝		F−4−N 北第II溝	
口縁部 形態	・斜めにまっすぐ立つ口縁部上端は平たん。		・備かな広がりを持つ筒状の口縁部と思われる。 ・肩位に肥手		・椀形の器体で口縁内端が肥厚		・腰に稜を持ち内方にやや傾斜して立つ段状口縁部	
口縁部 文様	・凹線文・刻目文		・頸部から腰にかけて櫛描直線文と同波状文		・凹線文		・口縁部下より櫛描直線文と同波状文	
頸部 整形外	・ヘラ磨きおよびヘラ削り		・剝離のため不明		・横ナデ		・横方向のヘラ磨き	
頸部 整形内	・横方向に刷毛目		・剝離のため不明		・一部ヘラ磨き		・縦方向のヘラ磨き	
体部 形態								
体部 文様								
底部 整形外	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
底部 整形内								
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明	
色調	・黄灰褐色		・淡黄赤褐色		・灰茶褐色		・淡黄赤褐色 中核一黒色	
胎土	・0.1〜0.2の砂粒多量に含有		・0.1〜0.6の砂粒含有		・0.1〜0.2の砂粒含有 ・雲母含有		・0.1〜0.2の砂粒含有	
焼成	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考					・外面煤付着		・腰部に黒斑あり	

土器 No.	36/99	61	99	62	36/99	63	99	64
種類 / 摘要	高杯 A1		脚部		脚部 A2		甕 B	
法量(cm) 口縁径	27.05		欠損のため不明		欠損のため不明		22.3	
法量(cm) 器高	4.2 (現存値)		6.15 (現存値)		6.85 (現存値)		28.8 (現存値)	
法量(cm) 胴径	欠損のため不明						27.25	
法量(cm) 底径			19.1 (脚部裾径)		7.7 (脚部裾径)		欠損のため不明	
出土地区	F−4−N 北第II溝		F−4−N 北第II溝		F−4−N 北第II溝		F−4−N 北第II溝	
口頸部(杯部) 形態	・直口の口縁で外方に傾斜する杯部で内方に肥厚する。						・口縁端部は「く」の字形に外反し端部は上方に僅かに肥厚する。	
口頸部(杯部) 文様	・細い沈線一条		欠損のため不明		欠損のため不明			
口頸部(杯部) 整形 外	・横ナデ						・横ナデ	
口頸部(杯部) 整形 内	・縦方向にヘラ磨き						・横ナデ	
体部(脚部) 形態	欠損のため不明		・短い脚部で大きく裾に広がる。		・短い脚部で裾はやや内湾する端面は丸い。		・肩から広がり脚部で丸く張り出し底部に続くと思われる。	
体部(脚部) 文様			・凹線文・爪圧痕文		・脚部裾に凹線文			
体部(脚部) 整形 外			・剥離のため不明		・縦方向ヘラ磨き		・上半部縦、斜め方向に刷毛目 ・下半部ヘラ削り	
体部(脚部) 整形 内			・剥離のため不明		・上半部絞り目 ・下半部横ナデ		・底部斜め方向に刷毛目 ・縦方向刷毛目所々に指圧痕	
底部							・欠損のため不明	
色調	・乳灰黄色		・淡灰黄褐色		・淡黄褐色		・茶褐色	
胎土	・0.1〜0.3の砂粒含有		・0.1〜0.8の砂粒含有		・0.1〜0.2の砂粒含有		・0.1〜0.4の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・外面に黒斑 ・内面一部に煤付着		・脚部裾黒斑 ・台付鉢		・内面煤付着 ・台付鉢		・内外共に煤付着 ・内面に一部炭化米	

土器No.	28 / 89	65	28 / 100	66	32 / 100	67	31 / 100	68
種類 / 摘要	壺 A2		無頸壺 B1		無頸壺 B1		壺 A	
法量(cm) 口縁径	21.55		10.05		21.35		16.85	
法量(cm) 器高	32.55		8.05（現存値）		6.4（現存値）		1.8（現存値）	
法量(cm) 腹径	29.15		16.05		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量(cm) 底径	7.1		欠損のため不明					
出土地区	F－4－N 北溝		G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑	
口縁部 形態	・太く短い頸部に口縁が漏斗状に開く端部は上下に肥厚する。		・丸味のある段状口縁部を持つもの。		・腰に稜を持ち内方に傾斜して段状口縁部を持つ。		・漏斗状に開き、下に肥厚する。	
口縁部 文様	・口縁端部外は凹線文端部内は管状の刺状文 ・頸部波状文・直線文				・口縁端面外に凹線文		・外円形浮文 ・内横描波状文、円形浮文、渦状文	
口縁部 整形外	・剥離のため不明		・横方向の細いヘラ磨き		・頸部より横方向にヘラ磨き		・横ナデ	
口縁部 整形内	・剥離のため不明		・横ナデ		・横ナデ ・縦方向に刷毛を施しヒより横方向ヘラ磨き		・横ナデ	
体部 形態	・太い頸部のまま胴部は広がり腰は底く張り出す。		・腰は底くはり出す。					
体部 文様	・頸部の続きで直線文5帯から始まり波状文と直線文のくり返し				欠損のため不明		欠損のため不明	
体部 整形外	・肩から腰にかけて指押痕、腰部ヘラ痕		・横方向のヘラ磨き					
体部 整形内	・腰部横方向のヘラ磨き腰部下、底部にかけて縦方向のヘラ		・横方向のヘラ磨き					
底部	・ヘラ磨き		・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明	
色調	・黄灰褐色		・暗灰色		・灰黄色		・淡黄褐色	
胎土	・0.1～0.3の砂粒含有 ・雲母塁かに含有		・0.1の砂粒僅かに含有		・0.2～0.3の砂粒含有		・0.1～0.2の砂粒少量含有	
焼成	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・口縁端部外一部黒斑 ・内面、腰から底部にかけて少しではあるが植物性の付着物		・外面腰部に煤付着 ・内面腰部に植物性の付着物					

土器 No.	31/100 …… 69	31/100	70	/100	71	31/100	72
種類 / 摘要	壺 A2	壺 A2	壺			壺 A3	
法量 (cm) 口縁径	21.35	23.76	欠損のため不明			31.65	
法量 (cm) 器高	5.75（現存値）	10.8	17.65（現存値）			4.54（現存値）	
法量 (cm) 腹径	欠損のため不明	欠損のため不明	25.75			欠損のため不明	
法量 (cm) 底径			欠損のため不明				
出土地区	G－4－B 第Ⅰ大形土坑	G－4－B 第Ⅰ大形土坑	G－4－B 第Ⅰ大形土坑			G－4－B 第Ⅰ大形土坑	
口頸部 形態	・短い頸部に水平に折れ曲る口縁部、端部は僅かに上下に肥厚する。	・短い頸部に水平に折れ曲る口縁部、端部は上下に肥厚し下端は外にはり出す。	・欠損のため不明			・下端に大きく肥厚する口縁	
口頸部 文様	・口縁部端面外に凹線文 ・端部内は列点文 頸部に櫛描直線文	・端部外に凹線文、内端に刺状文 頸部に櫛描直線文	・口縁下部に櫛描直線文			・口縁外端に凹線文を施しその上に円形浮文、内端に列点文	
整形 外部	・一部縦方向に荒い刷毛目	・横方向に細い刷毛目	・縦方向に刷毛目			・ ・ } 横ナデ	
整形 内部	・剝離のため不明	・横方向に荒い刷毛	・横ナデ				
体部 形態			・腰が底く張り出すもの				
体部 文様	欠損のため不明	欠損のため不明	・頸部から腰にかけて直線文、波状文のくりかえし			欠損のため不明	
整形 外部			・頸部から腰まで斜めに刷毛目、腰より下までへら磨き				
整形 内部			・腰から下、縦方向に刷毛目				
底部	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明			・欠損のため不明	
色調	・灰黄褐色	・淡灰黄白色	・黄褐色			・暗灰色	
胎土	・0.1～0.3の砂粒含有	・0.1～0.4の砂粒多量に含有 ・雲母僅かに含有	・0.1～0.3の砂粒含有 ・雲母少量含有			・0.1の砂粒僅かに含有	
質	・良好	・良好	・良好			・良好	
備考	・口縁から頸部にかけて煤付着	・内面頸部に煤付着 ・内面剝離が著しい。	・腰部に黒斑あり ・底部付近薄く煤付着			・内外共に煤付着	

土器 No.	100 / 73	100 / 74	100 / 75	34 / 100 / 76
種類 / 摘要	壺 As	壺 As	壺 B1	鉢 D
法量 (cm) 口縁径	28.3	24.1	29.15	35.8
法量 (cm) 器高	5.15（現存値）	6.8（現存値）	4.95（現存値）	4.85（現存値）
法量 (cm) 胴径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
法量 (cm) 底径				
出土地区	G－4－B 第Ⅰ大形土坑	G－4－B 第Ⅰ大形土坑	G－4－B 第Ⅰ大形土坑	G－4－B 第Ⅰ大形土坑
口頸部 形態	・短い頸部水平に折れ曲る、端部内は平らになり下に肥厚する。	・短い頸部やや下方に垂れ下り端部は下に長く肥厚する。	・頸部は漏斗状に開く口縁部は上方に立ち上る受口状のもの。	・口縁端を外側下方に折れ曲り内端は少し下がる。
口頸部 文様	・口縁部端面円線文の上に円形浮文	・口縁端部に円線文の上から円形浮文	・口縁受口状の部分に円線文	・櫛描波状文
口頸部 整形 外	・	・	・	・
口頸部 整形 内	・ 剝離のため不明	・ 剝離のため不明	・ 剝離のため不明	・ 横ナデ
体部 形態				
体部 文様	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
体部 整形 外				
体部 整形 内				
底部	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明
色調	・赤褐色 中核一暗灰色	・赤茶褐色	・淡黄灰褐色 中核一黒灰褐色	・暗茶褐色
胎土	・0.2～0.7の砂粒含有	・0.1～0.3の砂粒含有	・0.1～0.3の砂粒含有	・0.1～0.3の砂粒少量含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考	・口縁端面外側から内側にかけて一部黒斑あり。	・口縁端面外側から内側にかけて一部黒斑あり。		

土器No.	34/100	77	34/100	78	100	79	100	80
種類 / 摘要	鉢 D		鉢 C		鉢 C		脚部B	
法量(cm) 口縁径	35.8		26.45		33.2		欠損のため不明	
法量(cm) 器高	6.2（現存値）		8.9（現存値）		6.1（現存値）		6.55（現存値）	
法量(cm) 腹径	欠損のため不明		26.95		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量(cm) 底径			欠損のため不明				22.2	
出土地区	G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑	
口頸部 形態	・口縁端は外側下方に折れ曲り端部は平行である。		・腰に稜を持つ直口の鉢、口縁内端が少し肥厚する。		・腰に稜を持つ直口の鉢、口縁内端部に肥厚する。			
口頸部 文様	・口縁端面凹線文 ・口縁下より横描波状文と同凹線紋		・凹線文		・凹線文		欠損のため不明	
口頸部 整形外	・		・ヘラ削り		・			
口頸部 整形内	・	剝離のため不明	・所々にヘラ		・	剝離のため不明		
体部 形態	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		剝離のため不明	
体部 文様								
体部 整形外								
体部 整形内								
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明			
色調	・淡黄茶褐色		・淡黄灰褐色		・淡灰黄褐色		・黄茶褐灰色	
胎土	・0.1～0.6の砂粒含有		・0.1～0.3の砂粒少量含有		・0.1～1.0の砂粒多量に含有		・0.1～0.3の砂粒含有	
焼成	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・外面・口縁から胴にかけて一部黒斑あり				・口縁端面に黒斑		・黒斑あり	

土器No.	34 / 100	81	28 / 100	82	/ 100	83	28 / 101	84
種類 / 摘要	鉢 A		壺 Ga		鉢 D		蓋	
法量(cm) 口縁径	20.85		8.55		44.15		15.15（推部）	
法量(cm) 器高	8.5（現存値）		13.25（現存値）		9.05（現存値）		5.75	
法量(cm) 腹径	18.75		欠損のため不明		49.6			
法量(cm) 底径	欠損のため不明				欠損のため不明		5.0（つまみ部）	
出土地区	G－4－B 第Ⅰ大形土拡		G－4－B 第Ⅰ大形土拡		G－4－B 第Ⅰ大形土拡		G－4－B 第Ⅰ大形土拡	
口類 形態	・口縁は短く水平に折れ曲る。		・口縁は直口		・腰に稜を持ち内方に傾斜して段状口縁部を持つ		・つまみの部分は上げ底でなだらかなカーブを描く裾広ろがりの蓋	
口類 文様			・凹線文 ・頸部から腰にかけて櫛描直線文		・口縁端面に凹線文 ・頸部下より刻目文と凹線文			
口類 整形外部	・縦方向に刷毛ヘラ削りの上からヘラ磨き		・所々にヘラ痕		・横ナデ		・剝離のため不明	
口類 整形内部	・横ナデ		・横ナデ		・横ナデ		・剝離のため不明	
体部 形態	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明			
体部 文様								
体部 整形外部								
体部 整形内部								
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明			
色調	・暗灰黄色		・暗灰褐色		・茶褐色		・淡灰黄色	
胎土	・0.1～0.3の砂粒含有		・0.1～0.2の砂粒含有		・0.1～0.3の砂粒多量に含有		・0.1～0.4の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・煤付着							

土器No.	33/101	85	25/第16図	86	101	87	33/101	88
摘要＼種類	蓋		蓋		甕 B		甕 A	
法量(cm) 口径	欠損のため不明				20.75		9.45	
法量(cm) 器高	3.1（現存値）		11.35		3.1（現存値）		8.65（現存値）	
法量(cm) 腹径					欠損のため不明		9.3	
法量(cm) 底径	1.95（つまみ部）		17.35（脚部裾径）				欠損のため不明	
出土地区	G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G 4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑	
口頸部 形態	・つまみ部を持ち笠形の蓋である。				・円味を帯びた「く」の字形に外反する口縁部で端部は上下僅かに肥厚する。		・口縁部は外反するが内面に稜を持つ。	
口頸部 文様					・頸部に横描波状文 ・有孔			
口頸部 整形外	・縦方向のヘラ磨き				・		・横方向刷毛目	
口頸部 整形内	・ヘラ削り				・剝離のため不明 ・		・横ナデ	
体部 形態			・おそらく長い柱状部をもち裾部はなだらかにひろがり端部は上下僅かに肥厚する。				・口径とあまり変らない腹径で小型ながら他の甕と比べると器壁が厚い。	
体部 文様					欠損のため不明			
体部 整形外			・縦方向のヘラ磨き ・裾部端面は横ナデ				・ヘラ削り	
体部 整形内			・柱部に絞り目 ・ナデ？				・ヘラ削り	
底部					・欠損のため不明		・欠損のため不明	
色調	・暗茶褐色		・暗褐色		・淡赤茶褐色		・灰茶褐色	
胎土	・0.1～0.2の砂粒含有		・0.2～0.4の砂粒多量に含有 ・雲母及びかくせん石が少量含む		・0.1～0.2の砂粒含有		・0.2～0.4の砂粒含有	
焼成	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考			・上下に円板充填法 ・全面的に煤が付着 ・高杯脚部の転用				・外面濃く煤付着 ・内面頸部と脚部下に煤付着	

土器 No.	33 / 101	89	29 / 101	90	33 / 101	91	33 / 101	92
種別 / 摘要	甕 B		甕 B		甕 B		甕 B	
法量 (cm) 口縁径	14.65		12.85		12.3		14.85	
法量 (cm) 器高	5.55（現存値）		11.75（現存値）		8.9（現存値）		7.95（現存値）	
法量 (cm) 胴径	欠損のため不明		14.35		13.55		17.45	
法量 (cm) 底径			欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
出土地区	G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑	
口頸部 形態	◦斜めに外反する口縁部で端部は上に立ちあがる。		◦「く」の字形に外反し端部は上に立ちあがる。		◦斜めに外反する口縁部で端部は上に立ちあがる。		◦斜めに外反する口縁部は上に立ちあがる。	
口頸部 文様	◦口縁端面は凹線文		◦口縁端部に凹線文		◦口縁端面は凹線文		◦口縁端面は凹線文	
口頸部 整形外	◦横ナデ 荒い刷毛目		◦		◦		◦縦方向に刷毛目	
口頸部 整形内	◦横ナデ 刷毛目		◦ 横ナデ		◦ 横ナデ		◦横ナデ	
体部 形態			◦なだらかなカーブを持ち腰はあまり張出さない。		◦なだらかなカーブを持ち腰はあまり張出さない。		◦なだらかなカーブを持ち腰はあまり張出さない。	
体部 文様	欠損のため不明							
体部 整形外			◦ヘラ削り		◦縦方向の荒い刷毛目		◦刷毛目	
体部 整形内			◦縦方向に刷毛目		◦斜め方向の刷毛目の所々に縦方向の刷毛目		◦横ナデ	
底部	◦欠損のため不明		◦欠損のため不明		◦欠損のため不明		◦欠損のため不明	
色調	◦淡黄灰褐色		◦暗茶褐色		◦灰黄色		◦茶褐色	
胎土	◦0.1～0.5の砂粒含有		◦0.1～0.2の砂粒含有		◦0.1～0.2の砂粒僅かに含有		◦0.1～0.2の砂粒含有	
質	◦良好		◦良好		◦良好		◦良好	
備考			◦内外共に濃く煤付着 ◦内面に炭化米		◦外面頸部より煤付着 ◦内面黒斑		◦内外共に煤付着	

土器 No.	29 / 101	93	101	94	101	95	101	96
種類 / 摘要	甕 C		甕 C		甕 C		甕 C	
法量 (cm) 口縁径	16.75		27.05		33.65		36.45	
法量 (cm) 器高	27.6		9.15（現存値）		7.75（現存値）		21.75（現存値）	
法量 (cm) 腹径	20.65		欠損のため不明		欠損のため不明		43.75	
法量 (cm) 底径	5.15						欠損のため不明	
出土地区	G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑	
口縁部 形態	・斜めに広がりを持ち円味を持つ「く」の字形の端部は僅かに立ちあがりを持つ。		・斜めに外反する口縁部で端部は僅かに立ち上りを持つ。		・口縁部は「く」の字形に外反する。		・円味を帯びた「く」の字形に外反する口縁部に端部は上下僅かに肥厚する。	
口縁部 文様	・口縁端面に回線文							
口縁部 整形外	・	横ナデ	・	横ナデ	・横ナデ		・	横ナデ
口縁部 整形内	・		・		・横方向の細い刷毛目と荒い刷毛目		・	
体部 形態	・なだらかなカーブを持ち腰はあまり張出さない。						・肩から丸く張り出す。	
体部 文様			欠損のため不明		欠損のため不明			
体部 整形外	・縦方向に刷毛目						・縦・斜め方向に重なりあった荒い刷毛目	
体部 整形内	・縦・斜めに荒い刷毛と細い刷毛目						・斜め方向に一部荒い刷毛目	
底部	・内外共にヘラ削り		・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明	
色調	・暗茶褐色		・淡暗灰黄褐色		・淡暗灰褐色		・黄茶褐色	
胎土	・0.1～0.4の砂粒含有 ・雲母含有		・0.1～0.4の砂粒含有		・0.1～0.3の砂粒含有 ・雲母含有		・0.1～0.3の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
	・内外共に濃く煤付着				・内外共に薄く煤付着		・外面・薄く煤付着	
備考								

土器No.	101	97	101	98	32/101	99	34/101	100
種類	甕底部		甕		複合土器		脚部 B	
法量(cm) 口縁径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量(cm) 器高	6.65（現存値）		3.85（現存値）		5.45（現存値）		4.15（現存値）	
法量(cm) 腹径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明			
法量(cm) 底径	5.9		5.55				9.3（脚部裾径）	
出土地区	G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑	
口部 形態					・器台部・口頸部結合部分			
口部 文様					・四線文の上からヘラによる刻目文と円形浮文			
口部 整形外面	欠損のため不明		欠損のため不明				欠損のため不明	
口部 整形内面					・横ナデ ・口縁部は垂れ下り部内面ヘラ削り。 ・横ナデまたは横方向のヘラ磨き。			
体部 形態							・短い脚部ですそまでなだらかにひろがる端面は少し稜をもつが円味を持つ。	
体部 文様							・四線文・円窓。	
体部 整形外面	・縦方向の刷毛目		・縦方向に刷毛目		欠損のため不明		・ ・ 横ナデ	
体部 整形内面			・剝離のため不明				・	
底部	・あげ底の底部 ・木葉痕		・焼成前に穿孔		・欠損のため不明			
色調	・茶褐色		・茶褐色		・黄灰色		・淡茶褐灰色	
胎土	・0.1～0.5の砂粒含有		・0.1の砂粒僅かに含有		・0.1～0.3の砂粒含有		・0.1～0.2の砂粒少量含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・底部全面黒斑		・外面黒斑				・外面黒斑	

上器 No.	101	101	102	102	36 / 102	103	29 / 102	104
種類 / 摘要	器台		高杯 A1		高杯 A1		高杯 A2	
法量(cm) 口縁径	欠損のため不明		32.15		36.2		16.6	
法量(cm) 器高	13.55（現存値）		4.45（現存値）		4.0（現存値）		6.8（現存値）	
法量(cm) 腹径							17.25	
法量(cm) 底径	4.35		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
山上地区	G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑		G－4－B 第Ⅰ大形土坑	
杯部 形態			・僅かに外方に傾むく杯部で端部内方に肥厚する。		・直口の杯部で端部内方に肥厚し上端に凹線文を持つ。		・ゆるやかにカーブをえがき内弯し肥厚する。	
杯部 文様	欠損のため不明		・凹線文		・凹線文		・凹線文	
杯部 整形外面			・一部荒い刷毛目		・横ナデ		・縦方向にヘラ磨き	
杯部 整形内面			・荒い刷毛目		・横面ヘラ		・縦方向にヘラ磨き	
脚部 形態								
脚部 文様	・凹線文		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
脚部 整形外面								
脚部 整形内面	・刷毛目							
底部								
色調	・茶褐色		・黄灰色		・黄灰色		・青灰黄褐色	
胎土	・0.1～0.4の砂粒多量に含有		・0.1～0.2の砂粒含有		・0.1の砂粒僅かに含有		・0.1～0.5の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
							・内外共に煤付着	
備考								

土器No.	36 102	105 102	106 102	107 102	108 102
種類 / 摘要	高杯 B		高杯 C₂	脚部 A₃	脚部 A₂
法量(cm) 口縁径	18.55		21.45	欠損のため不明	欠損のため不明
法量(cm) 器高	6.25（現存値）		7.05（現存値）	8.2（現存値）	8.4（現存値）
法量(cm) 腹径	22.25		欠損のため不明		
法量(cm) 底径	欠損のため不明			7.6（脚部裾径）	8.15（脚部裾径）
出土地区	G－4－B 第1大形土坑		G－4－B 第1大形土坑	G－4－B 第1大形土坑	G－4－B 第1大形土坑
杯部 形態	・口縁の上端は平らで内弯する。		・口縁部は水平に折れ曲り端部は上方に僅かに立ち上りを持つ。		
杯部 文様				欠損のため不明	欠損のため不明
杯部 整形外	・横方向の刷毛目		・縦方向に刷毛目		
杯部 整形内	・ナデ		・頸部ヘラ削り		
脚部 形態				・短い脚部で裾はゆるやかに外弯する端面は丸い。	・柱状部から裾までなだらかにひろがり端面に凹線文
脚部 文様				・脚部裾に凹線文	
脚部 整形外	欠損のため不明		欠損のため不明	・縦方向ヘラ磨き	・縦方向ヘラ磨き
脚部 整形内				・上半部絞り目 ・下半部ヘラ削り	・上半部絞り目 ・下半部ヘラ削り
底部					
色調	・茶褐色		・淡黄褐色 中核—黒色	・茶褐色	・淡黄白褐色
胎土	・0.1～0.3の砂粒含有		・0.1～0.2の砂粒含有	・0.1～0.2の砂粒僅かに含有	・0.1～0.3の砂粒含有 ・雲母含有
質	・良好		・良好	・良好	・良好
備考	・外面黒斑あり			・裾部内外共に黒斑	・脚部裾に黒斑

土器 No.	102	109	102	110	102	111	102	112
種類 / 摘要	脚部 A1		壺 A2		壺 A3		壺 D1	
法量(cm) 口縁径	欠損のため不明		18.65		14.25		10.15	
法量(cm) 器高	11.85（現存値）		9.45（現存値）		6.2（現存値）		14.4（現存値）	
法量(cm) 腹径			欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量(cm) 底径	12.3（脚部径）							
出土地区	G－4－B 第Ⅰ大形土坑		F－4－N 東第Ⅱ溝		F－4－N 東第Ⅱ溝		F－4－N 東第Ⅱ溝	
口頸部（杯部） 形態			・太く短い頸部に口縁が少し開がり端部は丸く下方に折れ曲っている。		・短く立つ頸部に斜めに外反する口縁部、やや外側下方に肥厚する。		・頸部が細くしまり円味を持ち口縁近くで内弯する。	
口頸部（杯部） 文様	欠損のため不明		・口縁端面に櫛描簾状文 ・頸部に同直線文と同波状文		・口縁端面外側ヘラによる刻目文		・凹線文・櫛描波状文	
口頸部（杯部） 整形 外			・一部刷毛目		・一部刷毛目		・剝離のため不明	
口頸部（杯部） 整形 内			・剝離のため不明		・剝離のため不明		・剝離のため不明	
体部（脚部） 形態	・緩やかでなだらかに広がり端部は上下に肥厚する。							
体部（脚部） 文様			欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
体部（脚部） 整形 外	・縦方向ヘラ磨き							
体部（脚部） 内	・上半部絞り目一部ヘラ削り ・下半部横方向荒い刷毛							
底部			・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明	
色調	・暗茶褐色 中核－淡黄茶褐色		・灰黄褐色		・暗灰黄色		・暗茶褐色	
胎土	・0.2～0.3の砂粒含有		・0.1～0.4の砂粒含有		・0.1～0.5の砂粒多量に含有		・0.2～0.3の砂粒多量に含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・外面煤付着				・内面に煤付着 ・内外共に剝離激しい。			

土器No.	102	113	102	114	30 / 102	115	35 / 102	116
種類 / 摘要	壺 B_1		壺 B_1		壺 E		壺	
法量(cm) 口縁径	26.6		27.75		6.85		欠損のため不明	
法量(cm) 器高	4.5（現存値）		6.45（現存値）		10.75		6.4（現存値）	
法量(cm) 頸径	欠損のため不明		欠損のため不明		9.5		20.05	
法量(cm) 底径					2.65		欠損のため不明	
出土地区	F－4－N 東第II溝		F－4－N 東第II溝		F－4－N 東第II溝		F－4－N 東第II溝	
口頸部 形態	・直口の口縁で端部内は肥厚している。		・頸部は漏斗状に開き口縁部は上方に立ち上る受口状のもの。		・口縁端部は僅かに下方外面に折れ曲っている。			
口頸部 文様	・凹線文		・口縁受口状の部分に凹線文				欠損のため不明	
口頸部 整形外	・	横ナデ	・	剝離のため不明	・剝離のため不明			
口頸部 整形内	・		・		・横ナデ			
体部 形態					・腰は低くはり出す。			
体部 文様	欠損のため不明		欠損のため不明				・断面三角形の貼り付け凸帯の上へ刻目文	
体部 整形外					・剝離のため不明		・	剝離のため不明
体部 整形内					・横方向のヘラ磨き		・	
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・ヘラ磨き		・欠損のため不明	
色調	・淡白黄灰褐色		・淡灰黄褐色		・淡灰黄色		・茶褐色	
胎土	・0.1～0.2の砂粒含有 ・雲母含有		・0.1～0.3の砂粒含有		・0.1～0.3の砂粒含有		・0.2～0.9の砂粒多量に含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考					・頸部に2孔1対の孔あり。			

土器No.	34/102	117	—/102	118	36/102	119	33/102	120
種類 / 摘要	鉢 C		鉢 D		脚部 C		甕 C	
法量(cm) 口縁径	17.6		19.2		欠損のため不明		36.4	
法量(cm) 器高	2.75（現存値）		3.6（現存値）		8.0（現存値）		10.85（現存値）	
法量(cm) 胴径	欠損のため不明		21.0				欠損のため不明	
法量(cm) 底径			欠損のため不明		17.5（脚部裾径）			
出土地区	F−4−N 東第II溝		F−4−N 東第II溝		F−4−N 東第II溝		F−4−N 東第II溝	
口頸部（杯部） 形態	・腰に稜を持つ直口の鉢と思われる。		・腰に稜を持ち、内方にやや傾斜して立つ段状口縁部を持つ。				・口縁は「く」の字形に外反し端部は上方に僅かに肥厚する。	
口頸部（杯部） 文様	・刻目文・櫛描直線文・同波状文		・円形浮文		欠損のため不明		・頸部には貼り付けによる指頭圧痕文	
口頸部（杯部） 整形 外	・横ナデ		・横ナデ				・横ナデ	
口頸部（杯部） 整形 内	・横ナデ		・横ナデ				・横ナデ	
体部（脚部） 形態					・短い脚部ですそまでなだらかにひろがる。			
体部（脚部） 文様	欠損のため不明		欠損のため不明		・有孔		横ナデ	
体部（脚部） 整形 外					・剥離のため不明			
体部（脚部） 整形 内					・剥離のため不明			
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明				・欠損のため不明	
色調	・淡黄白色 中核—灰色		・黒色～暗茶褐色		・灰茶褐色		・明茶灰褐色	
胎土	・0.1～0.3の砂粒少量含有		・0.1～0.3の砂粒含有		・0.1～0.3の砂粒多量に含有		・0.1～0.3の砂粒含有 ・雲母含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・外面に黒斑				・外面に煤付着			

土器 No.	102 — 121	102 — 122	102 — 123	102 — 124
種類 / 摘要	底部	底部	底部	底部
法量 (cm) 口縁径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
法量 (cm) 器高	3.75（現存値）	3.05（現存値）	9.5（現存値）	5.2（現存値）
法量 (cm) 腹径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
法量 (cm) 底径	6.95	6.65	7.5	4.5
出土地区	F－4－N 東第II溝	F－4－N 東第II溝	F－4－N 東第II溝	F－4－N 東第II溝
口頸部 形態				
口頸部 文様	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
口頸部 整形外				
口頸部 内				
体部 形態				
体部 文様				
体部 整形外	・横方向ヘラ磨き	・縦方向にヘラ磨きと刷毛目	・縦方向にヘラ磨き	・ヘラ削り
体部 内	・ヘラ？	・不明	・斜め・縦方向に刷毛目	
底部	・外面ヘラ削り ・木葉底	・ヘラ ・僅かではあるがあげ底状である ・木葉底	・ヘラ	・内面指圧痕
色調	・淡灰茶褐色	・暗茶褐色	・黄灰褐色	・黄褐色
胎土	・0.1～0.4の砂粒含有	・0.1～0.3の砂粒多量に含有	・0.1～1.0の砂粒含有	・0.1～0.2の砂粒含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考		・底部内外共に黒斑		・底部に黒斑

土器No.	30/103 — 125	103 — 126	30/103 — 127	31/103 — 128
種類	壺 A	壺 A1	壺 A2	壺 A2
法量(cm) 口径	欠損のため不明	15.95	22.0	22.55
器高	12.05（現存値）	9.05（現存値）	21.35（現存値）	8.05（現存値）
最大腹径	欠損のため不明	欠損のため不明	29.6	欠損のため不明
底径			欠損のため不明	
出土地区	F－4－N 第II大形土坑	F－4－N 第II大形土坑	F－4－N 第II大形土坑	F－4－N 第II大形土坑
口頸部 形態	・僅かの広がりを持った長い頸部、水平に折れ曲る口縁を持つものと思われる。	・漏斗状に開く口頸部	・太く短い頸部に口縁が僅かに開き端部は下方へ肥厚する。	・太く短い頸部に口縁が僅かに開き端部は下方へ張出す。
口頸部 文様	・5帯の横描直線文	・口縁端面刻目文 頸部横描波状文 内面竹管文	・頸部外面横描波状文 同直線文	・口縁部端面に内外共に横描波状文 ・頸部に同直線文
口頸部 整形外	・ナデと思われる。	・荒い刷毛目	・横ナデ	・剝離のため不明
口頸部 内	・頸部絞り目	・横方向の荒い刷毛目	・剝離のため不明	・横ナデ
体部 形態			・腹が中頃で強く張出すものと思われる。	
体部 文様			・横描直線文	
体部 整形外	欠損のため不明	欠損のため不明	・ ・ ・ 剝離のため不明	欠損のため不明
体部 内				
底部	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明
色調	・暗灰黄色	・黄茶褐色	・黄茶褐色	・黄褐色
胎土	・0.1～0.3の砂粒含有	・0.1～0.3の砂粒含有	・0.1～0.3の砂粒含有	・0.1～0.2の砂粒含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考			・内面剝離のため不明	

土器No.	129	130	131	132
種類	103	103	103	103
摘要	壺 A2	壺 A3	壺 D2	壺 D1
法量(cm) 口縁径	21.45	18.05	11.25	9.2
法量(cm) 器高	9.7（現存値）	5.15（現存値）	11.15（現存値）	9.0（現存値）
法量(cm) 胴径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
法量(cm) 底径				
出土地区	F－4－N 第II大形土坑	F－4－N 第II大形土坑	F－4－N 第II大形土坑	F－4－N 第II大形土坑
口頸部 形態	・太く直立する頸部に水平に折れ曲る口縁部、口縁端は上方に肥厚する。	・太く短い頸部に口縁は僅かに開き端部は下外方に張出す。	・頸部が細くしまり斜めに広がる。口縁近くは僅かに内弯する。	・頸部は細くしまり、ほぼ直立し口縁近くは少しではあるが内弯する。
口頸部 文様	・頸部には貼り付けによる指頭圧痕文	・口縁内外に竹管文	・口縁端・円形浮文 ・口縁から頸部にかけて櫛描直線文と同波状文 ・頸部断面三角形の貼り付け凸帯	・凹線文・ヘラによる刻目文
口頸部 整形外	・縦方向に刷毛目	・縦方向に荒い刷毛目	・剝離のため不明	・剝離のため不明
口頸部 整形内	・横ナデ	・横方向に荒い刷毛目	・剝離のため不明	・剝離のため不明
体部 形態				
体部 文様				
体部 整形外	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
体部 整形内				
底部	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明
色調	・黄褐色 中核－淡灰色	・淡黄赤褐色 中核－淡灰色	・黄褐色	・黄赤褐色
胎土	・0.1の砂粒少量含有	・0.1～0.2の砂粒含有	・0.1～0.3の砂粒含有	・0.1～0.4の砂粒含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考		・内面と外面の竹材が異質である。	・外面に煤付着	

土器 No.	30/103	133	30/103	134	34/103	135	34/103	136
種類 / 摘要	壺 E₁		鉢 B		鉢 A		脚 部	
法量(cm) 口縁径	15.95		16.0		19.2		欠損のため不明	
法量(cm) 器高	17.6		17.4		4.95（現存値）		2.8（現存値）	
法量(cm) 腹径	28.15		19.75		19.15			
法量(cm) 底径	8.35		10.05（脚部裾径）		欠損のため不明		12.65	
出土地区	F－4－N 第II大形土坑		F－4－N 第II大形土坑		F－4－N 第II大形土坑		F－4－N 第II大形土坑	
口頸部（杯部） 形態	・口縁端部を外側へ折り返した段状口縁部を持つ。		・椀形の器体で口縁内部が僅かに肥厚し下っている。		・口縁部は斜めに外反するが、内外ともに円味をもち端部は丸い。			
口頸部（杯部） 文様	・口縁端面・凹線文		・凹線文 ・口縁端部有孔				欠損のため不明	
口頸部（杯部） 整形外	・	横ナデ	・上半部横方向ヘラ磨き ・下半部縦方向ヘラ磨き		・細く横方向にヘラ磨き			
口頸部（杯部） 整形内	・	横ナデ	・横方向ヘラ磨き		・横ナデ			
体部（脚部） 形態	・腰が低く張出す。		・柱状部は短く裾までなだらかに広がり端部は上下に肥厚する。				・裾は内傾する脚部で端面は丸い。	
体部（脚部） 文様	・櫛描直線文と同波状文		・柱状部ヘラによる凹線文 ・裾部刻目2ヶ所 ・胴部外に竹管文		欠損のため不明		・穿孔・凹線文	
体部（脚部） 整形外	・横方向ヘラ磨き		・	縦方向ヘラ磨き			・	ナデ
体部（脚部） 整形内	・腰の部分横方向ヘラ磨き腰以下横方向刷毛を施し縦方向に刷毛目		・	縦方向ヘラ磨き			・	ナデ
底部	・ヘラ磨き				・欠損のため不明			
色調	・淡灰茶褐色		・黄灰褐色		・黄褐色		・暗茶灰褐色	
胎土	・0.1～0.3の砂粒含有		・0.1～0.5の砂粒含有		・0.1～0.2の砂粒含有		・0.1の砂粒少量含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考			・円板充填法 ・椀と脚部に黒斑		・外面に煤付着		・裾部黒斑	

土器 No.	33 / 103	137	103	138	103	139	30 / 103	140
種類 / 摘要	甕 A		甕 C		甕		蓋	
法量 (cm) 口縁径	11.95		35.45		欠損のため不明		12.75 (復径)	
法量 (cm) 器高	8.7 (現存値)		23.8 (現存値)		22.8 (現存値)		8.0	
法量 (cm) 腹径	11.35		43.25		欠損のため不明			
法量 (cm) 底径	欠損のため不明		欠損のため不明		9.55		3.1 (つまみ部)	
出土地区	F－4－N 第Ⅱ大形土坑		F－4－N 第Ⅱ大形土坑		F－4－N 第Ⅱ大形土坑		F－4－N 第Ⅱ大形土坑	
口頸部 形態	・口縁部は外反するが内外ともに円味を持ち端部は丸い。		・斜めに外反する口縁で内面頸部及び端部は丸味を持ち肥厚する。				・つまみを持ち笠形をなす、頂部端部は丸味を持つ。	
口頸部 文様			・口縁端面刻目					
口頸部 整形外	・	横ナデ	・	横ナデ	欠損のため不明		・縦方向ヘラ磨き	
口頸部 整形内	・		・				・横ナデ	
体部 形態	・腹径は口径よりも小さい。		・肩から広がり緩やかで丸く張出し底部に続くと思われる。					
体部 文様								
体部 整形外			・縦・横・斜めに荒い刷毛目		・一部刷毛を施してからヘラ削りとヘラ磨き			
体部 整形内			・肩部斜め方向に荒い刷毛目		・横方向・縦方向に刷毛目			
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・ヘラ			
色調	・黄灰色		・淡黄茶褐色		・淡黄茶褐色		・暗灰黄褐色	
胎土	・0.1～0.3の砂粒僅かに含有		・0.1～0.3の砂粒含有・雲母含有		・0.1～0.3の砂粒含有		・0.1～0.2の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考			・内外共に煤付着				・裾部分内面に煤付着	

土器 No.		25 第17図	141	25 第11図	142	25 第12図	143	25 第15図	144
種類 / 摘要		壺		壺 A₂		底部		高杯	
法量 (cm)	口縁径	欠損のため不明		11.75		欠損のため不明			
	器高	24.75（現存値）		20.35		14.8（現存値）		20.0（現存値）	
	腹径	23.75		17.15		欠損のため不明			
	底径	欠損のため不明		4.65		9.15		17.15（脚部裾径）	
出土地区		F－4－N 第II大形土壙		F－4－N 第7号土壙墓		F－4－N 第8号土壙墓		G－4－B 第1号井戸	
口頸部	形態			◦短い筒状の頸部に水平に折れ曲る口縁部を持つ、口縁端は上下僅かに肥厚する。				◦段状口縁部を持つものであろう。	
	文様			◦口縁部外端面に凹線文 ◦内面端にも何かの文様があると思われる。					
	整形外	欠損のため不明		◦		欠損のため不明		◦腰部は横方向の細かいヘラ磨き。	
	内			◦ 剝離のため不明				◦腰部から柱部にかけて縦方向のヘラ磨き。 ◦細い不規則なヘラ磨き。	
体部	形態	◦頸部よりなだらかに肩部へ張り、中位上に最大径をもつ。以下そのまま張りをもち中位下より底部へなだらかに続く。		◦ほぼ円形で腰位は中頃にある。				◦長い柱状部を持ち中空である。裾までなだらかにひろがり端部は上下に肥厚する。	
	文様	◦肩部に櫛描波状文		◦櫛描直線文と同波状文が交互に入る。				◦凹線文状の直線文 ◦円孔上下段にあり。	
	整形外	◦全面に縦方向の荒い刷毛目。		◦剝離のため不明		欠損のため不明		◦縦方向のヘラ磨き。 ◦裾部は横方向のヘラ磨き。	
	内			◦ヘラ磨き状のヘラ痕				◦横方向のヘラ削りを施した後に横ナデ	
底部		◦不明		◦ナデ		◦外面はヘラ削りをし、内面は、ヘラナデをし指圧で絡まっている。			
色調		◦外面—黄茶褐色 内面—黒色		◦外面—黄灰淡褐色 内～中核—暗灰色		◦淡褐黄灰色～淡暗灰色		◦外面—暗茶褐色 中～内面—黄灰色	
胎土		◦0.1～0.5の砂粒含有		◦0.1～0.2の砂粒含有		◦0.1～0.3の砂粒含有		◦0.1～0.3の砂粒含有 ◦雲母極めて少量含有	
質		◦良好		◦良好		◦良好		◦良好	
備考		◦東海地方か？		◦腰部に6.2×6.4の黒斑あり。 ◦全面ともに剝離著しい。		◦方形周溝墓の陸橋部の土壙墓内に底部を上にして出土しているので、何かの蓋として使用していたのであろう。		◦内面には煤が付着 ◦内面に焼成前の押圧痕が多数みられる。 ◦円板充塡法	

第2節　土師器

F－7－E・F地区出土の土師器

F－7－E・F地区出土の土師器は、さきの弥生式土器より量は少ないが、第3層黒色粘土層・溝Ⅰ－S・溝Ⅰ－N・溝Ⅱ・沼地状落ち込みの各遺構より出土した。以下各遺構別に記述を進める。

第3層・黒色粘土層

高杯型土器（図版106－21）　21は、脚部のみであるが、柱部が中空で裾部へなだらかに広がり、裾部端で大きく広がる。端面に稜をもち、外面に縦方向のヘラ磨きを行う。

器台型土器（図版106－17・18）　17・18はいずれも脚部のみであるが、17が短い柱部をもち、裾部へ小さく開き、端部で僅かに内弯する。18は直線的に広がり、外面にヘラ磨き、内面に刷毛目を行う。

溝Ⅰ－S

壺型土器（図版106－1）　1は、二重口縁型の壺、筒状の頸部から大きく外反し、小さな段をもってさらに外反し端部で一層反る。

甕型土器（図版106－3～5）　3は、口縁部が緩やかに反り、体部は肩の張らないなだらかな形をなし、荒いタタキ目を行う厚手のもの、4は、丸味のある頸部から口縁部が内弯ぎみに立ち上がり、端部でつまみ上げられている。肩部内面はヘラ削りはみられない。5は、口縁部が内弯ぎみに立ち上がり、端部で内面肥厚する。肩部内面にヘラ削りを行う。

鉢型土器（図版106－7・8・16）　7は、平底底部より直線的に斜上方へ立ち上がる器形をなす。口縁部内面に稜をもち、端面へ器壁が薄くなる。外面のタタキ目は、口縁部に横方向、体部・底部に右上がりに行う。内面は刷毛目調整を行う。8は、器壁に指頭圧痕が残る突出平底より大きく広がる浅鉢型をなし、口縁部は稜をもってさらに広がる。外面に右上りのタタキ目、内面にナデを行う。16は、台付鉢脚部。

小型壺型土器（図版106－10）　10は、口縁部が小さくくびれる頸部より外反し、体部は最大径を中位上にもち、外面に右上がりのタタキ目が残り、底部はヘラ削りを行った平底。

高杯型土器（図版106－19・20）　いずれも脚部のみであるが、19は小型高杯の脚部と思われ、内弯ぎみに広がり、端面で僅かに内面肥厚する。外面に縦方向のヘラ磨きを行なう。20は、裾広がり中実柱部より、稜をもって裾部へ大きく広がる。

溝Ⅰ－N

小型壺型土器（図版106－12）　12は、頸部が細くしまり立ち上がった口縁部。体部は扁平球形の丸底である。整形は風化が著しく

定かでないが、ヘラ磨きと思われる。

小型丸底坩（図版106—13・15）　13は、扁平球形の体部より、屈曲して斜上方へやや広く短くのびる口縁部をもつ。15は、13より口縁部が内弯ぎみに長く立ち上がる。

溝Ⅱ

甕型土器（図版106—6）　6は、口縁部が丸味のある頸部より外反し、中位より内弯ぎみに立ち上がり、端部で内面肥厚する。

小型壺型土器（図版106—11）　11は、口縁部が直口ぎみに短く立ち上がり、体部は最大径付近で鋭く折れ、底部へ丸くカーブを描く器形。底部は尖底風を成しヘラ削りが行なわれている。

沼地状落ち込み

甕型土器（図版106—2）　2は、口縁部径が体部最大径に比べて大きく、器壁が器形に比べて厚い（0.7cm）。外面に右上がりのタタキ目を行う。

鉢型土器（図版106—9）　9は、非常に精製された胎土をもち、口縁部が2段に屈曲して立ち上がる。体部は広く浅い、内外面に細かなヘラ磨きを行なう。

高杯型土器（図版106—23）　23は、中空のやや太い柱部が裾部へ徐々に広がり、裾部で丸く大きく広がる。外面にヘラ磨き、刷毛目を行なう。

H—5—I・M地区出土の土器

II—5—I・M地区より出土した土器は、包含層・黒色砂質粘土層より唐古第Ⅳ様式、A—1地区の溝状遺構より唐古第Ⅴ様式(新)、A—10地区古墳時代前期の壺棺が出土した。

溝状遺構

壺型土器（図版105—1・2・3）　1は、太く短い頸部、口縁端部が僅かに外反し端面丸い。2は、筒状の頸部が僅かに外反し、端面は丸い。3は、体部が突出平底より大きく張り出し、扁平な球形をなす。

壺棺墓

壺棺（図版105—4）　4は、遺構の項で記述したように壺棺として使用されたものである。非常に風化著しく、また底部は意図的に欠いたのか欠損のため不明確である。口縁部は、肩部より短く立ち上がり大きく外反し端部に稜をもち、肩部と頸部の境に断面三角形の凸帯をめぐらしヘラで刻目文を施す。体部は最大径が中位にあり上・下の張りが等しい球形を成し、外面は全体にヘラ磨きを施す。

5は、二重口縁型土器、段をもって外反し、端部で水平にのび端面は稜をもち丸く終る。円形竹管浮文を施す。壺棺4の口縁部付近

より出土した。

H－3－N・P地区出土の土師器

H－3－N地区より大・小7基の井戸状遺構が検出された。その内5基より土器が出土したが、主だったものを記述し、また同H－3－P地区竪穴住居跡の土器を記述する。

井戸15号

甕型土器（図版107－1・2）　1は、口縁部端部が短く直立して立ち上がり、内面肥厚する。端部外面に櫛描直線文を施す。外面に刷毛目・内面にヘラ削りを行なう。2は、口縁部が中位より内彎し、端部で両面に僅かに肥厚し丸く終る。体部は肩部が丸味をもち、外面に刷毛、内面にヘラ削りを行う。肩部外面に2カ所の粘痕が残る。

井戸16号

甕型土器（図版107－4）　4は、口縁部が「く」の字形に外反し、中位外面で肥厚する。体部は張りの小さい胴長形をなし、底部の稜線までタタキを行う厚手のもの。

鉢型土器（図版107－3）　3は、他に類例の少ない器形をなし、鉢より椀・杯に似たものである。器形は、ヘラ削りを行なった小さな底部より大きく広がり、中位より直線的に立ち上がる。器壁は凹凸が著しく厚手、外面にヘラ磨きを行なう。他に柱部の貫通する器台片が1点出土している。

井戸8号

鉢型土器（図版107－6）　6は、口縁径33cmの大鉢。口縁部は丸味のある頸部より小さく外反する。体部は張りの小さい深鉢形をなし、タタキ目の上にヘラ磨きを行う。他に直口壺型土器・高杯型土器・甑型土器・小型丸底坩の小破片が出土している。

P－19

壺型土器（図版107－5）　5は、直口口縁部をもち、中位上部より僅かに外反し、肩部はなだらかに落ちる。色調が赤褐色の土器。

竪穴住居跡

高杯型土器（図版107－7）　7は、杯底部が小さく斜上方へのび、稜をもって大きく開く杯部。脚部は中実の柱部より、小さく開く裾部をもつ。器壁外面に縦方向のヘラ磨きを行なう。

H－3－G地区・井戸4号出土の土師器

溝Ⅰ－3（大溝）の東約10mより検出された井戸4号より、2層にわたって、甕型土器4点・壺型土器・椀型高杯型土器各1点と土錘（土製品の項）が出土した。

第3層

甕型土器（図版107－11）　11は、口縁部が「く」の字形に外反し、中位外面で僅かに肥厚する。体部は丸味をもち、荒いタタキを

行う厚手。

椀型高杯型土器（図版107－13）　13は、杯部底部より緩やかなカーブで立ち上がり、脚部は裾部を欠くが、短い柱部をもち、全面にヘラ磨きを行なう。

第2層

甕型土器（図版107－8～10）　8は、口縁部が「く」の字形に外反し、中位より僅かに内湾ぎみにのび、端部は上方へ小さく肥厚する。体部は長胴形をなすと思われ、外面に縦・横に刷毛、内面にヘラ削りを行なう。9・10は、口縁部が体部に比較して小さく、且つ短い。体部は最大径が非常に大きく、球形に近い、外面に一部タタキ目を残すが、ヘラ磨きを行う。内面にはヘラ削りのみられない厚手。

壺型土器（図版107－12）　12は、口縁部を欠くが、上方に開く直口口縁と思われる。体部は最大径が下位にある扁平球形をなし、外面に細かなヘラ磨きを行なう。

H－3－G地区出土の土器

H－3－G地区検出の大形溝状遺構（通称「大溝」、以後大溝と呼称する）の最下層より、「弥生式土器に後続する」土器が一括で多量に出土した。

溝Ⅱ－3（大溝）

その出土状態は遺構編のごとく、大溝最下層の厚さ0.5mの暗灰色粗砂層の中に限られて出土し、その上層からは全く遺物が検出されなかった。このことは最下層の堆積土層に、非常に多量の土器が一度に廃棄され、あるいは流れ込み、その後、自然の変化等によりいっきに大溝が埋没したと考えられるものである。

この一括土器は、完形品約100点を含み、コンテナバットに約150箱以上にもなり、また器種も、壺・甕・高杯・鉢・甑・器台などほぼ同時期の全器種が出土しており、三島地方におけるこの時期の貴重な資料となるものである。

形態分類　A
壺型土器

やや筒状の頸部に外反する口縁をもち、口縁部の器壁は厚くがっしりしている。頸部より口縁部にかけて水平に広がるものから、やや斜上方へ広がり、口縁端部内面はつまみあげられ、外端面には横ナデ、簾描波状文、刻目等施されたものがある。体部整形にはヘラ磨きが施されているものもあるが、その多くは刷毛調整である。

B_1

俗に二重口縁と呼ばれるもので、口縁部内外に文様は施されず、ヘラ磨きで整形されるものが多い。その方向は一定せず、横・縦・斜方向に整形されている。

B_2　装飾のある二重口縁を有するもの。口縁部には、櫛描直線文・波状文・円形浮文・竹管文・刻目文・刺突文等の文様が施されている。

また、肩部にも同様の装飾があるものが多い。口縁上方の部分は急な角度でたち上がるものと、緩やかな角度でたちあがるものがあり、そのために口径の大小がある。

B_3　口縁部外面に突帯状のものが付き二段となるが、内面には段がないものもある。

C_1　外上方へ広がる直口縁のもので器高30cm前後の大型のもの。口縁端部は丸くおさまるもので刻目等を施し、体部と口縁部の継ぎ目にも刻目風の文様を有し、その内面には絞りが残っているものもある。また口縁部の高さは大きな体部に比べ約5cm前後のものである。

C_2　形態はC_1と同様であるが、体部に比べ口縁部が大きく、ほぼ同等の直径のもので中型のもの。口縁部は規則正しく放射状にヘラ磨きが施してある。

C_3　形態はC_1と同様で小型のもの。

甕型土器　A_1　器高20cm以上の大型で在地のもの。「く」の字形に外反する口縁をもち端部に一部刻目が施されるものがある。また面をもつものと丸くおさまるものもあり、体形は、最大径が中位上でやや長形のものから、中位でやや円形のものまである。器壁の厚みは約 0.4cmから0.7cmで全体的に厚さがあり、タタキの巾が広いものである。

A_2　形態はA_1と同様であり、器高15～20cmの中型品で在地のもの。

A_3　形態はA_1と同様であり、器高15cm以下の中型品で在地のもの。

B　「く」の字形に鋭く外反し、口縁端はつまみあげられ稜のつくもので、体部最大径は中位にあり、器壁の厚みは、0.2cmから0.4cmで薄く、タタキも細くその上から刷毛のあるものもあり、色調は茶褐色を呈し、金・黒雲母を含む胎土をもち、いわゆる河内産「庄内式」といわれるもの。

C　「く」字形に外反し、器壁は薄いものであるが、Bとは色調・胎土が異なり在地のものと考えられるもの。

D　他地方のもので「S字状」口縁と呼ばれるもの。

E　他地方のもので「受口状」口縁と呼ばれるもの。

高杯型土器　A　杯部が水平かやや内湾してのび、上部との間にひとつの稜をもって口縁部までのび、内反するものや外反するものと直線的にのびる

ものもある。これらはすべて同一系統のものと思われる。細かい縦方向のヘラ磨きが施され、脚部は柱部下部より屈曲して広がるもの。

B　杯部下半部が水平に小さくのび、中位で外方に屈曲し大きく広がるものや、中位で確実な面をもつもので内側にはふたつの稜あるいは段を有するもの。脚部は柱部下部より屈曲し、一度段をもって広がるもので、細かいヘラ磨きが多用されているもの。

C　杯部下半部はやや内弯し、稜をもってたちあがりながら1/4円形の大きなカーブをもって外反し、端部に面をもつもの。

D　杯部下部と口縁端部に、それぞれ面をもって外反し、その面には、円形浮文、刻目などの装飾をもち、丁寧に仕上げられているもの。

E　小さな椀形の杯部をもつもので、脚部は大きく裾まで広がり、そのほとんどが、中・小型品である。

器台型土器　A　浅い皿部に裾広がりの脚部をもつもので、口縁径、器高が約10cm前後の小型のもの。柱部は充実し短かく広がるものと、皿部の接合面から広がるものがある。外面にヘラ磨きが多用され、裾部はほとんど刷毛である。皿部内側は、放射状のヘラ磨きが施されている。

B　他地方のもので、鼓の形を模した鼓形器台と呼ばれるもの。精巧な作りで、内面の一部を削っている。

鉢型土器　A_1　小型のもので、口縁部に比べて体部が大きいもので、頸部にくびれをもって直線的ないし、内弯ぎみにのびるもの。外面にタタキのあるものからないものまである。

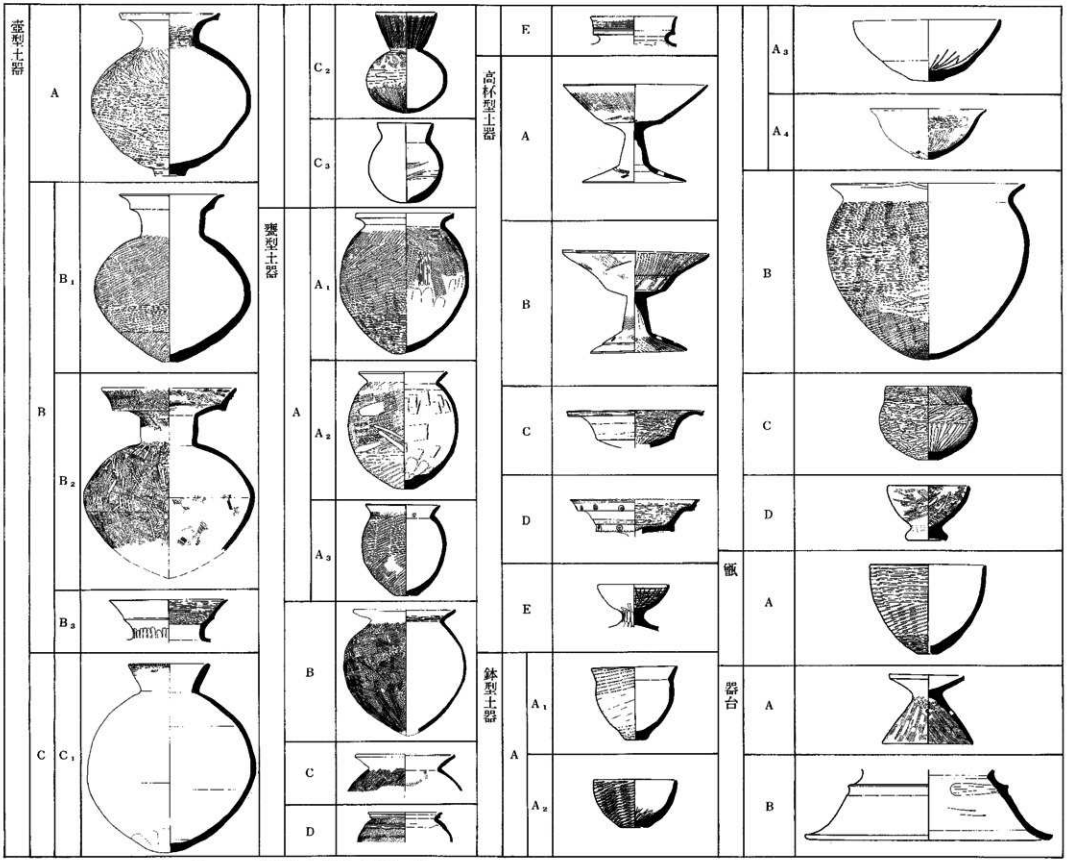
A_2　小型のもので、底部より内弯ぎみに口縁端部までのび、丸くおさまるもの。外面はタタキが施してある。

A_3　中型のもので、底部より内弯ぎみに口縁端部までのび、外面に一部タタキがあるものもあるが、そのほとんどはヘラ磨きである。

A_4　中型のもので、頸部にややくびれをもって広がり、外面はすべて丁寧なヘラ磨きが施され、胎土も良好なものが多い。

B　器高約30cm以上の大型のもので、頸部はゆるやかな「く」の字形に外反し注口をもつもので、外面にタタキが施されているものはほんの一部で、ほとんどはヘラ磨きである。内面はヘラ磨きが施されている。

C　口縁部は短く直線的にのび、丸くおさまり、体部は丸みをもつもので、外面は丁寧なヘラ磨きが施されている。



第9表　H－3－G地区　溝Ⅱ－3（大溝）土師器の形態と呼称

D　　A_1、A_2の小・中型の鉢に脚台を加えたもので、その継ぎ目に指頭圧痕のあるもの。

甕　　A　　底部よりやや内弯ぎみないし、直線的にのび、底部に孔のあるもの。口径は12cm～16cm前後で、器高は10cm前後の大きさに限られている。

編年試案

遺構編で述べたように、H—3地区で検出された大溝からは多量の土器が出土している。これらの土器は、厚さ約 0.5mの溝の最下層から出土したもので一括の遺物である。

調査中すでに、器壁が厚く荒いタタキ目を持った土器に混じって、外面に細いタタキ目を施し、内面にヘラ削りのみられる、いわゆる庄内式の甕が含まれていることが注目された。この結果、庄内式に併行する時期に、東奈良の集落で製作され使用された土器を明らかにし得るのではないかとの強い期待を持ったのであった。

しかし、その後整理が進むにつれ、庶古第5様式に含まれるものや、内面をヘラ削りした薄手の甕で、外部から持ち込まれたことが明らかなものの内にも、庄内式だけでなくやや新しい時期のものが含まれていることや、わずかではあるが布留式とみられるもののあることが明らかとなった。したがって圧倒的に多数を占める厚手の土器についても、当然のことながら、弥生時代後期から布留式に至るまでの間のものが含まれていると予想される結果となったのである。出土状態だけから一括遺物として単純にあつかえないものであり、これらの土器を如何に分け得るのかが問題となった。

最も数の多い甕について観察した結果、全体のプロポーション、タタキ目、口縁部もさることながら、各々底部に大きな特徴を持っていることが明らかとなった。

すなわち、第5様式にみられる突出した平底、突出せずに器壁からそのまま続く平底、平底の周辺をヘラ削りするもの、底にもタタキ目が付けられ、中心線上に底部が位置しない状態のものすら見うけられるもの、尖底のもの、丸底のものなどである。しかも各々の特徴を持ちながら、第5様式に含まれると考えられるものと、布留式に含まれると考えられるものを除いて、他はすべて大中小3様の大きさのものがあることが明らかとなった。これは少なくとも製作手法が共通する甕のセットとしてとらえ得るものであろう。

さらに甕と基本的に製作法が似ている鉢や甑の底部を観察してみ

ると、甕に見られると同様のものがあり、これを甕以外のセットとして加えることが可能となった。また壺の一部にも同様のことが言えるものがあって、少なくとも甕、鉢、甑、壺については、すべてではないが、セット関係としてとらえ得るもののあることが判ったわけである。

先に述べた様に、これらの土器は一括出土のものであっても、時間的に差のあるものを含んでいるわけであり、甕を基本としてセットとしてとらえ得る各々の土器は、製作手法が異なるだけでなく、時期差をあらわすものとしてとらえることが最も適当であると考えられる。もとより層位的に分離されて出土したものでないため、今後大巾に修正する必要があると考えられるが、第5様式に含まれるものを最古とし、布留式に含まれるものを最新のものとして、それぞれのセット関係を並べたのである。（編年表）

東奈良Ⅱとしたものには、底部が平底のもの。東奈良Ⅲとしたものには、平底の周辺をヘラ削りしたものと、底部にタタキ目を有するものがあり、他より数が多い。将来分離することが可能となるかも知れない。タタキ目を有するものの中には中心線上でなく横にはずれた位置に底部のあるものがみられる。製作にあたって底を意識しながら、使用上は底の意味を持たない底部となっているわけであり、はっきり底部を持つものより新しい段階と考えたわけである。

東奈良で製作され使用されたと考えられる厚手の土器に混じって、内面にヘラ削りのみられる薄手の甕が出土していることは先にも述べた通りであるが、これらの土器にも、外面に細かいタタキ目がみられ、口縁部は内外面ともに外反し、内面のヘラ削りが口縁部の付け根ぎりぎりにまで及んでいるため、頸部内面がするどい「く」の字状となっているいわゆる庄内式と呼ばれるものの他、同様の特徴をもちながら、口縁外面が内彎し、口縁部付け根に横ナデがなされた結果くびれがみられるもの、口縁部は内外面ともに内彎し、端部にはわずかに外に向って肥厚がみられ、器壁外面は刷毛調整されたものなどがみられる。いずれも庄内式から布留式に移行する段階で、外部からもたらされたものであることは、胎土等からみて明らかである。しかし、先に分けた厚手の土器のどの段階に各々が併行するのかを決定することは極めて困難であり、今後同じ東奈良で検出されている他の溝や土壙墓等の出土遺物との対比検討をまつことにして、とりあえず表の中に位置付けてみたわけである。

同様のことは、甕や鉢以外の高杯等についても言えるわけであり、今後大いに修正すべきものと考えている。

東奈良Ⅰ

東奈良Ⅰの土器群は、唐古第Ⅴ様式の伝統をもつ突出平底の底部をもつ一群と考えられる。器種、土器量ともに少ない。

壺型土器　東奈良Ⅰの壺型土器は、壺Aに突出平底をもつ6（図版108）があげられる。口縁部は、筒状頸部から大きく外反し、端面は僅かに上・下に拡張し面をもつ。体部は最大径を中位にもち、上・下段がよく似た無花果形をなす。他に突出平底をもつ壺型土器の底部は、41（図版110）とともに、破片をも含み総数106点の内、約20%の21点を数える。これらの底部破片から壺の形態を判別するのは不可能であるが、壺Aタイプが多いと思われる。

甕型土器　東奈良Ⅰの甕型土器は、完形品では甕A_1、A_2に突出平底の底部が観られる。甕A_1の55（図版112）、A_2の56（図版同）があげられ、共に頸部のくびれが小さく、口縁径と最大腹径との差の少ない丈の高い器形をなす。器壁には、やや荒いタタキ目を2段（一部3段）に行い、口縁部は内・外面横ナデを行い、肩部まで横ナデを行うものがある。52は、口縁部端部に刻目を施している。突出平底をもつ甕は、底部破片をも含み総点数 556点の内、17%の93点を数える。

高杯型土器　東奈良Ⅰの高杯型土器は、出土高杯の内、最も古い要素をもつ高杯A98、99（図版115）が位置すると考えられる。98、99は、杯部下半部が直線的に大きく広がり、上半部は短く外反する形態をなし、西ノ辻Ⅰ式[注1]の伝統をもつ。他の東奈良Ⅰの器種と比較すれば、やや古い要素が強い。

鉢型土器　東奈良Ⅰの突出平底をもつ鉢型土器は、鉢$A_{1,2}$・Bの器種に観られた。A_1 190（図版119）、A_2 196（図版同）は、いずれも突出平底底部をもちながら、体部外面にはタタキ目が観られず、ナデによって調整を行っている。Bの大形鉢 178（図版 118）は、口縁径に比較し浅い器形をなし、口縁部・体部外面全体に右上りのタタキ目を行う。この大鉢は、器壁外面にタタキを行った後に、口縁部を折り曲げたためか、頸部のタタキ目が変化し幅が狭くなっている。また突出平底底部に僅かながらタタキ目が残り、周囲にもヘラ削りを行っており、東奈良Ⅲに属する面もあるが、明確な突出平底であるため、東奈良Ⅰに位置づけた。他の鉢型土器の器種では、突出平底をもつ形態を確認できるものはなく、底部片では14

点検出されている。

他の器種　甑型土器の東奈良Ⅰに属するものは、完形品に近いものはないが、突出平底の底部片で214（図版120）を含み2点のみである。

東奈良Ⅱ

東奈良Ⅱの土器群は、小さな平底あるいは突出平底を押しつぶしたような形態の底部をもつ一群と考えられる。さきの東奈良Ⅰに比べて器種、土器量ともに増える。

壺型土器　東奈良Ⅱの平底をもつ壺型土器は、完形品ではC_2・43（図版111）のみである。他の器種では、口縁部等より後述する東奈良Ⅲより古い要素をもつB_1・B_2に、東奈良Ⅱに属すると考えられるものがある。B_1の二重口縁型壺型土器11（図版109）は、壺Aの外反する口縁部に、さらに口縁部を付加したような形をなす。すなわち、外反する頸部がさらに反り返り、下に張り出しさらに外反する口縁部をもち、端面で外側に肥厚し小さな稜をもつ。B_2の装飾を施す二重口縁には27（図版109）が属すると考えられる。27は、外反する頸部より段をもって大きく外反し端部でより反るが、内面には稜線が観られない。文様は、口縁部端部外面に円形浮文、段部外面に円形竹管文を2個1対に8カ所施すが、櫛描文は観られない。この他に口縁部端部が短く立ち上がる、あるいは短く外反し面をもつ19～23（図版109）は、いずれも櫛描波状文、円形浮文が施されている。これらのタイプが、外反する口縁部端部をつまみ上げたり、あるいはのばし擬口縁のごとくなしていることから、より古い要素をもつものと考えられる。

壺C_2・43は、体部は最大径が中位にあり、非常に偏平な球形をなし、口縁部は細い頸部より立ち上がり端部でやや内弯する。外壁面には縦・横に細いヘラ磨きを行う。底部は、平底であるが中央部で凹んでいる。

甕型土器　東奈良Ⅱの平底をもつ甕型土器は、A_1、A_2、A_3に完形の器種が観られる。A_1 55、A_2 56・58・59、A_3 54・57（図版112）があげられ、いずれも口縁部は「く」の字形に外反するものと、口縁部内面は外反するが外面に粘土を貼り付け、内弯風に行ったものとがある。体部は、東奈良Ⅰより最大径が下がり中位よりやや上位に位置し、口縁径を凌ぐようになる。タタキ整形は、頸部より下位へ全面に行い、器壁の継ぎ目で2段・3段と方向を変る。この中で58は、器高に比較し、体部最大径、頸部径が大きくタタキ

目を他の甕より細かく丁寧に行っている。なお平底には、底部の稜線までタタキを行い小さな平底をなすものと、底部が一度くびれて張り出す、突出平底を押しつぶしたような形をなすものの2種ある。各々に木葉痕、凹部を残すものがあり、いずれも、平底ではあるが、小型化あるいは不安定な底部である。この平底底部をもつものは、甕底部総数の約5%の196点を数える。

東奈良Ⅱに属する他の遺構出土の甕として、H—3—N地区P—16の4（図版107）が考えられる。口縁部は外反するが、外面中位で肥厚する。体部は胴長であるが最大径は中位にある。

高杯型土器　東奈良Ⅱの高杯は、東奈良Ⅰよりも杯部下段ののびが小さく、上段ののびが大きくなる高杯A110（図版115）を位置づけた。110は、杯部下段を欠損するが、外面段部で肥厚し上段へ大きく外反する。しかし、後述する東奈良Ⅲに比較して、杯部の深さは浅い。

鉢型土器　東奈良Ⅱの鉢は、A_1、A_2、A_3の器種が認められる。A_1 191・192は、いずれも頸部から小さく外反し、器壁外面にタタキ整形を行う。192は、口縁部が端部でやや内弯し、底部も丸味がある。A_2には、深鉢タイプの197・198（図版119）と浅鉢タイプの199～201（図版同）がある。深鉢タイプは底部より直線的に広がり、浅鉢タイプは内弯ぎみに広がる。いずれも底部の稜線までタタキを行う。A_3 202～204は、いずれも平底の中央が凹んでいる。器壁外面にはナデを行うが、203は、内面に刷け目の上に放射状のヘラ磨きを行う。他に底部片が5点認められる。

甑型土器　東奈良Ⅱの甑は、鉢型土器A_2の同形態のものである。212・215～218（図版120）があげられ、器壁外面にタタキ目を残すものとナデを行うものが多い。いずれも小型の器高10cm前後のものである。なお、平底底部は、甑総数の約24%の9点を数える。

東奈良Ⅲ

東奈良Ⅲは、底部の意識が薄れる削り底、タタキ底をもつ一群と考えられる。両底部は、厳密には手法を異とするが、底部の意識が薄れる点から同一群と考えられる。この一群は、溝Ⅰ—3出土の全器種が揃い、土器量も増大する。

壺型土器　東奈良Ⅲの壺は、壺自体にタタキ目を残すものが少なく、またヘラ削りを明確に残すものは少ないため、底部のみでの抽出が困難な面がある。壺Aタイプとしては、8（図版108）を位置づけた。口縁部は、短い筒状の頸部より外反し端面で僅かに上方へ

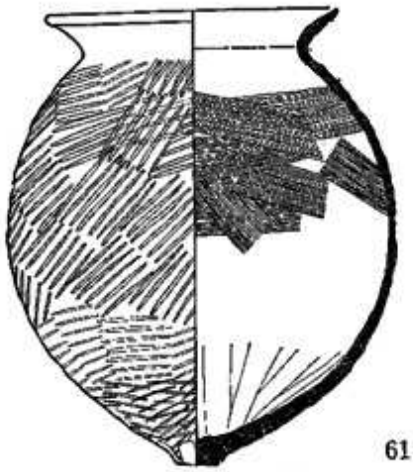
肥厚する。体部は肩部が丸味をもち全体的に球形化する。

B_1 9（図版108）は、壺として唯一のタタキ目を残すものである。口縁部は、筒状の頸部から小さく外反し、さらに段をもって外反し端部で一層反り、内外面とも稜が明確になる。体部は最大径を中位にもち、上・下の張りはやや上段が大きい。器壁外面に3段に方向を変えるタタキ目を残し、底部にタタキを行い尖底風におさめている。他に口縁部のみであるが、12～14（図版109）が、口縁部の稜が明確になる点から東奈良Ⅱに属すると考えられる。B_2 の装飾を施す30（図版109）は、B_1同様明確な稜を内外面にもつ。口縁部は長い筒状頸部から外反ぎみに水平にのび、上段も外反し、端面は丸くおさめる。装飾は外面に櫛描波状文と円形浮文を施す。体部は、最大径を中位上にもつ無果花形をなし、外面に細かい刷毛目の上からヘラ磨きを行い、内面の上部にヘラ削りが観られる。同口縁部片の25・26（図版109）が東奈良Ⅱに属すると考えられる。

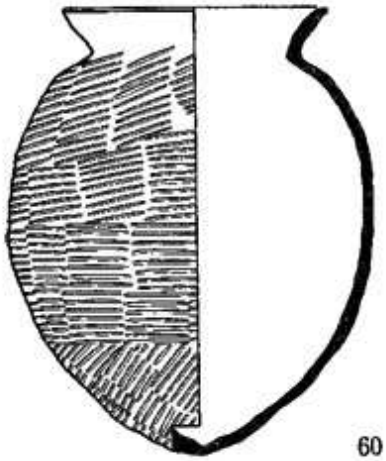
C_1の中でも最も古い形態をもつと考えられる48が、他の壺$B_{1,2}$の体部形態、整形等に共通点があるため、東奈良Ⅱに属すると考えた。C_1 48（図版111）は、直口口縁部が僅かに反り、端部で外面に小さく折れ稜をもつ。胴部やや下に最大径をもち、より丸味を増し、外面にやや荒い刷毛目を縦方向に行う。

C_3 152（図版117）は、底部の稜線にヘラ削りを行っている。溝Ⅱ－3出土の小型壺は絶対数が少なく、この直口口縁部をもつものが多い。壺型土器の底部片総数 106点の内、削り底と考えられるものは約27%の29点を数える。

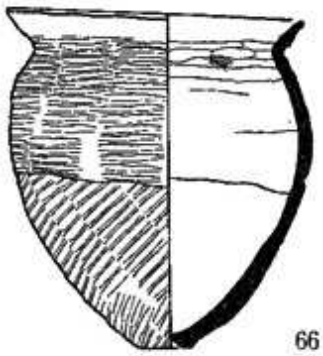
甕型土器　東奈良Ⅱの甕は完形品として最も多い。A_1 60・61（第20図）・62（図版112）、A_2 66（第20図）、A_3 63・64（図版112）が削り底底部をもち、A_1 65（第21図）67・72（図版113）75（第21図）、A_2 68～74（図版113）がタタキ底手法をもつ。各器種いずれも、東奈良Ⅱと大差がなく、口縁部は「く」の字形に外反し、一部に内弯風のものと直口風のものが観られる。体部は、最大径がより大きくなり球形近くになるものと、肩部が張り底部へ細くなり卵形をなすものがある。外面にタタキを3段に行い、一部にタタキの上からヘラ削り、肩部に刷毛目を行うものが観られるがその点数は少ない。底部の削り底手法は、突出平底を数回削ったものと平底を削り取ったものがあり、いずれの場合にも、底部の稜線をヘラにより数回削りあげて、底部を小さくするようにしている。こ



61



60



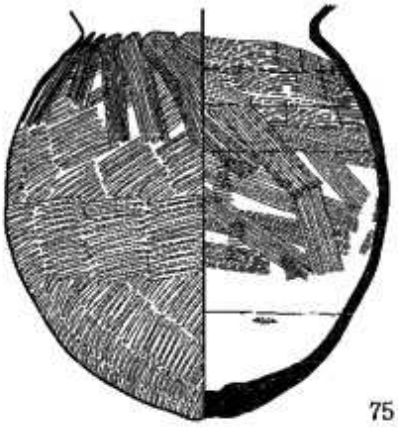
66

第20図　溝Ⅱ－3出土土器　¼

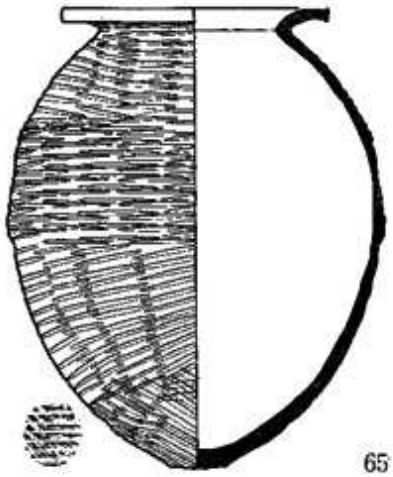
の手法をもつ甕底部は、総数の6％である86点を数える。同様にタタキ底手法を行う点数は総数の26％の156点を数え、その中で突出平底を残して叩いたものが6％、平底を叩き小さな底部をもつものが56％、同じく傾斜をもつものが17％、尖底・丸底風のものが21％となる。

この厚手の甕に、底部の意識が薄れ、一部尖底・丸底風のものが存在することから、Bの薄手の甕は東奈良Ⅲに影響したものとし、Bの最も古い形態のものを位置づけた。B83（図版114）は、口縁部が鋭くくびれる頸部より僅かに外反しながら直線的にのび、端面で僅かに上方へつまみ上げ横ナデ調整を行う。体部は、最大径が上位にあり、肩が張り底部は尖底風である。外面には細かい右上りのタタキ目、中位から下半に刷毛目を行う。内面のヘラ削りは、中位上半のみに行い、下半はナデを行い器壁も上半が薄く下半はやや厚い。83と同一形態をもつC80（図版114）は、胎土がBとは異なり、また右上りのやや太いタタキ目を残し頸部の稜もあまり鋭さがないことから、在地の甕と考えられる。内面ヘラ削りを行った薄手の甕の口縁部破片総数は137点を数える。その内、東奈良Ⅲに属すると考えられるBが25点、同じくCが18点である。

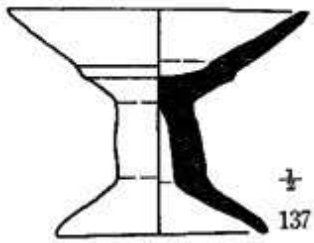
高杯型土器　東奈良Ⅲの高杯Aは、東奈良Ⅱのそれより新しく、杯部上段(上半部)の立ち上がりが大きく、杯部が深くなり、杯部外面の稜の肥厚が小さくなる。Aには杯部上段が直線的にのびる100～103（図版115）、同じく内弯ぎみにのびる106・107（図版同）、同じく大きく外反する111・113（図版同）がある。高杯Bは、杯部が2段に屈曲して広がる。122（図版116）は、東奈良Ⅴの高杯Bに比べ杯部が浅く、東奈良ⅢのAに近い率をもつ。高杯C117～121（図版116）は、杯部下半が内弯し、段をもって¼円形に外反し、口縁部端部で水平近くのび、端面に稜をもち、杯部口径に比べ深さが浅く、率が同Aに近いため東奈良Ⅲに位置づけた。高杯Dはその装飾性との関係から、壺B_2と併行期に位置づくと考えられる。124（図版116）と他に小破片が出土したのみであるが、杯部が段をもって大きく外反し端部でさらに外反する。杯部端部と底部に円形浮文と刻目文を施す。脚部を欠くが、エンタシス形の柱部、杯部と同形態の裾をもつものと考えられる。124は、胎土から河内産のものと思われる。高杯Eは、壺B・



75



65



1/4

137

第21図　溝II－3出土土器　¼

C、甕B・C等の新しい器種が東奈良Ⅲに属すると考えた点から、高杯Eの最も古い要素をもつものを位置づけた。E138・139・141（図版116）は、椀部が深く短い柱部をもち、裾部の広がりが小さく仕上りはやや粗雑である。いずれも他の器種より胎土が精良な明るい色調のものである。

他の遺構出土の高杯Eとして、II－3－G地区井戸4号下層出土の深い椀部をもつやや粗雑な作りの13（図版107）が、属すると考えられる。

鉢型土器　東奈良Ⅲの鉢は、A_1～A_4、Bに削り底、タタキ底が観られる。

A_1 193・194（図版119）は、いずれもタタキ底をもち、体部は丸くなり、器壁にタタキ目を残す。A_2 202（図版119）もタタキ底をもつ。A_3 206・208（図版119）に削り底がみられる。206は平底を削り取り、208は丸底風に仕上げている。いずれもヘラ磨き、ナデを多用する。A_4 182～184（図版118）に削り底が観られ、182・183にタタキ目が残る。B179（図版118）は、タタキ底をもち、口縁部が丸味のある頸部より外反し端面に稜をもち、片口を有す。体部は、最大径を上位にもち底部へなだらかに下る。器壁外面に右上りのタタキを行い、一部にヘラ削りが観られる。内面にはヘラ磨きを行う。鉢Dは、他の器種と台を付ける関係から東奈良Ⅲに属すると考えた。鉢D211（図版119）は、口縁部が僅かに外反し、212（図版同）は口縁部内面に稜をもつが、いずれも鉢底部の胎土をのばし、新たに粘土を付けたし、指なでを行い低い台としている。

他の遺構から出土したものとして、II－3－N地区P－16の鉢3（図版107）が属すると考えられる。平底底部を削り丸くした後にヘラ磨きを行うが、全体に粗雑な作りのものである。

甑型土器　東奈良Ⅲの甑は、他の器種同様削り底・タタキ底があり、その量も多い。いずれの手法の場合も尖底風に行うため、東奈良Ⅳのそれとの判別が困難な面がある。削り底をもつ甑219～224（図版120）、タタキ底の225～229（図版同）がある。この中には225に代表される底部より丸味をもって立ちあがるものと、227のように尖底風の底部より直線的に立ちあがるものがある。後者は底部にコブ状の粘土を付けたした後に、ヘラ削りしタタキ絞めたものであり底部の厚みが2cm近くあるものが観られる。

その他の器種　器台型土器の器台Aは、他の新しい器種同様に、溝Ⅰ－3出土の中で器形の識別できる最も古い要素をもつものを東奈良Ⅲに属すると考えた。小型器台158～160・164・165・167～169、172～174（図版117）は、皿部が深く、端部で上・下あるいは上方に肥厚し、脚部は短い柱部から広がり、柱部に貫通孔をもつものがある。いずれも皿部に横方向の粗雑なヘラ磨きを行う。

東奈良Ⅳ

東奈良Ⅳは尖底、丸底の底部をもつ一群と考えられる。ほぼ全器種に観られ、特に壺型土器が多い。

壺型土器　東奈良Ⅳの壺型土器各種は、底部のみでは判別が困難なために、東奈良Ⅲより新しい要素を形態、技法等に求めて位置づけた。

B_1 10（図版108）は、口縁部は下段が短く外反し、上段は直線的にのびより稜が明確になる。体部は、底部を欠くが球形化し、外面に刷毛目を行う。同15（図版109）は、筒状の頸部より鋭く屈折しのび、上段は大きく外反するが浅くなる。B_2 31（図版109）は、B_1 同様口縁部下段が短く外反し、上段は直線的にのび端面に稜をもつ断面三角形をなす。体部は底部を欠くが、球形をなし肩部に横方向のヘラ磨き、下位に刷毛目を行う。装飾は、口縁部に竹管文、櫛描波状文、刻目文を施し、肩部に竹管文・櫛描波状文を施す。同29（図版109）も同形態をもつ。同39（図版110）は、形態・技法よりやや新しい要素をもつものと考えられる。口縁部は短い頸部より大きく折れ、上段も僅かに外反し、全体的に浅くなる。体部は、肩がやや張るが球形に近い形をなしヘラ磨きを行う。装飾は、口縁部内外面に櫛描波状文、外面に竹管円形浮文、肩部に断面三角形の貼り付け凸帯文、櫛描波状文、竹管文、刻目文を施す。胎土も明るい色調のものである。また肩部に装飾を施すものに32～38（図版110）がある。

C_1 は、口縁部が体部に比べ短く直線的となり、端面を丸くおさめる。体部は球形・胴長球形を成し刷毛目、ヘラ磨きが盛になる。49・50（図版111）は、口縁端面に刻目文、49は頸部下にも刻目文を施す。同47（図版同）は頸部に凸帯・刺突文を施す。同51（図版111）は、特異な器種である。直口口縁部は、端面で内面肥厚する。体部は、球形をなし、全面にヘラ磨きを行う。器壁は非常に薄く一部にヘラ削りを行う。C_2 44は口縁部を欠くが、体部は肩部がやや張り下位は丸い。器壁外面にヘラ磨きを行う精製胎土を使用してい

る。体部中央に焼成後の穿孔がある。C₃ 157（図版117）は口縁部を欠くが、体部は中位が張る球形をなしヘラ磨きを行う。体部中央に焼成前の小さな穿孔がある。他の遺構出土のものとしては、H—3—G地区井戸4号のC₂ 12（図版107）があげられる。

甕型土器　東奈良Ⅳの厚手の甕は、A₁ 76（図版113）、A₂ 77（図版同）が代表される。口縁部は大きく外反し、体部は最大径を上位にもち、下位へ丸く細くなる。器壁外面にタタキを行うが、下位には刷毛目を行っている。尖底底部は甕総数の5％の23点を数える。薄手のBは、87（図版114）が代表され、口縁部は中位外面で厚みを増し内弯ぎみになる。端面は外面に丸く肥厚する。体部は最大径を中位にもつ胴長球形をなし、丸底風になる。器壁外面に僅かにタタキ目を残すが、全面に刷毛目を行う。内面のヘラ削りも全面に行い器壁は薄い。肩部に3カ所にヘラ描を施す。同86（図版114）は肩部に櫛描波状文を施す。薄手の甕口縁部総数 137点の内、東奈良Ⅳに属するBは7点、同Cは37点を数える。

甕D93・94（図版114）、甕E95～97（図版114）の他地域のものは、地域差ならびにその形態、他遺跡の出土状態から東奈良Ⅳに属すると考えられる。

他の遺構出土の東奈良Ⅳに属すると考えられる甕は、H—3—N地区P—15の1・2（図版107）、H—3—G地区井戸4号の8～10（図版同）があげられる。2は、口縁部が中位より内弯し端面で両面肥厚する。1は雄町13類の中の上泊6[注2]層と類以し、口縁部端面が内面肥厚する。2と共伴関係から東奈良Ⅳに属すると考えた。8は、口縁部が鋭い頸部より外反し、端部でやや内弯する。端面は両面肥厚し丸くなる。9・10は、厚手の甕であるが、いずれも「く」の字形に外反する口縁部中位外面で肥厚する。体部は作りが粗雑で球形をなす。器壁にはタタキ目を僅かに残しヘラ磨きを行う。

高杯型土器　東奈良Ⅳの高杯Aは、杯部がより深く、下部が小さくなると考えられる。105・108・109・112・114・115（図版115）が属すると思れる。脚部は、裾部の段が薄れ柱部より明瞭な屈曲をもって広がるものと考えられる。

鉢型土器　東奈良Ⅳの鉢は、A₁、A₄に器種が判明するものとして丸底風のものがある。A₁ 195(図版119)は、丸底風の底部から内弯ぎみに立ちあがり、小さくくびれ、口縁部が内弯し立ちあがる。頸部内面には幅のある稜をもち、外面には底部より放射線上のヘラ

削りを行う。A4 186（図版118）は、小型のものでヘラ削りを行う。底部を欠くが、Bの181（図版118）は、器壁外面にヘラ磨きを行うことから東奈良Ⅱに属すると考えられる。口縁部は体部最大径を凌ぎ、端面に刻目文を施す片口鉢である。Dの212（図版119）は、東奈良Ⅲのそれより、鉢部が内弯風になり新しい要素と考えられるが作りは依然粗雑である。

その他の器種　器台Aは、175（図版117）が考えられる。皿部の底部が落ち込み、直線的にのび端部で立ちあがり稜をもつ。脚部は、接合面からやや内弯ぎみに広がる。皿部は横方向のヘラ磨き、脚部は刷毛目を行う。

鉢230（図版120）は、器壁が薄く底部の整形に刷毛を行う。

東奈良Ⅴ

東奈良Ⅴは底部が完全に丸底化し、器種は少なくなり斎一化が考えられ、布留式併行期とも考えられる。

壺型土器　東奈良Ⅴの壺C2 45（図版111）は、非常に精良な胎土であり、薄手に仕上げられている。口縁部は内弯風に立ちあがり、内面には横方向の刷毛目の上から暗文風のヘラ磨き行う。他に同口縁部破片が21点出土している。小型丸底壺150（図版117）は、河内系の胎土と考えられる非常に良質な胎土を用い、平坦な丸底から立ちあがる浅い体部から、口縁部が直線的にのびる。形態からやや古いものと考えられる。

高杯型土器　東奈良Ⅴの高坏は、A116（図版115）とB136（図版116）が考えられる。116は、杯下部が短く水平にのび、極小の段をもち大きく広がる杯部上段をなす。器壁は細かいヘラ磨き刷毛目を多用する。脚部は明確な稜をもって大きく広がり、同様にヘラ磨き、刷毛目を行う。136は、杯部が2段に屈曲してのびる。脚部は、裾部に小さな段を残し大きく広がる。全面に細かいヘラ磨きを行い、非常に良質の青味がかかった胎土をもつ。E 142（図版116）は、精良な胎土を用い、暗文風のヘラ磨きを行う。脚部146（図版同）は大きく広がり細かなヘラ磨きを行う。いずれも胎土から河内産のものと考えられる。

他の遺構出土高杯としては、H－3－P地区竪穴住居跡の7（図版107）が属すると考えられる。

器台型土器　器台A163・176（図版117）は、皿部底部が水平になるものと丸くなるものがあり、ヘラ磨きを暗文風に行う。いずれも河内産の胎土を用いる。

器台B 177（図版117）は、底径28cm以上の大形品、内面ヘラ削り、外面に横ナデを行う。器形から退化的なもので青木Ⅵ期[注3]に比定されると考えられる。

鉢As 207（図版119）は、小型品のものであるが、良質の胎土を用い、ヘラ磨きを細かく行う。

以上のように別けられると考えたが、さきにも記したごとく一括土器であるため判然としない面がある。しかし、この後の東奈良遺跡の調査で同時期の多量の土器が出土しており、比較検討を続けて行きたいと考えているが、今回の資料が今後の在地の土器研究ならびに編年研究の踏台となることを期待する。

注　1　「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡Ⅰ地点の土器」　弥生式土器集成1　昭和33年　小林行雄

2　「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」　昭和31年　坪井清足

3　「鳥取県米子市青木遺跡発掘調査報告」　昭和51年　青木遺跡調査団

土師器観察表

土器 No.	(写真) / (図面) 106	1	40 / 106	2	40 / 106	3	/ 106	4
摘要 ＼ 種類	壺		甕		壺		甕	
法量 (cm) 口縁径	21.85		11.3 (反転)		15.2 (反転)		14.95	
法量 (cm) 器高	6.9 (現存値)		5.8 (現存値)		4.4 (現存値)		6.1 (現存値)	
法量 (cm) 胴径 / 底径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
出土地区	F－7－E，F 溝Ⅰ－S		F－7－E，F 沼地状落ち込み		F－7－E，F 溝Ⅰ－S		F－7－E，F 溝Ⅰ－S	
口頸部 形態	・二重口縁、筒状の頸部より大きく外反し、上段は小さな段をもち外反し端部で一層反る。		・緩やかに外反、端部で僅かに外面肥厚。		・外面は緩やかに外反、内面はやや大きく反る。端部断面は三角形。		・丸味のある頸部より、なだらかに外反し、中位よりやや内弯、端部は大きく上へつまみ上げる。	
口頸部 文様	端部に疑あり。							
口頸部 整形 外	・頸部に刷毛目、横ナデ		・僅かにタタキ目が残り、横ナデ		・ } 横ナデ		・ } 横ナデ	
口頸部 整形 内	・横ナデ		・横ナデ		・ } 横ナデ		・ } 横ナデ	
体部 形態	・欠損のため不明		・肩の張りがなく、同様に体部も張らない。		・肩の張らない体形		・肩の張らない体形	
体部 文様								
体部 整形 外			・右上りのタタキ目		・右上りのタタキ目		・ } 不明	
体部 整形 内			・ナデ		・肩部に指頭痕		・ } 不明	
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明	
色調	・赤褐色及び灰褐色		・黄褐色		・黄褐色		・淡黄褐色	
胎土	・0.1～0.6の砂粒・石粒・金雲母を含有		・0.1～0.3の砂粒多量に含有		・0.1～0.3の砂粒を含有		・0.1～0.3の砂粒を含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考								

土器No.	106 5	106 6	106 39 7	106 8
種類	甕	甕	鉢	鉢
法量(cm) 口縁径	14.8	13.4（反転）	11.3	欠損のため不明
法量(cm) 器高	4.3（現存値）	5.8（現存値）	7.55	7.0
法量(cm) 腹径	欠損のため不明	欠損のため不明		
法量(cm) 底径			3.8	3.55
出土地区	F－7－E，F 溝Ⅰ－S	F－7－E，F 溝Ⅱ	F－7－E，F 溝Ⅰ－S	F－7－E，F 溝Ⅰ－S
口頸部 形態	・頸部より丸く外反し、中位上よりやや内弯し立ち上がり端部は内面肥厚。器高 2.45cm。	・丸い頸部より外反し、中位下より内弯し、端部で内面肥厚、器高2.5cm。	・外面は直線的に伸び、内面は稜をなし端部は丸い。	・頸部より僅かに広がりやや内弯ぎみ。端部欠損
口頸部 文様				
口頸部 整形外	・共に横ナデ	・共に横ナデ	・横方向のタタキ目	・風化が著しいが、横ナデと思われる。
口頸部 整形内	・共に横ナデ	・共に横ナデ	・左上りの刷毛目	・風化が著しいが、横ナデと思われる。
体部 形態	・	・肩の張らない体形	・底部より直線的に立ち上がり、中位よりやや内弯ぎみになる。	・底部より大きく広がる。
体部 文様	・不明			
体部 整形外	・不明	・ヘラ削り	・右上りのタタキ目	・右上りのタタキ目
体部 整形内	・右上りのヘラ削り	・不明	・刷毛目	・ナデ
底部	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・平底 小さな凹みあり。	・突出平底 周囲壁に指頭痕が残り中央部に凹みがある。
色調	・淡黄褐色	・淡黄褐色	・乳灰黄色	・乳黄色
胎土	・0.1の砂粒、雲母を含有	・0.1～0.2の砂粒・金雲母を含有	・0.1～0.4の砂粒含有	・0.1～0.6の砂粒・雲母を含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考				・底部から頸部にかけて黒斑

土器 No.	39/106	9	39/106	10	39/106	11	/106	12
摘要＼種類	鉢		小型壺		小型壺		小型壺	
法量(cm) 口縁径	15.0		欠損のため不明		6.9		欠損のため不明	
法量(cm) 器高	5.95		6.7（現存値）		8.2		8.0（現存値）	
法量(cm) 腹径	12.30		8.55		8.0		9.2	
法量(cm) 底径	丸底		2.95		尖底		丸底	
出土地区	F－7－E，F 斜地状落ち落み		F－7－E，F 溝Ⅰ－S		F－7－E，F 溝Ⅱ		F－7－E，F 溝Ⅰ－N	
口頸部 形態	・二段に屈曲し立ち上がり、端部断面は薄く丸い。		・斜め上方に外反。端部欠損。		・斜め上方へ立ち上がり端部でやや内弯。		・細い頸部より斜上方へ立ち上がる。端部欠損	
口頸部 文様								
口頸部 整形 外	・共に横ナデ		・横ナデ、頸部縦方向の刷毛目。		・横ナデ、頸部に縦方向の刷毛目。		・風化著しく不明	
口頸部 整形 内	・共に横ナデ		・横ナデ		・横ナデ		・風化著しく不明	
体部 形態	・底部より大きく開き、頸部付近で直に立ち上がる。		・最大径は中位よりやや上に位置する。肩部も張らない体形		・最大径は中位上にあり、それより鋭く折れる。		・最大径付近で歪み、扁平球形を成す。	
体部 文様								
体部 整形 外	・太い刷毛目と細い刷毛目の上に細かいヘラ磨き。		・横方向のタタキ目、下位にヘラ削り。		・肩部は横方向のヘラ磨き、以下左から右へヘラ削り。		・風化が著しく不明	
体部 整形 内	・横方向の細かいヘラ磨き。		・ナデ		・ナデ		・風化が著しく不明	
底部	・丸底		・平底 壁面指頭痕		・尖底 ヘラ削り		・丸底	
色調	・茶褐色		・淡黄褐色		・淡灰黄色		・赤褐色	
胎土	・精良、金雲母を含有		・0.1～0.3の砂粒多量に含有		・0.1～0.2の砂粒多量に含有		・0.1～0.2の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考					・巻き上げ粘土紐が明確に残る。			

土器No.	39/106	13	39/106	14	39/106	15	/106	16
種類 / 摘要	小型丸底坩		小型丸底坩		小型丸底坩		台付鉢	
法量(cm) 口縁径	9.25（反転）		10.1（反転）		11.1（反転）		欠損のため不明	
法量(cm) 器高	3.50（現存値）		5.45（現存値）		5.4（現存値）		6.05（現存値）	
法量(cm) 腹径	6.65		7.2		8.2			
法量(cm) 底径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		7.6	
出土地区	F－7－E，F 溝Ⅰ－N		F－7－E，F		F－7－E，F 溝Ⅰ－N		F－7－E，F 溝Ⅰ－S	
口頸部 形態	◦大きく外反し、中位でやや肥厚し、一度小さくくびれ端部で小さく肥厚する。		◦斜め上方へ長く外反し中位で小さく肥厚し端部へ薄くなる。		◦斜め上方へ長く外反し中位上よりやや内弯。			
口頸部 文様							欠損のため不明	
口頸部 整形外	◦	共に横ナデ	◦	共に横ナデ	◦	共に横ナデ		
口頸部 整形内	◦		◦		◦			
体部 形態	◦最大径中位より上にあり、肩部はほぼ垂直以下丸くなる。		◦最大径は上位にある。		◦最大径は上位にある。		◦短い柱部からなだらかに開き、裾部で小さな段をもち端部は稜を有す。	
体部 文様								
体部 整形外	◦肩部横ナデ、下位は刷毛目		◦肩部は横ナデ以下風化で不明		◦風化が著しく不明		◦ナデ	
体部 整形内	◦ヘラ磨き		◦左上りのヘラ痕		◦左上りのヘラ痕		◦刷毛目	
底部	◦欠損のため不明		◦欠損のため不明		◦欠損のため不明			
色調	◦淡黄灰色		◦淡黄灰色		◦やや赤味のある淡黄灰色		◦淡赤褐色	
胎土	◦0.1～0.5の砂粒・雲母含有		◦0.1～0.7の砂粒・雲母を含有		◦0.1～1.0の砂粒・雲母を含有		◦0.1～0.2の砂粒・雲母を含有	
質	◦良好		◦良好		◦良好		◦良好	
備考								

土器No.	39/106	17	39/106	18	106	19	106	20
摘要＼種類	小型高杯		小型高杯		器台		高杯	
法量(cm) 口縁径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量(cm) 器高	5.25（現存値）		6.5（現存値）		6.55（現存値）		7.5（現存値）	
法量(cm) 腹径								
法量(cm) 底径	5.0		9.3		11.85		13.9	
出土地区	F－7－E，F		F－7－E，F		F－7－E，F 溝1－S		F－7－E，F 溝1－S	
杯部 形態								
杯部 文様								
杯部 整形外面	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
杯部 整形内面								
脚部 形態	・なだらかに広がり、裾部でやや内弯し、端部は内面に肥厚する。		・短い柱部よりなだらかに広がり、裾部でやや内弯ぎみになる。		・大きく開く脚部		・やや袂広がりの柱部より大きく広がる裾部。	
脚部 文様	・3孔						・4孔	
脚部 整形外面	・縦方向のヘラ磨き。		・縦方向の細かなヘラ磨き、端部は横ナデ		・摩滅が著しいがヘラ磨き。		・縦方向のヘラ磨き。	
脚部 整形内面	・ナデ		・端部は横ナデ		・刷毛目		・ナデ	
底部								
色調	・灰褐色		・茶黄褐色		・淡黒褐色		・淡黄褐色	
胎土	・0.1～1.0の砂粒・石粒を含有		・0.1～0.5の砂粒、雲母を含有		・0.1～0.3の砂粒を含有		・0.1～0.4の砂粒を含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考								

土器No.		106 — 21	106 — 22	106 — 23	107 — 23	107 — 1
種類 / 摘要		高杯	高杯	高杯	甕	
法量(cm)	口径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	13.7	
	器高	8.2（現存値）	6.15（現存値）	7.45（現存値）	21.2	
	腹径				19.2	
	底径	10.2	8.75	8.2	丸底	
出土地区		F－7－E，F	F－7－E，F	F－7－E，F 沼地状落ち込み	H－3－N P－15	
口縁部（杯部）	形態				・「く」の字形に外反し端部より短く直立、口縁端部で折り返し内面肥厚する。器高2.2cm。	
	文様				・直立する口縁外面に、細い櫛描直線文を施す。体部に施す刷毛目と原体は同じものと思われる。	
	整形外面	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明		
	内面				・横ナデ	
体部（脚部）	形態	・柱部よりおだやかに広がり裾部でやや広がる。端部に稜あり。	・中空の柱部より丸くなだらかに広がり、端部で中実が円む稜をもつ。	・やや太い柱部が裾部へゆるやかに広がり、裾部より大きく広がる。端部は稜をもち断面は丸い。3孔	・最大腹径を中位にもち肩部はやや張り、やや扁長の球形をなす。	
	文様	・4孔			・器壁の厚み 0.3～0.45cm	
	整形外面	・縦方向のヘラ磨き。	・縦方向の荒い刷毛目	・柱部縦方向のヘラ磨き裾部同刷毛目	・肩部から縦方向の原体12本の刷毛目。底部は煤付着により不明。	
	内面	・裾部にヘラ削り。	・裾部は横方向の刷毛目	・裾部横ナデ	・肩部から中位へ横方向のヘラ削り、下位へは縦方向のヘラ削り。	
底部					・丸底	
色調		・淡黄褐色	・淡灰褐色	・淡灰褐色	・淡乳茶褐色	
胎土		・0.1～0.3の砂粒・金雲母を含有	・0.1～0.2の砂粒を含有	・0.1～0.5の砂粒・石粒を含有	・0.1～0.2の砂粒・金雲母を含有	
焼成		・良好	・良好	・良好	・良好	
備考					・外壁全面に煤付着 内面下位に炭化米付着	

土器 No.	107 2	107 3	107 4	41 107 5
種類 / 摘要	甕	鉢	甕	壺
法量(cm) 口縁径	16.1	14.35	13.4	14.4
法量(cm) 器高	10.6（現存値）	8.0	21.4	11.15（現存値）
法量(cm) 腹径	欠損のため不明		18.0	欠損のため不明
法量(cm) 底径		2.9	3.2	
出土地区	H—3—N P—15	H—3—N P—16	H—3—N P—16	H—3—N P—18
口頸部 形態	・下位は外反し、中位より内弯する。端部は、両面に肥厚し、角張って終る。	・体部より直すぐ立ちあがり、口縁端部は非常に厚く 0.7cmあり。断面三角形。	・外面は外反するが、中位で肥厚し、端部へ薄くなる。	・肩部より斜上方へ立ちあがり、中位上部よりやや外反し、端部外面に小さな稜をもつ。
口頸部 文様	・内面は、内弯するが、頸部の稜は明確でない。			
口頸部 整形外	・横ナデ	・風化が著しく不明（横方向のヘラ磨きか）	・横ナデ	・風化が著しく不明
口頸部 整形内	・横ナデ	・風化が著しく不明（横方向のヘラ磨きか）	・横ナデ	・風化が著しく不明
体部 形態	・肩部よりなだらかに落ち、肩の張らない胴長の器形と思われる。	・底部より、浅い角度で直線的に伸び、急激に折れて口縁部に至る。	・最大腹径を中位にもち肩部よりなだらかに落ち胴長の器形をもつ。	・肩部よりなだらかに落ちる。
体部 文様	・器壁の厚み0.3～0.4cm	・内面は凸凹が激しく、器壁の厚みにむらがある。		
体部 整形外	・風化が著しく明確でないが、横方向の刷毛目。	・縦方向のヘラ磨き。	・肩部は横ナデを施し、胴部は右上りの3段に別けられるタタキ目。	・風化が著しく不明
体部 整形内	・肩部は横方向のヘラ削り。	・風化が著しく不明確であるが、ナデか細かいヘラ磨きと思われる。	・横方向刷毛目 底部はナデ	・風化が著しく不明
底部	・欠損のため不明	・平底をヘラ削りして、丸くした後にヘラ磨き。	・底部の破線までタタキ目。丸味がある平底	・欠損のため不明
色調	・淡黄茶褐色	・淡黄色及び淡黒褐色	・黄褐色	・外面・赤褐色 内面・灰黄褐色
胎土	・0.1～0.2の砂粒を含有	・0.1～0.5の石粒多量に含有	・0.2～1.0の砂粒・石粒を含有	・0.1～0.3の赤茶色の石粒を多量に含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考	・肩部外壁に2コの孔跡			

土器 No.	41/107 6	41/107 7	107 8	41/107 9
種類 / 摘要	鉢	高杯	甕	甕
法量(cm) 口縁径	33.05（反転）	23.1	15.4（反転）	13.7
法量(cm) 器高	18.8（現存値）	17.3	13.7（現存値）	20.9
法量(cm) 腹径	33.9		22.9	19.8
法量(cm) 底径	欠損のため不明	13.3	欠損のため不明	丸底
出土地区	H－3－N P－8	H－3－P 竪穴住居跡	H－3－G 井戸4号	H－3－G 井戸4号
口頸部（杯部） 形態	・小さくくびれる頸部から小さく外反し、端部は角張り終る。	・小さな杯下部に小さな稜をもち、外上方へ立ち上り、中位上部よりやや内弯する。杯端部は小さな面をもち、薄く断面は丸い。	・「く」の字形に鋭く外反し、中位上部よりやや内弯し、端部は両面肥厚し、小さな面をもつ。 ・頸部内面は丸くおさめている。	・「く」の字に外反する外面中位でわずかに肥厚する。口縁端部やや反り丸くおさめる。 ・中位に継ぎ目があり上方よりかぶさっている。
口頸部（杯部） 文様				
口頸部（杯部） 整形 外	・横ナデ	・細かな縦方向のヘラ磨き。	・横ナデ	・横ナデ
口頸部（杯部） 整形 内	・横ナデ	・不明確であるが、細い縦方向のヘラ磨き。	・横ナデ	・横ナデ
体部（脚部） 形態	・肩部よりなだらかに落ち、最大腹径が体部上部にあり、さらにゆるやかに落ちる。比較的に深い鉢。	・中実で裾広がりの柱部に小さく直線的に広がる脚部。	・鋭くくびれる頸部から肩がやや張り、胴長形と考えられる。	・体部は、歪んでいるため、最大腹径は中位下にある。 左右非対称の上に、底部外壁にも継ぎ目が明確に残り、荒い仕上げである。
体部（脚部） 文様	・頸部は横ナデ。以下荒い右上りのタタキ目の上にヘラ磨きを施すが、中位より上はタタキ目が残る。	・裾部の上段に4孔。	・頸部付近は横ナデを施し、肩部から縦方向刷毛目の上より、横方向の刷毛目。	・頸部は横ナデ、肩部以下は右よりの荒いタタキ目の上にヘラ磨き。
体部（脚部） 整形 外	・剥離が著しいが、中位より上は横方向のヘラ磨き、下は縦方向のヘラ磨き	・柱部、裾部ともに縦方向の細いヘラ磨き。	・頸部付近は横ナデ、肩部は右上りのヘラ削り、中位は横方向ヘラ削り。	・中位上段に横方向のヘラ削りと思われる砂粒の移動が観られる。
体部（脚部） 整形 内		・横方向の刷毛目。		
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明	・丸底、ヘラ磨きを施すが凸凹が残る。
色調	・黄褐色	・淡黄褐色	・淡灰色	・淡黄褐色
胎土	・0.1～0.6の砂粒、石粒、金雲母を含有	・0.1～0.2の砂粒を含有	・0.1の砂粒を含有	・0.1～0.4の砂粒を含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考		・杯部端に黒粒あり。		

土器 No.	41/107	10	—/107	11	41/107	12	—/107	13
種類 / 摘要	甕		甕		壺		脚部高杯	
法量 (cm) 口縁径	14.1		13.8		欠損のため不明		11.45	
法量 (cm) 器高	22.9		13.25（現存値）		12.3（現存値）		6.2（現存値）	
法量 (cm) 腹径	22.4		15.9		15.0			
法量 (cm) 底径	丸底		欠損のため不明		2.1		欠損のため不明	
出土地区	H－3－G 井戸4号		II－3－G 井戸4号		H－3－G 井戸4号		H－3 G 井戸4号	
口頸部（杯部） 形態	・「く」の字に外反し、中位よりさらに反り、端面は丸い。外面中位でわずかに肥厚する。		・整部は「く」の字形を成し、内弯ぎみに立ち上がる。端部断面は丸い。				・杯下部より、緩やかなカーブをえがく。 ・端部断面は丸い。	
口頸部（杯部） 文様	・中位に継ぎ目があり上方よりかぶさっている。				欠損のため不明			
口頸部（杯部） 整形外	・	・横ナデ	・	・共にナデ			・ヘラ磨き	
口頸部（杯部） 内	・		・				・縦方向のヘラ磨き	
体部（脚部） 形態	・体部は、口縁部に比べて大きく。最大腹径も非常に大きい球形に近い形を成す。		・底部よりなだらかに丸みを持ち、最大腹径が中位にある。		・最大径は下位にあり、扁平な形である。		・短かい充実した柱部	
体部（脚部） 文様	・外壁表面に明瞭な輪積痕が残っている。							
体部（脚部） 整形外	・ヘラ磨きともヘラ削りともいえる技法を用い、全体に砂粒が動いている。		・右上りのタタキ目		・全体に3段に別けられる右下りのヘラ磨き。		・柱部は縦方向のヘラ磨き。	
体部（脚部） 内	・刷毛目		・不明		・不明		・ナデ（不調整である）	
底部	・丸底		・欠損のため不明		・丸底 わずかにある底部のまわりを削っている。			
色調	・乳黄褐色		・淡灰褐色		・淡茶褐色		・黄褐色	
胎土	・0.1～0.8の砂粒・石粒を含有		・0.1～0.2の砂粒含有		・0.1～0.2の砂粒含有		・0.1～0.3の砂粒、石粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・外面と底部内面に煤付着 外面底部に黒斑				・底部付近に黒斑あり			

土器 No.	108	1	42/108	2	108	3	108	4
種類 / 摘要	壺 A		甕 A		壺 A		壺 A	
法量(cm) 口縁径	15.5		23.1		17.9		15.8	
法量(cm) 器高	3.95（現存値）		6.6（現存値）		6.0（現存値）		5.45（現存値）	
法量(cm) 胴径 / 底径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
出土地区	II—3—G 溝II—3		II—3—G 溝II—3		II—3—G 溝II—3		II—3—G 溝II—3	
口頸部 形態	◦筒状の頸部に水平に開く口縁。口縁端はつまみ上げられ、外面に稜をなす。器壁が口縁部は厚いが、頸部から胴部にかけて器壁は薄くなる。		◦少し広がる筒状の頸部に緩やかなカーブで水平に開く口縁、口縁端は立ち上がり、下位に張る稜が有る。器壁は厚くしっかりした口縁部。		◦筒状の頸部に緩やかなカーブで水平に開く口縁、口縁端はつまみ上げられ、外面に稜が有るが、横ナデのためか、凹んでいる。		◦筒状の頸部に外反する口縁、口縁端はつまみ上げられ外面に稜を有する。	
口頸部 文様	◦口縁端部の稜に3本の凹線文。				◦外面稜に刻目が一周する。			
口頸部 整形外面	◦横ナデ		◦口縁部は横ナデ。頸部は縦方向のヘラ磨き。		◦頸部は粗雑なヘラ磨き、口縁は縦方向の刷毛目。口縁端は横ナデ。		◦頸部は刷毛目が少し残り太いヘラ磨き、口縁部は横ナデ。	
口頸部 内面	◦縦方向の刷毛目の上から横ナデ。		◦口縁部は横ナデ、頸部はヘラ板有り。		◦頸部・口縁部ともに横ヘラ磨き。			
休部 形態	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
休部 文様								
休部 整形外面								
休部 内面								
底部	◦欠損のため不明		◦欠損のため不明		◦欠損のため不明		◦欠損のため不明	
色調	◦淡茶褐色		◦淡黄茶褐色		◦淡赤褐色		◦淡茶褐色	
胎土	◦0.1の砂粒を僅かに含み、雲母を多量に含有		◦0.1～0.5の砂粒を含み1.0の石粒をも含有		◦0.1～0.3の砂粒含有		◦0.1～0.2の砂粒を含有	
焼成	◦精良		◦良好		◦良好		◦良好	
備考	◦外面全体に煤付着。						◦煤付着	

土器 No.	42/108 5	42/108 6	42/108 7	42/108 8
種類 / 摘要	壺 A	壺 A	壺 A	壺 A
法量 (cm) 口縁径	24.5	16.0	欠損のため不明	14.1
器高	8.6 (現存値)	25.9	23.6 (現存値)	16.35 (現存値)
腹径	欠損のため不明	25.4	23.0	24.3 (現存値)
底径		4.8	4.15	欠損のため不明
出土地区	H—3—G 溝II—3	II—3—G 溝II—3	H—3—G 溝II—3	H—3—G 溝II—3
口頸部 形態	・筒状の頸部に外上方へ広がる口縁、口縁端は立ち上がり外上方へ向いている。口縁部と頸部の接合面には粘土の細つなぎ痕が残っている	・短い筒状の頸部に外反する口縁、口縁端は外上方へ立ち上がり、外面には斜めに稜を有し断面は丸い。	・口縁部は残っていないが、筒状の頸部から外反する口縁部と思われる。	・短かく立ち上がり大きく外反する口縁、口縁端内面は立ち上がり外面は丸く稜がある。
口頸部 文様	・口縁端面に櫛描波状文			・頸部から外反する所にヘラ痕が残る。頸部と肩部の境に刻目が一周する。
口頸部 整形外	・口縁端は横ナデ、他は縦方向の刷毛目に接合面には横方向のヘラ磨き。	・横ナデ	・頸部に横方向刷毛目と縦方向の刷毛目が残る。	・横ナデ
口頸部 内	・横方向の刷毛目の上からヘラ磨き。	・頸部には横方向の刷毛目、上位はヘラ磨き、口縁端は横ナデ。	・横ナデ	・横ナデ
体部 形態	欠損のため不明	・最大径は中位よりやや下に有り。上位・下位ともに良く似た張りである。3回に区切られて作られ、粘土紐のあとがよく残っている。	・最大径は、中位にあり上位・下位が同じような形を成すが、上位がやや張る。	・肩部よりまる味をもって落ち最大径がやや下位にある。
体部 文様				
体部 整形外		・横方向のヘラ磨き、タタキ目が一部に残っている。	・細いヘラ磨きの上から浅い縦方向の刷毛目、下位は煤付着により不明	・縦方向のヘラ磨き。
体部 内		・ナデ。一部刷毛目の所もある。	・下位にヘラ痕が残る。	・肩部より下位は横方向の刷毛目
底部	・欠損のため不明	・平底 突出し、壁面にタタキ目が有る。中央部には凹みがあり囲りに十字に線刻が入っている。	・突出平底 中央部が凹み、木葉痕が残る。	・欠損のため不明
色調	・淡灰赤褐色	・淡青灰褐色	・淡灰黄色	・外面—茶褐色 内面—淡灰色
胎土	・0.1～0.3の砂粒を含有	・0.2～0.5の砂粒・石粒を多量に含むが、胎土は精良	・0.1～0.7の砂粒・石粒を含有	・0.1～0.3の砂粒を含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考		・編み包みの日焼けのあとが残っている。	・底部から中位まで煤付着。 編み包みの跡が残っている。	・内面に薄く煤付着

土器No.	42/108 9	42/108 10	109 11	43/109 12
種類 / 摘要	甕 B1	甕 B1	甕 B1	壺 B1
法量(cm) 口縁径	16.55	21.4	20.9	17.15
法量(cm) 器高	26.5	23.2（現存値）	6.25（現存値）	6.06（現存値）
法量(cm) 腹径	24.9	35.2	欠損のため不明	欠損のため不明
法量(cm) 底径	2.25	欠損のため不明		
出土地区	H—3—G 溝II—3	H—3—G 溝II—3	H—3—G 溝II—3	H—3—G 溝II—3
口頸部 形態	・二重口縁。長い筒状の頸部から下段は小さく反り、上段は大きく反り口縁端部は水平近くのびる。内面は段がなく外反するのみである。	・二重口縁、筒状の頸部が外反し、上段は少し立ちあがり外反する。口縁端部に稜がある。	・二重口縁。頸部より外反し、上段も大きく外反する。口縁端部は下位に肥厚し、稜を有する。	・二重口縁、筒状の頸部から短く大きく反り、上段は僅かに外反する。口縁端部は小さな稜をもち丸く終る。
口頸部 文様				
口頸部 整形 外	・共に横方向の刷毛目	・共に口縁部は横ナデ頸部は横方向刷毛目	・口縁部は横ナデ、頸部は縦方向の刷毛目。	・上段は縦方向のヘラ磨き、下段は横方向のヘラ磨き。
口頸部 整形 内			・細かな横方向ヘラ磨き	・風化が著しく不明
体部 形態	・最大径は中位にあり、上・下が同じ張りをもつ。	・肩部で張り緩やかなカーブで胴部へと続き、細長い器形。		
体部 文様			欠損のため不明	欠損のため不明
体部 整形 外	・上部と下部は右上り、下位上段の接合面は横方向の3段に別けられるタタキ目。	・5本の刷毛目を縦・横に行う。		
体部 整形 内	・横方向の刷毛目。	・横方向の刷毛目。		
底部	・尖底 囲りをタタキで尖底に成形し、底を1回たたいている。	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明
色調	・黄灰褐色	・茶褐色	・茶褐色	・暗茶褐色
胎土	・0.1～0.5の砂粒、石粒、雲母を含有	・0.1～0.7の砂粒、石粒を多量に含有。	・0.1の砂粒を僅かに含有	・0.1～0.6の砂粒、石粒を含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考	・底部から片面にかけて黒斑	・この二重口縁は、一端外反している所で止まり水平な薄い器壁を有している。その後、上から立ち上がりの部分をつけたしている。		

土器No.	109 13	109 14	109 62 15	109 16
種類 / 摘要	壺 B1	壺 B1	壺 B1	壺 B2
法量 (cm) 口縁径	18.75	20.95	23.35	18.9
法量 (cm) 器高	4.45（現存値）	4.6（現存値）	5.5（現存値）	3.75（現存値）
法量 (cm) 腹径 / 底径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
出土地区	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3
口頸部 形態	・二重口縁。下段は水平近くのび、わずかに肥厚し上段は直線的にのびる内面にも明瞭な段がある。	・二重口縁。下段は大きく外反し、外面にわずかに肥厚し、上段も大きく外反する。口縁端部に段を有する。内面はわずかに段をもって外反する。	・二重口縁、上方の開く頸部が水平に折れ端部で僅かに下に張り出す、上段は広く外反し、端部に丸味のある段をもつ。	・二重口縁。外上方へ直線的にのびる口縁に、中位外面に三角の凸帯を付け二重口縁としたもの。
口頸部 文様		・下段端に刻目痕が一周する。		
口頸部 整形 外	・風化により不明	・上段は、横方向の刷毛目の上から粗雑なヘラ磨き。下段は縦方向の刷毛目の上からヘラ磨き。	・上段は横ナデ、下段はヘラ磨き。	共に横方向のヘラ磨き。
口頸部 整形 内	・上段は、縦方向の細かいヘラ磨き、下段は横方向のヘラ磨き。	・横方向の刷毛目の上から縦方向のヘラ磨き。	・横ナデ、ヘラ痕が観られる。	
体部 形態	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
体部 文様				
体部 整形 外	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明
体部 整形 内				
底部	・暗茶褐色	・茶褐色	・淡茶褐色	・外面一青黄灰褐色 内面一淡赤褐色
色調				
胎土	・0.1〜0.2の砂粒を含有	・0.1〜0.2の砂粒を含有	・0.1〜0.2の砂粒を含有	・0.1〜0.3の砂粒を含有
焼成	・良好	・良好	・良好	・良好
備考		・薄く煤付着。		

土器No.	43 / 109	17	43 / 109	18	/ 109	19	/ 109	20
種類 / 摘要	壺 B₂		壺 B₂		壺 B₂		壺 B₂	
法量(cm) 口径	18.75		16.5		12.75		15.95	
法量(cm) 器高	6.25（現存値）		6.65（現存値）		3.0（現存値）		3.5（現存値）	
法量(cm) 胴径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量(cm) 底径								
出土地区	H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
口頸部 形態	・二重口縁、頸部より外反し、さらに外反する口縁部をつけたした形をなす。内面は頸部と口縁部の境に稜をもって外反する。		・二重口縁、短い筒状の頸部に外上方へひろがる口縁、中位外面に三角形凸帯を付け二重口縁としたもの。		・細い短かな筒状の頸部に大きく水平に広がる口縁、口縁端は上・下に張り出し稜をもつ。稜は中央でふくらみ断面は丸い。		・外上方へ大きく広がり、端部は上・下に大きく張り出し稜をなし、稜は中央が凹み弓なりをなす。	
口頸部 文様					・稜に5本の櫛描波状文と2個1対の円形浮文が7ヵ所につき、内面端に4本の櫛描波状文と放射状の線が入っている。		・外面に8本の櫛描波状文と上・下1個の円形浮文が12ヶ所。内面には、7本の異形の櫛描波状文	
口頸部 整形 外	・口縁部は横方向のヘラ磨き。頸部は縦方向のヘラ磨き。		・共に口縁部は横ナデ頸部は横方向のヘラ磨き。		・内・外面ともに、縦方向のヘラ磨き。		・不明	
口頸部 整形 内	・口縁部は横方向のヘラ磨き、頸部は板ナデ						・縦方向のヘラ磨き。	
体部 形態	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
体部 文様								
体部 整形 外								
体部 整形 内								
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明	
色調	・淡黄褐色、一部赤褐色		・茶褐色		・淡茶褐色		・淡赤褐色	
胎土	・0.1〜0.3の砂粒を含有		・0.1〜0.2の砂粒極少含有		・0.1〜0.2の砂粒を含有		・0.1〜0.3の砂粒を含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・内外共に煤付着							

土器No.	61/109	21	61/109	22	61/109	23	/109	24
種類 / 摘要	壺 B₂		壺 B₂		壺 B₂		壺 B₂	
法量(cm) 口縁径	19.3		19.15		17.4		34.2 (反転)	
法量(cm) 器高	2.3 (現存値)		2.5 (現存値)		3.7 (現存値)		3.7	
法量(cm) 胴径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量(cm) 底径								
出土地区	H—3—G 溝II—3		H—3—G 溝II—3		H—3—G 溝II—3		H—3—G 溝II—3	
口頸部 形態	・口縁端部のみであるが水平近くのびる口縁、口縁端は上に立ちあがり、下にわずかに張り、稜を有する。		・二重口縁。下段は大きく外反し、少し下に張り出す、上段は短く外反し端部は外面に肥厚する。		・二重口縁。下段は大きく外反し、小さく下に張り出す。上段は短く、少し立ち上がり端部で反り、端部は僅かに外面肥厚する。		・二重口縁。下段から大きく外反し、上段も外反し、端部に稜を有する。	
口頸部 文様	・稜、上下端に刻目を施し14本の櫛描波状文と3個1対の円形竹管文を施す。		・4本の櫛描波状文と2個1対の円形竹管浮文。		・5本の櫛描波状文。		・稜外面に3本の櫛描波状文。上段外面に8本の同文と5本の同直線文。内面端に9本の同波状文。	
口頸部 整形外	・				・口縁端部横ナデ、下段は縦方向のヘラ磨き。			
口頸部 整形内	・ 不明		・横方向の櫛毛目。		・口縁端部横ナデ、一部刷毛目、下段は横方向のヘラ磨き。		・横方向のヘラ磨き。	
体部 形態								
体部 文様	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
体部 整形外								
体部 整形内								
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明	
色調	・淡暗黄茶褐色		・淡黄灰褐色		・淡赤茶褐色		・外面—淡青黄褐色 内面—淡灰褐色	
胎土	・0.1・0.2の砂粒を含有		・0.1～0.3の砂粒を含有		・0.1～0.3の砂粒を含有		・0.1～0.5の砂粒、石粒を含有	
焼成	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考								

土器 No.	61 / 109 — 25	61 / 109 — 26	109 — 27	61 / 109 — 28
種類 / 摘要	壺 B₂	壺 B₂	壺 B₂	壺 B₂
法量 (cm) 口縁径	16.6	17.3	23.1	19.0
法量 (cm) 器高	4.0 (現存値)	7.1 (現存値)	5.1 (現存値)	2.7 (現存値)
法量 (cm) 胴径 / 底径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
出土地区	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	II−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3
口縁部 形態	・二重口縁。下段は外反し端部で下へたれる。上段は短く直線的に斜上方に立ち上がる。	・二重口縁。肩部より大きく反り曲り、上段は、中位まで外反し上部は僅かに内弯ぎみにのびる。	・二重口縁。下段より外反し、上段は中段まで立ちあがりさらに大きく外反する。端部に稜を有する。内面は段なく外反し端部でより反る。	・二重口縁。下段は広く外反し、上段も大きく開く、端部は断面三角形を成す。
口縁部 文様	・上段外面全面に18本の櫛描波状文。波状文の巾が大きく山を全部描き切っていない。	・外面には、8本の櫛描波状文2帯と4本の同直線文。内面はそれと下位に4本の同直線文。	・段の所に2個1対の円形竹管浮文を8ヵ所施す。	・内面端部に7本の櫛描波状文。
口縁部 整形外面	・横ナデ	共に風化が著しく不明	・横ナデの上から縦方向のへう磨き。	共に横ナデ
口縁部 整形内面	・横方向の粗雑なへう磨き。		・横ナデの上から横方向のへう磨き。	
体部 形態	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
体部 文様				
体部 整形外面				
体部 整形内面				
底部	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明
色調	・暗茶褐色	・茶褐色	・茶褐色	・淡黄茶褐色
胎土	・0.1〜0.4の砂粒、黒雲母を僅かに含有	・0.1〜0.4の砂粒、雲母を含有	・0.1〜0.2の砂粒を含有	・0.1〜0.2の砂粒を含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考	・外面に薄く煤付着		・内面に煤付着	

土器 No.	61 / 109	29	43 / 109	30	43 / 109	31	— / 110	32
摘要 ＼ 種類	壺 B₂		壺 B₂		壺 B₂		壺	
法量 (cm) 口縁径	19.8		21.6		19.3		欠損のため不明	
法量 (cm) 器高	3.95（現存値）		26.1（現存値）		口縁部高 5.2（現存値） 体部器高19.2（現存値）		4.1（現存値）	
法量 (cm) 腹径	欠損のため不明		27.5		33.9		22.8（現存値）	
法量 (cm) 底径			欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
出土地区	H－3－G 溝Ⅱ－3		H－3－G 溝Ⅱ－3		H－3－G 溝Ⅱ－3		H－3－G 溝Ⅱ－3	
口縁部 形態	・二重口縁。下段は内弯ぎみに伸び、上段は直線的に伸びる。段の所に張り出しを付けたしている。		・二重口縁。長い筒状の頸部から水平ぎみに大きくのび、上段は僅かに外反する。		・二重口縁。下段は外反し端部で僅かに張り出す。上段は斜上方へ直線的に伸び、端部は鋭を有し断面三角形。		欠損のため不明	
口縁部 文様	・上段の上下に刻目文、8本の櫛描波状文を2帯、中央に約50個の円形竹管浮文。内面は8本の同波状文2帯、11本の同直線文。		・7本の櫛描波状文2帯。中央部に2個1対の円形浮文4カ所。		・上段の上・下に刻目文竹管文約50ヶ所1列にならび、下に6本の櫛描波状文2帯が、6回に区切られてある。			
口縁部 整形 外	・		・細かな縦方向刷毛目、頸部横ナデ。		・横方向刷毛目。			
口縁部 整形 内	・共に横ナデ		・横方向の刷毛目の上から横ナデ。		・横、右下りのヘラ磨き。			
体部 形態	欠損のため不明		・肩部がややふくらみをもち、中位上で大きく張り出す。下位は直線的に小さくなる。		・最大径は中位にあり上・下が同じ張りをもち球形を成す。		・肩部が張る。	
体部 文様					・肩に12本の櫛描波状文。40ヶ所の竹管文。		・6本の櫛描直線文と5本の同波状文各々2帯	
体部 整形 外			・細かな刷毛目の上に縦方向のヘラ磨き。		・肩部は横方向の大きなヘラ磨き、中・下部は縦方向の刷毛目。		・縦方向ヘラ磨き。	
体部 整形 内			・上部は一部削っている。下部は縦方向の刷毛目。		・横方向の刷毛目。		・横ナデと一部ヘラ磨き。	
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明	
色調	・淡黄褐色を基調に、全面に淡赤黄色を塗っている。		・淡青黄褐色		・赤褐色一部黄褐色		・淡茶褐色	
胎土	・0.1～0.2の砂粒を多量に含有		・0.2～0.8の砂粒・石粒を多量に含有。		・0.1～0.2の砂粒含有		・精製粘土	
質	・やや軟質		・良好		・良好		・良好	
備考					・薄く煤付着			

土器No.	110 / 33	62 / 110 / 34	110 / 35	62 / 110 / 36
種類	壺	壺	壺	壺
法量(cm) 口縁径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
法量(cm) 器高	4.0（現存値）	13.3（現存値）	7.2（現存値）	4.3（現存値）
法量(cm) 胴径	22.7（〃）	23.65（〃）	30.0（〃）	19.05（〃）
法量(cm) 底径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
出土地区	H－3－G 溝II－3	H－3－G 溝II－3	H－3－G 溝II－3	H－3－G 溝II－3
口頸部 形態				
口頸部 文様				
口頸部 整形外面	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
口頸部 整形内面				
体部 形態	・丸味のある肩部	・肩状の頸部より肩の張る丸い器形	・肩が張り丸い器形	・肩の張らない、なだらかな器形
体部 文様	・肩部に断面四角形の凸帯をはり付け、これに刺突文。7本の櫛描波状文2帯、9本の同直線文、7本の同波状文	・10本の細かい櫛描直線文と12本の同波状文	・6本の細い櫛描直線文と同5本の波状文。	・7本の櫛描直線文、同波状文が各々2帯
体部 整形外面	・不明	・頸部は横方向のヘラ磨き。体部は縦方向のヘラ磨き。	・不明	・不明
体部 整形内面	・横ナデ	・風化が著しく不明	・横ナデ	・横ナデ
底部	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明
色調	・暗茶褐色	・青黄褐色	・淡黄灰褐色	・淡茶褐色
胎土	・0.1の砂粒、雲母を含有	・0.1～0.7の砂粒、石粒多量に含有	・0.1～0.7の砂粒、石粒を含有	・0.1～0.6の砂粒、雲母を含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考				

土器 No.		62/110	37	62/110	38	43/110	39	45/110	40
摘要	種類	壺		壺		壺 B₂		壺	
法量(cm)	口縁径	欠損のため不明		欠損のため不明		24.6		17.75	
	器高	6.1（現存値）		10.85（現存値）		19.1（現存値）		23.1（現存値）	
	腹径	21.4（〃）		23.55（〃）		29.6		24.95	
	底径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
出土地区		H－3－G 溝Ⅱ－3		H－3－G 溝Ⅱ－3		H－3－G 溝Ⅱ－3		H－3－G 溝Ⅱ－3	
口頸部	形態	欠損のため不明		欠損のため不明		◦二重口縁。短い筒状の頸部から明確に折れ上段は広く外反、内面は緩やかなカーブで外反する。		◦やや内傾し立ち上がり、中位で僅かに肥厚。端部は、内面が上方へ外面が外方へ肥厚する。	
	文様					◦外面12本の櫛描波状文と2個1対の円形竹管浮文。内面12本の同波状文を2帯。			
	整形 外					◦縦方向のヘラ磨き		◦右上りの細かな刷毛目の上から、縦方向のヘラ磨き。頸部下段に横方向のヘラ痕。	
	内					◦横方向のヘラ磨き		◦横方向の刷毛目。	
体部	形態	◦筒状の頸部から、肩の張らない、なだらかに落ちる器形。		◦肩の張らない球形を成す。		◦肩部がやや張り、最大径は中位、緩やかなカーブをもつ。		◦緩やかな肩部に胴部でやや張り、丸い器形。	
	文様	◦6本の櫛を押した列点文、7本の櫛描直線文各々3帯。		◦11本の櫛描波状文4帯と同直線文1帯		◦肩部に断面三角形凸帯をはり付け、刻目文、4個1対の竹管文4カ所、その間に12本の櫛描波状文。			
	整形 外	◦不明		◦不明		◦右下りのヘラ磨き		◦縦方向の刷毛目の上から、ヘラ磨き。	
	内	◦頸部横ヘラ磨き、肩部、ナデと刷毛目。		◦横方向の刷毛目。		◦ナデ（粘土紐が残り巾1.7cm）		◦横方向の刷毛目、一部ヘラ削り。	
底部		◦欠損のため不明		◦欠損のため不明		◦欠損のため不明		◦欠損のため不明	
色調		◦黄灰褐色		◦淡青黄褐色		◦乳黄褐色、赤褐色		◦乳黄褐色	
胎土		◦0.1～0.4の砂粒多量に含有　雲母を含有		◦0.1～0.2の砂粒を含有		◦0.2～1.0の砂粒、石粒を含有		◦0.1～0.5の砂粒、石粒多量に含有	
	質	◦良好		◦良好		◦良好、軽量の質		◦良好	
備考		◦内面に煤付着				◦この櫛描波状文は、なだらかな山と谷をもつ線で描いている。			

土器 No.	110	41	110	42	111	43	111	44
種類 / 摘要	甕		甕		壺 C₂		壺 C₂	
法量 (cm) 口径	欠損のため不明		欠損のため不明		8.05		欠損のため不明	
法量 (cm) 器高	19.98（現存値）		22.9（現存値）		17.35		13.65（現存値）	
法量 (cm) 腹径	27.1		30.3		17.55		15.05	
法量 (cm) 底径	4.6		4.5		3.5		2.15	
出土地区	H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
口縁部 形態					・外上方へ立ち上がり端部で内弯し器壁が薄くなる。断面は丸い。		・口縁、頸部は欠損	
口縁部 文様								
頸部	欠損のため不明		欠損のため不明					
頸部 整形外					・横ナデ、縦方向のヘラ磨き。			
頸部 内					・横ナデ		・横ナデ（頸部）	
体部 形態	・最大径が中位にあり大きい、肩部が張り中位で丸味を増し、下位は張りがない。		・肩部が張り、躯部では大きく一個まるみをもちながら張る。下位は急な線で底部に続いている。		・肩部が張り、最大径の中位で一個張る扁平な形。		・最大径は上位にあり肩が少し張り、下位は丸くなる。	
体部 文様								
体部 整形外	・中位まで右下りのヘラ磨き、下位は一部ヘラ削り。		・最大径まで右下りのヘラ磨き。下位は一部ヘラ削り。		・上位・下位は縦方向・中位は横方向のヘラ磨き。		・右下りのヘラ磨き。	
体部 内	・右下りの刷毛目の上から横方向のヘラ磨き。		・右下りの刷毛目の上から横方向のヘラ磨き。		・不明		・細かな横方向の刷毛目	
底部	・突出平底 中央に凹みがあり、周りを少し削っている。		・平底 厚みがあり底が小さく中央部凹んでいる。周りを削っている。		・平底 中央部が自然に凹み削っている。		・平底 周りがよく磨かれているため丸底に近い。	
色調	・淡青黄褐色		・淡青黄褐色		・暗茶褐色		・外面—淡黄茶褐色 内面—淡黒色	
胎土	・0.1〜0.7の砂粒、石粒を含有		・0.2〜0.7の砂粒、石粒を含有		・0.1〜0.2の砂粒・雲母を含有		・雲母を含有	
胎土 質	・良好		・良好		・良好		・精製された良質の粘土	
備考					・全体に薄く煤付着		・焼成後、体部中央に孔	

土器No.		44/111 45	44/111 46	44/111 47	44/111 48
摘要	種類	壺 C_2	壺 C_1	壺 C_1	壺 C_1
法量(cm)	口縁径	9.65	15.1	13.35	12.65
	器高	16.0	7.5（現存値）	18.8（現存値）	25.0（現存値）
	腹径	12.9	欠損のため不明	28.8	25.95
	底径	丸底		欠損のため不明	欠損のため不明
出土地区		H－3－G 溝Ⅱ－3	H－3－G 溝Ⅱ－3	H－3－G 溝Ⅱ－3	H－3－G 溝Ⅱ－3
口類部	形態	◦肩部と頸部の境で少しくびれ、½まで内弯し、外上方へ広がる端部で一層内弯し、断面は三角形を成す。	◦外反し、端部は丸くおさめる。	◦外上方に少し外反し、内面はより外反し端部程薄くなり、断面は丸い。	◦外上方へ広がり、端部でやや外反し、外面に稜がある。
	文様		◦端部上面に刻目文を一周する。	◦頸部と肩部の境に、凸帯を付け、2カ所の刺突文。	
	整形外	◦縦方向の細かなヘラ磨き。	◦横ナデ、縦方向の太いヘラ磨き。	◦ 共に横ナデ	◦縦方向の刷毛目。
	内	◦横方向の刷毛目の上に放射線上のヘラ磨き。（暗文風）	◦横ナデ	◦ 共に横ナデ	◦横方向の刷毛目。
体部	形態	◦最大径は中位、胴部で張るが上・下位の張りが等しい丸い体部。	欠損のため不明	◦少し肩部が張り、胴部はゆるやかである。	◦胴部一部欠損。肩部がやや張り、胴部で緩やかになり最大径はやや下位にある。下位では粘土紐の痕が残る。
	文様				
	整形外	◦肩部に少し刷毛目が残り、中位は横方向。下位は縦方向のヘラ磨き		◦右下りのヘラ磨き。	◦縦方向の刷毛目、下位に一部タタキ目が残る
	内	◦ナデ		◦横方向に不調整	◦ナデ、粘土紐の継ぎ目が明確に残る。
底部		◦丸底	◦欠損のため不明	◦欠損のため不明	◦欠損のため不明
色調		◦赤褐色	◦淡灰赤黄色	◦黄褐色	◦青黄褐色
胎土		◦金雲母を含有	◦0.1～0.3の砂粒含有	◦0.1～0.3の砂粒を含有	◦0.1～0.3の砂粒を含有
質		◦精製された良質の粘土	◦良好	◦良好	◦良好
備考					◦編み包みの日焼けの痕が残る。

土器 No.	45 / 111 — 49	45 / 111 — 50	45 / 111 — 51	46 / 112 — 52
種類 / 摘要	壺 C_1	壺 C_1	壺 C_1	甕 A_1
法量 (cm) 口縁径	13.35	13.1	15.1	17.0
法量 (cm) 器高	23.0 (現存値)	29.9	26.9	23.7
法量 (cm) 胴径	23.85	26.9	23.0	20.1
法量 (cm) 底径	欠損のため不明	尖底	丸底	4.1
出土地区	II−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	II−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3
口頸部 形態	・外上方へ小さく外反し、端部外面に稜を有する。	・肩部より直線的に短くのび、器壁は厚く端部は丸くおさめる。	・外上方へ広がり、中位でやや内弯し、端部で僅かに内弯し内面肥厚する。	・外上方へ大きく広がり、外面中位で僅かにふくらむ。端部外面に稜を有するが丸くなる。
口頸部 文様	・頸部の付け根と口縁端部に刻目文が一周する。	・端部外面に刻目文が1周する。		・端部稜に刻目文が一周する。
整形 外	・縦方向の刷毛目の上から横ナデ。	・縦方向のヘラ磨き、端部付近は横方向の刷毛目が残る。	・端部は横方向、他は縦方向のヘラ磨き。	・共に横ナデ
整形 内	・横ナデと縦方向の刷毛目の上から一部に縦方向のヘラ磨き。	・横方向のヘラ磨き。	・端部・頸部付近は横方向、他は縦方向のヘラ磨き。	
体部 形態	・肩部があまり張らず丸い体部、下位がやや張る。	・頸径が小さく、最大径が中位にある丸い器形	・最大径は中位にあり、肩から緩やかに落ち、下位は急激に小さくなる。器壁は薄い。	・最大径は中位にあり、上位より下位の張りがやや小さく長い体部。
体部 文様				
整形 外	・深い縦方向の刷毛目の上から所々にヘラ磨き	・細かなヘラ磨き、一部ヘラ削りがある。	・上位は右下り、下位は横方向のヘラ磨き。	・肩部は横ナデ、以下右上りのタタキ目2段。
整形 内	・右下りの刷毛目。	・ナデ	・ナデ、一部削っている	・横方向の刷毛目
底部	・欠損のため不明	・尖底 器壁が厚く、ヘラで削っている。	・丸底 僅かに削っており、器壁は非常に薄い。	・突出平底 木葉痕、糸底と認められるあとが付いている。
色調	・茶褐色	・淡黄茶褐色	・淡黄灰色	・淡黄茶褐色
胎土	・0.1〜0.5の砂粒多量に含有	・0.1〜0.3の砂粒を多量に含有	・0.1〜0.7の砂粒、石粒、金雲母を含有	・0.1〜0.3の砂粒を含有
質	・良好	・良好	・精良粘土	・良好
備考	・内外共に煤付着	・全体に煤付着	・平城宮址溝SD6030の出土壺に酷似している	・煤は底部と頸部には比較的少なく最大径に多く付着している。

土器 No.	46/112 53	46/112 54	46/112 55	47/112 56
種類 / 摘要	甕 A1	甕 A3	甕 A1	甕 A3
法量(cm) 口縁径	15.15	11.55	14.1	12.0
法量(cm) 器高	17.95	14.1	20.1	14.4
法量(cm) 胴径	15.85	12.35	18.7	13.5
法量(cm) 底径	3.7	4.8	3.2	3.6
出土地区	H—3—G 溝II—3	H—3—G 溝II—3	H—3—G 溝II—3	H—3—G 溝II—3
口頸部 形態	・「く」の字に外反し中位で僅かに肥厚する端部は、立ち上がり明瞭に稜がある。	・「く」の字に外反し端部で一段外反し、外面に僅かに稜を有する。	・「く」の字に外反、中位で僅かに肥厚し、端面に僅かな稜。	・頸部のくびれが小さく短く外反する。端部は薄くなる。
口頸部 文様				
口頸部 整形 外	・共に横ナデ	・共に横ナデ	・共に横ナデ	・頸部に縦方向の刷毛目、他横ナデ。
口頸部 整形 内	・共に横ナデ	・共に横ナデ	・共に横ナデ	・横ナデ
体部 形態	・最大径が中位上にあり、下位が張らないため細長い器形を成す。	・最大径は中位より上に有り、長い器形。	・最大径は中位の上にあり、肩部がやや張るが下位は張らず小さい。	・最大径が中位にあり緩やかな器形。
体部 文様				
体部 整形 外	・肩部は横ナデ、以下継ぎ目で変化するタタキ目2段。	・右下りのタタキ目2段、底部付近は右上り、一部ヘラ磨き。	・3段の右上り、水平タタキ目。	・右上りのタタキ目2段下段にヘラ、刷毛の調整が数カ所みられる。
体部 整形 内	・刷毛目	・ナデ	・右下りで回転する刷毛目。	・ナデ
底部	・突出平底 中心部が僅かに方形に凹んでいる。	・平底 突出平底を押しつぶしたような形をなす。木葉痕を残す。	・平底 タタキが稜線まで施され、中央が凹み、まわりの粘土が入っている。底部は器壁が他よりやや薄い。	・平底 中央部に凹みが有る。
色調	・淡茶褐色	・淡茶褐色	・淡黄褐色	・淡灰茶褐色
胎土	・0.1～0.3の砂粒を含有	・0.1～0.3の砂粒を含有	・0.1～0.3の砂粒を含有	・0.1～0.3の砂粒を含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考		・底部に黒斑	・底部のみ煤付着	・内外共に煤付着

土器No.	47/112	57	47/112	58	47/112	59	48/第20図	60
種類	甕 A_3		甕 A_3		甕 A_3		甕 A_3	
法量(cm) 口縁径	13.55		18.4		12.8		14.5	
法量(cm) 器高	12.3		17.4		17.2		23.5	
法量(cm) 腹径	13.65		19.9		15.5		19.6	
法量(cm) 底径	5.1		3.45		3.2			
出土地区	H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
口頸部 形態	・緩やかに外上方へ開き、端部で一層外反する。頸部内面に突出し、ふくらみがある。		・外反し立ち上がり、中位より一層反る。		・ゆるやかに曲折し、外上方へのび、端部でより反り、断面は丸い。		・外反し、中位で厚みを増し、端部で一層反り、外面に僅かに稜あり。	
口頸部 文様								
口頸部 整形外	・共に横ナデ		・頸部に縦方向の刷毛目、横ナデ		・頸部の一部にタタキ目が残る。横ナデ		・共に横ナデ	
口頸部 整形内			・横ナデ		・横ナデ			
体部 形態	・最大径が中位より上にあり、短い器形を成し、口径と腹径に差がない。		・最大径が中位の上にあり、器高より腹径が大きく、頸径(15.5)も大きい鉢に近い形を成す。		・最大径が中位で、上位と下位の張りが同程度で、ずんぐりしている		・最大径は上位の肩部近くにあり、頸部は張りが少なく長い。	
体部 文様								
体部 整形外	・右上りのタタキ目、以下風化により不明		・下位の継ぎ目から急傾斜の細かい右上りのタタキ目。		・右上りのタタキ目2段と下位は右下りのタタキ目。		・比較的太いタタキ目が3段、所々ヘラ削り。	
体部 整形内	・風化により不明		・ナデ、底部より口縁へ動いている。		・ナデ、一部に刷毛目。		・ナデ、ヘラ痕がある。	
底部	・平底 一方が押しつぶされ歪んでいる。		・平底 中央に僅かな凹をもつ		・平底		・削り底 削り取った痕が残り凸凹が多い。	
色調	・淡茶褐色		・乳黄褐色		・乳黄褐色		・淡黄褐色	
胎土	・0.1~0.4の砂粒を含有		・0.1~1.0の砂粒・石粒を含有		・0.1~0.4の砂粒・石粒含有		・0.1~0.5の砂粒を含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・煤が全体に付着		・底部以外全体に煤付着内面下位に炭化物付着内面には巾3cmの粘土紐が4段に積まれているのが残る。		・外面全体に煤付着。外面最大径付近に若しく付着			

土器 No.	48 第20図	61	48 112	62	47 112	63	47 112	64
種類 / 摘要	甕 A1		甕 A1		甕 A2		甕 A2	
法量(cm) 口縁径	15.4		15.0		17.7		13.45	
器高	23.7		26.6		12.9		14.1	
腹径	20.6		22.7		15.9		13.8	
底径	2.7				3.8		2.45	
出土地区	H−3−G 溝II−3		II−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
口頸部 形態	◦ゆるやかに外反し、端部でつまみ上げられ外面に稜を有する。		◦外反し、端部でより外反する。端部外面に稜をもつ。		◦外反し、中位で外面に器壁が肥厚し、やや内弯ぎみになり、端部で反り断面は丸い。		◦小さくくびれる頸部から、緩やかに外反する	
文様								
調整 外	◦	共に荒い横ナデ	◦	共に横ナデ	◦頸部にタタキ目が残り横ナデ		◦	共に横ナデ
内	◦		◦		◦横ナデ		◦	
体部 形態	◦最大径は中位より上にあり、上位より下位の張りが大きく丸い器形を成す。		◦最大径が中位より下にあり、頸径が小さく肩の張りが大きい。		◦最大径は中位の上にあり、口径が腹径より大きい、器高の低い器形。		◦最大径が中位にあり器高と腹径の差が小さく、ずんぐりした器形	
文様								
調整 外	◦右上りのタタキ目、3段。		◦右上りの浅いタタキ目所々ヘラ削り。		◦右上りの急傾斜のやや細かなタタキ目。		◦右上り、右下り、右上りの3段のタタキ目。	
内	◦横方向の刷毛目。		◦ナデ		◦ナデ		◦刷毛目。	
底部	◦削り底 側面を7面に削り突出する。		◦削り底 突出した底部を削り取っている。		◦削り底 中央部に大きな凹みがある。周囲にタタキ目が残り、ヘラ削りがなされている。		◦削り底 底部の稜を刷毛で削り取っている。中央に凹みがある。	
色調	◦淡灰黄色		◦灰黄褐色		◦黄茶褐色		◦淡茶褐色	
胎土	◦0.1〜0.2の砂粒を含み、やや軟質		◦0.1〜0.3砂粒を含有		◦0.1〜0.3の砂粒を含有		◦0.1〜0.5の砂粒・石粒を含有	
質	◦良好		◦良好		◦良好		◦良好	
備考	◦全体に薄く煤付着。内面底部に炭化物残る。		◦底部に黒斑		◦全体に煤付着。内面に炭化物が残る。		◦内外共に煤付着。内面底部炭水物付着。	

土器 No.	48 第21図 65	49 第20図 66	49 113 67	49 113 68
種類 / 摘要	甕 A1	甕 A2	甕 A1	甕 A2
法量 (cm) 口縁径	14.0	15.6	15.7	13.9
法量 (cm) 器高	23.9	17.3	22.4	17.1
法量 (cm) 腹径	19.8	15.9	20.5	13.7
法量 (cm) 底径	3.0	2.6	1.5	3.05
出土地区	II−3−G 溝II−3	II−3−G 溝II−3	II−3−G 溝II−3	II−3−G 溝II−3
口頸部 形態	・水平近く外反し、端部でつまみ上げられ、稜を有す。器高が非常に低い。	・短く外反し、器壁が中位でやや肥厚する。端部波うち、ゆがんでいる。	・外上方に中位まで立ち上がり大きく外反する。端部が立ち上がり稜をもつ。	・外反し、端部で一段反る。端部に僅かに稜があり器壁が薄くなる。
口頸部 文様				
口頸部 整形外	・	・頸部にタタキ目が残る横ナデ	・	・
口頸部 整形内	・ 共に横ナデ	・横ナデ	・ 共に横ナデ	・ 共に横ナデ
体部 形態	・最大径は中位より上に位置し、頸径が小さいため肩張りの長い器形	・最大径が中位より上にあり、頸径が大きく張りのない長い体形を成す。粘土紐が明確に残る。	・最大径は中位にあり、上位が張る器形。	・最大径が中位より上にあり、上・下位の張りが等しく、器高が低い
体部 文様				
体部 整形外	・深い横、右上り、右下りの3段のタタキ目。	・横方向と右上りのタタキ目の2段。	・右上りのタタキ目3段	・横方向のタタキ目。
体部 整形内	・ナデ	・ナデ、刷毛目が残る。	・縦方向の刷毛目。	・縦方向の刷毛目。
底部	・タタキ底 底面を2回叩く。	・削り底 中央に凹み有り	・タタキ底 底面にタタキが入り乱れる。	・タタキ底 僅かに突出し、底面を2回以上叩き、周囲にも深いタタキ目。
色調	・茶褐色	・茶褐色及び淡赤褐色	・茶褐色	・淡茶褐色
胎土	・0.1〜0.4の砂粒を含有	・0.1〜0.6の砂粒・石粒多量に含有	・0.1〜0.3の砂粒を含有	・0.1〜0.2の砂粒を含有
置	・良好	・良好	・良好	・良好
備考	・外面全体と内面下段に煤付着。	・外面全体に煤付着。内面下位に炭化物付着	・最大径に著しく煤付着	・外面に僅かに煤付着内面全体に煤、炭化物付着。

土器 No.	49 / 113	69 / 113	70 / 113	71 / 113	50 / 113	72
種類 / 摘要	甕 A2	甕 A2	甕 A2	甕 A1		
法量 (cm) 口縁径	14.7	16.0	15.8	16.2		
法量 (cm) 器高	17.15	19.1	17.2	25.2		
法量 (cm) 腹径	15.55	18.0	16.7	22.95		
法量 (cm) 底径	2.8	4.1	3.8	2.3		
出土地区	H—3—G 溝II—3	II—3—G 溝II—3	H—3—G 溝II—3	H—3—G 溝II—3		
口頸部 形態	・頸部が大きくくびれ外反し、端部で一層反り、外面肥厚する。	・「く」の字に外反し端部で一層反る。器壁は段々薄くなり稜をもつ	・緩やかに外反し、中位で両面肥厚する。	・「く」の字に外反し端部で一層反る。		
口頸部 文様						
口頸部 整形外	・頸部にタタキ目が残り歪つになっている。	・僅かにタタキ目が残り横ナデ	・頸部にタタキ目が残り横ナデ	・共に横ナデ		
口頸部 整形内	・横ナデ	・横ナデ	・横ナデ	・共に横ナデ		
体部 形態	・最大径が肩部にあり、非常に肩部が張り、底部へ細くなる。	・最大径は上位に位置し、全体に張りが大きい。	・最大径中位はやや上に位置し、胴が張りずんぐりした器形。	・最大径が中位に位置し、上・下の張りが似た器形。		
体部 文様						
体部 整形外	・右上りのタタキ目、中位で右下りのタタキ目と交差、一部へラ削り	・右上のタタキ目3段、底部で交差する。	・右上りのタタキ目2段下段は縦方向のタタキ目と交差。	・比較的細かな右上りのタタキ目3段。右上りのヘラ磨き数カ所施す。		
体部 整形内	・ナデ	・縦方向の刷毛目。	・ナデ、大きなヘラ痕が残る。	・横方向の刷毛目。		
底部	・タタキ底 タタキ目が深く残り、傾斜があり不安定	・タタキ底 底面を1回叩き、中心よりずれ、傾斜している。	・タタキ底 タタキ底にしては大きいが、傾斜をもつ。	・タタキ底		
色調	・灰黄茶褐色	・乳黄茶褐色	・淡黄茶褐色	・淡茶褐色		
胎土	・0.1～0.5の砂粒を多量に含有	・0.1～0.3の砂粒を含有	・0.2～0.3の砂粒多量に含有	・0.1～0.8の砂粒・石粒を含有		
質	・良好	・良好	・良好	・良好		
備考	・中位より下位の内外に煤付着。	・薄く全体に煤付着。	・全体に煤付着。	・胴部に多く煤付着。		

土器 No.	50 / 113	73	49 / 113	74	50 / 第21図	75	50 / 113	76
種類 / 摘要	甕 A₂		甕 A₂		甕 A₁		甕 A₁	
法量 (cm) 口縁径	14.2		13.8		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量 (cm) 器高	18.6		19.8		21.4 (現存値)		22.05 (現存値)	
法量 (cm) 腹径	17.5		17.1		20.3		20.0	
法量 (cm) 底径	3.0		2.7				尖底	
出土地区	H—3—G 溝II—3		H—3—G 溝II—3		H—3—G 溝II—3		H—3—G 溝II—3	
口頸部 形態	◦くびれた頸部から外反し、端部に稜を有する		◦外反し、中位より一屈する。端部に稜が有り断面は丸く、外周が垂でいる。		◦口縁端欠損。頸部よりゆるやかに外反する。		◦「く」の字状にやや湾曲しながら外反する。口縁端部は欠損	
口頸部 文様								
口頸部 整形外	◦頸部にタタキ目が残り横ナデ		◦横ナデ		◦共に横ナデ		◦刷毛目 頸部付近は右上りのタタキ目	
口頸部 整形内	◦横ナデ		◦横ナデ、横方向の刷毛目が残る。				◦横方向刷毛目	
体部 形態	◦最大径が中位より上にあり、上・下位の張りが似た、ずんぐりした器形		◦最大径は中位より上にあり、頸部のしまりがよいため、上・下位の張りが似ている。		◦最大径が中位に位置し、上・下の張りが似た器形。		◦最大径は中位に位置し胴下半部より、とがりぎみに底部に続く器形。	
体部 文様								
体部 整形外	◦右上りのタタキ目2段が重複、数カ所ヘラ磨き。		◦右上りのタタキ目3段下段は右下りのタタキ目と交差し、右下りが後から叩かれている。		◦右上りのタタキ目3段肩部に縦方向の刷毛目		◦右上りのタタキ目の上に刷毛目、胴下半部は剝離のため不明	
体部 整形内	◦ナデ、ヘラ痕が残る。		◦横方向の刷毛目。		◦肩部横方向、下位縦方向の刷毛目。		◦ナデ	
底部	◦タタキ底 傾斜をもち不安定。底部は厚く1.3~2.0cm		◦タタキ底		◦タタキ底 底面を叩き、又一部を削り尖底風に。中央に凹みあり		◦尖底	
色調	◦黄褐色		◦茶褐色		◦淡赤黄褐色		◦淡茶褐色	
胎土	◦0.1~0.5の砂粒・石粒を含有		◦0.1~0.3の砂粒を含有		◦0.1~0.2の砂粒を含有		◦0.1~0.6の砂粒・石粒多量に含有	
質	◦良好		◦良好		◦良好		◦良好	
備考	◦外面全体煤付着 内面下段炭化米付着。		◦粗雑な作り。		◦全面に煤付着。		◦全面に煤付着。	

土器 No.	51/113	77	51/113	78	/114	79	/114	80
種類 / 摘要	甕 A_2		甕 A_2		甕 B		甕 C	
法量(cm) 口縁径	14.15		13.35		18.05		15.6	
法量(cm) 器高	17.5		15.4（現存値）		2.7（現存値）		5.9（現存値）	
法量(cm) 腹径	16.3		15.9		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量(cm) 底径	尖底		欠損のため不明					
出土地区	H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
口縁部 形態	◦「く」の字に外反し端部で一層外反し、外面に稜を有する。		◦緩やかな頸部から、外反し、端部で一層反り、端面に稜あり。		◦外上方へ大きく広がり内面は上方へ、外面端は外上方へ肥厚する。器高2.6cm。		◦やや弱く「く」の字型に外反、中位で厚みを増し、端部でつまみ上げ断面は丸い。器高2.6cm。	
口縁部 文様								
口縁部 整形外面	◦横ナデの上から縦方向の刷毛目。		◦共に横ナデ		◦共に横ナデ		◦共に横ナデ	
口縁部 整形内面	◦横方向の刷毛目		◦		◦		◦	
体部 形態	◦最大径が中位より上に位置し、下位の張りの小さい器形		◦最大径が中位にある丸い器形				◦やや肩張りの体部。器壁の厚み0.25〜0.4cm	
体部 文様					欠損のため不明			
体部 整形外面	◦肩部に横方向のタタキ目を残す、他は煤付着で不明		◦右上りの浅いタタキ目に横方向の細かいヘラ磨きを中位まで行う。				◦右上りの太いタタキ目僅かに浅い刷毛目。	
体部 整形内面	◦縦方向の刷毛目。		◦無方向の細かなヘラ磨き、一部削りがみられる。				◦横方向のヘラ削り、刷毛目が残る。	
底部	◦尖底		◦欠損のため不明		◦欠損のため不明		◦欠損のため不明	
色調	◦茶褐色		◦茶褐色		◦淡黄褐色		◦暗褐色	
胎土	◦0.1〜0.2の砂粒を含有		◦0.1〜0.3の砂粒を含有		◦0.1〜0.2砂粒、雲母を僅かに含有		◦0.1の砂粒含み、精良な粘土。	
質	◦良好		◦良好		◦良好		◦良好	
備考	◦全体に煤付着、最大径に著しい付着。器壁は厚い（0.5）が、最も精巧に作られている。		◦全体に煤付着 内面に炭水物付着		◦煤付着。		◦煤全体に付着。	

土器 No.	51 / 114	81	114	82	51 / 114	83	114	84
摘要 ＼ 種類	甕 B		甕 B		甕 B		甕 C	
法量 (cm) 口縁径	16.8		15.5 (反転)		16.3		17.95	
法量 (cm) 器高	8.25 (現存値)		10.85 (現存値)		19.6 (現存値)		7.75 (現存値)	
法量 (cm) 最大径	欠損のため不明		欠損のため不明		19.5		欠損のため不明	
法量 (cm) 底径					尖底			
出土地区	H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
口頸部 形態	・「く」の字型に外反し、端部でより反り、端は内側へ長くつまみ上げ、外面に稜を有す。器高2.2cm。		・「く」の字型に外反し、中位よりやや内弯する。外面に稜を有する。器高2.55cm。		・鋭く「く」の字型に外反、端部で立ち上がる。外面に稜あり、器高1.8cm。		・緩やかに「く」字型に外反、下位に厚みがあり、端部内側に立ち上がり稜をなす。器高2.5cm。	
口頸部 文様								
口頸部 整形外	・横ナデ		・共に横ナデ		・横ナデ		・横ナデ、タタキ目が残る。	
口頸部 整形内	・横ナデ、一部刷毛目		・外面に粘土の継ぎ目		・刷毛目の上から横ナデ		・横ナデ	
体部 形態	・なだらかな肩部より胴部へ続く器形。器壁が他より厚く0.4〜0.5cm		・緩やかな肩部に胴部より張る。器壁の厚み0.25〜0.45cm。		・最大径は中位より上にあり、肩の張った器形。頸部内面に鋭い稜をもつ。		・頸部からやや張る肩部。器壁の厚み0.25〜0.4cm。	
体部 文様								
体部 整形外	・細かい右上のタタキ目に下から上へ縦方向の刷毛目。		・細かい右上のタタキ目底部からの縦方向の刷毛目。		・右上りの細かいタタキ目。上から縦方向の刷毛目を下位に主に施す		・右上のタタキ目、一部へラ削り。	
体部 整形内	・粘土紐巾 1.6cmと規則正しく残り、横方向のへラ削り。		・肩部は横、胴部は縦方向のへラ削り。		・肩部より中位までへラ削り。		・横方向のへラ削り。	
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・僅かに欠損しているが尖底。		・欠損のため不明	
色調	・暗褐色		・暗褐色		・暗褐色		・暗褐色	
胎土	・0.1〜0.2の砂粒・金雲母を含有		・0.1〜0.3の砂粒・金雲母を含有		・0.1〜0.2の砂粒・金雲母を含有		・0.1〜0.2の砂粒を含み、金雲母多量に含有	
質	・精良な粘土。良好。		・精良な粘土。良好。		・精良な粘土。		・良好、精良な粘土。	
備考			・全面に煤付着。		・刷毛は2種内外共に煤が付着。		・口縁部に煤付着。	

土器 No.	114 85	114 51 86	114 51 87	114 88
種類 / 摘要	甕 B	甕 B	甕 B	甕 B
法量 (cm) 口縁径	14.8	14.1	15.75	15.3
法量 (cm) 器高	8.5 (現存値)	12.45 (現存値)	22.95	5.55 (現存値)
法量 (cm) 腹径	欠損のため不明	19.6	20.3	欠損のため不明
法量 (cm) 底径		欠損のため不明	丸底	
出土地区	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3 G 溝II−3
口縁部 形態	・中位で厚みを増し、外面は緩やかに外反、内面は鋭く「く」字に外反する。端部は僅かに鍛をなす。器高1.95cm	・「く」の字型に外反し、中位で外面が肥厚し、端部は外面に丸く肥厚する。器高2.4cm	・「く」の字型に外反し、器壁外面に僅かに肥厚し、内弯ぎみになる。端部外面に丸く肥厚する。器高2.6cm	・「く」の字に外反し、端部へ器壁が段々薄くなり。端でつまみ上げ鍛をなす。器高2.0cm
口縁部 文様				
頸部 整形外	・横ナデ、タタキ目が一部に残る。	・共に横ナデ	・共に横ナデ	・縦方向の刷毛目が薄く残り上から横ナデ。頸部にヘラで押えた痕。
頸部 内	・横ナデ	・共に横ナデ	・共に横ナデ	・横方向刷毛目の上に横ナデ
体部 形態	・なだらかな肩、体部の張りが小さい。器壁の厚み0.4〜0.5cm	・最大径は上位にあるが、おだやかな丸い肩器壁の厚み0.2〜0.4cm	・最大径は中位より上に位置し、肩の張った丸い器形。	・なだらかな肩。器壁の厚み0.3〜0.5cm
体部 文様		・肩に8本の櫛描波状文		
体部 整形外	・右上りの細かいタタキ目、僅かに刷毛目。	・横、縦方向の刷毛目。	・肩部は横、以下縦方向の刷毛目。	・縦方向の刷毛目。
体部 内	・横方向のヘラ削り。	・ヘラ削り	・肩部は横、以下右下りのヘラ削り。	・横方向のヘラ削り、(肩部には右下りの刷毛目)
底部	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・丸底 縦方向の細かい刷毛目が交差。	・欠損のため不明
色調	・暗褐色	・暗茶褐色	・暗茶褐色	・茶褐色
胎土	・0.1〜0.2の砂粒・金雲母を含有	・0.1〜0.3の砂粒・雲母を含有	・0.1の砂粒・金雲母を含有	・0.1〜0.3の砂粒・金雲母を含有
質	・良好	・良好	・精良な粘土。	・良好
備考	・この種の中で最も胎土が厚い。	・全面に煤付着。	・肩部に3カ所のヘラ記号。 外面に煤付着。内面底に炭化物。	・全体に煤が付着。煮汁こぼれの痕がついている。

土器No.	114 — 89	114 — 90	114 — 91	114 — 92
種類 / 摘要	甕 B	甕 C	甕 C	甕 B
法量(cm) 口径	17.0	15.1	14.95（反転）	13.25
法量(cm) 器高	3.85（現存値）	3.3（現存値）	5.0（現存値）	9.2（現存値）
法量(cm) 胴径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	17.05 欠損のため不明
法量(cm) 底径				
出土地区	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3
口縁部 形態	・やや丸い頸部から、僅かに内弯ぎみに立ち上がり、端部も僅かに立ち上がる。器高2.2cm。	・ゆるやかな頸部より外反し、中位よりやや内弯する。端部内面で上方へ肥厚し、凹みを有す。器高2.08cm。	・丸い頸部より外反し、端部で外面肥厚。器高は2.1cm。	・ゆるやかな頸部より外反し、中位より内弯する。端部は内面へつまみ上げ、外面に肥厚する。器高2.1cm
口縁部 文様				
口縁部 整形外	・共に横ナデ	・共に横ナデ	・頸部に縦方向の刷毛目、ヘラ圧痕。横ナデ	・共に横ナデ
口縁部 整形内	・共に横ナデ	・共に横ナデ	・横ナデ	・共に横ナデ
体部 形態	・不明	・不明	・なだらかな肩部 器壁の厚み0.2〜0.3cm	・最大径は中位より上に位置し、肩部の張りは小さい。器壁の厚み0.2〜0.4cm
体部 文様	・不明	・不明		
体部 整形外	・不明	・不明	・横方向の刷毛目。	・肩部は横、胴部は下から上へ縦方向の刷毛目
体部 整形内	・ヘラ削り	・ヘラ削り	・横方向のヘラ削り。	・肩部は横方向、下位は縦方向のヘラ削り。
底部	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明
色調	・淡黄褐色	・淡黄褐色	・淡黄褐色	・外面—黄茶褐色 内面—青黄褐色
胎土	・0.1〜0.3の砂粒を含有	・0.1〜0.2の砂粒・雲母を含有	・0.1〜0.3の砂粒・金雲母を含有	・0.1〜0.2の砂粒・金雲母を含有
焼成	・良好	・良好	・良好	・良好
備考		・煤付着。	・煤が薄く付着。	・全面に煤付着。

土器 No.	51 / 114	93	/ 114	94	/ 114	95	/ 114	96
種類 / 地区	甕 D		甕 D		甕 E		甕 E	
法量 (cm) 口縁径	11.65（反転）		18.3（反転）		12.7（反転）		13.65（反転）	
法量 (cm) 器高	4.8（現存値）		9.8（現存値）		4.5（現存値）		4.45（現存値）	
法量 (cm) 腹径 / 底径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
出土地区	II−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
口頸部 形態	・S字状口縁・端部は反って断面が丸い。		・緩やかに外反し、¼付近で外面に肥厚し、さらに端部で大きく立ち上がり丸く外反する。断面は丸い。		・ゆるやかなカーブで外上方へ立ち¼より、垂直近く上方へ立ちあがる。端部で外面に肥厚する。		・頸部より丸く反り、ほぼ垂直に立ち上がり端部で少し反る。端部断面は丸い。	
口頸部 文様								
口頸部 整形 外	・ } 共に横ナデ		・ } 共に横ナデ		・ } 共に横ナデ		・ } 共に横ナデ	
口頸部 整形 内	・		・		・		・	
体部 形態	・やや肩部が張る。		・なだらかな肩部。				・	
体部 文様							・ } 不明	
体部 整形 外	・肩部は右上りと横方向の、中位は右下りの刷毛目		・縦方向の刷毛目に、波形の刷毛目。一部ヘラ削り。		欠損のため不明		・	
体部 整形 内	・ナデ		・横方向の刷毛目、肩部に一部ヘラ削り。				・ヘラ削り	
底部	・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明		・欠損のため不明	
色調	・淡黄茶褐色		・茶褐色		・茶褐色		・淡黄灰茶褐色	
胎土	・精良な粘土		・0.1〜0.4の砂粒多量に含有		・0.1の砂粒を含有		・0.1の砂粒を含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・全面に薄く煤付着（東海系土器）				・全面に煤付着。			

土器 No.	114	97	115	98	115	99	115	100
種類 / 摘要	甕 E		高杯 A		高杯 A		高杯 A	
法量 (cm) 口縁径	24.1 (反転)		22.6 (反転)		21.3 (反転)		20.75 (反転)	
法量 (cm) 器高	7.5 (現存値)		4.7 (現存値)		4.3 (現存値)		5.25 (現存値)	
法量 (cm) 腹径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量 (cm) 底径								
出土地区	H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
口頸部(杯部) 形態	・外反し、ほぼ垂直に立ち上がり、立ち上がりが長い。端部断面は四角形		・下部は大きく広がり、上部は短く外反し、端断面は丸い。		・下部はやや内湾ぎみに広がり、上部は短く外反。端断面は丸い。		・下部が不明 外上方へ広がり、口縁端で一周広がる。	
口頸部(杯部) 文様			・端部に細かい刻目文が1周する。					
口頸部(杯部) 整形 外面	・	共に横ナデ	・	共に横ナデの上から放射線状のヘラ磨き	・	共に横ナデ	・横ナデ、上部には太い横ナデが残り縦方向のヘラ磨きが上から施される。	
口頸部(杯部) 整形 内面	・		・		・		・横方向のヘラ磨き。	
体部(胸部) 形態	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
体部(胸部) 文様								
体部(胸部) 整形 外面								
体部(胸部) 整形 内面								
底部	・欠損のため不明							
色調	・暗茶褐色		・灰褐色		・淡黄赤褐色		・淡黄赤褐色	
胎土	・0.1〜0.2の砂粒僅かに含有		・0.1〜0.3の砂粒多量に含有		・0.1〜0.2の砂粒を含み、僅かに雲母を含有		・0.1〜0.2の砂粒含有	
焼成	・良好		・良好 ・内外共に燻薄く付着。		・良好 軟質		・良好	
備考								

土器No.	115	101	115	102	115	103	115	104
種類 / 摘要	高杯 A		高杯 A		高杯 A		高杯 A	
法量(cm) 口径	21.65		22.6		20.0		21.8	
法量(cm) 器高	5.5（現存値）		5.5（現存値）		5.85（現存値）		6.05（現存値）	
法量(cm) 底径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
出土地区	II－3－G 溝II－3		H－3－G 溝II－3		H－3－G 溝II－3		H－3－G 溝II－3	
杯部 形態	◦外上方に広がる下部に、外上方に広がる口縁を有す。口縁端は内弯し僅かにつまみ上げられている		◦内弯しながら広く、平坦な杯下部に大きく外反する杯部。		◦外上方に僅かに反りながら大きく広がる。下部は内弯しながら水平に広がる。端部は丸い。		◦内弯する下部に外面に肥厚する段を有し外上方へ広がり、端部で外反する。	
杯部 文様								
杯部 整形 外面	◦不明		◦杯下部は横方向のヘラ磨き。		◦縦方向のヘラ磨き、口縁端は横ナデ		◦端部は横ナデ 段の部分は横ナデ	
杯部 整形 内面	◦口縁上面は横方向のヘラ磨き、その上より放射状にヘラ磨き。		◦放射状の凹凸のあるヘラ磨き。		◦縦方向のヘラ磨き。		◦縦方向の細かなヘラ磨き	
脚部 形態								
脚部 文様								
脚部 整形 外面	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
脚部 整形 内面								
底部								
色調	◦外面－茶褐色 内面－淡黄赤茶褐色		◦淡青黄褐色 中核－褐色		◦暗灰茶褐色		◦淡黄褐色	
胎土	◦0.1～0.3の砂粒含有		◦0.1～0.2の砂粒含有		◦0.1～0.2の砂粒含有		◦0.1～0.3の砂粒含有	
質	◦良好		◦良好		◦良好		◦良好	
備考								

土器No.	115 — 105	115 — 106	115 — 107	115 — 108
種類 / 摘要	高杯 A	高杯 A	高杯 A	高杯 A
法量(cm) 口縁径	22.2	23.05	19.25	20.75
法量(cm) 器高	6.7 (現存値)	5.75 (現存値)	5.0 (現存値)	6.2 (現存値)
法量(cm) 脚径				
法量(cm) 底径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
出土地区	II−3−G 溝II−3	II−3−G 溝II−3	II−3−G 溝II−3	II−3−G 溝II−3
杯部 形態	・内弯した下部に稜を有し、大きく外上方へ反り深い。端部は反り、断面は丸い。	・外上方に広がる下部に小さな段を有し、内弯しながら外上方へ広がる口縁。端1/4程は厚みを増し、内面端が反り丸くなっている。	・内弯しながら外上方へ広がり、僅かにふくらむ段を有し、内弯しながら外上方は広がる。端1/4程で一層内弯し、断面は丸い。	・内弯しながら外上方へ広がる下部で凹む段を有し、外上方へ広がる1/4〜1/4程で内弯し口縁端になると薄くなり丸い断面を有する。
杯部 文様				
杯部 整形 外	・共に縦方向のヘラ磨き	・不明	・杯下部にタタキ目が残っている。	・放射状のヘラ磨き
杯部 整形 内	・下部は横方向のヘラ磨き	・横、右下りの刷毛目の上に下方向から細線なヘラ磨き	・横ナデ	・横、右下りの刷毛目が残っている。
脚部 形態				
脚部 文様	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
脚部 整形 外				
脚部 整形 内				
底部				
色調	・淡茶褐色	・黄茶褐色	・淡黄灰色	・黄茶褐色
胎土	・0.1〜0.4の砂粒含有	・0.1〜0.6の砂粒、石粒を多量に含有	・0.1〜0.3の砂粒多量に含有	・0.1〜0.3の砂粒含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考				

土器 No.	115 / 109	115 / 110	52 / 115 / 111	115 / 112
種類	高杯 A	高杯 A	高杯 A	高杯 A
法量 (cm) 口縁径	20.65	20.8	20.3	22.2
法量 (cm) 器高	6.4 (現存値)	4.15 (現存値)	10.0 (現存値)	6.7 (現存値)
法量 (cm) 腹径				
法量 (cm) 底径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
出土地区	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3
杯部 形態	・内弯した下部に稜を有し大きく外上方へ広がる口縁を有する。	・稜を有し、外上方へ反る杯部 下部欠損	・下部は中心部がやや下り、広い。稜を有し、端部付近でより一層外反する。	・内弯した下部に稜を有し、大きく外上方へ反り深い。端部は反り、断面は丸い。
杯部 文様	内部底面に粘土の継ぎ目があるが中心部が深くまっすぐ外上方へ広がる。			
杯部 整形 外	・風化が著しく不明	・内外共に横ナデの上からヘラ磨き	・口縁端付近は横ナデヘラ磨き	・内外共に縦方向のヘラ磨き
杯部 整形 内	・横方向の刷毛目の上から放射状にヘラ磨き		・縦方向の刷毛の上から横方向のヘラ磨き	・杯下部は横方向のヘラ磨き
脚部 形態			・短く充実した柱部に大きく開く裾部	
脚部 文様				
脚部	欠損のため不明	欠損のため不明		欠損のため不明
脚部 整形 外			・ヘラ磨き	
脚部 整形 内			・ナデ (不調整)	
底部				
色調	・黒褐色		・青茶褐色	・淡茶褐色
胎土	・0.1〜0.5の砂粒、石粒多量に含有	・0.1〜0.2の砂粒含有	・0.1〜0.3の砂粒多量に含有	・0.1〜0.4の砂粒含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考	・円板充填型	・内外共に黒斑を有する		・稜の所には明確な粘土の継目が出ている。

土器 No.	113 (115)	114 (115)	115 (115)	116 (52/115)
種類 / 摘要	高杯 A	高杯 A	高杯 A	高杯 A
法量 (cm) 口縁径	18.8	20.75	22.7 (反転)	22.95
法量 (cm) 器高	11.3 (現存値)	6.9 (現存値)	10.8 (現存値)	15.95
法量 (cm) 腹径				
法量 (cm) 底径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	16.4
出土地区	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	II−3−G 溝II−3
杯部 形態	・下部は張り、段を有する。上部は少し立ち上がり大きく外上方へ広がる。内面は傾斜を有する下底にゆるやかなカーブで立ち上がる。	・下部欠損、外上方へ大きく反る杯部で深く、口縁端はわずかに立ち上がる。	・内湾した下部にやや下方へ稜をなし、大きく外上方に反る。内面は中央ほど深くなる。稜のところには明確な粘土の継ぎ目が残っている。	・小さな下部に極少の稜をもち、外上方へ大きく広がる杯口縁。下部の内面は平坦、端部は薄く断面は丸い。
杯部 文様		・上部にタタキ目が一部残っている。その上から横方向の刷毛目があり右下りのヘラ磨きが施されている。		
杯部 整形 外	・ヘラ磨き 立ち上がりの所のみ横ナデ		・下部は横方向のヘラ磨き。上部は縦方向のヘラ磨き	・刷毛目と細かいヘラ磨き
杯部 整形 内	・ヘラ磨き	・横方向の刷毛目の上から放射状にヘラ磨き。	・斜方向のヘラ磨き	・刷毛目とヘラ磨き 端部は横ナデ
脚部 形態	・充実したエンタシス状の柱部		・やや太い充実した柱部	・中空で裾広がりの柱部に大きく広がった裾部をつけている。
脚部 文様				・3孔
脚部 整形 外	・縦方向のヘラ磨き	欠損のため不明	・縦方向に太目のヘラ磨き。	・柱部は横方向の細かなヘラ磨き。裾部は細かな刷毛目とヘラ磨き。
脚部 整形 内	・刷毛目		・不明	・内面は風化が著るしく不明
底部				
色調	・黄茶褐色	・淡灰黄色	・灰黄褐色	・黄褐色 ・内面中核一茶褐色
胎土	・0.1〜0.3の砂粒含有	・0.1の砂粒含む	・0.1〜0.3の砂粒、多量に含有	・0.1〜0.5の砂粒、石粒含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考			・杯部内面に煤付着	・差し込み型

土器No.	116	117	116	118	116	119	116	120
種類	高杯 C		高杯 C		高杯 C		高杯 C	
法量(cm) 口径	21.9		20.0		20.45		14.2	
法量(cm) 器高	5.9（現存値）		3.9（現存値）		5.55（現存値）		3.5（現存値）	
法量(cm) 腹径								
法量(cm) 底径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
出土地区	H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
杯部 形態	・広く、やや平坦な下部に立ち上がり深く直角に外反する。口縁端付近でより一層外反し、端部は外上方へのつまみあげがある。外面は稜をなし、中央が凹みになっている。		・下部欠損、立ち上がりが深く、直角に外反し、端部外面に稜をなし立ち上がっている。		・やや平坦で広い下部に深い立ち上がりが有り、短かく直角に外反し、口縁端はわずかに立ち上がり、断面は丸い。		・少し深い下部にゆるやかなカーブで立ち上がり、外上方へ大きく反っている口縁を有し、端部でつまみ上げられ、外面に稜を有している。	
杯部 文様					・端部横ナデ、細かな横方向のヘラ磨き。			
杯部 整形 外面	・ヘラ磨き。（一部砂粒の動きがあり、削っているとも考えられる）		・横方向の刷毛目の上から放射状のヘラ磨き。端部付近は横ナデ		・横方向のヘラ磨き。立ち上がりの部分までやや太目で外反部分は細かいヘラ磨き。		・共に横ナデの上から縦方向に荒くヘラ磨き	
杯部 整形 内面	・横方向のヘラ磨き。下部は放射状のヘラ磨き		・横刷毛目の上から細かな横方向のヘラ磨き。					
脚部 形態	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
脚部 文様								
脚部 整形 外面								
脚部 整形 内面								
底部								
色調	・外面一暗灰褐色 内面一暗褐色		・淡青黄灰褐色		・茶褐色		・淡茶褐色	
胎土	・0.1〜0.5の砂粒、石粒含有		・0.1〜0.2の砂粒含有 雲母極少含有		・0.1〜0.3の砂粒含有		・0.1〜0.2の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・粘土紐の痕が明確で紐巾で屈折している。							

土器 No.	116 121	116 122	116 123	52 116 124
種類 / 摘要	高杯 C	高杯 B	高杯 B	高杯 D
法量 (cm) 口縁径	14.3	22.65	27.0	20.65
法量 (cm) 器高	4.4 (現存値)	5.45 (現存値)	4.5 (現存値)	5.7 (現存値)
法量 (cm) 腹径				
法量 (cm) 底径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
出土地区	H−3−G 溝II−3	II−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	II−3−G 溝II−3
杯部 形態	・内湾しながら広がる下部にゆるやかなカーブで立ち上がり、外反する。端部で一層外反し、丸い断面。	・やや平坦な下部に浅い立ち上がりが有り、外上方へ大きく広がる口縁を有し、端部外面に稜を作り、つまみあげがある。内面の立ち上がりは緩やかである。	・平坦な下部に浅い立ち上がりがあり、15度の角度で大きく広がり外上方へ立ち上がる。	・平坦な下部に二重の口縁を有す。上段は短かく外反し、端部は一層反り断面は丸い。
杯部 文様			・端部は横ナデ、ヘラ磨き、立ち上がりの部分は縦方向刷毛目の上から横ナデ、一部横ナデが残っている。	・端部と下部の境とに刻目、それぞれの境に竹管円形浮文が付いている。
杯部 整形外面	・横方向の細かなヘラ磨き	・内外共に端部横ナデ、放射状のヘラ磨き、立ちあがりの部分は、横方向。一部横ナデが残っている。	・ヘラ磨き。立ち上がりの部分は横方向の刷毛目	・端部横ナデ
杯部 整形内面	・多方向に細かなヘラ磨き			・下部は放射状にヘラ磨き、上部は、横方向のヘラ磨き。
脚部 形態	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
脚部 文様				
脚部 整形外面				
脚部 整形内面				
底部				
色調	・淡暗赤褐色	・淡黄茶褐色	・淡黄赤茶褐色	・淡茶褐色
胎土	・0.1〜0.5の砂粒含有	・0.1〜0.3の砂粒多量に含有	・0.1〜0.2の砂粒多量に含有	・0.1〜0.3の砂粒含有 金雲母極少含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考				

土器 No.	52 116	125	116	126	116	127	52 116	128
種類 / 摘要	高杯		高杯		高杯		高杯	
法量(cm) 口縁径 器高 腹径 底径	欠損のため不明 4.25（現存値） 16.7		欠損のため不明 4.15（現存値） 21.9		欠損のため不明 3.4（現存値） 21.95		欠損のため不明 9.15（現存値） 16.15	
出土地区	H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
杯部 形態								
杯部 文様	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
杯部 整形 外								
杯部 整形 内								
脚部 形態	・段のある裾部 ・上坦部はなだらかに下り、孔を6孔もつ。少し稜をもちながら外反する。下部には8孔ある。		・段のある裾部、上坦部はなだらかに下り、孔をもつ（数不明） ・稜に刻目が施こされ下方に外反する下部に孔は5孔ある。		・段のある裾部		・充実したエンタシス状の柱部、段を有する裾部。上坦の上位に4孔。内面は比較的緩やかで柱部までくいこんでいる。	
脚部 文様								
脚部 整形 外	・ヘラ磨き。裾端は横撫毛		・ヘラ磨き		・ヘラ磨き		・ヘラ磨き。（裾部は柱部より細かなヘラ磨き。）	
脚部 整形 内	・横ナデ		・風化のため不明		・横ナデ、一部ヘラ痕有り。		・横ナデ	
底部								
色調	・暗茶褐色		・赤褐色		・青黄褐色		・淡赤褐色 中核一淡灰色	
胎土	・0.1〜0.3の砂粒多量に含有		・0.1〜0.2の砂粒多量に含有		・0.1〜0.3の砂粒含有		・0.1〜0.4の砂粒含有 雲母含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考								

土器 No.	116	129	52 116	130	116	131	116	132
種類 / 摘要	高杯		高杯		高杯		高杯	
法量 (cm) 口縁径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量 (cm) 器高	6.55（現存値）		8.95（現存値）		8.0（現存値）		9.4（現存値）	
法量 (cm) 腹径								
法量 (cm) 底径	14.35		13.65		15.3		15.8	
出土地区	H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
杯部 形態								
杯部 文様	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
杯部 整形 外								
杯部 整形 内								
脚部 形態	・充実した柱部、段を有する裾部。 ・柱部よりなだらかに下り、4孔を有する。段のため少し立ちあがり下方に外反している。 ・裾端に刻目が一周している。		・充実し、裾広がりの柱部。少しもりあがり、内弯した裾部。裾部内面に少し肥厚		・充実したまっすぐの柱部でやや盛りあがりながら裾広がり、裾端で外面に肥厚する。断面は丸い。内面はゆるやかに外反し柱部内面にくいこんでいる。		・短かく充実した柱部よりラッパ状に開く。	
脚部 文様			・4孔				・4孔	
脚部 整形 外	・ヘラ磨きの上から縦方向に刷毛目が施こされている。		・ヘラ磨き、裾端のみ横ナデ		・柱部—縦方向のヘラ磨き 裾部—ヘラ磨きとナデ		・細かなヘラ磨き	
脚部 整形 内	・中心部には刷毛目が有り裾部は横ナデで仕上げている。		・横ナデ		・横ナデ		・風化が著るしく不明	
底部								
色調	・淡黄赤褐色		・茶褐色		・青黄糸褐色		・淡茶褐色	
胎土	・0.1〜0.3の砂粒含有 金雲母含有		・0.1〜0.3の砂粒含有 雲母含有		・0.1〜0.3の砂粒含有		・0.1〜0.5の砂粒含有	
焼成	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考								

土器 No.	52 116	133	116	134	116	135	52 116	136
種類 / 摘要	高杯		高杯		高杯		高杯 B	
法量 (cm) 口縁径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		23.45	
法量 (cm) 器高	10.5 (現存値)		9.4 (現存値)		9.8 (現存値)		16.3	
法量 (cm) 脚径								
法量 (cm) 底径	13.75		14.05		12.6		15.15	
出土地区	H−3−G	溝II−3	H−3−G	溝II−3	H−3−G	溝II−3	H−3−G	溝II−3
杯部 形態	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		・下部が張り、外上方へ立ち上がり、中位下でより一層大きく開き、端部は立ち上がり稜を有し、断面は丸い。内面は下部が広く深く立ち上がり、外上方へ大きく開がる。	
杯部 文様							・右下りの刷毛目の上から横方向の細かなヘラ磨き、口縁端付近は横ナデ	
杯部 整形外							・刷毛目の上から放射状に横方向へラ磨き。	
杯部 内								
脚部 形態	・中空であるが器壁が太い柱部に、下方にひろがる裾部		・中空で裾広がりの柱部に、大きく広がる裾部をもつ。裾端断面は丸い		・中空で長く広がりぎみの柱部からなだらかに外反し、短かな裾部を付けている。		・中空で裾広がりの柱部に段を有する裾部	
脚部 文様	・3孔		・4孔				・上段部には5の孔を有し、下段部より長い。裾端断面は丸い。内面はまっすぐ下り段はない。	
脚部 整形外	・縦方向のヘラ磨き		・細かな横方向のヘラ磨き、柱部には縦方向のヘラ磨きが施こされている。		・縦方向のヘラ磨き		・柱部は縦方向のヘラ磨きで16面をなしている。内部は絞り目が残る。裾部内面は後から刷毛を行う。下段部は横方向の細かなヘラ磨き。上段部は細かなヘラ磨きの上から刷毛	
脚部 内	・内面は縦方向の刷毛目、裾部は横ナデ		・柱部には絞りが有り裾部に刷毛目が残っている。		・柱部内面は横方向に一回転のヘラ削りが施こされ、器壁は薄い。裾端付近には刷毛目が残っている。		・内面は太く鮮明な刷毛	
底部								
色調	・淡黄褐色		・赤褐色 一部黄赤褐色		・茶褐色、中核一灰色		・青黄茶褐色	
胎土	・0.1〜0.3の砂粒含有 雲母含有		・0.1〜0.2の砂粒少量含有 ・精良な粘土を使用		・0.1〜0.2の砂粒含有		・0.1の砂粒含む ・金雲母含有 ・非常に精良な粘土使用	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
							・差し込み型	
備考								

土器No.	53 第21図 137	53 116 138	53 116 139	53 116 140
種類 / 摘要	小型高杯 A	高杯 E	高杯 E	高杯 E
法量(cm) 口縁径	7.65	11.5	11.15	12.65
法量(cm) 器高	5.8	7.5 (現存値)	6.8 (現存値)	5.7 (現存値)
法量(cm) 腹径				
法量(cm) 底径	5.5	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
出土地区	II—3—G 溝II—3	H—3—G 溝II—3	II—3—G 溝II—3	II—3—G 溝II—3
杯部 形態	・僅かに反る下部に段を有し、大きく外上方へ広がる。内面も下部が深く僅かに段を有する。	・椀形の杯部。端部は内弯し、刻目が一周している。	・椀形の杯部。下部から山がり、大きく立ち上がる。端部で内弯し、断面は丸い。	・椀形の杯部。杯下部が広く、緩やかなカーブをえがき、口縁端で内弯する。
杯部 文様				
杯部 整形 外	・内外面とも細かな刷毛の様なもので削っている。	・全体にタタキ目が残り、その上から粗雑なヘラ磨きを施こしている。	・口縁端横ナデ。ヘラ磨き（風化が著るしい。）	・共に横ナデの上から縦方向のヘラ磨き。
杯部 整形 内		・ナデ、底面は凹み荒い仕上げ。	・ヘラ磨きを縦横に行っている。筋が残り粗雑な仕上げ。	
脚部 形態	・エンタシス状の中空の柱部より下方に内弯しながら広がる裾部	・短かく充実した柱部で横に大きく広がった裾部	・やや長目で充実した柱部に大きく広がる裾部	欠損のため不明
脚部 文様				
脚部 整形 外	・柱部は縦方向のヘラ削り。裾部は縦方向のヘラ磨き。	・風化の為不明	・縦方向のヘラ磨き	
脚部 整形 内	・ナデ		・ナデ	
底部				
色調	・黄茶褐色	・淡黄褐色	・茶褐色	・淡黄灰色(一部黄褐色)
胎土	・0.1の砂粒多量に含有 雲母含有	・0.1～0.4砂粒含有	・0.1の砂粒極少含有	・0.1～0.2の砂粒含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考				

土器No.	116	141	53 116	142	116	143	116	144
種類 / 摘要	高杯 E		高杯 E		高杯 E		高杯 E	
法量(cm) 口縁径	7.95		11.35		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量(cm) 器高	5.7（現存値）		4.3（現存値）		3.7（現存値）		3.7（現存値）	
法量(cm) 腹径								
法量(cm) 底径	欠損のため不明		欠損のため不明		16.05		15.55	
出土地区	H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
杯部 形態	◦深い椀形の杯部。下部から曲がり立ち上がり、口縁端は内弯し断面は丸い。		◦椀形の杯部で下部は平坦で広く立ち上がっている。端部は内弯し、断面は丸い。接合面は非常に厚い。		欠損のため不明		欠損のため不明	
杯部 文様			◦端部横ナデ、横方向の細かなヘラ磨き、下部に僅かなヘラ削り。					
杯部 整形外	◦共に横方向のヘラ磨き		◦細かな横方向のヘラ磨きの上から放射状に細かいヘラ磨き。					
杯部 内	◦							
脚部 形態	◦短かく充実した柱部に横に大きく広がる裾部				◦短かな充実した柱部に低く大きく広がる裾部で裾端は丸くなっている。		◦短かな充実した柱部で杯下部接合面の所に凹みがあり、低く内弯しながら大きく広がる裾部を有す。裾端で僅かに肥厚	
脚部 文様	◦4孔				◦4孔		◦4孔	
脚部 整形外	◦柱部は縦方向のヘラ磨き		欠損のため不明		◦共に細かなヘラ磨き		◦刷毛目の上から細かなヘラ磨き。	
脚部 内	◦ナデ				◦		◦縦横方向に刷毛(10本)が交差している。	
底部								
色調	◦淡赤褐色 内面一黒灰色		◦茶褐色		◦淡赤褐色（一部淡黄褐色）		◦赤褐色、及び暗褐色	
胎土	◦0.1〜0.3の砂粒多量に含有		◦砂粒を含まず精良な粘土を使用 雲母含有		◦0.1〜0.5の砂粒、石粒含有		◦0.1〜0.3の砂粒含有 雲母含有	
質	◦良好		◦良好		◦良好		◦良好	
備考			◦脚部は組み合せ型である。					

土器No.	53 / 116	145	116	146	116	147	54 / 117	148
種類 / 摘要	高杯 E		高杯 E		高杯 E		壺 B1	
法量(cm) 口縁径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		11.6	
法量(cm) 器高	4.35（現存値）		2.45（現存値）		2.9（現存値）		4.0	
法量(cm) 腹径							欠損のため不明	
法量(cm) 底径	17.4		16.7		18.4			
出土地区	H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
杯部（口縁部） 形態							・二重口縁、短かい頸部から大きく外反する口縁に、外面中位に凸帯をつけて段をもたしたもの。端部は僅かに立ちあがる。	
杯部（口縁部） 文様	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明			
杯部（口縁部） 整形 外							・	
杯部（口縁部） 整形 内							・ 共に横ナデ	
脚部（体部） 形態	・短かな充実した柱部で低く内弯しながら大きく広がる裾部を有す。裾端で僅かに内側に肥厚		・低く大きく広がる裾部で裾端は丸くなっている。		・低く内弯しながら大きく広がる裾部			
脚部（体部） 文様	・4孔						欠損のため不明	
脚部（体部） 整形 外	・細かなヘラ磨き、柱部と裾部の境にヘラ痕がある。		・細かなヘラ磨き		・細かな刷毛目			
脚部（体部） 整形 内	・風化の為不明		・縦横に荒い刷毛(14本)が交差している。		・縦横に刷毛（10本）が交差している。			
底部							・不明	
色調	・茶褐色		・茶褐色		・外面−淡黄赤褐色 内面−淡黄褐色		・淡黄灰褐色	
胎土	・0.1〜0.3の砂粒含有		・0.1〜0.2の砂粒含有 雲母含有		・0.1〜0.3の砂粒含有		・0.1の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考							・小型壺の二重口縁	

土器No.	117 149	54/117 150	54/117 151	54/117 152
種類 / 摘要	小型壺	小型丸底壺	蓋	小型壺 Cs
法量(cm) 口縁径	7.0	10.0		6.4
法量(cm) 器高	5.0（現存値）	5.8	5.9	9.0
法量(cm) 胴径	欠損のため不明	6.2		8.2
法量(cm) 底径	欠損のため不明	丸底	15.2	2.5
出土地区	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3
口類 形態	・垂直に立ち上がり、端部で器壁が薄くなり丸く終る。	・外上方へ直線的に大きく開く。	・笠形の蓋である。	・「く」の字形に外反し、端部付近で少し内弯、端部は少し外面肥厚する。
口類 文様				
口類 整形外	・共に横ナデ	・横方向のヘラ磨き、頸部横ナデ	・全体に刷毛が施こされ一部削り取っている。つまみの部分はナデ	・横方向の細かなヘラ磨き。
口類 整形内	・共に横ナデ	・横方向の刷毛目、一部ヘラ磨き、頸部横ナデ	・刷毛	・刷毛目の上から細いヘラ磨き。
体部 形態	・なだらかな肩をもつ器形	・広い丸底から立ちあがる浅い鉢形、内面頸部で肥厚し、指の圧に横ナデし凹んでいる。		・肩が張り、最大径が上位にある。粘土紐の痕が明瞭。
体部 文様				
体部 整形外	・ヘラ磨き。	・横方向のヘラ磨き。		・肩部に細かなヘラ磨き、胴部下はヘラ削り
体部 整形内	・ナデ、粘土紐の継ぎ目が明瞭	・刷毛目の上からナデ		・ナデ
底部	・欠損のため不明	・丸底 削っており僅かに凹んでいる。		・削り底
色調	・黒灰色	・茶褐色	・青黄茶褐色	・黄茶褐色
胎土	・0.1〜0.2の砂粒多量に含有	・0.1の砂粒極小、金雲母を含有	・0.1〜0.2の砂粒含有	・0.1〜0.4の砂粒・石粒を含有
質	・粗	・精製された胎土	・良好	・良好
備考				

土器 No.	54 / 117	153	117	154	117	155	54 / 117	156
種類 / 摘要	小型壺 Ca		小型壺		小型壺		小型壺	
法量 (cm) 口縁径	6.25		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量 (cm) 器高	9.5		6.6 (現存値)		6.0 (現存値)		5.3 (現存値)	
法量 (cm) 腹径	8.9		8.25		7.2		8.75	
法量 (cm) 底径	1.3		1.8		1.9		1.75	
出土地区	II−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
口頸部 形態	・「く」の字形に外反する				・口縁部欠損、外上方へ広がる頸部、内面は接合のため肥厚する。			
口頸部 文様								
口頸部 整形外	・ヘラ磨き		欠損のため不明		・	不明	欠損のため不明	
口頸部 整形内	・不明				・	不明		
体部 形態	・最大径は中位にあり丸い器形。		・頸部で少しくびれ、なだらかな肩部から、大きな底部へ至る。		・張りが小さく底部へなだらかに小さくなる器形。		・最大径が上位にあり、やや肩が張る。	
体部 文様								
体部 整形外	・	不明	・	共に横ナデ	・ナデ、一部タタキ目を残す。		・横方向のヘラ磨き	
体部 整形内	・	不明	・	共に横ナデ	・横方向の刷毛目		・ナデ	
底部	・平底 丸底に近い。		・平底 中央部が大きく凹んでいる。		・平底 中央部が凹んでいる。		・平底	
色調	・黄茶褐色		・淡青黄褐色		・淡黄灰色		・淡赤褐色	
胎土			・0.1〜0.4の砂粒を含有		・0.1〜0.3の砂粒を含有		・0.1〜0.5の砂粒・石粒含有	
質			・良好		・良好		・良好	
備考								

土器No.	54 / 117	157	117	158	117	159	117	160
種類	小型壺		器台 A		器台 A		器台 A	
法量(cm) 口縁径	欠損のため不明		10.8		9.25		10.4	
法量(cm) 器高	7.5（現存値）		1.75（現存値）		2.1（現存値）		2.35（現存値）	
法量(cm) 腹径	8.6							
法量(cm) 底径	0.5 尖底		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
出土地区	H—3—G 溝II—3		H—3—G 溝II—3		H—3—G 溝II—3		H—3—G 溝II—3	
口頸部（杯部） 形態	・口縁部欠損、頸部が小さく大きく外反する。		・浅く反り、端部外面に稜をなし中央部に凹がある。口縁端は立ち上がり外反している。		・浅い器形端部外側に稜をなしている。端部は立ち上がっている。		・浅い器形をなし、やや内弯する。端部は外反し、断面は丸い。	
口頸部（杯部） 文様	・							
口頸部（杯部） 整形外	・	不明	・端部横ナデ、放射状にヘラ磨き。		・端部横ナデ ・無雑作なヘラ磨き		・端部横ナデ ・共に放射状のヘラ磨き	
口頸部（杯部） 内	・		・端部には横方向にヘラ磨き、放射状にヘラ磨き。		・放射状にヘラ磨き		・内面の方が暗文風で美しい仕上げ	
体部（脚部） 形態	・体部中位が大きく張り、器高より大。							
体部（脚部） 文様								
体部（脚部）			欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
体部（脚部） 整形外	・上・中位は横方向、下位は右下りのヘラ磨き							
体部（脚部） 内	・ナデ、底部に放射線状のヘラ痕							
底部	・尖底 底部の器壁は厚い。							
色調	・茶褐色		・淡黄褐色		・淡黄色		・外面—淡黄褐色 内面—薄茶色	
胎土	・0.1～0.2の砂粒を極小含有		・0.1～0.3砂粒含有		・0.1～0.3砂粒含有		・0.1～0.4の砂粒、石粒含有。	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考					・円板充填型		・円板充填型（3cm）	

土器No.	117	161	117	162	117	163	117	164
種類 / 摘要	器台 A		器台 A		器台 A		器台	
法量(cm) 口縁径	10.65		8.95		10.0		欠損のため不明	
法量(cm) 器高	2.7（現存値）		2.3（現存値）		2.55（現存値）		4.35（現存値）	
法量(cm) 腹径								
法量(cm) 底径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
出土地区	H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
杯部 形態	・深い器形。端部断面は丸くふくらみ、やや外反		・浅い器形。端部外面は外上方へ立ち上がり、端でより一層外反している。内面は緩やかに立ち上がり、外反している。		・浅い器形。外上方へ自然な形で僅かに端部が立っている。		欠損のため不明	
杯部 文様								
杯部 整形外	・端部横ナデ、ヘラ磨き		・横方向のヘラ磨き		・暗文風の美しいヘラ磨きで仕上げている。			
杯部 整形内	・ヘラ磨き		・縦方向のヘラ磨き		・不明			
脚部 形態							・充実した柱状に杯下部より貫通した孔を有する。柱部より緩かに外方へ広がる。	
脚部 文様							・4孔	
脚部 整形外	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		・縦方向にヘラ磨き、杯部接合付近は横方向刷毛	
脚部 整形内							・ナデ	
底部								
色調	・淡黄色 一部 淡黒灰色		・茶褐色		・淡茶褐色		・青黄褐色	
胎土	・0.1〜0.3の砂粒含有		・砂粒を含まない精良な粘土		・砂粒を含まず精良な粘土		・0.1〜0.3の砂粒含有	
			・金雲母含有		・金雲母含有			
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・円板充填型（ハケ痕有） ・黒斑		・胎土異質					

土器 No.	117	165	117	166	117	167	117	168
摘要 ＼ 種類	器台		器台		器台		器台	
法量(cm) 口縁径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量(cm) 器高	5.15（現存値）		4.45（現存値）		6.5（現存値）		6.15（現存値）	
法量(cm) 脚径								
法量(cm) 底径	欠損のため不明		10.4		10.7		10.7	
出土地区	II－3－G 溝II－3		II－3－G 溝II－3		H－3－G 溝II－3		H－3－G 溝II－3	
杯部 形態								
杯部 文様								
杯部 整形 外	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
杯部 整形 内								
脚部 形態	・充実した柱部に杯下部より貫通した孔を有する。柱部より外方へ大きく広がる。		・短かい充実した柱部		・短かい充実した柱部に緩やかに広がった裾部で、裾端外面は外反し、肥厚している。		・充実した柱部で、緩やかなカーブで脚底部に続く。全体に小作りである。	
脚部 文様	・4孔				・4孔		・4孔	
脚部 整形 外	・縦方向にヘラ磨き		・横方向のヘラ磨き		・縦方向のヘラ磨き		・縦方向のヘラ磨き、下からタタキ口が残っている。（消しきっていない）	
脚部 整形 内	・ナデ		・横ナデ		・ナデ		・ナデ	
底部								
色調	・青黄褐色		・黄褐色		・黄褐色		・淡黄褐色 一部茶褐色	
胎土	・0.1～0.3の砂粒含有		・0.1～0.4の砂粒含有		・0.2～0.4の砂粒含有		・0.1～0.3の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考								

土器No.	55 117	169	55 117	170	— 117	171	55 117	172
種類 / 摘要	器台		器台		器台		器台 A	
法量(cm) 口縁径	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		11.15	
法量(cm) 器高	7.5（現存値）		7.45（現存値）		7.5（現存値）		6.75（現存値）	
法量(cm) 胴径								
法量(cm) 底径	12.3		11.5		13.75		欠損のため不明	
出土地区	H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
杯部 形態	欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明		・下部が落ち込み、外上方へ広がる。端部外面には下に張り出した鍔を有し、内面端部は立ち上がっている。	
杯部 文様								
杯部 整形 外							・端部横ナデ、横方向のヘラ磨き	
杯部 整形 内							・横方向のヘラ磨き	
脚部 形態	・充実した短かな柱部に緩かに広がった裾部、端でより一層広がっている。		・杯部接合面から広がり中位で一旦広がる。柱部がなく中空。裾端で内弯し内面に粘土の折り返しがある。器壁は0.5cm程度で繊細		・杯部接合面から大きく外下方へ広がる。柱部がなく中空。裾端断面は丸い。		・器台としてやや長目の充実した柱部をもち、緩やかなカーブで裾部に続く。	
脚部 文様	・4孔		・4孔		・4孔			
脚部 整形 外	・縦方向のヘラ磨き		・刷毛の上より縦方向のヘラ磨き		・縦方向と孔より下は右下りのヘラ磨き		・縦方向のヘラ磨き	
脚部 整形 内	・刷毛とナデで仕上げている。		・ナデ		・ヘラ削り、美しい仕上		・ナデ（不調整）	
底部								
色調	・黄褐色及び赤褐色		・黄褐色		・黄褐色 一部茶褐色		・黄褐色 中核は赤褐色、淡青黄色	
胎土	・0.1〜0.3の砂粒多量に含有		・0.1〜0.3の砂粒やや多量に含有		・0.1〜0.2の砂粒含有		・0.1〜0.2の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考								

土器No.	117	173	55/117	174	55/117	175	55/117	176
種類 / 摘要	器台		器台 A		器台 A		器台 A	
法量(cm) 口縁径	8.95		9.5		9.0		8.9	
法量(cm) 器高	6.21（現存値）		8.85		8.3		7.2（現存値）	
法量(cm) 腹径								
法量(cm) 底径	欠損のため不明		10.2		10.8		欠損のため不明	
出土地区	H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
杯部 形態	・下部が落ち込み、外反する。端部内面は外上方へ立ち上がり外面は丸く稜をなしている。		・端部は立ち上がり、外面に稜をなしている。下部は深い		・浅い器形。下部で底かに落ち込んでいる。端部外面に稜を有し内面は立ち上がり外反する。		・浅い器形。下部は水平。端部は、外上方へ立ち上がる。	
杯部 文様								
杯部 整形外	・口縁端横ナデ、横方向のヘラ磨き		・縦方向の細かなヘラ磨き		・口縁端横ナデ、ヘラ磨き		・端部横ナデ 刷毛の後にナデ	
杯部 内	・横方向のヘラ磨き		・ヘラ磨き		・ヘラ磨き		・全面ナデの放射状の暗文風のヘラ磨き	
脚部 形態	・杯部接合面から緩やかなカーブで柱部へと続き。柱部充実。		・長口の充実した柱部。裾部接合面から緩やかなカーブを描き、裾部で一旦広がる。		・杯部接合面から広がりやや内弯している。 ・柱部がなく中空、裾端で内弯し、内面折り返し肥厚する。		・杯部接合面から内弯ぎみに広がる。	
脚部 文様			・3孔		・4孔、孔の為生じた粘土は外面は残し、内面は削っている。			
脚部 整形外	・ } 共にナデ		・柱部は縦方向のヘラ磨き。裾部はナデ		・刷毛接合面ヘラ磨き		・縦方向のヘラ磨き、接合面付近はその後ナデ	
脚部 内	・ } 共にナデ		・ナデ		・刷毛		・ヘラ削りとナデ	
底部								
色調	・淡青黄色 裾部内面及び中核黒色		・紫黄赤褐色 杯部黄土色		・淡黄色		・茶褐色	
胎土	・0.1〜0.3の砂粒含有精良な粘土使用		・0.1〜0.4の砂粒多量に含有 雲母含有		・0.1〜0.4の砂粒多量に含有 雲母含有		・精良 雲母含有	
焼成	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考			・裾部内面に薄く煤付着				・杯部と裾部内面に薄く煤付着	

土器 No.	55 / 117	177	56 / 118	178	56 / 118	179	/ 118	180
種類 / 摘要	器台 B		鉢 B		鉢 B		鉢	
法量 (cm) 口縁径	欠損のため不明		34.3		30.4		32.7	
法量 (cm) 器高	8.5 (現存値)		17.0		27.8		19.9 (現存値)	
法量 (cm) 腹径			31.85		32.1		34.8	
法量 (cm) 底径	28.3		5.6		4.0		欠損のため不明	
出土地区	H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
口頸部(杯部) 形態			・頸部でくびれ外反する。外面が少し肥厚し稜をもつ。断面は角張っている。		・頸部でくびれ外反する。端部外面に稜を有し断面はやや丸みがある。片口を有する。		・頸部でくびれ外反する。端部外面に稜を有し断面は丸い。	
口頸部(杯部) 文様	欠損のため不明							
口頸部(杯部) 整形 外			・体部からそのまま続く右上りのタタキ目		・ナデ		・共に横方向のヘラ磨き	
口頸部(杯部) 整形 内			・ナデ		・横方向のヘラ磨き		・共に横方向のヘラ磨き	
体部(脚部) 形態	・中位でくびれながら頸部上方まで外反し、明瞭な稜を持って端部まで広がる。		・腹径が中位にあり、大きく浅い。		・最大腹径が下位にあり張った深い器形。口径より腹径が大きい。		・最大腹径が下位にある	
体部(脚部) 文様								
体部(脚部) 整形 外	・ナデ		・右上りのタタキ目		・横方向の太いタタキ目下位に太いヘラ磨き(ヘラ削り)を施こしている。		・共に縦横方向のヘラ磨き	
体部(脚部) 整形 内	・ヘラ削りのまま、下方はナデ		・ヘラ磨き		・右上りのヘラ磨き		・共に縦横方向のヘラ磨き	
底部			・突出した平底 ・タタキ目で整形し、周囲をヘラでわずかに縦方向に削っている。		・タタキ底 ・尖底に近い形をなしている。周囲にはあとから縦方向の叩きが行われ、格子状になっている。		・欠損のため不明	
色調	・淡黄茶褐色		・黄褐色一部暗青灰色		・淡黄褐色		・黄褐色	
胎土	・0.1〜0.3の砂粒多量に含有		・0.1〜0.3の砂粒含有		・0.2〜0.5の砂粒、石粒多量に含有		・0.1〜0.3の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考								

土器 No.	118 181	56/118 182	118 183	56/118 184
摘要＼種類	鉢 B	鉢 A₄	鉢 A₄	鉢 A₄
法量(cm) 口縁径	29.1	15.65	17.0 (反転)	18.1
法量(cm) 器高	11.5 (現存値)	7.4	6.05	8.0
法量(cm) 腹径	26.7			
法量(cm) 底径	欠損のため不明	4.2	1.9	1.6
出土地区	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3
口縁部 形態	・頸部でゆるやかなカーブをなし、外上方へ立ち上がる。端部外面に稜をなし刻目が一周している。片口を有する。	・外面は体部よりまっすぐ上がり、端で外反。内面は体部より外反し稜をつけている。口縁が波を打ち、器壁の厚い薄いがある。	・頸部より緩やかに広がり、端で僅かに立ち上がっている。外面に稜を有している。内面は外反した形である。	・体部より緩やかに広がり、端で立ち上がる。外面に稜を有する。
口縁部 文様				
口縁部 整形 外	・	・総な右下りの刷毛に所々をナデで消す。刷毛は器高の½程あり体部との境ではない。	・	・横方向のヘラ磨き
口縁部 整形 内	・ 共に横方向のヘラ磨き	・刷毛とナデ	・ 共に横ナデ	・ナデ
体部 形態	・ゆるやかなカーブをえがく	・底部が広く、中位で立ちながら広がる。	・底部より外上方に大きく広がり、浅い。	・底部より外上方に広がり、深みがある。
体部 文様				
体部 整形 外	・	・ナデ	・細かな右上りのタタキ口底部からヘラ削り。	・横方向のヘラ磨き
体部 整形 内	・ 共に横方向、少し右下りのヘラ磨き	・横方向の刷毛が施こされ、底部付近はヘラ磨き	・横ナデ	・横方向のヘラ磨き、底部より縦方向のヘラ磨き
底部	・欠損のため不明	・削り底 ・突出し、後から粘土が付け足され、周りにヘラ削りが施こされ、中央部の突出が不安定である。	・削り底?	・削り底 ・無方向のヘラ削りの為底面は不安定で凹凸である。
色調	・淡黄色	・淡茶褐色	・暗灰黄色	・淡茶褐色
胎土	・0.1〜0.2の砂粒多量に含有	・0.1〜0.3の砂粒含有	・0.1〜0.2の砂粒多量に含有 金雲母含有	・0.1〜0.3の砂粒含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考		・½黒斑で口縁内面にもある。		

土器No.	185	186	187	188
	118	56 / 118	118	118
種類 / 摘要	鉢 A4	鉢 A4	鉢 C	鉢 C
法量(cm) 口縁径	19.6	12.2	17.6	13.4
法量(cm) 器高	8.6 (現存値)	5.5	9.2 (現存値)	11.7
法量(cm) 胴径			18.1	15.6
法量(cm) 底径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	3.3
出土地区	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3
口頸部 形態	・端は外反し断面三角形である。頸部で緩やかに外反。	・外面は真直ぐ、外上方へ開く。内面は外反し稜をなす。端は丸い	・頸部で内折し、外面はまっすぐ立ち上がり内面は外反。器壁が段々薄くなり端部で外反する。断面は丸い。	・頸部で内折し、まっすぐ立ち上がり、端部は細くなり丸い。
口頸部 文様				
口頸部 整形外	・ナデ	・ナデ、粘土紐の継ぎ目が残っている。	・横方向のヘラ磨き、下から刷毛目が残っている。	・横方向のヘラ磨き、刷毛目の痕が残っている
口頸部 整形内	・ナデ	・細かな横方向の刷毛	・右下りの刷毛目	・右下りの刷毛、所々にヘラ磨き。
体部 形態	・底部より外上方に大きく広がり、底部が広く深い。	・浅い椀形で、底面が広く、外上方へ広がっている。	・底部より外上方へ大きく広がり、屈折。粘土の継ぎ目が明確で急なカーブ。	・底部より外上方へ大きく広がり屈折し、最大径には粘土の継ぎ目が残っている。
体部 文様				
体部 整形外	・ヘラ磨き	・ナデ	・横方向のヘラ磨き、下位から縦方向のヘラ磨き。	・横方向のヘラ磨き、下位にタタキ目が残っている。
体部 整形内	・頸部付近は刷毛、底部より縦方向のヘラ磨きで刷毛目は消えている	・ナデ	・右上りのヘラ磨き、粗雑な仕上げである。	・底部より放射状にヘラ磨き、最大径付近で右上りの乱雑なヘラ磨き
底部	・欠損のため不明	・尖底(丸底に似ている) ・放射状に内外共にヘラ削り。器壁は厚い。	・欠損のため不明	・平底 ・全体に対して凹凸な底で大きく、はっきりとした底部の形をしていない。
色調	・外面は淡茶褐色、一部茶色 ・内面は淡黄色	・淡茶褐色、中核は赤褐色	・茶褐色	・茶褐色
胎土	・0.1〜0.2の砂粒を多量に含有	・0.1〜0.3の砂粒が表面に多い	・0.1〜0.6の砂粒、石粒含有	・0.1〜0.4の砂粒、0.7位の石粒も含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
		・外面に黒斑	・一部黒斑	
備考				

土層No.	118	189	56 119	190	56 119	191	56 119	192
種類 / 摘要	鉢		鉢 A1		鉢 A1		鉢 A1	
法量(cm) 口径	18.2		11.6		10.35		10.4	
法量(cm) 器高	14.9 (現存値)		8.5		8.8		7.9	
法量(cm) 腹径								
法量(cm) 底径	欠損のため不明		3.9		2.3		2.5	
出土地区	H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
口頸部 形態	・端は、内弯ぎみに立ち上がり、断面は、内側に稜を有している。		・外反する口縁で、太く、端部は丸い。頸部の括れが内外で違う。		・頸部で括れ、外上方に広がる口縁で、端は丸い。		・頸部で括れ、外上方に広がっている。少し内弯し、端部で細くなり、丸い。中央部に粘土の継ぎ目がある。	
口頸部 文様								
口頸部 整形 外	・	共にナデ	・	共にナデ	・右上りの浅いタタキ目		・	共にナデ
口頸部 整形 内	・		・		・ナデ		・	
体部 形態	・底部より外上方に立ち上がり、深い器形		・底部より外上方に立ち上がる。深い器形		・底部より外上方に広がり丸みがある。		・底部より丸く外上方に立ち上がる。	
体部 文様								
体部 整形 外	・横方向の浅いタタキ目		・ナデ		・底部と口縁付近にタタキ目があり、中央部はナデで消されている。		・細かな浅いタタキ目の上よりナデ	
体部 整形 内	・斜方向の刷毛目		・刷毛とヘラ		・ナデ		・ナデ	
底部	・尖底?		・突出平底 ・突出した底部で内面には放射状のヘラ痕がある。		・削り底 ・突出し、一面ヘラで削っている。粘土が体部の方へ付着		・削り底	
色調	・淡黄褐色		・淡茶褐色		・淡黄褐色		・茶褐色	
胎土	・0.2〜0.8の砂粒、石粒多量に含有		・0.1〜0.3の砂粒含有		・0.1〜0.3の砂粒含有 金雲母含有		・0.1〜0.3の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・甕Aの体部上半を欠いた形である。				・内外共に煤付着		・底部全面に黒斑	

土器No.	57 / 119	193	57 / 119	194	57 / 119	195	57 / 119	196
種類 / 摘要	鉢 A1		鉢 A1		鉢 A1		鉢 A2	
法量(cm) 口縁径	12.0		13.2		10.9		8.7	
法量(cm) 器高	8.4		7.2		7.3		5.4	
法量(cm) 腹径	11.1		10.1		9.6			
法量(cm) 底径			2.6				3.3	
出土地区	H—3—G 溝II—3		H—3—G 溝II—3		H—3—G 溝II—3		II—3—G 溝II—3	
口類 形態	・頸部で外反し、内弯しながら外上方へ立ち上がる。外面端は粘土を継ぎたしナデ、肥厚し、断面三角形		・頸部から緩かに外反し、端部で内弯し立ち上がる。器壁は段々と薄くなる。		・頸部で外反し、端で内弯し、立ち上がり、断面は丸い。頸部内面は巾のある稜を有する。		・端で内弯し、断面は三角形	
口類 文様			・中央部に粘土の継目がある。					
部 整形外	・右上りのタタキ目、上からナデている。		・ヘラ磨きとナデ 頸部付近にタタキ目		・		・	
部 整形内	・ナデ		・横方向の刷毛とナデ		・	共にナデ	・	不明
体部 形態	・肩が張り丸い		・底部より丸く、外上方に広がる。		・底部より外上方に丸く立ち上がる。		・底部より外上方へ立ち上がり、大きな底部に比して小さい。	
体部 文様								
器形外	・タタキ目、部分的にナデ、ヘラで作用している。		・右上りのタタキ目、所々ヘラで消されている		・底部から放射状のヘラ削りの上よりナデ		・ナデの調整、粘土の始末が不十分のため亀裂が多くある。	
器形内	・縦方向のナデ		・横方向の刷毛目		・刷毛に似た部分もあるが全体的にナデ		・ヘラ疵のあとが多くある。	
底部	・削り底 ・粘土をつぎたし、丸底ぎみに削りそのあとナデている、そのため器壁は厚い		・削り底 ・底面に記号有り。内面は刷毛の上から削っている		・尖底 ・ヘラ削りが中心部より放射線上に施こされている。		・突出平底 ・突出した底で、中央部になると緩やかに凹んでいる。	
色調	・外面—淡赤褐色 内面—淡黄褐色 中核—赤褐色		・茶褐色		・赤褐色 一部灰黄褐色		・青灰色	
胎土	・0.1～0.5の砂粒、石粒含有 金雲母含有		・0.1～0.3の砂粒含有 雲母含有		・0.1～0.3の砂粒含有 赤褐色の粒含有		・0.1～0.2の砂粒含有 精良な粘土使用	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考	・器高 1.5cmまで煤付着がなくそれ以上一面に煤が付着、頸部やや少ない ・内面底部には炭化米が残存							

土器No	57/119 197	57/119 198	119 199	57/119 200
種類 / 摘要	鉢 A2	鉢 A2	鉢 A2	鉢 A2
法量(cm) 口縁径	11.7	9.9	10.4	11.5
法量(cm) 器高	8.5	8.4	6.35	6.5
法量(cm) 腹径				
法量(cm) 底径	4.35	3.3	2.8	3.0
出土地区	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3
口縁部 形態	・内弯している端部は非常に薄んで、上下右左にゆがんでいる。	・端部で器壁は薄くなり断面は丸く粘土が外面に付着	・端部は角張って、雑つな仕上り。	・端部は内弯ぎみに立ち上がり。断面は丸い。
口縁部 文様				
口縁部 整形外	・タタキ目の上からナデ	・ } 不明	・ナデ	・ } 不明
口縁部 整形内	・ナデ（ヘラ疵も有る）	・ } 不明	・横方向の細かな櫛毛目	・ } 不明
体部 形態	・底部より外上方へ立ち上がり深い。	・底部より外上方に立ち上がる。	・底部より外上方へ広がる。	・底部より外上方に開き。口縁付近が内弯している為椀形に近い。
体部 文様				
体部 整形外	・急な右上りのタタキ目。土器をねじった様な仕上り。	・右上りの太く浅いタタキ目、表面の石が多く飛んで凹凸になっている。	・ナデ	・右上りのタタキ目。
体部 整形内	・ナデ（ヘラ疵が付いている）	・ナデ	・不明	・放射状のヘラ痕
底部	・平底 ・突出して、中央部が凹んでいる。	・平底 ・内面はヘラで操作した為か凹凸が著るしい。	・平底 ・突出ぎみの底部に中央部がなだらかに凹む。	・平底 ・底部は突出した形で器壁は1.5〜2.0cmと厚い
色調	・黄茶褐色	・淡青黄灰色	・茶褐色	・青灰黄色及暗茶灰色
胎土	・0.1〜0.5の砂粒、石粒含有	・0.1〜0.3の砂粒含有	・0.1〜0.3の砂粒含有	・0.1〜0.3の砂粒含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考	・全体的に薄く煤が付着 ・黒斑1ヶ所			

土器No.		119	201	57 / 119	202	119	203	58 / 119	204
摘要	種類	鉢 A_2		鉢 A_2		鉢 A_3		鉢 A_3	
法量(cm)	口縁径	9.9		12.2		14.7		12.3	
	器高	5.8		6.4		6.9		5.2	
	腹径								
	底径	3.3		2.0		3.7		3.3	
出土地区		H—3—G 溝II—3		H—3—G 溝II—3		II—3—G 溝II—3		II—3—G 溝II—3	
口頸部	形態	◦端部外面が内弯し、器壁が薄くなり、断面が丸い。		◦端部外面は肥厚し、内面端は立ち上がっている。内面は端より 1.7 cm程下で稜を有している。		◦端部断面は丸い		◦端は器壁が厚く、断面は丸い。	
	文様								
	整形外	◦ 不明		◦端部横ナデ		◦横ナデ		◦ 共にナデ	
	内	◦ 不明		◦ナデ		◦不明		◦ 共にナデ	
体部	形態	◦底部より外上方へ広がり、丸みを有する。		◦底部より外上方へ広がり中位より立ち上がっている。		◦外上方へまっすぐ上がる。		◦外上方へまっすぐ上がる。	
	文様								
	整形外	◦右上りのタタキ目		◦僅かに右上りの細かい浅いタタキ目、一部削っている。		◦ナデ 下位には刷毛のあとが僅か残っている		◦ 共にナデ	
	内	◦ナデ(放射状のヘラ痕)		◦ナデ、ヘラ痕が放射状についている。		◦細かな刷毛の上から放射状のヘラ磨き		◦ 共にナデ	
底部		◦平底 ◦中央部が僅かに凹んでいる。		◦削り底 ◦底面が小さく、細かな刷毛のあとがある。		◦平底 ◦突出した底で、現在のいときりの様な形。粘土があとからつけたとされている。		◦欠損のため不明	
色調		◦茶褐色		◦淡黄茶褐色		◦外面—淡黄褐色 内面—茶褐色		◦淡赤褐色	
胎土		◦0.1～0.3の砂粒含有		◦0.1～0.3の砂粒含有 雲母含有		◦0.1～0.3の砂粒多量に含有		◦0.1～0.3の砂粒含有 雲母含有	
	質	◦良好		◦良好		◦良好		◦良好	
備考		◦内外共に煤付着		◦底部全面に黒斑		◦口縁内外に煤付着			

土器No	58 119 205	58 119 206	119 207	58 119 208
種類 / 摘要	鉢 As	鉢 As	鉢 As	鉢 As
法量(cm) 口縁径	13.8	15.8	11.6 (反転)	17.6
器高	5.3	6.8	5.0	7.35
最大腹径				
底径	3.9	2.3	1.3	3.9
出土地区	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3
口頸部 形態	・端部が角張って太くなっている。	・端部内面は外上方へ向き、外面はやや肥厚し丸くなっている。	・端部は薄くなり、断面は丸い。	・端部は内弯し断面は丸い。
口頸部 文様				
口頸部 整形 外	・ 不明	・ 共に横ナデとヘラ磨きが交差している。	・ 共に横ナデ	・ 不明
口頸部 整形 内	・ 不明	・ 共に横ナデとヘラ磨きが交差している。	・ 共に横ナデ	・ 不明
体部 形態	・底部より外上方に広がり、中位あたりで一段と肥厚している。底部接合面ではヘラで押したあとが残り、凹凸になっている。	・底部よりまっすぐ広がり、やや丸い。	・底部より外上方へ広がる。	・底部より外上方に大きく広がる。
体部 文様				
体部 整形 外	・ナデ	・縦方向のヘラ磨き	・縦方向のヘラ磨きの上に横方向のヘラ磨き	・ナデ
体部 整形 内	・ナデ、ヘラ痕が製造作についている。	・ヘラ磨き	・横方向のヘラ磨き	・ナデ 底部からヘラで削った痕がある。
底部	・平底 ・中央部が凹んでいる。底面は石粒がとんで、凹凸になっている。	・削り底 ・小さな底で中央部に凹みがある。縦方向のヘラ削り	・丸底	・丸底 ・あとから粘土をつけたしていて不安定である
色調	・青黄茶褐色	・淡黄褐色	・茶褐色	・淡黄色 一部青灰黄色
胎土	・0.1〜0.3の砂粒含有	・0.1〜0.4の砂粒小量含有	・0.1の砂粒含有 非常に精良な粘土使用	・0.2〜0.4の砂粒含有
焼成	・良好	・良好	・良好	・良好
備考				

土器No.	119 209	58 119 210	58 119 211	58 119 212
種類 / 概要	鉢 As	台付鉢 D	台付鉢 D	台付鉢 D
法量(cm) 口縁径	19.3	11.3	12.1	9.8
法量(cm) 器高	8.5 (現存値)	7.8 (現存値)	7.5	6.6
法量(cm) 腹径		10.6		
法量(cm) 底径	欠損のため不明		5.3	4.7
出土地区	H−3−G 溝II−3	II−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3
口頸部 形態	・端部外面は少し肥厚外反している。断面は丸い。	・「く」の字に外反する。中位で肥厚し、端部は外面に肥厚している。	・外面は体部より緩やかに外反。端部で立ち上がる、内面は頸部で稜を有し外上方へ広がる	・端部外面が内弯し、断面は三角形
口頸部 文様				
口頸部 整形 外	・ 不明	・ 共に横ナデ	・右上りのタタキ目、上からナデで消している	・ 不明
口頸部 整形 内	・ 不明	・ 共に横ナデ	・ナデ	・ 不明
体部 形態	・底部より外上方に大きく広がる。	・最大径が上位にあり丸い。	・底部が広く立ち上がる器壁が比較的薄く、指で押えるため厚薄がある。	・外上方へ広がり、上位で立ち上がり内弯ぎみである。底面が小さく凹んでいる。
体部 文様				
体部 整形 外	・右上りの刷毛の上から底部の方より暗文風のヘラ磨き	・縦方向のヘラ磨き	・タタキ目の上を指ナデで調整する。	・ 共に横方向の細かいヘラ磨き
体部 整形 内	・全体的な仕上げは粗雑である	・ナデ、底部から放射状にヘラ痕が残っている	・放射状にヘラ磨き、底部付近は刷毛目のあとが残っている。	・ 粗雑な仕上り
底部	・欠損のため不明	・台を付け足す前の形で粘土は止っている。柱部は指でナデられている。	・低い台。あとから粘土をつけ足した台で中央部はない。 ・指圧痕でひだの様になっている。	・厚手の低い台 ・周りを指で押え中央部が自然に凹んでいる。指圧痕が多くついている。
色調	・黄茶褐色 一部淡赤褐色	・茶褐色	・淡茶褐色	・乳赤褐色
胎土	・0.1〜0.2の砂粒含有 金雲母含有	・0.1〜0.3の砂粒含有 0.6〜1.0の石粒含有	・0.1〜0.2の砂粒含有	・0.1〜0.3の砂粒多量に含有 0.5の石粒も含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
備考			・全体的に指圧痕がつき、凹凸になっている	

土器No.	59 120	213	120	214	120	215	120	216
種類 / 摘要	甕		甕		甕		甕	
法量(cm) 口縁径	12.15		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量(cm) 器高	9.6		4.6（現存値）		4.5（現存値）		9.1（現存値）	
法量(cm) 腹径								
法量(cm) 底径	4.15		4.9		3.9		2.6	
出土地区	H—3—G 溝II—3		H—3—G 溝II—3		H—3—G 溝II—3		H—3—G 溝II—3	
口部 形態	◦中位付近で一端丸くなり、端部で細く、断面は丸い。粘土が外面に折り返えり、粗雑な仕上げである。粘土の継ぎ目が明確である。		欠損のため不明		欠損のため不明		欠損のため不明	
口部 文様								
体部 整形外	◦ナデ							
体部 内	◦波型に刷毛目							
体部 形態	◦底部より外上方へ立ち上がり、中位より真すぐに立ち上がる。		◦底部より外上方に広がる。		◦底部より外上方に大きく広がる。		◦底部より外上方へ広がる。器壁は比較的薄い	
体部 文様								
体部 整形外	◦縦方向にタタキ目が施こされ中位より上ではナデ		◦		◦右上りのタタキ目		◦	
体部 内	◦縦方向の刷毛目		◦ 共にナデ		◦ナデ（放射状にヘラ痕）		◦ 共にナデ 内面一部ヘラ削り	
底部	◦平底 ◦突出した底部で粘土が底面に巻いた形で折り返えしている ◦1孔、2.0cmの厚み		◦突出平底 ◦突出した底部で内外両面より穿ち、粘土が両面に付着 ◦底面に起伏 ◦1孔、2.4～2.5cmの厚み		◦平底 ◦体部に比べて大きな底部 ◦1孔、1.0cmの厚み		◦平底 ◦中心よりはずれた所に1孔あり、細い孔である。 ◦1孔、1.5cmの厚み	
色調	◦外面—淡茶褐色 内面—淡青茶色		◦淡黄褐色 ◦外面は黒斑が全体に付いている。		◦青黄茶褐色		◦外面—淡灰茶褐色 ◦内面—茶褐色（一部赤褐色）	
胎土	◦0.1～0.3の砂粒含有		◦0.1～0.3の砂粒多量に含有		◦0.1～0.4の砂粒、石粒含有		◦0.1～0.3の砂粒含有	
質	◦良好		◦良好		◦良好		◦良好	
	◦黒斑あり							
備考								

土器 No.	120 / 217	59 / 120 / 218	120 / 219	120 / 220
種類 / 摘要	甕	甕	甕	甕
法量 (cm) 口縁径	欠損のため不明	13.4	欠損のため不明	欠損のため不明
法量 (cm) 器高	6.0 (現存値)	6.2	8.7 (現存値)	4.4 (現存値)
法量 (cm) 底径		4.5	2.1	2.0
出土地区	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3	H−3−G 溝II−3
口縁部 形態		・端部で外反し、内面が反り返えっている。外面には折り返しの粘土が付着し広くなっている。		
口縁部 文様				
頸部	欠損のため不明		欠損のため不明	欠損のため不明
頸部 整形 外		・		
頸部 整形 内		・ 共にナデ		
体部 形態	・底部より外上方へ立ち上がり、内弯ぎみである。	・底部より外上方へ丸みをもちながら立ち上がる。器壁は 0.8cm と厚い。	・底部より外上方へ広がる。	・底部より大きく外上方に広がる。
体部 文様				
体部 整形 外	・横方向のタタキ目。	・急な右下りのタタキ目の上からナデている。	・横方向のタタキ目。	・右上りのタタキ目。
体部 整形 内	・縦と横方向に交差した刷毛目	・刷毛とナデ	・ナデ (放射状のヘラ痕)	・放射状にヘラ痕が行なわれている。
底部	・平底 ・底部の粘土が体部の方へ付着 ・内外両面より穿つ、両面に粘土付着 ・1孔、1.5cm の穿み	・平底 ・突出した底部で後からつけ足している。 ・内面より刺し、外面に粘土が歪つに付着 ・1孔、1.7cm の厚み	・削り底 ・突出した小さな底部で開りをヘラ削りしている。 ・外面より後から粘土をつけ足している。 ・1孔、1.2cm の厚み	・削り底 ・突出した小さな底部で開りをヘラ削りしている。 ・1孔、1.4cm の厚み
色調	・淡茶褐色、中核は赤褐色	・黄褐色	・淡黄赤褐色	・淡灰茶褐色
胎土	・0.1〜0.2の砂粒含有	・0.1〜0.3の砂粒・石粒含有	・0.1〜0.4の砂粒、石粒多量に含有	・0.1〜0.2の砂粒含有 僅かに石粒も含有
質	・良好	・良好	・良好	・良好
	・黒斑あり			
備考				

土器 No.	59 / 120	221	120	222	120	223	120	224
種類 / 摘要	甕		甕		甕		甕	
法量 (cm) 口縁径	14.4		15.4		欠損のため不明		欠損のため不明	
法量 (cm) 器高	7.3		11.1		3.5 (現存値)		6.4 (現存値)	
法量 (cm) 腹径								
法量 (cm) 底径	3.0		1.5		0.7			
出土地区	H−3−G 溝Ⅱ−3		H−3−G 溝Ⅱ−3		H−3−G 溝Ⅱ−3		H−3−G 溝Ⅱ−3	
口頸部 形態	・堅かに反り、外面は内弯している、断面は三角形		・体部より一段と大きく外上方へ広がっている端部断面は丸い。					
口頸部 文様					欠損のため不明		欠損のため不明	
口頸部 整形外	・共に横ナデタタキ目を消している		・右上り浅いタタキ目					
口頸部 整形内			・横ナデ					
体部 形態	・底部より外上方へ広がり、器高が低く、土器全体が厚つぼい。		・底部より外上方へ立ち上がる。上位で一層反っている。		・底部から外上方に大きく広がる。		・底部より外上方へ大きく広がり、丸みがある	
体部 文様								
体部 整形外	・上下左右交差した細かいタタキ目。		・右上りのタタキ目		・右上りのタタキ目（後から縦方向のタタキ目がある）		・右上りのタタキ目（風化が著るしい。）	
体部 整形内	・ナデ		・ナデ、中位より以下は指押えで凹凸が著しい。		・刷毛目		・刷毛目が部分的にある	
底部	・削り底 ・内面より刺し、孔のあけ方は歪つ。外面に粘土付着 ・1孔、1.8cmの厚み		・削り底 ・縦方向のタタキ目上に僅かに削っている。 ・1孔、1.5〜1.7cmの厚み		・削り底 ・尖底ぎみである ・1孔、1.6cmの厚み		・削り底 ・尖底ぎみである ・1孔、1.6cmの厚み	
色調	・淡青黄灰褐色		・淡黄茶褐色 中核一赤褐色		・黄茶褐色		・青黄褐色	
胎土	・0.1〜0.3の砂粒含有		・0.1〜0.6の砂粒・石粒多量に含有		・0.1〜0.3の砂粒含有		・0.1〜0.4の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考								

土器 No.	60 / 120	225	120	226	59 / 120	227	60 / 120	228
種類 / 摘要	甕		甕		甕		甕	
法量 (cm) 口縁径	13.8		欠損のため不明		11.7		16.1	
法量 (cm) 器高	10.85		8.4 (現存値)		11.2		8.8	
法量 (cm) 胴径								
法量 (cm) 底径	2.4				1.3		1.3	
出土地区	H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3		H−3−G 溝II−3	
口頸部 形態	・端部は垂直に立ち上がる。断面は三角形				・端部断面は三角形で、外面端が内弯している		・端部で外反し、器壁は薄くなっている。	
口頸部 文様								
口頸部 整形 外	・	横ナデ	欠損のため不明		・	共にナデ タタキ目を消している		
口頸部 整形 内	・	横ナデ			・	共にナデ タタキ目を消している	・横方向のヘラ磨き	
体部 形態	・底部より外上方に立ち上がり、上位より垂直に立ち上がり、深くなっている。		・外上方に内弯しながら立ち上がる。		・外上方に立ち上がり細長い。底部につけ足した粘土が下位で厚なり、器壁が厚くなっている。		・底部より外上方へ広がり、中位でやや厚みを増す。	
体部 文様								
体部 整形 外	・横方向の三段のタタキ目		・右上りのタタキ目		・右上りのタタキ目、中位より縦方向のタタキ目で格子状になっている。		・右上りのタタキ目、所々ナデ。中位で縦方向のタタキ目と交差	
体部 整形 内	・ナデ		・ナデ		・ナデ (放射状のヘラ痕)		・刷毛目	
底部	・タタキ底 ・1孔、1.0cmの厚み		・タタキ底 ・コブ状に後からつけ足され、最終的にタタキ目で仕上げている。 ・1孔、1.8cmの厚み		・タタキ底 ・コブ状に後からつけ足され、斜方向のタタキ目が格子状になっている。 ・1孔、2.0cmの厚み		・タタキ底 ・1孔、1.3cmの厚み	
色調	・淡灰黄褐色		・淡黄褐色		・淡黄赤褐色		・淡暗赤褐色	
胎土	・0.1〜0.3の砂粒、石粒多量に含有		・0.1〜0.2の砂粒含有		・0.1〜0.2の砂粒含有		・0.1〜0.2の砂粒含有	
質	・良好		・良好		・良好		・良好	
備考								

土器 No.	60/120	229	60/120	230
種類 / 摘要	甕		甕	
法量(cm) 口縁径	14.6		11.15	
法量(cm) 器高	9.25		5.9	
法量(cm) 腹径				
法量(cm) 底径	1.5		1.9	
出土地区	H－3－G 溝Ⅱ－3		H－3－G 溝Ⅱ－3	
口頸部 形態	・端部は外上方へ向き、やや外面に肥厚する。		・端部は内弯し断面は丸く、器壁が厚い。	
口頸部 文様				
口頸部 整形 外	・	共に横ナデ	・	共にナデ
口頸部 整形 内	・		・	
体部 形態	・底部より外上方へ立ちさがり口縁付近で内弯する。		・底部より外上方に広がる。	
体部 文様				
体部 整形 外	・右上りタタキ目、中位より不規則なタタキ目		・	共にナデ
体部 整形 内	・右下りの刷毛目、中位より横方向の刷毛目		・	
底部	・タタキ底 ・粘土を後から巻いている。 ・1孔、1.7cmの厚み		・丸底 ・外面より穿つ ・1孔	
色調	・淡黄褐色		・淡茶褐色	
胎土	・0.1～0.3の砂粒多量に含有		・0.1の砂粒含有	
焼成	・良好		・良好	
備考			・全体に同一手法で仕上げ、乱雑である。	

第3節　須恵器

須恵器は、東奈良遺跡のほぼ全域より出土しており、今回はA—6—G・I・J・K、H—3—B・C・G・H・J・K・M・N・O・P、F—7—E・Fの各地区から出土した須恵器について記す。（図版121・122）

器種としては、杯蓋（1～4・6～11）・杯身（12～19）・有蓋高杯（20・21・22）・甕（27～34）・器台（26）・鉢（23）・壺（24・25）等がある。しかし他の弥生式土器や土師器にくらべると、出土量はきわめて少ない。さらに出土状態においても、H—3—F地区の溝Ⅰ—1より出土した鉢（23）、F—7—E・F地区の溝Ⅰ—Nより出土した杯蓋（1・3・4）・甕（27）、H—3—O—8地区のP—23より出土した甕（34）が遺構に伴う他は、すべて直接遺構に関連のない包含層より出土したものである。

時期は陶邑のⅠ期からⅤ期[注1]までの各時期のものがある。

5世紀の須恵器

5世紀の須恵器としては、杯蓋（1～4）・杯身（12～14）・甕（27・30・32・34）・器台（26）・高杯（20）がある。

杯蓋・身の天井部・底部はほぼ全体の¾ほどヘラ削りにより、丁寧に成形・調整されている。杯蓋（1～4）の天井部と口縁部との境界はやや突出し稜をなしている。口縁部は比較的高く、（1）の端部は丸く仕上げられ、他の（2～4）より古い時期のものである。杯身（12～14）のたちあがりは、やや内傾はしているが比較的長く、杯蓋（2～4）とともに定形化したものであろう。

第22図　須恵器杯蓋

甕（27・30・34）の口縁端部は張り出した様になっている。

器台（26）は、上段には長方形、中・下段には三角形の三段の三方向の透しがあり、透しのまわりにはナデがあり、透しと透しのあいだには櫛描波状文がある。

高杯（20）は、短脚1段透しの有蓋高杯の脚部である。

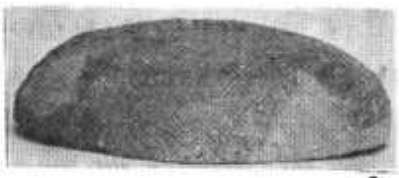
6世紀の須恵器

6世紀の須恵器としては、杯蓋（6～8）・杯身（15～19）・高杯（21・22）・高杯の蓋（5）・鉢（23）・甕（31）がある。

杯蓋（6～8）は、天井部は粗いヘラ削りで成形され、口縁部はゆるやかに外上方に広がり、端部は丸くおさめられている。天井部と口縁部の境界には、（6）は凹線が、（8）はあいまいな凹線がめぐらされてはいるが、（7）は判然としない。いずれも6世紀後半の須恵器である。

第23図　須恵器杯蓋

杯身は、扁平な天井部で、粗いヘラ削りがなされ、たちあがりは内傾し、（15・17）は短く、（16・19）はさらに短い。（15・17）



8

第24図　須恵器杯蓋

は6世紀前半で、（16・19）は6世紀後半に位置づけられるであろう。

高杯の蓋（5）は、天井部をヘラ削りし、後カキ目調整をおこない、頂部には平たい円盤形のつまみをつけている。口縁部はやや湾曲しながら外へひらき、やや短い。時期としては6世紀前半のものであろう。

高杯（21）は、長脚のつくものであり、また𤭯（23）は頸部の長大化していく時期のものであり、高杯（22）とともに6世紀前半の新しい時期のものであろう。

7世紀の須恵器

杯蓋（9）・壺（24）・甕（28・29・33）がある。

杯蓋（9）は端部の内面にかえりがつき、天井部の頂部に宝珠つまみのつくものである。

甕（28・29）は外反する口頸をもち、端部を折りまげている。甕（33）は口頸部に一帯の粗い櫛描波状文があり、この粗い波状文はTK43までにはほとんど消滅したものが、一時復活するものである。[注3]

いずれも7世紀前半の時期の須恵器である。

8世紀の須恵器

杯蓋（10・11）であり、天井部と口頸部との境界は段をなし、口縁部は短く屈曲したものである。

壺（25）は底部のみであり、糸切り底で平安時期以後のものである。

まとめ

東奈良遺跡から出土した須恵器には、Ⅰ期からⅤ期のものが認められる。また全域からその出土をみるが、量的にもわずかであり、遺構も少ない。

5世紀代の須恵器には、杯蓋（3、4）、杯身（12）でみられるように割れ口が暗紫色を程し、泉北陶邑で製作された可能性のあるものがある。6世紀～7世紀代の須恵器には、胎土に砂粒を多く含むものが多くみられ、これらの須恵器は、この時期にすでに成立していた千里古窯跡群から供給されたものと考えられるが、詳細は今後胎土分析等によって決めるべきものと考えている。

注　1　陶邑古窯跡群Ⅰ　平安学園
　　2　〃

須 恵 器 観 察 表

土器No.	(写真)第22図 (図面) 121	1	121	2	11	3	63 121	4
種類	蓋		蓋		蓋		蓋	
法量(cm) 口縁径	13.0		11.8		11.0		12.3	
法量(cm) 器高	4.2		3.95		4.0 (現存値)		4.85	
法量(cm) 腹径								
法量(cm) 底径								
出土地区	F−7−E・F 溝1−N		F−7−E・F		F−7−E・F 溝1−N		F−7−E・F 溝1−N	
口縁部 形態	・口縁部はわずかに外へひらき、稜線部の径よりも口径の方がやや大きい。口縁下端は丸くおさめられている。		・口縁部はわずかに外方へひらき、稜線部の径よりも口径の方がやや大きい。口縁下端はわずかに内傾し、端面に凹線が一条めぐる。		・口縁部はゆるやかに彎曲しながら下方にのびる。口縁下端は内傾し、やや鋭さに欠ける。		・口縁部はわずかに外へひらき、稜線部の径よりも口径の方がやや大きい。口縁下端はわずかに内傾し、きわめて鋭い。	
口縁部 文様								
調整部	・内外面とも横ナデ調整		・内外面とも横ナデ調整		・内外面とも横ナデ調整		・内外面とも横ナデ調整	
体部 形態	・天井部と口縁部の境界は、突出してやや鈍い稜をなす。天井部は比較的平らでほとんどヘラ削りされている。		・天井部と口縁部の境界は、突出してやや鈍い稜をなす。丸味をもった天井部は、ていねいにヘラ削りされているが、焼ひずみにより中心部が少し凹んでいる。		・天井部と口縁部の境界は、突出しやや鈍い稜をなす。天井部は丸味をもち%ほどヘラ削りされている。		・天井部と口縁部の境界は、突出して鋭い稜をなす。丸い天井部は、ていねいにヘラ削りされ中心部を不定方向にナデて仕上げられている。	
体部 文様								
整形部	・ヘラ削り及び内面は横ナデ調整。 ・ヘラ削り方向は、時計まわり。 ・仕上げナデは一方向		・ヘラ削り以外及び内面は横ナデ調整。 ・ヘラ削り方向は、時計まわり。		・ヘラ削り以外及び内面は横ナデ調整。 ・ヘラ削り方向は、逆時計まわり。		・ヘラ削り以外及び内面は横ナデ調整。 ・ヘラ削り方向は、時計まわり。	
底部								
色調	・淡灰色		・淡青灰色		・暗灰色		・暗灰色	
胎土	・精良ながらやや粗砂含		・精良であるがやや粗砂を含		・精良ながら粗砂含		・精良	
質	・やや軟質		・堅緻		・堅緻		・堅緻	
備考							・天井部に白斑アリ	

土器 No.	第23図 121 5	121 6	63 121 7	121 8
種類 / 摘要	蓋	蓋	蓋	蓋
法量 (cm) 口径	14.8 (反転)	13.8 (反転)	14.4 (反転)	14.8
器高	7.6	4.3	4.4	4.0
腹径				
底径				
出土地区	F−7−E・F	A−6−G・I・J・K	A−6−G・I・J・K	A−6−G・I・J・K
口縁部 形態	・口縁部はやや弯曲しながら外へひらく。口縁下端は丸く、内面ににぶい凹線を一条めぐらす。	・口縁部はゆるやかに外下方にひろがる。口縁下端は丸くおさめられ稜はなく、わずかに凹線が一条めぐる。	・口縁部は、弯曲しながら外下方にのびる。口縁下端は丸くおさめる。	・口縁部は、外下方にゆるやかにひろがり口縁下端は丸くおさめる。口縁下端内面に、にぶり凹線が一条めぐる。
文様				
調整	・内外面とも横ナデ調整	・内外面とも横ナデ調整	・内外面とも横ナデ整整	・内外面とも横ナデ調整
体部 形態	・天井頂部に平たい円盤形のつまみがつく天井部と口縁部の境界はにぶい凹線めぐる。天井部は丸脉をもちほとんどヘラ削りされ後に、カキ目調整。	・天井部と口縁部の境界は、ゆるい凹線をめぐらす。天井部は余りふくらみがなく、¾弱粗いヘラ削りされている。	・天井部と口縁部の境界は、あいまいな凹線をめぐらす。天井部は余りふくらみがなく、¾強粗いヘラ削りされている。	・天井部と口縁部の境界は認められない。天井部は余りふくらみがなく、口縁部まで粗くヘラ削りされている。
文様				
調整	・ヘラ削り及び内面は横ナデ調整。 ・ヘラ削り方向は時計まわり。 ・仕上げナデは一方向	・ヘラ削り以外及び内面は横ナデ調整。 ・ヘラ削り方向は、逆時計まわり。 ・仕上げナデは不定方向	・内面は横ナデ調整。 ・ヘラ削り方向は、逆時計まわり。 ・仕上げナデは一方向	・内面は横ナデ調整。 ・ヘラ削り方向は、逆時計まわり。 ・仕上げナデは一方向
底部				
色調	・淡灰色	・淡灰色	・暗灰色	・淡灰色
胎土	・精良ながら粗砂含	・精良ながら粗砂含	・精良ながら粗砂含	・精良ながら粗砂含
焼成		・堅緻	・堅緻	・堅緻
備考	・やや大型品である。	・天井部に白斑アリ	・内面に白斑あり 焼けひずみが著しい	・焼けひずみが著しい

土器 No.		121	9	121	10	121	11	121	12
摘要 ＼ 種類		鉢		壺		蓋		杯	
法量(cm)	口縁径	9.2		13.2		17.6 (反転)		9.7	
	器高	2.9		1.8 (現存値)		1.3 (現存値)		3.9 (現存値)	
	腹径								
	底径								
出土地区		A—6—G・I・J・K		A—6—G・I・J・K		A—6—C・I・J・K		F—7—E・F	
口縁部	形態	・口端部ちかくに内面にかえりをもつが、かえりは口端部よりも内傾し突出する。		・口縁端部は短く屈曲し下方へ折れる。口端部は丸くおさめる		・口縁部は、小さく屈曲し内傾にややふくれる、外側に端面をもつ		・たちあがり端部は内傾する。	
	文様								
	整形	・内外面とも横ナデ調整		・内外面とも横ナデ調整		・内外面とも横ナデ調整		・内外面とも横ナデ調整	
体部	形態	・天井頂部に宝珠形つまみがつく。天井部は一段高くふくらみ、ふくらみ部分をヘラ削りする。		・器高は低く。天井部と口縁部の境界は不明瞭であるが口縁部近くに凹線が一条めぐる。		・天井部と口縁部の境界は段をなす。天井部平坦である。		・受部は水平に外方へのび、端部は丸味を持っている。体部は丸く仕上げられている。	
	文様								
	整形	・内面は横ナデ調整、仕上げナデは認められない。 ・ヘラ削り方向は、逆時計まわり。				・内外面とも横ヘラ調整		・外面はヘラ削りで削りの方向は時計まわりである。 ・内面は、横ナデ調整	
底部									
色調		・淡青灰色		・黒灰色		・灰白色		・青灰色	
胎土		・精良		・精良であるが 0.1程度の砂粒を含む		・精良		・精良であるが、やや粗砂を含む	
質		・堅緻				・堅緻		・堅緻	
備考									

第24図

土器No.	121	13	63 121	14	121	15	121	16
種類 / 摘要	杯		杯		杯		杯	
法量(cm) 口径	10.2		12.5		14.4		11.6	
法量(cm) 器高	5.0		5.8		5.3		2.4 (現存値)	
法量(cm) 腹径								
法量(cm) 底径								
出土地区	F－7－E・F		F－7－E・F		F－7－E・F		A－6－G・I・J・K	
口縁部 形態	・たちあがり端部は内傾し、ややあまい稜を持つ。		・大型の杯である。たちあがりは内傾する。		・大型の杯である。たちあがりはやや内傾し、低い。		・たちあがりは、内傾し低い。受部は水平に外方へのびる。口端部は丸くおさめる。	
口縁部 文様								
胴部 整形	・内外面とも横ナデ調整		・内外面とも横ナデ調整		・内外面とも横ナデ調整			
体部 形態	・受部は水平で、先端は丸味をもっている体底部は丸く仕上げている		・受部はやや外上方にのびる。体部は扁平である。		・受部は外上方にのび端部は丸味をもっている。体部は扁平な感じである。		・体部は、きわめて扁平であろう。	
体部 文様								
底部 整形	・底部の約¾を荒いヘラ削りし、方向は逆時計まわりである。 ・内面は横ナデ調整		・外面は、体底部全体の約½を荒いヘラ削りし、方向は逆時計まわりである。 ・内面は横ナデ調整		・外面は荒いヘラ削りをし、方向は逆時計まわりである。 ・内面は横ナデ調整			
底部								
色調	・灰白色		・青灰色		・灰白色		・淡青灰色	
胎土	・胎土はややキメが粗い		・精良であるが、やや粗砂を含む。		・精良であるが、やや粗砂を含む。		・精良	
質	・やや軟質である。		・堅緻		・やや堅緻である。		・堅緻	
備考					・底部にヘラ記号一本あり。			

土器 No.	17 (121)	18 (63 / 121)	19 (121)	20 (121)
種類 / 摘要	杯	杯	杯	高杯
法量 (cm) 口縁径	14.0	15.4	14.8	欠損のため不明
法量 (cm) 器高	3.3 (現存値)	3.2 (現存値)	3.1 (現存値)	6.0 (現存値)
法量 (cm) 腹径				
法量 (cm) 底径				8.4
出土地区	A−6−G・I・J・K	A−6−G・I・J・K	H−3−P	F−7−E・F
口縁部 形態	・たちあがりは中程がやや ふくらみを持ち低い、端部は丸くおさめられている。	・たちあがりは、内傾し低い。受部はやや水平に外方へのびる。	・たちあがりは、内傾し低い。受部は水平に外方へのびる。	
口縁部 文様				欠損のため不明
頸部 整形	・内外面とも横ナデ調整	・内外面とも横ナデ調整		
体部 形態	・受部は水平に外方へのびる。体部は扁平な感じであると思われる。	・体部は、扁平であろう	・体部はきわめて扁平である。	・脚部は外反するが脚端部付近は直立する脚端部は丸くおさめられている。
体部 文様				・透しが3孔ある。
体部 整形		・外面ヘラ削り		・ヘラ削り調整
底部				・横ナデ
色調	・灰白色	・青灰白色	・灰黄色	・暗灰色
胎土	・精良である。	・精良ながらやや粗砂含	・精良ながらやや粗砂含	・精良
質	・やや堅緻である。			・堅緻
備考				

土器No.	63/121 21	63/121 22	63/121 23	/121 24
種類 / 摘要	無蓋高杯	高杯	鉢	壺
法量(cm) 口縁径	11.0	13.6	欠損のため不明	13.2 (反転)
器高	4.0 (現存値)	7.4	9.8 (現存値)	6.65 (現存値)
脚径			9.2	欠損のため不明
底径		9.0		
出土地区	II−3−P	A−6−G・I・J・K	II−3−F 溝J−1	A−6−G・I・J・K
口頸部 形態	・口縁部は外上方にのびる。	・口縁部は外上方にのび端部は丸くおさめる。	・口縁部は欠損のため不明。外反する頸部、外面に櫛描波状文をほどこす。	・口頸部は、やや長く外反ぎみに内弯する。口端部は、丸くおさまり頸部に一条の凹線をもつ。
口頸部 文様				
口頸部 整形	・内外面とも横ナデ調整	・内外面とも横ナデ調整	・内外面とも横ナデ調整	・内外面とも横ナデ調整
体部 形態	・体部は比較的浅い。	・口縁部と体部の境界は、にぶい稜をもつ体部はあまり深くない。	・丸みをもった体部。	
体部 文様	・凹線に区画された中に櫛描波状文をほどこす		・肩部に凹線を一条めぐらし、その下に櫛描波状文をほどこす。	欠損のため不明
体部 整形	・外面はヘラ削り後横ナデ調整。 ・内面は横ナデ調整。 ・ヘラ削り方向は逆時計まわり。 ・仕上げナデは一方向	・外面は½ヘラ削りされ、ヘラ削り以外は横ナデ調整。 ・ヘラ削り方向は時計まわり。 ・仕上げナデは一方向	・体部下半から、底部は、ヘラ削りされた後ラセン状に、カキ目調整している。	
底部		・下方にのび、さらに段をもちひろがる。内外面とも横ナデ調整。	・丸底	・欠損のため不明
色調	・淡灰色	・灰白色	・灰白色 ・中核は紫黒褐色を呈す	・淡青灰色
胎土	・精良ながらやや粗砂含	・精良ながら粗砂含	・やや粗砂を含	・精良
質	・堅緻			・やや軟質
備考	・内面に白斑あり		・内面に自然釉の付着が認められる。	

土器No.	121 — 25	63 121 — 26	63 122 — 27	122 — 28
種類 / 概要	壺（底部）	器台	甕	甕
法量（cm） 口縁径	欠損のため不明	欠損のため不明	25.3（反転）	22.0（反転）
法量（cm） 器高	欠損のため不明	10.1（現存値）	5.6（現存値）	3.6（現存値）
法量（cm） 脚径	欠損のため不明			
法量（cm） 底径	9.3（推定）	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
出土地区	A−6−G・I・J・K	H−3−O	F−7−E・F 溝I−N	A−6−G・I・J・K
口縁部 形態			・外反する口頸は、口端部外面に、にぶい突帯をもつ。	・外反する口頸、口端部は、さらに外方へやや広がり、丸くおさめられている。
口縁部 文様	欠損のため不明	欠損のため不明		
口縁部 整形			・内外面とも入念な横ナデ調整	・内外面とも横ナデ調整
体部 形態		・3段3方向に透しのある、あまり高くない脚で、上段の透しは長方形、中・下段の透しは三角形で面どりをしている。		
体部 文様	欠損のため不明	・外面にはやや崩れた櫛描波状文がほどこされている。	欠損のため不明	欠損のため不明
体部 整形		・内面は、横ナデ調整		
底部	・糸切り底である。 ・底部中央に、焼成後に穿った穴が認められる		・欠損のため不明	・欠損のため不明
色調	・灰白色	・灰白色	・暗灰色	・淡青灰色
胎土	・精良	・精良	・精良	・精良
質	・堅緻	・堅緻	・堅緻	・堅緻
備考	・焼き台か			

土器No.	29	30	31	32
	122	122	122	63 122
種類 / 摘要	甕	甕	甕	甕
法量(cm) 口縁径	21.3 (反転)	18.4 (反転)	22.0 (反転)	58.9 (反転)
器高	4.7 (現存値)	4.4 (現存値)	8.6 (現存値)	7.3 (現存値)
腹径 / 底径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
出土地区	A—6—G・I・J・K	H—3—B・C・G・H J・K・M・N・O・P	A—6—G・I・J・K	H—3—B・C・G・H J・K・M・N・O
口類部 形態	・口頸部は、短く外反し、口端部は外側に折り返し肥厚する。	・短く外反する口頸は口端部で外側に肥厚し凹線を一条めぐらす。	・外反する口頸、口端部は、さらに外方へやや広がり、丸くおさめられている。	・外反する口頸は、凹線によって三条に区画された間に、波状文をほどこす。口端部は、外側にやや面をもち、丸くおさめられている。
口類部 文様				
口類部 整形	・内外面とも横ナデ調整	・頸部外面にカキ目をほどこし内外面とも横ナデ調整している。	・内外面とも横ナデ調整	・内外面とも横ナデ調整
体部 形態	・欠損のため不明であるが、肩部のみやや残存	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
体部 文様				
体部 整形	・外面は、タタキ目文後カキ目調整。 ・内面は、同心円文を粗くナデ消している。			
底部	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明	・欠損のため不明
色調	・青灰色	・灰白色	・青灰色	・暗灰色
胎土	・精良	・精良	・精良	・精良
質	・堅緻	・やや軟質	・堅緻	・堅緻
備考			・口縁内面に自然釉及び白斑あり	

土器 No.	122 — 33	63/122 — 34
種類 / 摘要	甕	甕
法量 (cm) 口縁径	30.9 (反転)	25.5
器高	3.7 (現存値)	49.2 (現存値)
腹径	欠損のため不明	48.6
底径		欠損のため不明
出土地区	A—6—G・I・J・K	H—3—O—8、P—23
口部 形態	・外反する口頸、口端部は外側に折り返しやや肥厚する。口端部上面に、にぶい凹線をもち、内側につまみ上げられた立ち上りをもつ。	・外反する口頸をもち口縁部端面は、上下にわずかにのび棱をつくる
口部 文様	・口頸部外面に、ゆるやかな波状文をほどこす	・端面に、ゆるい凹線がめぐっている。
口部 整形	・内外面とも横ナデ調整	・口頸部外面はカキ目調整、内面は横ナデ調整
体部 形態		・最大腹径は、比較的上方にあり、やや長い胴部をもつと思われる。
体部 文様	欠損のため不明	
体部 整形		・外面はタタキ目文後カキ目調整
底部	・欠損のため不明	・欠損のため不明
色調	・暗灰色	・青灰色
胎土	・精良であるが、やや粗砂合	・精良
質	・堅緻	・堅緻
備考		

第4節　石　　器

石器・土製品
小川水路・F－7－E、F地区・H－5－I、M地区・I－3－B、F、G、H地区・H－3－J、K、M、N、O、P地区・H－3－B、C、F、G、H地区・F－4－N・G－4－B地区・A－6－F、G、I、J、K地区

今回報告する石器・土製品は、小川水路地区、F－7－E・F地区、H－5－I・M地区、I－3－B・F・G・H地区、H－3－J・K・M・N・O・P地区、H－3－B・C・F・G・H地区、F－4－N・G－4－B地区、A－6－F・G・I・J・K地区の合計8地区より出土した遺物である。(注1)個々の遺物についての詳細は、石器・土製品観察表と図版（123～125）を参照されたい。

◦石鏃は、平基無茎式（1・2）・凹基無茎式（3）・円基無茎式（5・8）・凸基有茎式（6・7・9・10・11）が出土しており、凸基有茎式が大形の傾向を示している。遺構に伴なう遺物としては、（11）のF－4－N、G－4－B地区方形周溝墓北溝出土の石鏃が唯一のものである。

◦磨製石剣（16・17）2点の内（16）は、柄部に桜の樹皮などを巻きつけた痕を残している。本来は、大阪府恩智遺跡出土の打製石剣のように樹皮を巻きつけていたのであろう。(注2)（17）は、A－6－K地区で検出された第1号方形周溝墓南溝より出土したもので、伴出した土器は唐古第Ⅲ様式である。

◦石斧（26・34）は、ともにF－4－N地区で検出された方形周溝墓北溝から出土しており、伴出土器は唐古第Ⅲ様式から第Ⅳ様式である。

◦自然石（49・50）のうち、（49）は部分的に火を受けた痕跡があり何か火を使う作業工程に使用されたものであろうか。（50）はH－5－I・M地区A－10で検出された壺棺付近より出土しており、壺棺に対する墓標的役割の可能性が考えられる。

土錘（35・36・37・38・39・40）は、（41）を除いて全て小川水路採集遺物であるので、時期を決めがたい。（37・38・39・40）のうち、（37）と（39）・（38）と（40）が同質であり同時製作と考えられる。この4個について共通に見られる特徴は、一方の小口に整った面を持っていることである。この事から棒状の工具に粘土を巻き付け一方の小口を水平面にあて整えた後、適当な大きさでもぎ取って製作されたと考えられる。他方の小口が不整形であるのはこのためで、量産には適した方法であったと考えられる。

以上が石器・土製品の大略である。今回石器の出土量が少ないのは、各々の調査地区において弥生時代前期・中期の住居などの遺構がほとんどなかったからであろう。

注　1　今回の報告に際しては、剝片等の遺物は除外している。
　　2　考古学雑誌第63巻第2号　日本考古学会　S52年9月　図版Ⅱ恩智遺跡出土の木戈・打製石剣　P81～84恩智遺跡出土の木戈・打製石剣について　瓜生堂遺跡調査会

石器・土製品観察表

図版番号	出土地点	法量(cm) 長さ 幅 厚 □現存値	備考
1	F－7－E・F 包含層	1.6 (1.2) 0.2	打製石鏃（平基無茎式）　一逆刺を欠損 断面は扁平な菱形
2	F－7－E・F 包含層	(1.4) 1.5 0.2	打製石鏃（平基無茎式）　先端部を欠損 断面は扁平な菱形
3	F－7－E・F 包含層	(1.4) 1.4 0.3	打製石鏃（凹基無茎式）　先端部を欠損 断面は扁平な二角形
4	F－7－E・F 溝1－S	(2.2) (1.5) (0.7)	打製石鏃　基部を欠損。断面は菱形
5	F－7－E・F 包含層	2.9 1.6 0.6	打製石鏃（円基無茎式）　断面は菱形
6	F－4－N、G－4－B 包含層	4.0 (1.7) 0.4	打製石鏃（凸基有茎式）　一側辺を欠損 断面は菱形
7	F－7－E・F 包含層	4.3 1.1 0.5	打製石鏃（凸基有茎式）　断面は扁平な菱形
8	A－6－F・G・I・J・K 包含層	4.3 1.6 0.4	打製石鏃（円基無茎式）　先端部を欠損 断面は極端に薄い
9	F－4－N、G－4－B 包含層	4.5 2.1 0.7	打製石鏃（凸基有茎式）　断面は菱形
10	F－4－N、G－4－B 包含層	4.8 1.8 0.6	打製石鏃（凸基有茎式）　断面は菱形
11	F－4－N 方形周溝墓北溝	4.7 2.4 0.6	打製石鏃（凸基有茎式）　先端部は欠損 断面は扁平な菱形
12	F－4－N、G－4－B 包含層	(2.4) 3.5 1.3	打製石槍　中央部破片で断面は菱形
13	F－4－N、G－4－B 包含層	4.1 1.1 0.5	打製石錐。最大幅は頭部付近にあり、断面は二角形 錐部に使用痕が見られる。
14	F－4－N、G－4－B 包含層	(4.0) 1.5 0.6	打製石錐。頭部と錐部に破損がある。 断面は楕円形で最大幅が中央部にある。
15	F－4－N、G－4－B 包含層	9.9 3.4 1.5	打製石器、裏面に自然面を残す。表面の風化がひどく縄文期の遺物ではないかと考えられる。
16	71年度 小川水路採集	(10.4) 3.2 0.7	磨製石剣。全面に研磨痕が見られる。先端部は欠損。柄部には刃がなく面取りされ、桜の樹皮などを巻きつけた痕を残す。

図版番号	出土地点	法量(cm) 長さ 幅 厚 ()現存値	備考
17	A－6－K 第1号方形周溝墓 南溝（西スミ）	11.5 2.4 0.7	磨製石剣。刃部に一部破損がある。研磨痕が全面に見られる。
18	F－4－N 方形周溝墓西溝	(6.8) (1.4) (0.6)	磨製石器。破損石器に再加工を施す段階のものであろう。石包丁の刃部か。
19	A－6…F・G・I・J・K 包含層	(6.7) (1.8) (0.7)	磨製石器。破損石器に再加工を施す段階のものであろう。刃部は両刃である。全体的に研磨痕が見られる。
20	F－4－N、G…4－B 包含層	(4.5) (2.7) (0.6)	磨製刃器の破損石器の再加工であろう。 片刃
21	F－4－N、G－4－B 包含層	(4.8) (3.0) (0.7)	磨製刃器の破損石器の再加工であろう。 両刃で刃縁に使用痕あり。
22	F…4－N、G－4…B 包含層	(3.5) (3.4) (1.2)	扁平片刃石斧。刃面を破損している。
23	F…4－N、G…4－B 包含層	4.8 3.4 1.2	扁平片刃石斧。刃先に使用痕がみられる。
24	F－7－E・F 包含層	6.4 3.4 2.2	磨製石器。形態的特徴より男性性器石器か。頭部（端部）に磨滅痕があり穿孔具の可能性もある。
25	F－4－N、G…4－B 包含層	(7.6) (8.1) (0.7)	磨製石器。大型石包丁の破片か。一部に片刃の刃部がみられる。再加工を施す段階のものであろう。
26	F…4－N 方形周溝墓北溝	(5.6) (2.4) (2.1)	柱状片刃石斧。基部破損のために抉りの有無不明。 刃面の一側面に2ヶ所の打撃痕がみられる。 断面は台形である。
27	F…4－N、G－4－B 第1大形土壙	(9.6) (2.9) (0.9)	石包丁（直線刃半月形態）。片刃。刃面に対して彎曲している。全面に研磨痕が残存し、刃部に研ぎ直しが見られる。背面、刃線に条痕が見られる。端部に打撃痕がある。
28	F－4－N、G…4－B 包含層	(7.0) (3.6) (0.7)	石包丁（直線刃半月形態）。片刃。背面は平坦で光沢を持つ。 刃部に一部研ぎ直しが見られる。未穿孔が一ヶ所ある。
29	A－6－F・G・I・J・K 包含層	(10.6) (5.2) (0.7)	石包丁（杏仁形態）。全体的に剝離がひどい。 両刃、背面は平坦で光沢を持つ。
30	A－6－F・G・I・J・K 包含層	(10.2) (5.7) (0.9)	石包丁（杏仁形態）。両刃。全体的に研磨痕が見られる。穿孔は4ヶ所で1ヶ所が未穿孔である。
31	F－7－E・F 包含層	(10.2) (5.7) (0.9)	磨製石器。大型石包丁の破片か。一部に片刃の刃部を残している。破片の再加工を施す段階か。 研磨痕と剝離痕が見られる。
32	II－3－J・K・M・N・O・P 旧地層	(8.3) 5.0 3.2	大型蛤刃石斧。未製品で研磨段階で表面の刃面を破損している。 断面は楕円形をしている。
33	A－6－K 第1号方形周溝墓溝中	(10.8) (7.0) (4.1)	大型蛤刃石斧。刃部を破損している。 断面は楕円形して、基端に対して細くなる。

図版番号	出土地点	法量(cm) 長さ 幅 厚 ()現存値	備考
34	F－4－N 方形周溝墓北溝	(8.0) (3.6) (3.5)	大型蛤刃石斧。4分の1破損 断面は扁平な楕円形である。断面に研磨痕を残す。
35	71年度 小川水路採集	(2.2) (1.1) (1.2)	土錘。胎土は少量の砂粒　含む。 焼成は不良。色調は橙色、36と同質
36	71年度 小川水路採集	3.2 1.2 1.2	土錘。胎土は少量の砂粒を含む。焼成は不良 色調は橙色、35と同質。重量5.0g
37	71年度 小川水路採集	4.7 4.0 1.3	土錘。胎土・焼成は良好。色調は橙色 39と同質。重量65.5g
38	71年度 小川水路採集	4.5 5.1 1.3	土錘。胎土、焼成は良好。色調は乳白色 40と同質。重量90.1g
39	71年度 小川水路採集	4.1 4.1 1.0	土錘。胎土、焼成は良好。色調は橙色 37と同質。重量61.7g
40	71年度 小川水路採集	3.9 4.9 1.3	土錘。胎土、焼成は良好。色調は乳白色 38と同質。重量66.5g
41	H－3－G 井戸4号	6.1 2.9 0.9	土錘。胎土、焼成は良好。色調は乳白色 表面に線刻がある。重量61.4g
42	F－7－E・F 包含層	4.2 3.9 0.9	円板。胎土は少量の砂粒を含む、焼成は良好。色調は乳白色、土器片の再利用で紡錘車を作る目的であろう。
43	F－4－N 東端土器群	5.6 4.9 0.8	円板。胎土、焼成は良好。色調は淡褐色で外面に煤の付着あり。 土器片の再利用で紡錘車を作る目的であろう。
44	F－4－N、G－4－B 第1大形土坑下層	5.5 (2.6) 0.8	紡錘車。胎土、焼成は良好。色調は褐色 土器片の再利用
45	F－4－N、G－4－B 第1大形土坑	9.3 5.7 3.5	砥石。重量 201.8g
46	F－4－N、G－4－B 包含層	8.0 4.9 2.4	砥石。重量 118.9g
47	F－4－N、G－4－B 包含層	6.5 4.7 1.9	砥石。重量　81.0g
48	F－4－N、G－4－B 第Ⅳ土坑	16.6 9.0 3.6	砥石。重量 709.1g
49	H－3－B・C・F・G・H 包含層	10.4 10.3 4.2	自然石。影の部分に火を受けた痕がある。
50	H－5－M A－10電柱付近	14.8 10.6 5.8	自然石。一部に打撃痕あり、 壺棺に対する墓標石の可能性がある。

第5節　木　　器

木製品

F－7－E・F地区

F－7－E・F地区においては、弥生時代～古墳時代の遺構より木製品が出土している。

溝Ⅰ－S、溝Ⅱより多量の自然木、加工木が出土しているが製名は、9点ある。沼地状落ち込みからは、腰掛形木製品1点が単独で、溝Ⅰ－Sからは、木槌1点、つちのこ1点が、溝Ⅱからは、竪杵2点、杭2点、有頭棒1点、異形木製品1点などがある。これらのうち腰掛形木製品は、庄内第Ⅴ様式併行の土器と伴出しており弥生時代後期であろう。木槌、つちのこ、竪杵、杭、有頭棒、異形木器は、弥生時代後期～古墳時代前期のものと考えられる。

腰掛形木製品（図版126－1）　弥生時代の木製腰掛けには、尻受け台と脚とを一木から作ったものと、尻受け台に柄を穿って別木の脚を組み合わせたものの二種があり、本遺跡出土の腰掛形木製品は前者である。残存しているのは全体のほぼ半分で、尻受け台は縦33cm、横11.3cm、厚さ3.5cmの長楕円形であり、脚の幅24cm、高さ8cm、厚さ4cmである。尻受け台の上面は長辺側約1cm、短辺側それぞれ2.5cm残し、中央に向って四方からなだらかに刳っている。長辺側の中程に長さ4cmのくぼみがみられる。脚は尻受け台の下面より、角度110°とやや開きぎみに作り出されている。用材はコウヤマキである。

木槌（きぬた）（図版128－8）　一木作りで槌部は円筒形、槌部の一端より把り柄を造り出している。槌部は、全体が残存しており、残存長21cm、槌部長19cm、直径8.5cm、把り柄直径2.5cmとなっている。槌部の側面下方は、周囲を面取りしており、槌部中程は、使用により幅4～7cm摩滅し、くびれている。用材には、木心を有するユズリハの丸太材を使用している。

つちのこ（図版128－9）　完形品である。全長16.5cm、丸太の中央部がくびれ、両側にふくらみをもつものであり、くびれ部直径3.7cm、ふくらみ部直径約7cmである。用材が枝分かれの部分にあたっているため、左右の大きさが多少異なる。この種の木製品は、民俗例によれば一名"つちのこ"と称され、こも・俵などを編む時に使用されるものである。

竪杵1（図版127－4）　搗部先端と握部から半分以上が欠損、全体の約5分の2が残存しており、残存長49.5cm、搗部直径約8cmで全体的にやや彎曲している。搗部の全側面に幅1.5cmの面取りがなされており、非常に明瞭な加工痕がみられる。用材は、クスギの

丸太材を使用している。

竪杵2（図版127－5）　握部から半分が欠損している。残存長40cm、搗部最大直径4.5cm、搗部先端は、丸くなっている。用材はシキミの割り材を使用しており、木目が荒く粗い。

杭（図版127－6・7）　杭は2点出土しており、いずれも同じ形状を呈しており、かなり荒い加工が施されている。しかも、その加工痕は、非常にシャープなものである。

6　上方部が欠損。残存長48cm、直径6cmの木心を含むマツの丸太材を用いている。上端より10cmは、樹皮を剝いだだけの自然面で加工痕は見られない。それ以下38cmは下方に向って、次第に細くなる様に削られており、下端近くは全側面に削り痕が見られる。

7　上方部と先端が欠損。直径約5cmのエゴノキの丸太材を用いている。上端より14.5cmは、樹皮を剝いだだけの自然面である。29.5cm以下には（3）と同様の加工が施されている。

有頭棒（図版126－3）　樹皮を剝いだモミの細い丸太に、くびれをいれ、頭を削り出した木製品である。残存長30cm、直径4cm、頭長7cm、頭の先端は、丸くなっている。えぐれ部、先端のみに加工がなされており、他は自然面である。使用用途不明である。

異形木器（図版126－2）　長方形の板状の一長辺中央部を、半円形に抉ったものである。ほぼ完形品と思われる。全長23cm、幅9cm、厚さ1.8cm、半円直径7cm、用材はクスノキである。使用用途不明である。

F－4－N、G－4－B地区

G－4－B地区、第Ⅰ大形土坑とF－4－N－5地区、第Ⅱ大形土坑より、自然木、加工木、木製品10点が出土しており、木製品の中には、6点の未製品も含まれている。第Ⅰ大形土坑からは、又鋤1点、丸鍬未製品2点、朱塗り板2点、用途不明木製品1点、割り材3点が、又、第Ⅱ大形土坑からは石斧の柄の未製品1点が単独で出土している。これらの木製品は、いずれも唐古第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式併行の土器と伴出していることから、弥生時代中期のものと考えられる。

丸鍬（図版129－12・13）　柄穴の穿たれていない丸鍬の未成品2点である。2点とも同形で陣笠状を呈しており中央が盛り上がっている。材質はいずれもカシである。

12　一部欠損、全表面の3分の1程度は、腐蝕がひどく表面が剝離している。縦26.5cm、横29.5cm、中央の厚さ2.5cm、刃部の厚さ0.5

cmである。加工の状態からみると、ほとんど完成品にちかくあと柄孔を穿つのみと思われる。

13　一部欠損、表面はほとんど腐蝕、剝離している。縦25cm、横28.5cm、中央の厚さ 3.5cm、刃部の厚さは不明である。加工状態は確認できないが（1）と同じと考えられる。これらの製品は、1カ所に重って出土している状況からみて、同時に製作され、一緒に保存されていたのではないだろうか。

又鍬（図版 128—10）　二本歯の着柄鍬の鍬身のみである。着柄部は多少欠損し、残存長42.8cm、着柄部残存長 7.8cm、幅 4 cm、鍬身の長さは、 3.5cmで、二本の歯は、長さ27.3cm、幅 3.5cmと長さ26.5cm、幅3.1cmで、間隔は、約5 cm、厚さは、上方2 cm、先端0.5 cmと序々に薄くなっている。鍬身の断面は、それぞれかまぼこ形を呈している。二本の歯の中央には、わずかに稜がみられる。先端には使用による摩滅痕がみられる。又、着柄部にも着柄の際についたと思われる摩滅痕がみられる。

朱塗板（図版 129—14・15）　全体に小さな穴を数列穿ち、表面に朱を塗布した薄い偏平な板状木製品である。本遺跡からは、2点出土しており同じ形状を呈している。いずれも周囲が欠損しており全体の形態は不明である。2点は、形状及び材質から同種の製品に属するものと思われる。材質は、いずれもモミであり、ヒビ割れがひどい。

14　残存長30cm、残存幅 3.5cm、厚さ 0.8cm、全面に直径0.15cm～0.2cmの穴が0.7cm～1.2cmの間隔に 8 列穿たれている。列の間隔は、3 cm～5 cmである。穴は全部で29確認でき、そのうち、3 カ所の穴の中より、長さ 0.8cm、直径0.12cmの小さな木製釘が見出された。釘の表面にも朱が付着している。

15　残存長31.7cm、残存幅 4.6cm、厚さ 0.6cmである。全面に直径0.15cm～ 0.2cmの穴が0.8cm～1.0cm間隔に 6 列穿たれており列の間隔は、4 cm～5 cmである。穴は全部30確認でき、いずれも貫通している。

以上2点の使用用途は不明であるが表面に朱が塗布されていることより、一般の生活用器ではなく、特殊な用途をもつ製品であると思われる。

〔参考〕

本製品と同形のものが、東大阪市瓜生堂遺跡、山賀遺跡から、

又、上記のものよりやや形状の明らかなものが、大阪市長原遺跡より出土している。

用途不明木製品（図版 129 —16）　一部欠損しているが、全体の形状より弓型を呈す板状加工木である。残存長55cm、中央幅7.2cm、両面の曲線側に幅 1.2cm～8 cmに厚さ 1.8cmの線が削り出されている。他は、厚さ約 0.9cmで全体的に偏平であり、直線側は平面に直角に切断されている。用材は、カシで材質は木目が荒く、堅く強いが弾力性に富んでいる。使用用途は不明である。

石斧の柄（図版 128 —11）　石斧着装部が未完成な柄である。全長43.3cm、枝分れを利用し枝の把り部と幹の活用部から成っている。把り部長38cm、直径2.5cm、活用部長21cm、直径5.3cm、把り部と活用部は 60° を成している。把り部は、手元がわずかに湾曲しているが、ほぼ直である。所々に樹皮を剝ぐ際の刃物痕が見られる。活用部は、幹を縦２分の１に割裂き断面がほぼ丸くなる様に整えたものであり、幅 2.5cm～1 cmの面取りが見られる。用材は、石斧の柄として多くに用いられているサカキではないかと考えていたが、解剖観察の結果、モミであった。石斧の柄の用材については、今後検討してゆきたい。

板状原材（図版 131 —19・20・21）　同種のもの３点が同一地点より出土した。出土状態、形状より、それらは鋤又は、鍬を作るための用材であると考えられる。カシの原木を一定の長さに切断した後、断面が楔形になる様に割り裂き、製品に近い大きさに製材し保存したものであろう。これら３点のうち２点はほぼ同じ大きさ、他の１点は幅がほぼ同じであるが、長さが約２分の１となっている。これより一定の寸法基準があったことも考えられる。又、加工状態、断面より割材からの加工方法、加工段階をも知る事ができる。そこで、以上の事を明示するために３点の板状原材についての事項を第10表にあらわしてみた。

H—3—G地区

H—3—G地区においては、古墳時代の遺構より木製品が出土している。溝Ⅰ—3（大溝）より鋤２点が出土しており、これら２点の鍬はいずれも弥生式土器から土師器への過渡期の土器と伴出していることから、古墳時代前期の遺物と考えられる。

注　上記の木製品出土状況について詳しくは、遺構説明を参照されたい。

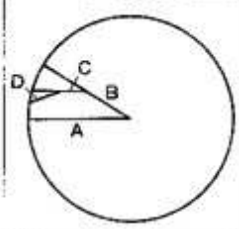
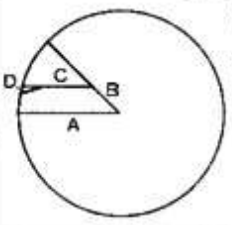
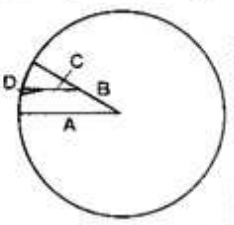
鍬１（図版 130 —17）　着柄鍬の鍬身である。上方部は欠損し、

鋤身は先端のやや狭まった方形を呈し、上方に着柄のため鋤身の中央部に、長方形の孔が穿たれている。全体的に薄く、断面は偏平である。残存長45cm、上方幅推定約19cm、先端幅14cm、厚さは、上方1.5cm～下方0.7cmと先端にゆくに従って薄くなっている。孔は、縦8cm、横3cmであり切り口は、非常に鋭い。用材にはカシ類を用いている。

鍬2（図版130－18）　鋤1と同一地点にて出土した。長柄鋤の柄で先端欠損、柄の着け根がわずかに残存している。鋤身は長方形と推定される。厚味は下方に序々に薄くなっており、断面は上方がかまぼこ状、下方は偏平である。残存長36.9cm、同幅13.3cm、柄残存長約1.7cm、幅3cm。用材には、カシを用いている。

小結

木製品については、その製作にあたった工具にも目を向ける必要がある。本遺跡出土の木製品は、弥生時代後期～古墳時代前期のものが多い。その加工状態や調整痕などは、金属器の使用を如実に示していると思われる。特に、木槌、杭、鋤にその様子が顕著にあらわれている。

No.		21	20	19
法量	長さ	82.6cm	75.8cm	42.3cm
	幅	27.6cm	24.5cm	23.2cm
	最大厚	9.0cm	6.7cm	5.7cm
	分割角度	30°	40°	30°
製材状態	横断面			
A面		正目面　刃物痕なし	正目面　刃物痕なし	正目面　刃物痕なし
B面		正目面　刃物痕なし	正目面　刃物痕なし	正目面　刃物痕なし
C面		木目にそって刃物痕	木目にそって刃物痕	木目にそって刃物痕
D面		木目に直角な刃物痕が平行にならぶ	木目に直角な刃物痕	木目にそって刃物痕
木口		㋑ 両面より斜め切断 ㋒ 垂直切断	㋑ 両面より斜め切断 ㋒ 両面より斜め切断	㋑ 両面より斜め切断 ㋒ 垂直切断
使用用途		鋤又は鍬	鋤又は鍬	鍬又は小型鋤

第10表　板状原材木どり模式図及び考察表

木器の材質鑑定

古代遺跡出土木器の材質を知ることは、木製品の形態、用途、加工と同様に重要であり、又、自然木については、当時の自然環境を

知る上に必要事項とされている。しかし、材質鑑定にあたって、自然木はともかく木製品については、遺物保護の立場から多量の切断面を必要とする顕微鏡観察は躊躇され、ほとんど裸眼観察のみで済まされていた。しかし、古代の遺物に関する限りでは、裸眼による材質鑑定はきわめて不明確なものであり、断定的資料としては適当ではないと考える。

ところが今回、鳴倉己三郎氏により、少量の試料で科学的観察をしていただける機会を得、本遺跡出土木器の鑑定を依頼した。それについて、次の様な結果を得た。なお自然木については、多量のため鑑定終了までには至っていないので、結果は次の機会に譲ることにする。

茨木市東奈良遺跡出土材調査報告

鳴倉巳三郎

茨木市東奈良遺跡から出土した試料21点につき、切片を作って解剖学的に調べた結果、次の樹種を識別した。

カシ　Quercus (Cyclobalanopsis) sp. (第25・26図 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9.)

試料：1丸鍬Ⅰ（図版129—12）2丸鍬Ⅱ（図版129—13）3鋤Ⅰ（図版130—17）4鋤Ⅱ（図版130—18）5弓形木製品（図版126—16）6板状原材Ⅰ（図版128—19）7板状原材Ⅱ（図版131—20）8板状原材Ⅲ（図版131—21）9つちのこ（図版128—9）

放射孔材で、巾の広い放射組織がある。近畿地方のカシ類には、アラカシ、アカガシ、イチイガシ、ウラジロガシ、ウバメガシ、シラカシ、ツクバネガシなどがある。材もそれぞれ多少の違いを示すといわれるが、一般に区別がむずかしいので、ここでは一応カシ類とした。そのうちでもアラカシなどによく似ている。

カシ材は硬く強靱なので、古くから農具、器具の柄、銃、家具、車輌材などに用いられてきた。

モミ　Ables firma Sied. et Zucc　マツ科（第26・27図10. 11. 12. 13）

試料：10朱塗板Ⅰ（図版129—14）11朱塗板Ⅱ（図版129—15）12石斧の柄（図版128—11）13有頭棒（図版126—3）

放射組織の水平および切線壁に肥厚が認められ、放射嚢の各分野には小さな半有線膜孔がある。

モミは広く本州に分布し、現在は建築・建具・家具材などに多く用いられるほか、心材と辺材とであまり色調の差がなく、器具材としても慣用されている。

コウヤマキ　Sciudopitys Verticillata Sied, et Zucc　コウヤマキ科（第25・29図14. 21）

試料：14腰掛型木製（図版126－1）21F－4－N地区方形周溝墓第1号木棺（図版84）

放射組織の各分野には大きな単紋孔がある。樹脂道や樹脂細胞はない。

現在コウヤマキは数も少なく、限られた分布をしているが、過去に於いては広く茂ったものである。近畿や東海地方から出土した棺材は筆者の調査した限り（十数例）すべてコウヤマキであり、ここにも1例を加えたことになる。なお、コウヤマキはマキと誤称されている。

クヌギ　Quercus（Lepidobalanus）acutissima Carr　ブナ科（第28図16）

試料：16竪杵Ⅰ（図版127－4）

環孔材で春材部の導管は1－2環、巾の広い放射組織がある。アベマキにもやや似るが、クヌギに最も近い。コナラとは夏材部における導管の配列から区別できる。

クヌギは温帯の山野に分布し、材は現在、器具、家具、薪炭材として多く用いられている。

シキミ　Illicium religiosum Sieb, et Zucc　シキミ科（第28図17）

試料：17竪杵Ⅱ（図版127－5）

散孔材で、導管は小さく、放射壁に階段状穿孔がある。

シキミは本邦の暖帯に分布し、枝葉を仏前に供える。材は肌目がやや密で、現在、施作・小器具などに用いられるという。杵材としては珍しい。

マツ　Pinus（Diploxylon）sp　マツ科（第28図18）

試料：18杭Ⅰ（図版127－6）

放射仮導管に鋸歯状肥厚があり、二葉松類に属するが、アカマツかクロマツかは構造上の区別がむずかしいので、ここでは単にマツとした。

アカマツもクロマツもわが国に広く分布し、現在建築材・土木材

その他広く用いられている。

アサガラの類　Pterostyrax　sp　エゴノキ科（第29図19）

試料：19杭Ⅱ（図版127—7）

散孔性であるが、導管はやや放射状に並ぶ。エゴノキにも似るが導管の複合状況や放射組織の構造が多少異なる。試料が不十分で確認できないのでかりにアサガラの類としておいた。

この属にはアサガラとオオバアサガラとあり、わが国の暖帯に分布し、材は器具材、呑口、マッチの軸木等に用いられるという。

クスノキ　Cinnamomum　camphora　Sied　クスノキ科（第29図20）

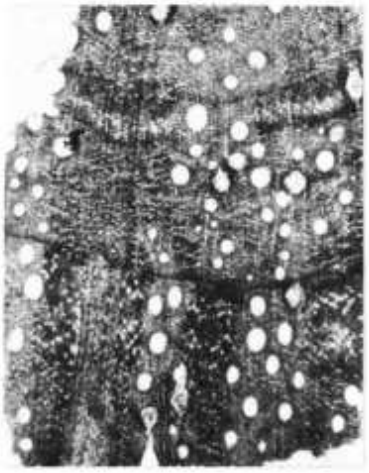
試料：20用途不明木器（図版126—1）

散孔材で導管はやや大きい。周囲状柔細胞が著しい。

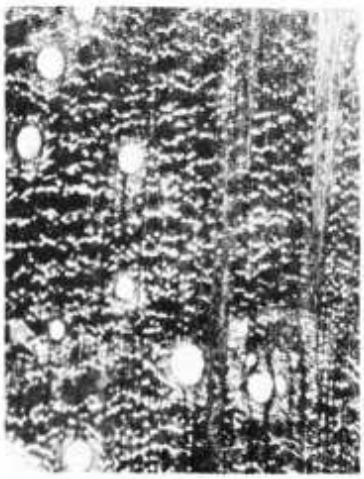
クスノキは本邦暖帯から中国・台湾に広く分布し、材は現在、建材・器具・家具などに用いられているが、昔から彫刻にもよく使われてきた。

追加　木槌（図版128—8）はユズリハ・又鋤（図版128—10）はカシと考えられる。

12・15は適切な写真が撮れなかったので次回に委ねる。

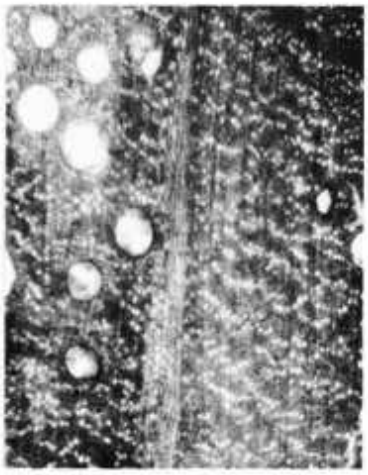


1．カシ（木口）



2．カシ（木口）

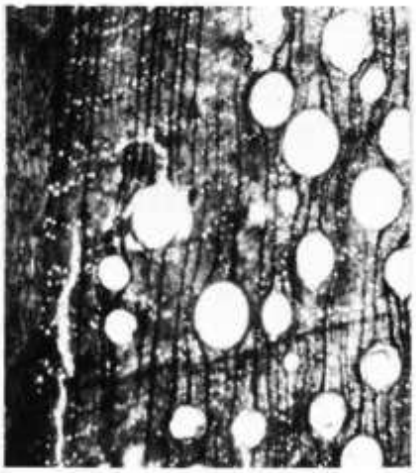
同左（板目）



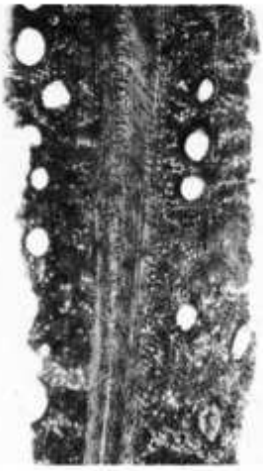
3．カシ（木口）

4．カシ（木口）

同左（板目）



5．カシ（木口）

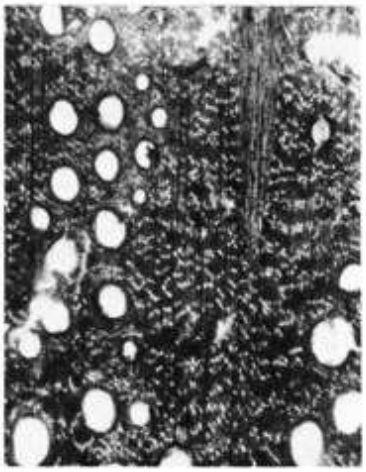


6．カシ（木口）

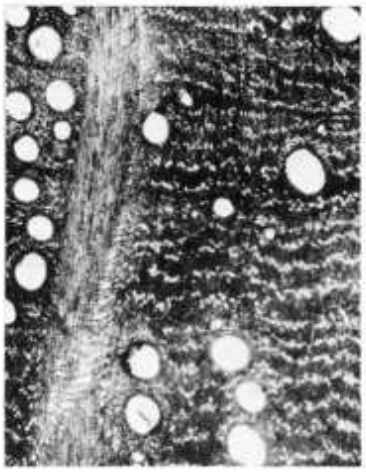
同左（板目）

1．丸鍬Ⅰ　2．丸鍬Ⅱ　3．鋤Ⅰ　4．鋤Ⅱ　5．弓形木製品　6．板状原材Ⅰ

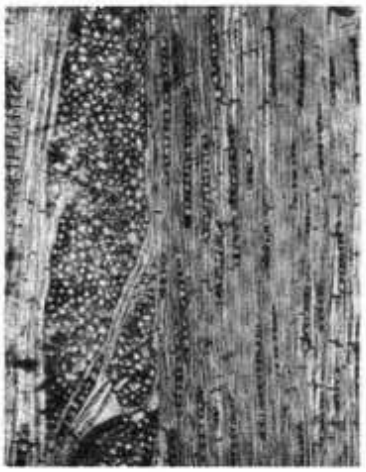
第25図　木器材質鑑定顕微鏡写真



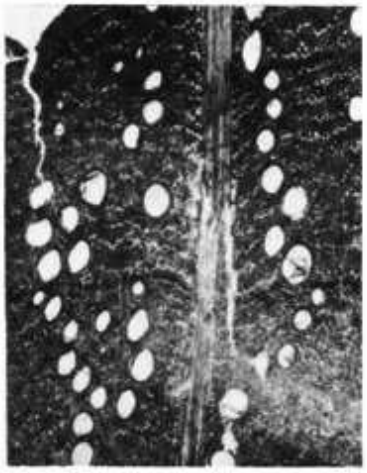
7．カシ（木口）



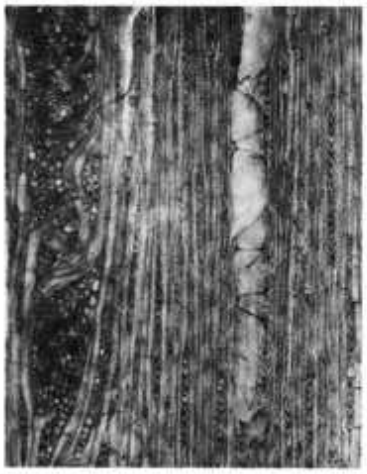
8．カシ（木口）



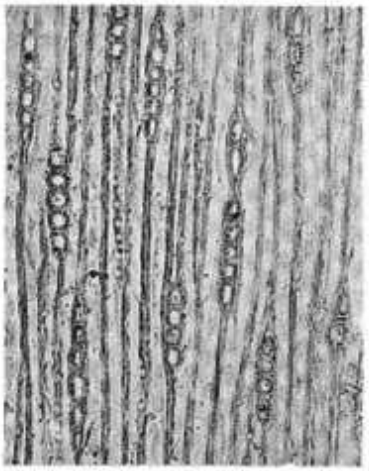
同左（板目）



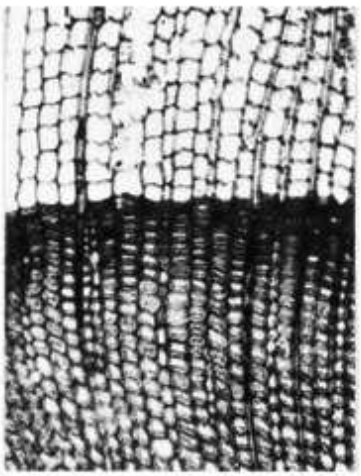
9．カシ（木口）



同左（板目）

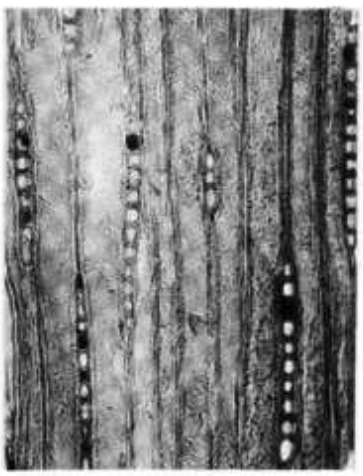


10．モミ（板目）



11．モミ（木口）

同左（柾目）

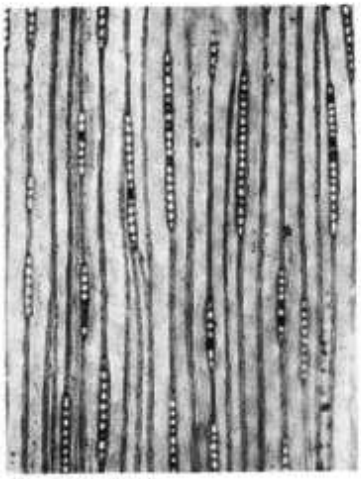


同左（板目）

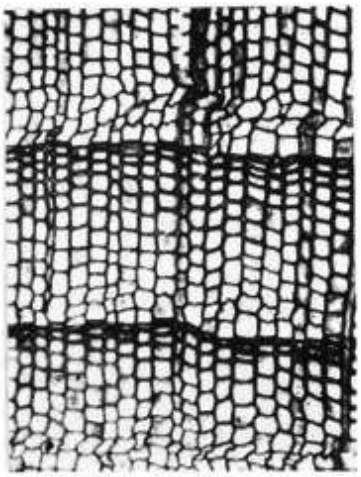
7．板状原材Ⅱ　8．板状原材Ⅲ　9．つちのこ　10．朱ぬり板Ⅱ

第26図　木器材質鑑定顕微鏡写真

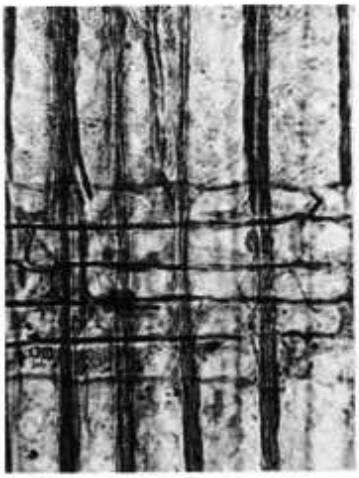
12. モミ（木口）



13. モミ（板目）



14. コウヤマキ（木口）



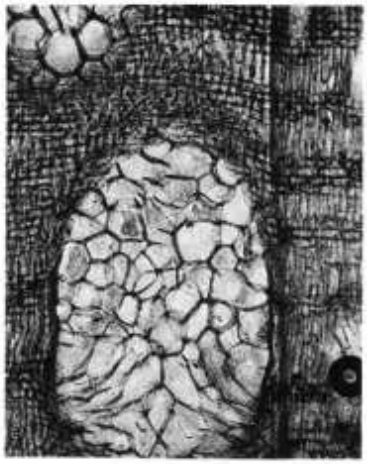
同左（板目）

15. ユズリハ（木口）

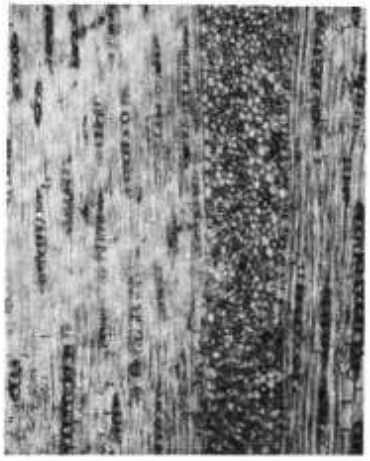
12. 斧の柄　13. 有頭棒　14. 腰掛型木製品　15. 木槌

第27図　木器材質鑑定顕微鏡写真

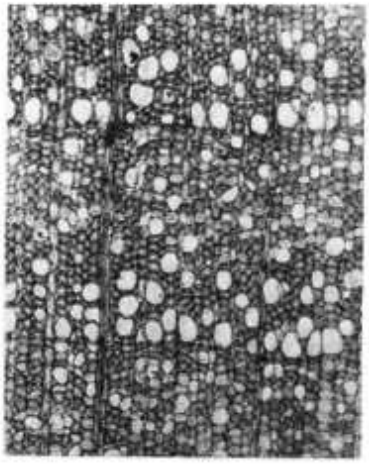
16. クヌギ（木口）



同左（柾目）

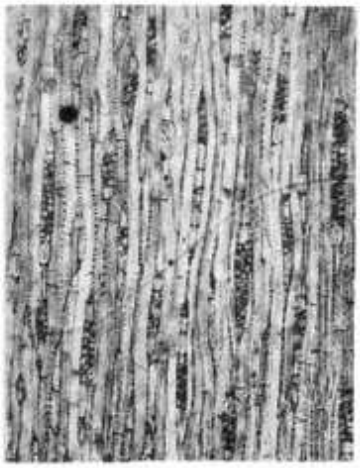


同左（板目）

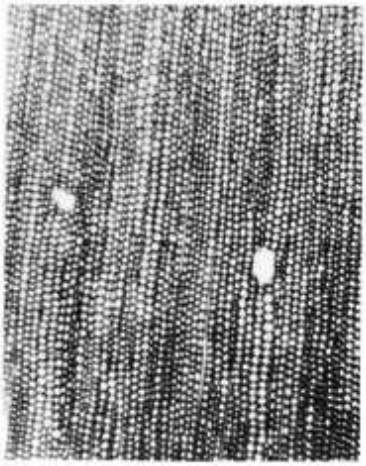


17. シキミ（木口）

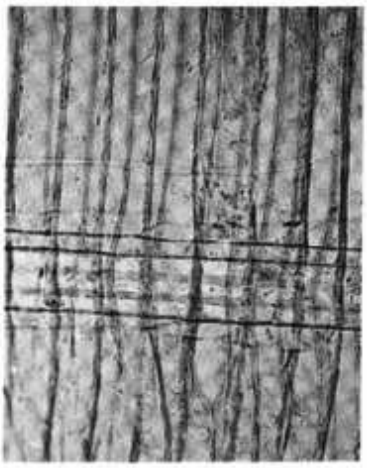
同左（柾目）



同左（板目）



18. マツ（木口）

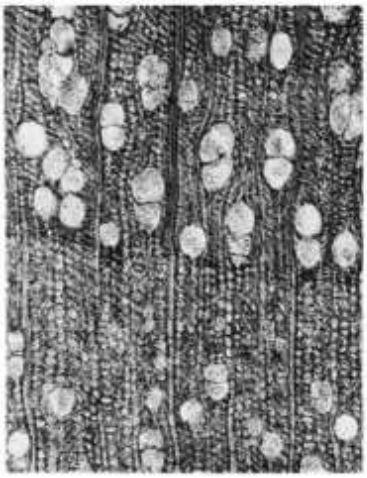


同左（柾目）

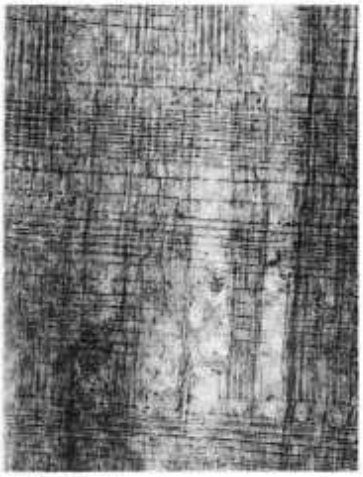
同左（板目）

16. 竪杵Ⅰ　17. 竪杵Ⅱ　18. 杭Ⅰ

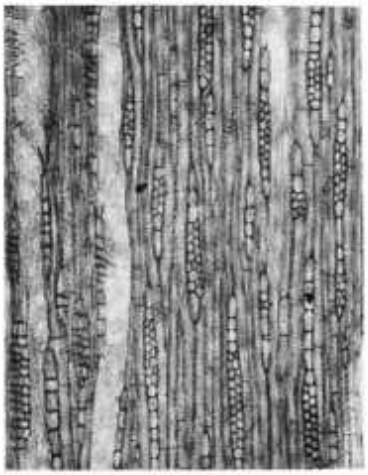
第28図　木器材質鑑定顕微鏡写真



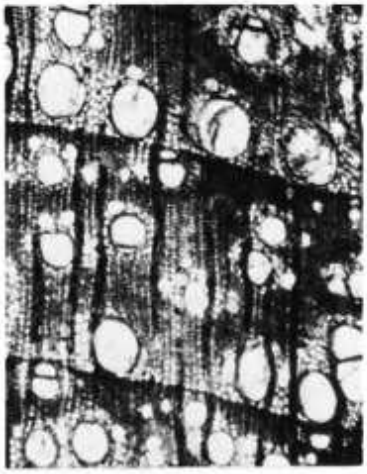
19. アサガラの類（木口）



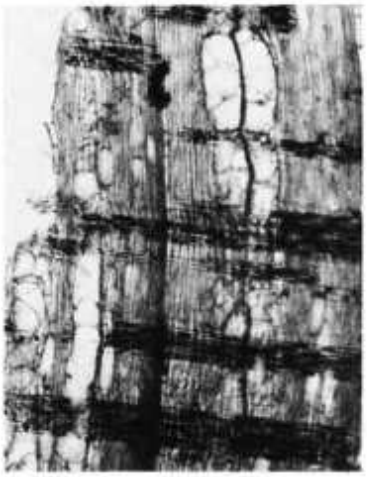
同左（柾目）



同左（板目）

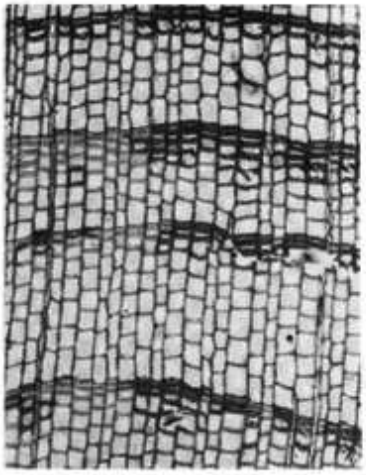


20. クスノキ（木口）

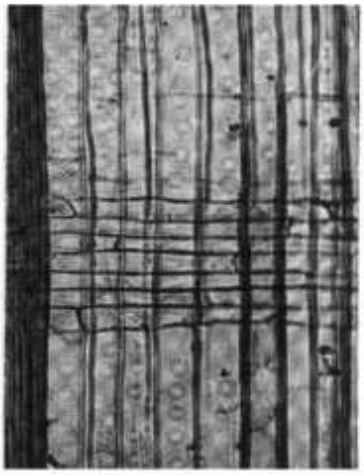


同左（柾目）

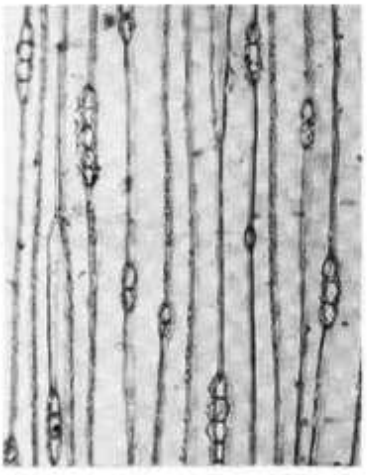
同左（板目）



21. コウヤマキ（木口）



同左（柾目）



同左（板目）

19. 杭Ⅱ　20. 用途不明木器　21. 木棺

第29図　木器材質鑑定顕微鏡写真

第Ⅵ章
考　察

F－4－N地区
方形周溝墓の供献土器について

F－4－N地区で発見された第1号方形周溝墓の、南溝、北溝、東第Ⅱ溝からは、ほとんど破片となっているが、多くの土器が出土した。

これらの土器は、方形周溝墓の外側からでなく、内側すなわち、盛土され埋葬のおこなわれた内側から、溝内やさらにそれを越えて溝外にまで流出し堆積したものであることが、出土状態から明らかである。埋葬毎に内側の盛土の肩に近い部分に、次々と並べられた土器が、後に盛土の流出とともに溝の内外に堆積したものとみてまちがいのないものと考えている。

各溝 ＼ 器種 ／ 位置		壺	甕	鉢	高杯	水差	器台	計
南溝	溝中	37 (53.6)	16 (23.2)	3 (4.3)	9 (13.1)	4 (5.8)	0	69
	溝肩	8 (50.0)	4 (25.0)	3 (18.8)	1 (6.2)	0	0	16
	溝外	19 (52.9)	6 (16.6)	8 (22.2)	3 (8.3)	0	0	36
	計	64 (52.9)	26 (21.5)	14 (11.6)	13 (10.7)	4 (3.3)	0	121
東第Ⅱ溝	溝中	5 (31.3)	5 (31.3)	3 (18.7)	3 (18.7)	0	0	16
	溝外	5 (38.5)	6 (46.1)	1 (7.7)	1 (7.7)	0	0	13
	計	10 (34.5)	11 (37.9)	4 (13.8)	4 (13.8)	0	0	29
北溝	北第Ⅱ溝 溝内・外	44 (30.8)	56 (39.2)	15 (10.5)	23 (16.1)	3 (2.0)	2 (1.4)	143
各溝総計		118 (40.3)	93 (31.7)	33 (11.3)	40 (13.6)	7 (2.4)	2 (0.7)	293

(注)　北溝は、遺構編で記述したごとく、取り上げ時に別けていないため位置は不明。

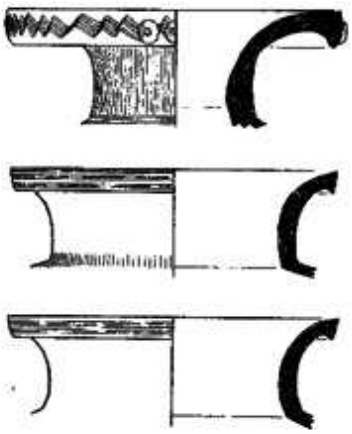
第11表　各溝・供献土器集計表・（　）内は百分率（%）

各々の溝から出土した土器の器種等については、第11表に示すとおりである。壺、甕、鉢、高杯はすべての溝に認められる他、南溝には水差し、北溝では器台が含まれている。時期的には唐古第Ⅲ様式から第Ⅳ様式に含まれるものであるが、明確に分けることが困難なものも多く、今回は一括して取り扱った。

遺構からみると、北溝には拡張がみられ、また東第Ⅱ溝は東溝が埋まった後、さらに東側に掘り直されたものであり、この方形周溝墓では最も新しい溝と言えるであろう。

内部主体としては、明らかに木棺であったことが判る2基の他に、5基の土壙が検出されている。土壙のうち底が平なものについては木棺であった可能性が強いものである。

合計7基の埋葬が行なわれていることから、溝中から出土した土器は、それぞれの埋葬に際して次々と供献されたものとみられるが、各々の埋葬に際しどの位置にこれらの土器が置かれたかは明らかにし得ない。ただ西溝及び東溝では土器が出土しなかったことから、埋葬に当ってあちこちばらばらに置くのではなく、南あるいは北溝の上方盛土上にその都度並べて置かれた可能性が強いものと考えられる。



第30図　東第Ⅱ溝出土土器

それぞれの溝の土器の観察結果からは、南溝にやや古い傾向のものがみられ、東第Ⅱ溝には他にみられない新しいものが含まれている。この結果、最初の埋葬に際しては南溝上方に供献が行なわれ、その後、南溝、北溝上方ともに供献の行なわれたことが推定される。土器の出土状態からみれば、盛土の流出とともに溝内に堆積した土器は、そのままの状態で置かれ、溝を埋めた土砂とともに二度と掘り直されることはなかったことがうかがえる。新しい埋葬を行う時点でもとの溝を掘り直すのでなく、外側へ新らしく溝が掘られたようである。東第Ⅱ溝はこうした意味を持つ最後の埋葬に伴うものと考えてまちがいないであろう。

各々の溝から出土した土器の内、南溝では壺が全体の½を占めるのに比べて、北溝では壺甕ともに約½となり壺が少ないのが目立つ。鉢、高杯は両溝ともにほぼ似た比率を占めるようである。ただこのような比率が出たと言っても、これらの土器が数回の埋葬に際して供献されたものである限り単純に考えることはできないわけであり、はたして埋葬の時期が新しくなるにつれて、壺が全体に占める割り合が減少するととらえ得るのかどうかについては、今後、より単純にとらえ得る資料の増加を待って比較検討を加えたいと考えている。

土器焼成実験から観た黒斑

弥生時代から古墳時代前期の土器には、必ずといってよいほど、黒い斑点、「黒斑」が付いている。弥生時代中期以降の明るい色調

Ⅰ・黒斑への疑問

の土器には特に目立つものであるため、従来より黒斑の生じる原因について種々論じられてきた。例えば、土器焼成時の火の回りが悪かったために生じる。又は、焼成後冷え切る前に高熱の土器を取り出し、木板等の上に載せて冷す間に木がくすぶることによって生じるといった見解がいわれた。いずれも具体性を欠くものであるが、その後紫雲出遺跡の報告書(註)の中において、弥生式土器の製作技術から観た黒斑の生じる原因について、『黒斑の黒色が、土器の表面あるいはそれに近い器壁のみに認められ、器壁深層では認められないことから、火の回りが悪くて生じるものではなく、焼成後に生じたものとされた。』そして、その焼成後に生じる原因としては、多数の土器を観察されて、『黒斑の位置関係から、焼成中の高温の土器を取り出すために、木の棒・藁束(ワラタバ)・布等によって持ち上げることによって、そのものがくすぶるために生じる。』と初めて具体的な論述をされた。その後は、この見解が最も適切な意見とされ、黒斑についてはあまり触れられないようになった。しかし、依然この見解のみでは説明できない、黒斑の全くみられない土器、1ヵ所のみに付く土器など、上記説明にあてはまらない所に付く黒斑が多くある。今回この疑問点を1歩進め、佐原氏の見解、従来の意見等を参考とし、黒斑の生じる原因について「土器の焼成実験」を行って一つの見解を考えて観た。以下黒斑の生じる原因について述べていくが、焼成実験とはいっても、当時の焼成技術自体にも不明瞭な部分が多く、また土器を焼いた跡も検出されていないため、現在考えられている当時の焼成方法を想定して行った。さらに、実験回数が少なく、多くのケースを想定して行っていないため不十分な所も多いことを付記する。今回の実験によって、一つの黒斑に関する見解が得られたことと、当時の焼成方法の一端にもふれられたが、今後の研究課題も残った。

Ⅱ・焼成実験に先立って黒斑の生じる原因の想定

黒斑は、従来の見解でも明らかな様に、土器の焼成中及び焼成直後に生じるものと考えられ、土器の製作段階に生じることは考え難い点を前提として原因を5通り想定する。

焼成中の原因

これまでのように焼成中の原因として火の回りが悪く温度が上がらないのではなく、焼成中に他のものとの接触による炭化現象、低温化現象によるものと考えた。

①土器と地面の接触による場合。

②土器と木（炭や燠を含む）の接触の場合。

③土器と土器との接触による場合。

次に焼成直後に生じる原因は、従来通りのものを考えた。

④焼成直後に土器を木等で挟んで取り出す場合。

⑤焼成直後に土器を取り出して、木の上に載せて冷やす場合。

以上の5通りを想定して焼成実験を行った。

また黒斑の性質を考えるために、種々ある黒斑にも注目した。黒斑は、土器表面の他の異物との炭化現象ではあるが、色調は真黒・黒色・灰色に近いもの、形も大形から小形、円形、楕円形、点のようなものまで種々ある。これらの相違がなぜ生じるかも今回の実験結果に期待した。

焼成実験・Ⅰ

実験Ⅰでは、焼成中に生じる黒斑の実験を試みた（原因①～③の追求）

1　実験場所、周囲よりやや高く（10～20cm）なった台状の所で、凹凸の著しい比較的やわらかい平面上で行なった。

2　実験土器、壺・甕・高杯・台付鉢など約30点である。粘土は、東奈良遺跡の調査区（遺構面）から採取したものを使用した。これらの土器は、製作後1～2週間の自然乾燥を経たものである。

3　焼成実験土器の配置、最も大きな台付鉢を中心にして、それを取り巻くように、逆にしたり、横に倒したりして山状に積みあげた。（第36図－1）

4　焼成方法、土器群から50cm前後離れた所から4カ所に火を付け（第36図－2）次に火を横へとのばし土器群を次第に取り囲んで行った。完全に土器群を取り囲んでから約2時間ほど焼き、胎土中の水分を蒸発させた。水分が蒸発すると土器の色調は暗褐色に変化した。（第36図－3）この時点で、火を土器群に近づけて行き、次第に土器群を包み込んでしまう形になる。（第36図－4）この状態で数時間焼くのであるが、今回の実験では種々の制約から約1時間で終わった。（第36図－5・6）

焼成実験・Ⅱ

実験Ⅱでは、焼成直後に生じる黒斑についての実験を行なった。（原因④⑤）上記と同様の工程で、粘土小塊を用いて行なった。焼成直後に、木で挟んだ場合、木の上に載せてみる場合の2種の実験を

行なった。

実験結果

焼成実験Ⅰの結果、そのほとんどの土器に黒斑が認められ、焼成中にも黒斑が生じた。しかし、黒斑のほとんどが小形で不整形なものであり、遺物にみられるような円形、もしくは楕円形に近いものは、僅かな数のみであった。以下焼成実験Ⅰを行なった実験土器の中から、抽出し記述する。

	焼成時の設置状態	黒斑の付着状態（胴部最大径を腰部）
a壺型土器	地面に横転。	・接地部の口縁端外面、腰部に灰色の黒斑。（第35図－1） ・上記対面、小形・不整形な黒斑数カ所。（第35図－2）
b壺型土器	地面に横転。	・接地部の口縁端外面、腰部に円形に近い黒色の黒斑。（第35図－3） ・上記対面、小形・不整形な黒斑数カ所。（第35図－4）
c甕型土器	口縁部を下に伏せる。	・口縁内側に僅かな黒斑。（第35図－5） ・体部に小形・不整形な黒斑数カ所。（第35図－6）
d高杯型土器	杯部を下に伏せる。	・杯部内側に黒色の黒斑。（第35図－7） ・杯部外面、脚部内面に小形・不整形な黒斑数カ所。（第35図－8）
e台付鉢型土器	地面に横転。	・杯部・脚部の最大径に黒斑。（第35図－9） ・上記対面、小形・不整形な黒斑数カ所。（第35図－10）

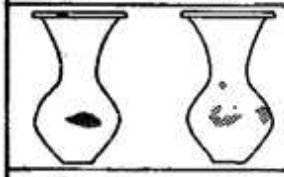
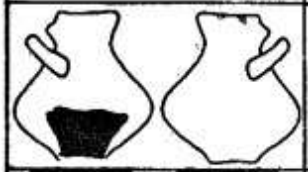
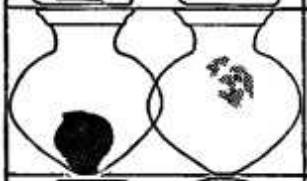
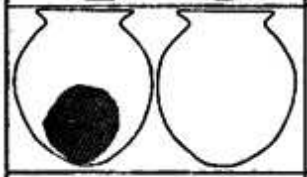
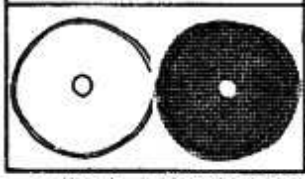
第12表　実験Ⅰ・焼成土器の観察表

A_1	同一面の口縁端部と脚端部・腰部の2カ所に黒斑が認められるもの。
A_2	A_1の部分と共に、反対面に対になるような黒斑が認められるもの。
B_1	下腹部分に黒斑が認められるもの。
B_2	B_1の部分と共に、反対面の肩部に黒斑の認められるもの。
C_1	底部全面に黒斑が認められるもの。
C_2	C_2の部分と共に、反対面の口縁部・肩部に黒斑の認められるもの。
D	土製品などの半面を覆う黒斑があるもの。

第13表　黒斑の位置関係の分類表

原因①による黒斑・b壺型土器の黒斑は、出土土器に認められる様な比較的整った形を呈している。他は、色調は薄いが、黒斑状のものが多い。d高杯型土器の杯部内面すべてが黒色を程しているのは杯部を下に伏せて焼いたために、地面との接触によって生じたと考えられる。

原因②による黒斑・上記のすべての土器に小形、不整型な黒斑が生じた。これは、燃料にした薪が完全に焼えつきる前に土器を取り

模式図	器種	時期	黒斑の位置・形態（胴部の最大径部を腰部とする。）	黒斑の分類
	壺型土器	弥生時代中期	○口縁外端部・腰部に小型・大型の黒斑。（第34図1） ○上記対面・頸部と胴部の接する部、腰部の2ケ所の不定形な黒斑。（第34図2）	A_2
	壺型土器	弥生時代後期	○底部全面に黒斑。（第34図3）	C_1
	水差型土器	弥生時代中期	○腰部下位より底部へ大型の黒斑。（第34図5） ○上記対面・口縁部外端に非常に小型の黒斑。（第34図6）	B_2
	無頸壺型土器	弥生時代中期	○鉢・腰部と脚部端面に黒斑。（第34図7） ○上記対面、鉢、腰部に薄い色調の不定形黒斑。（第34図8）	A_2
	壺型土器	古墳時代前期	○腰部下位より底部へ大型の黒斑。（第34図9） ○上記対面、肩部に小型・不定形な黒斑数ケ所。（第34図10）	C_2
	壺型土器	古墳時代前期	○底部周囲より一部、腰部下へのびる黒斑。（第34図4）	C_1
	甕型土器	古墳時代前期	○腰部から底部へ大型の黒斑。（第34図11）	B_1
	高杯型土器	古墳時代前期	○杯、口縁端部と脚部端部に黒斑。（第34図14）	A_1
	土錘	弥生時代後期	○外面½に黒斑。（第34図15・16）	D
	紡錘車	弥生時代後期	○片面に黒斑。（第34図12・13）	D

第14表　黒斑の位置観察表

出したために、薪が載っていた部分に生じたものと考えられ、そのために大きさや形が異なる黒斑が生じたのであろう。

原因③による黒斑・今回の実験では、土器と土器の接触では黒斑は生じなかった。

焼成実験Ⅱの結果、いずれのものにも黒斑が認められた。

原因④による黒斑・木で挟む実験の結果、木の当たった部分は濃く、その木の形を残し、それに順じて薄く広がった。

原因⑤による黒斑・木に接する部分は濃く、煙ののびて行く方向にも黒斑が生じた。

以上の結果により、原因③の土器と土器の接触による黒斑のみが今回の実験では、生じなかった。①②、④⑤では不明確なものがあるが、黒斑は生じ、またその中でも原因②による土器上に炭、籾等がのることで小形、不整形な黒斑がすべての焼成実験土器に観られた。

東奈良遺跡出土土器の黒斑

焼成実験Ⅰ・Ⅱより得られた黒斑を生じる原因、黒斑のありかたを考える上において、当東奈良遺跡出土の土器・遺物の黒斑を観察した。（以下抽出した土器は、黒斑のあり方が明瞭に判るほぼ完形の、弥生時代壺古第Ⅱ様式から古墳時代の各種土器と土錘・紡錘車である。）

東奈良遺跡出土土器と実験結果の比較

以上のように、黒斑のあり方を出土土器よりA_1～C_2、Dの7通りにわけたが、実験土器との比較のために黒斑を細かくみてみる。

このうち、A_2、B_2、C_2のそれぞれ対になる黒斑をもつものは、それぞれの一方の黒斑が、色調も薄く、小形・不整形であることで共通している。これらの黒斑は、反対面に認められる色調の濃い整った形のものとは異なった原因により生じると考えられる。さきの色調が薄く小形・不整形な黒斑は、焼成実験Ⅰの土器に多数認められた小形・不整形な黒斑と似ている。この黒斑は、実験結果表でも記述したが、原因②によるものである。焼成時に燃料の薪が真赤に焼けて炭の様になっているものが土器に密着している場合に生じ、この炭が完全に燃え切らない内に取り出した場合、小形・不整形な黒斑が生じた。また、この黒斑は、焼成時の土器の置き方、他の土器の関係から、いろいろな位置に付くが、その多くは焼成時に土器の上面になった部分であった。この原因②の黒斑は、俗に言われている黒斑とは異なり、土器に付着する炭の燃焼状態により、生じない場合もあり、また非常に不鮮明な場合もある。

今回観察した出土土器では、A_2、B_2、C_2 の対になる黒斑のあ

り方の一方が、原因②によって生じる黒斑ということになる。では、A_1～C_2、Dに観られる黒斑は、なぜ生じるのであろうか、実験Ⅰ・Ⅱにより、一方が原因②による黒斑となる場合は除外され、原因③は実験で黒斑は生じなかった。残る原因①、④、⑤で黒斑は生じる。出土土器、A_2、B_2、C_2と原因①の地面との接触によって黒斑を生じた実験土器、壺1・2、器台を比較して観ると、いずれも大きな黒斑と小さい黒斑をもつものである。そこで出土土器A_2の壺型土器、B_2の水差型土器、C_2の壺型土器の小さい黒斑の認められる部分を上にして置くと、対になる大きな黒斑の部分が接地し、安定するようになった。また他の小さい黒斑が認められない他の出土土器も、黒斑部分を接地させると安定した。これらの点から出土土器にみられる黒斑は原因①によって生じたものとみられる。なお、Dの土製品にみられる黒斑も原因①によるものであろう。

次に原因④は、焼成実験Ⅱのように小粘土塊の場合は木等で挟み上げることが可能であるが、焼成直後の土器を底部と肩部をもって挟み上げるのは難しい面がある。同様に原因⑤も困難な作業であり実際に行なわれたかどうか疑問である。

以上のような実験結果と出土土器との比較によって、焼成中に土器と地面が接触している場合、大きな黒斑が生じ、土器と薪（炭・燠）等の接触では不明瞭な小さい黒斑が生じることが明らかとなった。なお、焼成直後木で挟んで取り出したり、木の上にのせた場合も接触した部分に小さい黒斑が生じる。また今回の実験では土器と土器の接触によっていずれの黒斑も生じなかった。

小結

黒斑の生じる疑問に対して今回の実験と出土土器の比較検討によって、一つの解決案が出た。いままで言われていた「焼成直後に土器を木・藁束・布等で挟み上げる時」と「焼成直後に土器を冷やす間木板等の上に置いた時」に黒斑が生じること以上に、焼成中に地面との接触によっても生じ、また焼成中の土器に付着する薪・炭・燠等の状態によっても黒斑が生じることが判ったのである。このように、黒斑は1つの原因で生じるのではなく、種々の原因が関係し合って生じるのである。

次に新たな疑問点も起こった。弥生時代・古墳時代前期の土器は、どのような場所でどのように焼成されたのであろうか。原因①

の地面との接触によって黒斑が生じることを前提にして、東奈良遺跡出土の土器の黒斑を観ると、弥生時代中期の土器は壺・甕・高杯・鉢型土器等の多くを横に倒して焼成している。古墳時代前期の土器は、高杯型土器には横に倒して焼成しているものが多く、他の土器は、多くが底部・下腹部を下にし、自然に安定するような位置で焼成している。

このように時代により、焼成状態に違いが認められるようである。この違いは、焼成時の熱効率を考えたものか、焼成土器の量によるものか明らかでないが、今後これらの点から観る黒斑のあり方を追求する必要があろう。

注　「紫雲出」　昭和39年

高杯型土器と台付鉢型土器の杯部と脚部の接点について

高杯・台付鉢型土器等の脚部の接合方法は、筒状の脚部を絞りしめ、杯部と脚部の誘い口として成形した後に、球状の粘土を充填する、いわゆる円板充填法である。この手法は、畿内地方において、弥生時代中期（唐古第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ様式）から後期（西ノ辻Ⅰ式を含む唐古第Ⅴ様式）まで用いられたとされている。しかし、これ以降の土器を観察してみると、もろもろの方法こそ違うが、古墳時代前期の土器から奈良・平安時代の土師器までに及んでいる。

また円板充填法と並行して、弥生時代後期以降から、さし込み法、貼り付け法なども観られるようになると考えられる。

以下、各製作方法を各時期に追って変化をみる。

①弥生式土器唐古第Ⅰ様式の時期

②弥生式土器唐古第Ⅲ・Ⅳ様式の時期

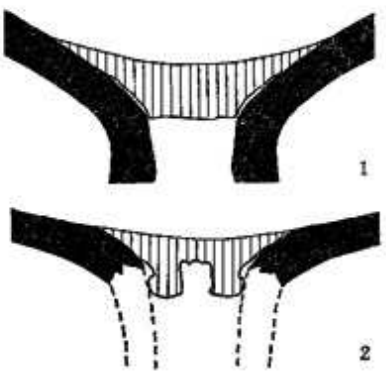
③弥生式土器唐古第Ⅴ様式の時期（西ノ辻Ⅰ式を含む）

④土師器（古墳時代前期）

⑤土師器（奈良・平安時代）

1 円板充填法

①の時期は、他の時期とは異なり、柱部は充実しているが、杯底部が落ち込んでいるため充填（補足といった方法といえる面がある）して補ったのであろう。この時期の高杯・台付の土器のうち充填したものと充填しないものの比率は、各々約50%である。



第31図　杯部と脚部のとりつけ方法

②の時期は、柱状部中央を周囲からしめつけて細くする。杯部には底部がなく中空であるため、粘土をその部分に充填してふさぐ。後に脚部中頃より下端面まで、ヘラ削り調整を行なう。まれに柱状部までヘラ削りを行なうものもある。

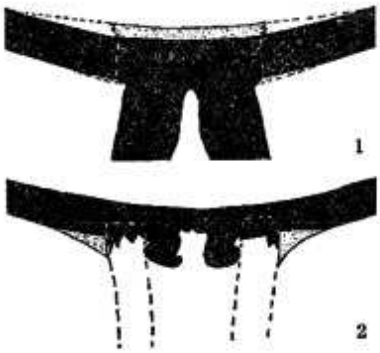
③の時期は、②の時期とほとんど変化はないが、充填の時に指などで受けとめたのであろうか、円板が逆台形のものが多い。また、柱状部上端までヘラ削りが行なわれている。

④の時期は、さきの弥生式土器とは異なり、かなり変化する。杯部底部の穴が小さいため、脚部を付けた後に、杯部底部内面のヘラ磨きを行う時に、ヘラについた粘土によって小さな空間を埋めたと考えられる。この点から、円板充填法といえない点があり、補足的な充填方法とも考えられる。

⑤の時期は、充填円板の下面に、棒で支えたと思われる痕跡が観られる。この痕跡から、a充填する時に粘土が下がらない様に棒等で支える。b充填する時の圧力で脚部が、崩れないように棒で支えた。c外面の整形・施文の時に棒を支えとして用いる等の方法によ

る痕跡と考えられる。しかし、土器製作から考えると、充填するまでの器体は、あらかじめの生乾きの状態であると考えられ、器体の堅さよりも充填する粘土の方が柔らかいと思われるため、a・bの方法による痕跡に不明確な所がある。この痕跡は、a・bの充填する時のみの使用ではなく、cの整形・施文等の時における使用も含むと考えられる。（第36図－7～9、第37図－1・2）

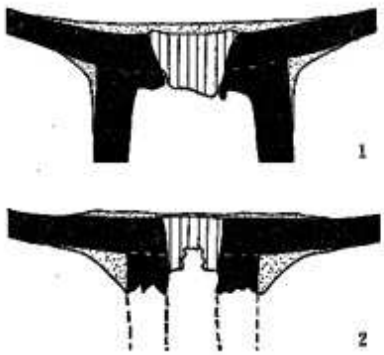
2さし込み法



第32図　杯部と脚部のとりつけ方法

④、⑤の時期に多く観られる。さし込み方法は、杯部と脚台部とを別個に作り、あらかじめ杯底部となる部分は脚部上端の径の大きさに穿孔しておく。そして、接合の時に、柔らかい粘土（ドロ状のもの）または水を杯部と脚部の接点部分に塗り、杯部に脚部をさし込む。最後に杯部内面、杯部と脚部の接合外面にヘラ磨き等を行い、接点部分を消すと共に強度を増す方法を用いている。しかし、さし込んだ時点での杯部と脚部の粘着度が違うためか、接合点はもろく、構造的に弱い面がある。またこの時期の脚部は、絞りしめ後に内面上端までヘラ削りを行い、器壁の薄いものが多い。（第37図－3～5）

3貼り付け法



第33図　杯部と脚部のとりつけ方法

②の時期の大形台付鉢、台付無頸壺等、④の時期の高杯に観られる。この方法には2種ある。a鉢・無頸壺等の底部角部分にヘラ削りを行い、丸底状に仕上げ、脚台部を付加する。b鉢・無頸壺等の底部に直接付加するものと、充実の短い脚部を直接付加する方法がある。aの方法は、円板状に剝落するものが多いため、円板充填法と誤解されやすいが、明らかに異なり、特に大形のものにはこの方法が用いられている。（第36図－10、第37図－6～8）

回転台について

弥生式土器の製作技法の説明に、「回転台」という言葉がしばしば登場する。しかし、現在の所、明確な「回転台」と呼ばれる土器製作用具が、発見・検出されたとの報告(注1)はないが、その存在が想像遺物として使用されている。

この「回転台」という言葉が使用されはじめたのは、弥生式土器と呼ばれる新器種の発見からである。日本の考古学は縄文式土器の研究から始められたが、縄文式土器にない均整のとれた美しい弥生式土器は、「轆轤」を使用して製作されたものと考えられた。しかし、その後の研究により、我国の「轆轤」の使用は、古墳時代中期

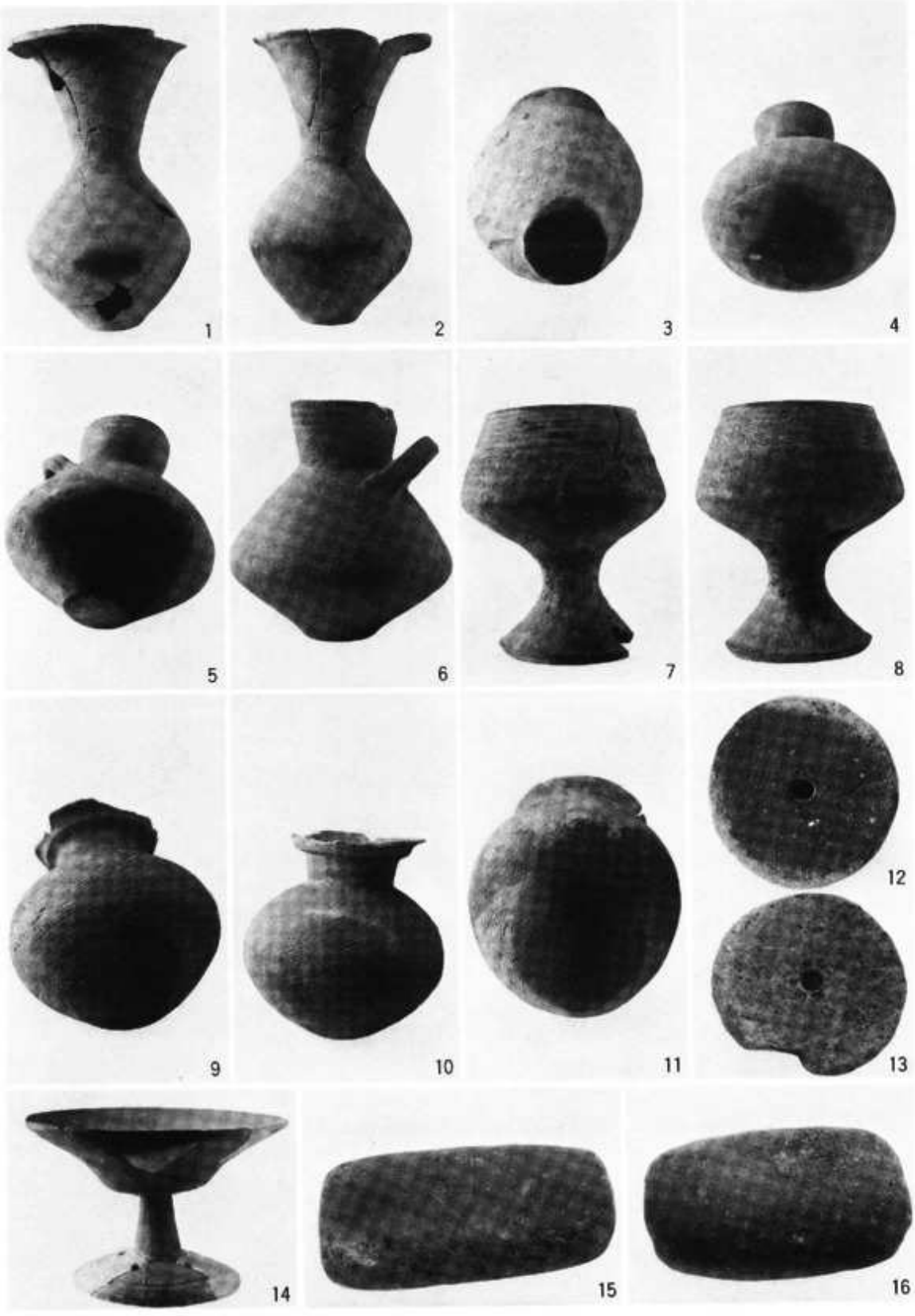
に須恵器の製作技術と共に朝鮮半島から伝えられてからはじまったことが明らかになった。その時点で、上記の技術を説明する上に、「轆轤」に近い道具として「回転台」が考え出された。その後、昭和34年に佐原真氏が土器製作技術の面から、「回転台」の存在の可能性を一歩進められた。(注2)

「回転台」とは何か

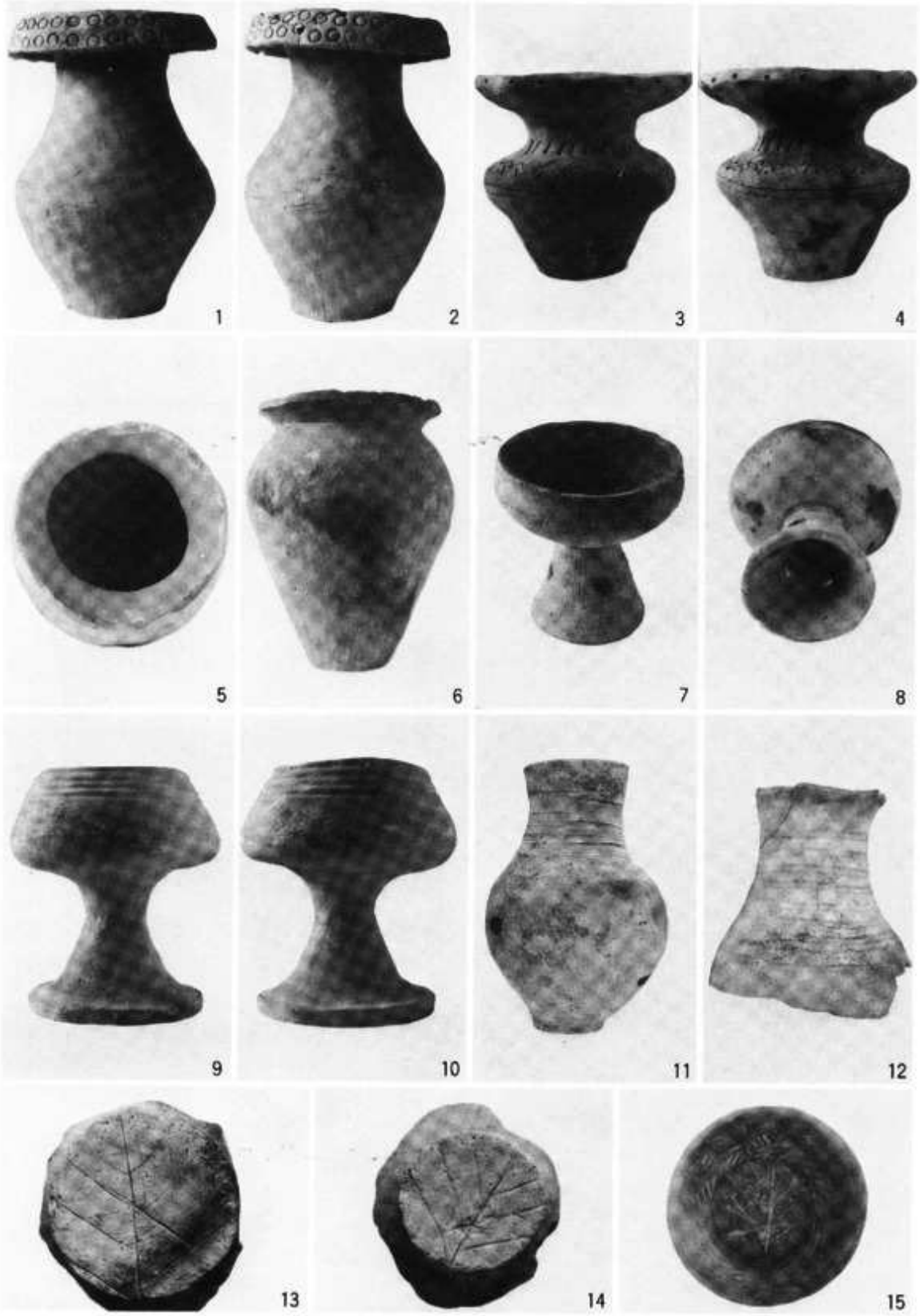
「回転台」とは、「轆轤」(注3)とは区別され、必要に応じて台そのものを回転させて使用するものとされている。しかし、現在考えられている「回転台」とは、弥生時代中期後半には単に回転する台ではなく、回転軸をもつ真正円運動をするものとされている。ここまで進歩したとするならば、一種の機械と言えるものであろう。そのために畿内地域のみが使用でき、他の地域では使用できうる単純なものでないとさえ想像(注4)されている。しかし、現在のように全国の多数の箇所で発掘等の調査が行われ、何千万・何億点といわれる遺物等が出土しているにも拘らず、その実体をみない。確かに土器製作用具も遺物としての出土例(注5)が少ない面があるが、これほどの道具が出土していない上に、「回転台」が土器製作過程において、調整・施文等の段階にのみ使用されたものでありながら、当時としてはこれほど高度な道具へ技術進歩したという点に疑問をもち「回転台」を再考してみる。

「回転台」

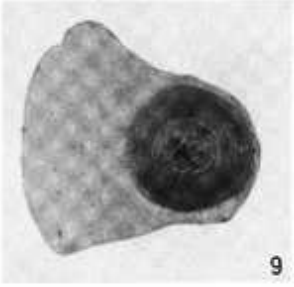
そこで「回転台」の存在を肯定させる櫛描文、凹線文、横ナデ等を考えてみる。畿内型櫛描文A種においても、庄古第Ⅱ様式の時期には描き継ぎが認められるものがあり、中には5～10箇所を数えるものさえある。（第32図—11・12）また同時期末から第Ⅲ様式初頭の畿内地方の一部にみられる櫛描簾状文は、回転運動からの文様というよりも、停止目が文様化したものと考えられ、同様に櫛描流水文も往復運動とも考えられ、回転運動と異なると考えられる文様がある。次の庄古第Ⅲ様式は、畿内型櫛描文A種の隆盛期に至り、確かに描き継ぎは少ない。庄古第Ⅲ様式（新）から第Ⅳ様式（古）にかけての凹線文に至っては、「回転台」の存在を十分に考えさせるものである。さらに庄古第Ⅳ様式から古墳時代前期にかけては、土器自体の製作技術が大きく変化し、今までの「回転台」上の調整・施文等の作業を破棄するため、庄古第Ⅴ様式末から古墳時代初頭に再びあらわれる櫛描文が描き継ぎの多い手の運動によるⅡ種のものに変る。この流れは「回転台」の使用状態の変遷と考えられるが、別の視点「回転台」がないものとした場合には、単純な回転補助具

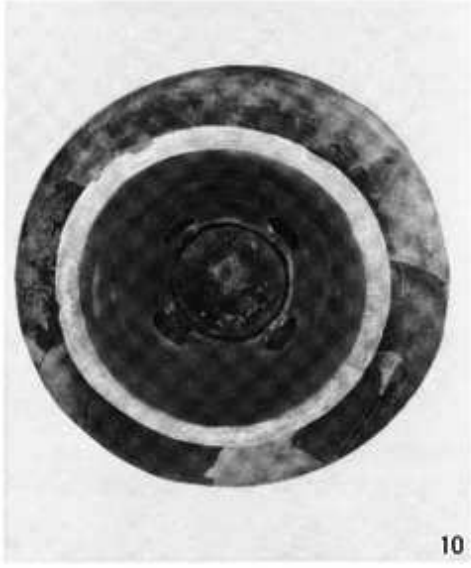


第34図　東奈良遺跡出土土器・土製品の黒斑

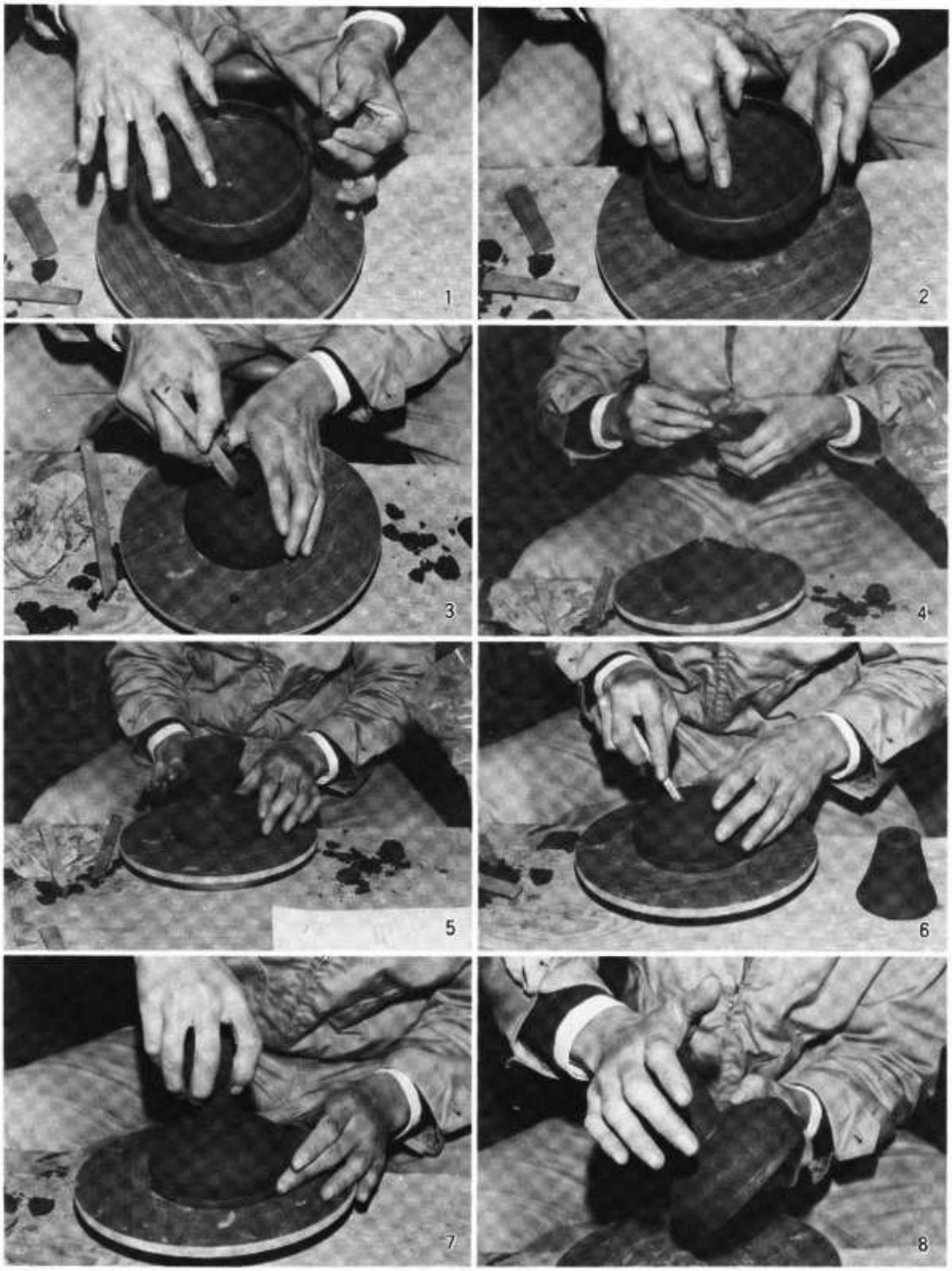


第35図　焼成実験土器(1～10)　唐古第Ⅱ様式壺型土器・櫛描文の描き継ぎ(11.12)
木葉痕の残る土器底部　唐古第Ⅱ様式(13.14)　土師器(15)





第36図　土器焼成実験（1～6）　脚部の取り付け方法　円板充填法（7．8．9）・貼り付け法(10)



第37図　杯部と脚部の接合実験

円板充填法（1．2）　さし込み法（3．4．5）

貼り付け法（6．7．8）

でも長年つちかってきた櫛描・横ナデ技法を施すことによる熟練化が進み、唐古第Ⅲ様式の畿内型櫛描文を生み、あるいはその頂点が凹線文であるとも考えられる。そして、一時衰退した櫛描文が再び施される唐古第Ⅴ様式末から古墳時代初頭では、製作技術の変化により以前のような丁寧な技法を使ったものを必要としなかったために、描き継ぎが多く認められるものとなったとも考えられる。

この考えから単純な「回転台」として、以前から言われている土器底部に残る木葉痕に注目し、「木の葉」による回転台を考えた。この木の葉は、縄文式土器より網代・布等と共に土器を作る下敷として使用され、弥生式土器の製作においても使用し、土器底部にその圧痕を残す。ただ、弥生時代各時期によって僅かながら異っているため、分類し3形態に分けてみる。

a形態。唐古第Ⅰ・Ⅱ様式の時期、木葉痕は1葉の圧痕が多い。

b形態。唐古第Ⅲ・Ⅳ様式の時期、土器底部までのヘラ削り、ヘラ磨きを行うために木葉痕を残すものが少ない。大形の土器は木葉痕が1葉、小形の土器は何葉にも重なっているものが稀に認められる。

c形態。唐古第Ⅴ様式・古墳時代前期、多くの木葉が重なりあっている。（第32図—13～15）

以上のような分類を考えた。b形態の櫛描文、凹線文の隆盛期に木葉痕を残すものが少ないのは、他の形態に比べて底部が非常に薄く、削り取りがあるからと考えられる。また回転運動から離れた縦方向のヘラ磨き、ヘラ削り作業を行うことに重点を置く面がある。これらの点からb形態の時期にも、木の葉等の下敷を用いた可能性が考えられる。

では何ぜ、各時期（特にa形態の畿内第Ⅱ様式）に木葉痕を残すのであろうか。「回転台」の存在を考えたならば、木葉痕を残すことに疑問を感じる。つまり、木の葉等を下敷として使用して回転台に載せた場合、真に回転台の回転運動を利用できるとは思えない。回転台に固定してこそ利用価値があると考えられるからである。木の葉は、下敷としての機能と共に、下敷ごと回転する機能をもつものとして使用されたものではないだろうか。また高度な「回転台」が存在したとすれば畿内第Ⅴ様式に、簡単に廃絶することは理解できない。むしろ木の葉等の単純なものであるからこそ、道具の廃絶でなく、その時間と労力を使った技法の廃絶であったと考えたい。

これらの点を総合すると、単なる製作用の台は十分に考えられるが、そのものが回転運動するのではなく、そこに下敷として使用した「木の葉」等が回転運動を助け、これに弥生時代前期よりつちかってきた調整、施文技術の向上と熟練化によって可能となった櫛描文、凹線文等が施文されたと考えられる。ここであえて、「回転台」という名称を残すとするならば、木の葉等に与えられるべきであると思われる。

注　1　「勝部遺跡」　昭和48年　　回転台が出土したと報告されたが後に否定される。

2　「紫雲出」　昭和39年

3　轆轤とは整った回転軸を、台に適当な重さを与えて惰力で急速度に回転させ、台にのせた粘土塊から直接水挽きによって作り上げるもの。

4　「古代の技術」　小林行雄編

5　東奈良遺跡より昭和49年、叩き板出土。

第37図　杯部と脚部の接合実験は、西念秋夫氏による。

東奈良遺跡発掘調査概報　I

本　文　編

発行日　昭和54年6月1日
発　行　東　奈　良　遺　跡　調　査　会
住　所　〒567 大阪府茨木市天王2丁目1－8
TEL　(0726)　27－3037
印　刷　株式会社　中　島　弘　文　堂　印　刷　所